

鬼神西住

友爪

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

誰もが一度は考える『軍神』西住みほ。そいつをぶちぬいてみたかった。

※本作では西住殿が鬼神と化しています。

※イデオロギー的意図は一切ありません。

目次

鬼神西住1	1
鬼神西住2	4
鬼神西住3	8
鬼神西住4	13
鬼神西住5	17
鬼神西住6	22
鬼神西住7	27
鬼神西住8	32
鬼神西住9	37
鬼神西住10	46
鬼神西住11	53
鬼神西住12	62
鬼神西住13	67
鬼神西住と親衛隊長1	78
鬼神西住14	89
鬼神西住15	96
鬼神西住16	106
鬼神西住17	113
鬼神西住18	122
鬼神西住と親衛隊長2	132
鬼神西住19	139
鬼神西住20	155
鬼神西住21	165
鬼神西住と親衛隊長3	178



## 鬼神西住1

黒森峰女学院は悲願の十連覇を達成した。

表彰台に上がった女生徒たちは、優勝を飾ったというのにどこか暗い。優勝旗を掲げる隊長、西住まほの顔は俯いていた。

皆、この勝利の罪悪感に囚われていた。

ただ一人。ただ一人だけ、隊長の隣で満面の笑み、喜びの微笑みを湛えている者がいた。

副隊長である、西住みほだった。



空気が重い、息をするのさえも辛く感じた。

西住まほは固唾を呑んで目の前の親子のことを見つめている。西住流戦車道師範しほと、その娘みほの対峙であった。

みほがしほに呼び出されて部屋に着いてから一切の会話がない。しほは普段よりずっと険しい顔でみほを睨めつけていた。その隣のまほは、事の重大さを肌で感じていたが、当のみほは平素通りといった様子で、のしかかるような空気を感じていないようだった。

「何故あの様なことをしたの」

沈黙を破りしほは切り出した。

「あの様とは一体何のことでしょうか」

みほは平然と返した。

それに母が怒気を帯びたのをまほは感じた。

「とぼけないで。味方の戦車を川に突き落とした、その馬鹿げた真似のことを言っているのよ」

「馬鹿げた真似」

「貴女の行為は西住流の名を著しく汚すものよ。分かっているの？」

「名を、汚す」

みほは考え込んだ。師範の言葉について考えているのだった。そしてすぐに答えた。

「一体全体、仰っている意味が全く分かりません」

力を込めてしほは机を叩いた。まほは驚き竦み上がる。机が間に

無ければ、叩かれていたのはみほの頬だっただろう。

「何故、あの様なことをしたの」

机を叩いたしほの手は怒りに震えていた。

「射線の邪魔だったからです」

「馬鹿なー」まほは咄嗟に声を張り上げた。隊長として、皆を束ねる役を持つ彼女にとって聞き流せない言葉だった。

「みほ、みほ！ お前は射線の邪魔になるのなら仲間を川に突き落とすのか、あの氾濫する川に。仲間がどうなるのか考えなかったのか。みほ、答えろ！」

今までしほに目を合わせていたみほは、まほの方を向いた。

「状況によるなら、そうするでしょうし、そうしました。仲間？ 射線の邪魔になる仲間はその時仲間ではありません、それは障害物です」  
「お前本気で、言っているのか」

「本気もなにも、だって、そう思いませんか。邪魔だな……って  
やはり平然として応えるみほの顔に、まほは寒気がした。どうしてこんなことが平然と言えるのか。

「私の知るみほは、もっと……優しかったはずだ」

「優しさ。最も尊ぶべきものですね、私はそう思います」

「なら、どうして……」

「撃てば必中、護りは硬く、進む姿は乱れなし。鉄の掟、鋼の心」

みほは目を閉じて西住の流儀を諳んじた。

目を開けて、二人を交互に見る。

「実行しました、ええ、間違いなく。西住の流儀に何一つ悖る所がありません。そして勝ちました。馬鹿げた真似？ 本当にそう思われるのですか。西住流の後継者が、本気でそう思っているのですか」

娘が何を言っているのか、母親は理解出来なかった。

だから、ただ一つ分かることを口にした。

「みほ、あなたは正気じゃない」

狂っている……母の隣で青ざめた顔をしてまほは呟いた。

「此処から出ていきなさい。あなたに戦車を動かす権利はないわ」

みほは驚いた顔をして、その後俯いた。「なんで……」と俯いたま

ま、か細く言った。

「なんで分かってくれないの……」

人目には、母と姉に拒絶された可哀想な妹に見えた。

だが実際にみほを目の当たりにしている二人には、全く別のものに見えた。

「それなら」

みほは顔を上げて、悲しそうに笑った。

「西住流なんて、いらない」

母と姉には、妹がまるで地獄の軍団長に見えた。

## 鬼神西住2

まほは、みほが大人しい子だと思っていた。

初めて会う人の前では何時もモジモジしていて、しやんとしなさいと窘めても直らなかつた。物怖じしていると言うよりは、恥ずかしかつているのだった。

驚いたのはみほが中学校3年生の時だった。

黒森峰付属の中学校で、高校と同じく姉妹で隊長・副隊長をしていた。けれどまほが卒業したので、みほが隊長をすることになった。

あのみほが隊長を務められるのか心配だったから、こっそり訓練を見に行った。ちょうど訓練が始まる時だった。

頼もしい隊長が代替わりしたので、隊員が不安がついていた。するとみほは手近な戦車の上に登って、大声で話し始めた。

『姉が抜けたからといって不安がるのは分かる。斯く言う私もそうなのだ。だが、何時までもそうではならない。私たちは過去の栄光に縋るのではなく、未来の栄光について考えなければならぬ。私は諸君らが戦車のような不屈の精神を持つと信じている。それを西住流で束ねれば恐れるものなど何も無い』

そういつた内容だった。隊員たちは沸き上がり、口々に新隊長万歳と叫んだ。

皆の前で話す度胸もそうだが、その口ぶりには聴衆を強く惹き付ける力があり、共感と頼もしさ呼びかけ、熱狂を呼ぶものだった。

姉のまほでさえ、その演説に飲まれかけていた。

その後、結束した黒森峰付属中学は大会で連覇を果たした。

西住みほは演説の天才だった。



十連覇を達成した黒森峰女学院は、他聞に漏れず学校から表彰を受ける。巨大な体育館で行われる全校集会での表彰だった。

まほは、罪悪感からそれを受ける気分には到底なれなかつたが、表彰を断るわけにもいかなかった。

隊長まほと副隊長みほは、壇上に登り、学長から「おめでとう」の



言葉と共に優勝旗と賞状、そして勲章を受け取った。

勲章とは、特別に学校に貢献した生徒に送られるもので、全校生徒の憧れの的だった。それが贈られると、体育館は弾けんばかりの拍手と歓声に包まれた。

「ここでもう一人、勲章を送りたい生徒がいます」

そう学長が言った。生徒にどよめきが走る。

まほも困惑した。何も聞いていなかった。

「赤星隊員！」

みほが叫んだ。

「はいいつ」という気の抜けた返事が、群集の中から聞こえた。自分の名前が呼ばれたことに驚いたようだった。

赤星小梅、みほが川に突き落とした戦車の乗組員だった。

壇上に登ってくる小梅の顔は青く、細かく震えている。足取りもおぼつかない。それらはみほに近づくほど酷くなっていく。

まほは胸が締め付けられる思いだった。小梅はあの試合が終わってからずっとこの有様だった。

「あなたに勲章を贈ります」

学長が小梅に勲章を渡した。拍手は少ない、皆困惑していた。

「聞いてください」

みほは校長に代わってもらい、マイクで話した。

体育館はしんとする。

「生徒の皆さんは赤星隊員が何故勲章を贈呈されたのか疑問に思っているでしょう。それにお答えします」

みほが小梅をちらりと見た。

小梅はそれだけで竦み上がった。

「我が黒森峰女学院は十連覇を達成しました。非常に名誉なことであり、人ひとりの力では到底成し遂げられないことでもあります。私はここに戦車道の同志のみならず、ここに集まる全ての人に深い感謝を捧げます」

みほは頭を下げた。

「全ての事においてそうであるように、輝かしい勝利の裏には必ず犠

牲がついて回ります。犠牲となった者は陽の目を見ず、讃えられることもない、それが世の常です。これは仕方が無いことなのかも知れません」

声の調子が落ち、みほは落胆したような表情を浮かべた。

「しかし、しかし、私ははつきりと言います。そんな事があつてはならない。私は犠牲が黙殺されることを断じて許しはしない!!」

怒りと正義に満ちた声で叫ぶ。

生徒たちは今や固唾を呑んで演説に聞き入っている。

「かの試合を観戦した人もいるでしょう。赤星隊員の戦車は試合中、川に落ちました。氾濫する川です、とても危険なことで、下手をすれば命に関わりました。ですが、その事が直接的に荣誉ある勝利へと繋がったのです」

まほは薄ら寒くなった。一体そんなことをどの口が言えるのか。今すぐ妹を黙らせたくなくなった。

みほは構わず続ける。

「英雄と呼べる人間がいるならばどの様な人間でしょうか。それは自分の身を顧みず、他人の為に動くことの出来る人間であると私は信じています。赤星隊員の行動は全くそれであります！ 英雄的行動により隊を勝利に導いた。これは尊敬すべき戦車道精神であり、黒森峰女学院の模範となるべき生徒です！」

この頃には生徒は熱狂に飲まれていた。そうだ、そうだ、と演説に同調していた。

「よつて、その素晴らしい功績を讃え、私は学長閣下に赤星隊員へ勲章を授与することを提案いたしました。そして閣下は快諾して下さいましたのです」

そんなことをしていたのか、まほは初めてこの茶番の所以を知った。

「そして今ここに、赤星隊員への勲章を贈呈するものであります！」  
拍手と歓声が頂点に達した。体育館が震えているのが分かるほどだった。

みほはマイクから退き、小梅の手を取った。

感激か、驚きか、恐怖か、その全てか……小梅の両目からは止めどなく涙が溢れていた。

その感動的光景に、生徒からは自然と『黒森峰万歳!』の唱和が始まった。

この光景を身に受けるまほは、身体がぐらぐら揺れる錯覚を味わっていた。冷や汗が止めどなく流れている。

今やあの恐ろしい体験を間近にした隊員たちでさえ熱狂的に万歳をしている。

まほは演説のみで、この場の全ての人間を自分の行いを正当化するための証人にしたのだ。

今やあの行為を糾弾できる人間はいなくなってしまった。まほは、そこに隊長である自分をも含まれていることに気が付き一層戦慄した。

しばらく唱和が続き、それがやっと落ち着いた頃、学長が再びマイクに戻った。

学長すら感激を湛えた声で言った。

「では、これら全ての功績を讃えて、隊長の西住まほさんから生徒諸君へ向けて一言お願いします」

まほは、この時自分が何を言ったか覚えていない。

### 鬼神西住3

まほは戦車に乗るのが嫌になった事が何度もある。

それらは全て幼少の頃の事だった。友達は気ままに遊ぶことが出来たのに、自分といえば暇さえあれば厳しい母親に戦車に押し込まれていた。

どうして自分ばかりこんな目に合うのか、世の中不平等だ。

表には出さなかったが何時もそう思っていた。

そのうち成長した妹と戦車に乗るようになった。妹と一緒に抗議すれば、或いは、と最初は淡い期待を抱いていた。

けれども妹は違った。

「楽しいねお姉ちゃん。戦車に乗るのは楽しいね」

妹はにつこりしてそう言った。

そう言えるのも最初だけだと思った。けれどいつまで経っても、そして今でも、みほは「戦車に乗るのは楽しい」と言い続けた。

まほは自分を恥じた。この逞しい戦車と妹に恥じないような立派な戦車乗りにならねばならないと心に誓った。

けれどみほが何故戦車に乗るのを楽しいと言うのか、その理由は知らなかった。

◆ みほが黒森峰女学院に進学した時、祝いを述べるに様々な人種が西住屋敷を訪れた。由緒ある戦車道の旧家とはそういうものだった。

訪れるのは地域人だったり、教育者だったり、戦車道連盟だったりと様々だったが、ともかく最後に訪れたのが杖をついた一人の老女だった。

松尾スミといって、戦後日本の戦車道を形作った立役者であり、齢九十を越してなお現役で戦車道連盟重役を務める強者だった。

この人は西住流と縁が深い人で、先々代の西住流師範（みほの曾祖母）の部下で同じ戦車の砲手を務めており、その最期を看取った人でもあった。

スミが訪れた時、これまでの来客とは比較にならない程の緊張感

が空間を支配した。

なにしろこの老撫子は戦車による実戦を経験した元兵士であったし、目は加齢を思わせない程に鋭く輝いていた。

それをもてなす西住一家三人が来客部屋でスミと対面した時、この老女が途方もなく大きく感じられた。

少なくとも、しほとまほには。みほは何時もと変わらずにモジモジとしていた。

「この度は妹様の御進学、誠に、おめでとう存じ上げます」

「いいえこちらこそ、未熟な娘の為に御足労頂き感謝の念に堪えませんわ」

「妹の為に、あなた様に出向いて貰えるとは感激であります」

スミが深々と頭を下げたことに恐縮するように、母と姉が礼に倣う。

みほは「ありがとうございます……」と小声で言っ、ペコリと頭を下げた。その態度で、母に一瞬睨まれたことに気が付いたかは分からない。

「うん、お姉さんの方は益々お母様に似ていらつしやった。この前まではほんの童女であったのに」

「はい」

「今年も黒森峰は優勝できますか」

「はい！ 絶対に勝ちます、勝って見せます」

「勇猛だ。意気込みというのは最も大事なものです」

爽やかな笑いを受けてまほは照れくさそうに返事をした。

「今日のしほさんのご活躍、その都度感心しております。日本の戦車道が今後発展していくためにはあなたの働きが不可欠でしょう」

「はっ、未だ半端者にてお恥ずかしい限りでございます」

まさに頭が下がりがりっぱなしといった様子で応じるしほに、母がここまで畏まるのは、この人の前だけなのかもしれないと娘たちは思った。

「みほさんと会うのはこれが初めてですね」

最後にみほに優しく声を掛けた。

他の全ての人間と同じように、みほが内気な性格であると判断したからだだった。

「御家族はやたらに持ち上げますが、私はなんてことはない人間ですから、そう畏まらなくてよいのです。西住の家が気になってしようがない、ただの老いぼれですよ」

ハハハと豪快に笑うスミに続き、多少引きつり気味に母と姉も笑った。

みほは笑わなかった。

別に面白いとは思わないからだだった。

「中学校では御活躍されたそうですね、立派だ」

「ありがとうございます」

「この先も戦車道を続けられるのでしょうかね」

「もちろん」

「ほう、直ぐ答えられた。お姉さんもそうだった。ではその理由は如何に？」

まほには覚えがあった。一年前、この人はまほに同じ質問をした。

結局その時は「西住流を継ぐ者だから」と答えたが「それは御家の事情でしょう、あなた自身はどう思っているのですか」と聞き返され、答えられず、泣きそうになった所で母に助け舟を出してもらったのだった。

みほがどう答えるのか、そもそも答えられるのか、心臓が高鳴る。

「楽しいからです」

みほは直ぐに答えた。

「楽しい、戦車道が？」

「そうです……お姉ちゃんもそう答えたんじゃないやありませんか？」

「戦車道が楽しいですか」

「ええ全く、これ以上に楽しいことを私は知りません」

スミの目がぎりりと、急に険しくなった。この温厚な彼女にとって非常に珍しいことである。

しほは汗を一筋流した。

「みほさん、あなたは戦車道を楽しいと仰るけれども、それは勝つ事が楽しいのですか」

「いいえ」

「ほう、では勝とうとは思わない」

「さあ……思わないこともありません」

意気込みが最も大事……という前のスミの発言を受けての返事だった。

それに加え「さあ」とは余りに失礼に思えたので、しほはみほの口をつぐませようとしたが、スミが片手を上げて制したので引き下がるを得なくなつた。

「ではあなたは意気込みも無しに戦車に乗っているのですか」

「そういうことになるでしょうか」

「みほさん……では何を以て戦うのですか。相手を倒そうという戦意無しに、どうして砲が撃てるのですか」

怒りと言つていいほど険のある口調でスミは尋ねた。

みほは考え込んだ。返事によつては、西住家はスミの信頼を失うかもしれない。

しほはこの時生きた心地がしなかつた。

やがてみほは、やはり何時もと変わらない調子で返答した。

「勝ちとか負けとか、意気込みが有るとか無いとか、それほど重要ですか」

「……と、いうと」

「戦車道とは闘争です。相手は此方をやるつもりで来るでしょうし、否応なしに此方も反撃することになります。その結果、やったりやられたりする訳です」

「その通り」

「それが繰り返されます。やったりやられたり、やったりやられたり、やったりやられたり……どちらかが終わるまで永遠に報復は続きます。たくさんやられます、敵も味方も」

みほは笑つた。この異様な空気の中で、独り笑つた。

楽しくて仕方が無いのだった。

「楽しきかな。これが闘争です。これが戦車道です。だから私は戦車に乗ります。終わるために、終わらせるために、それを永遠に続けるために」

言い終わるやいなや、音を立ててスミは席を立った。その身体は打ち震えている。

そのままみほに歩み寄って、鋭い視線で見下ろした。手には杖を持っている。

殴られる、周りの二人は確信した。

まほは動けない、身体が完全に硬直してしまっている。しほは激昂したスミが杖を振り上げたら、娘を身を呈して庇うつもりで身構えた。

ところが予想は実現しなかった。

スミは膝を折り、杖を置いて、みほの手を取った。

「みほさん、あなたは……」

声が上がらず、震えていた。

「あなたはまさに、西住戦車隊長の生き写しです」

感服し尽くした。

そういう風に涙を溜めて、老女は跪いていた。

かつて命を賭して共に戦い、無念の最期を看取った上官……その姿をこの少女の中に見出したのだった。

「曾お婆様……」

みほは呟く。曾祖母は、みほがこの世で最も尊敬している人だった。

生き写しと称され、歓喜の念がじわりと滲み出した。

「聞かせてください。私の、先祖の話を」

「はい、喜んで」

松尾スミは語った。

彼女の上官が、かの軍神……西住戦車隊長が如何なる人間であったのかを。



## 鬼神西住4

西住みほというのはおおよそ転校生らしくなかった。

普通転校生というものは注目を集めるものだ。けれど西住みほは全く目立たなかった。どころか、彼女が転校生だという事をクラスの間々が知っているのかも怪しかった。

いつも席に座って本を読んでいた。本の表紙のローテーションから察するに、大変な読書家であるようだった。

ならば内気な性格かと思いきや、朝は「おはよう」夕は「さようなら」とにこやかに挨拶をしてくれる。

ちよつとした日常会話では可愛らしい口ぶりで話し、けれども自分から会話をしようとはしない。

不思議な娘だ。

新学期当初、武部沙織は西住みほをそう評していた。

しばらく時が経つと、ちよつとした評判が立った。

というのも、みほは困った人を見れば「大丈夫ですか」と声をかけていたし、大変そうな人を見れば「手伝いましょう」と献身していた。

そういう訳で、みほに助けられたという人が学校内外に沢山いて、あの風紀委員にも覚えが大変めでたい(らしい)。

いつの間にやら『A組の良心』などと呼ばれ始めていたが、当の本人は暇さえあれば読書に勤しんでいたので自然話しかけづらく、友人と呼べるようなクラスメイトは未だいなかった。

こんな娘を放っておく訳にはいかない、仲良くなればお互いに生活が素敵になるはずだ……というのが武部沙織である。

ある日、沙織は親友の五十鈴華と共に西住みほに話しかけ、自己紹介をしようとしたが、先んじてみほは言った。

「武部沙織さん、6月22日生まれ。五十鈴華さん、12月16日生まれ」

◆ あちらは、こちらをよく知っているようだった。

副隊長であるみほが転校してからというもの、黒森峰女学院戦車道部はあわや解散の危機に瀕していた。

学校のエースが居なくなつたことで、上層部が落胆を隠さずに文句を言ってきたということは大した問題ではなかつた。

今、戦車道部は退部志願者が続出していた。

外部からではなく、内部からの崩壊が深刻だつた。

退部の理由としては「西住副隊長が居なくなつてしまつた」「これから誰の為に戦つていいのか分からない」「黒森峰女学院に失望した」等々。言い回しは様々だつたが根本は一樣だつた。

みほが人に及ぼしていた影響がどれほど大きかつたか、皮肉にも居なくなつてから判明したのであつた。

黒森峰女学院には全体として口下手な風潮がある。

これはドイツの流れを汲んでいるものだつたが、その分、芯に熱く質実剛健で結束力の高い事が特徴だつた。

ある種、みほが異質だつたのである。

みほはこの風潮をも利用し、洗脳の口上で鉄の結束を作り上げていたのだ。

だが、結束の要が居なくなつてしまつたらどうか。

これほど脆いものは無い。

まほは、自分が黒森峰に典型的な口下手であることを自覚している。妹の真似など出来ることではないし、そもそもああいふ風になりにたくなかつた。

だから、退部すると進言してきた仲間を説得し、引き止めることが叶わなかつた。

隊長としてどれほど人望があるか、試されるのは非常時であると言ふ。今、自分がどれだけ不甲斐ない隊長であつたのか、まほは覺つた。

そして失意の底に沈んだ。

誤解が無いように言つておくと、別にまほが頼りない隊長だと皆が本気で思つていた訳ではない。むしろ尊敬を集めていたと言つてよい。

だが物事には順序というものがある。

そういう事だった。

もはやこれまでか……そう諦めかけた時、救世主（まほにはそう思えた）が現れた。

逸見エリカである。

エリカは辞めようとする隊員たちを必死に説得して回った。

決して丁寧な言い回しではなかったし、器用な立ち回りでもなかった。彼女も一種の口下手だった。

けれど、その熱意が隊員に伝わるには十分だった。

辞めると言っていた隊員の半数以上がこの説得により思い留まった。

間違いなく黒森峰女学院戦車道部は逸見エリカによって救われたのである。

まほはエリカの戦車道における実力に加え、この功績を加味し、新副隊長に任命した（単純に嬉しかった、というのもある）。

エリカは恐縮しながらもこれを受けた。

状況がひとまず落ち着いた後、まほはエリカに聞いた。

「隊長たちは頑なだった。一体、どうやって説得したんだ？」

エリカは恐縮して答えた。

「大したことは私には言えません。ただ……」  
「ただ？」

『西住副隊長がいつか黒森峰女学院にお戻りになった時、この有様をご覧になったらお嘆きになることでしょう。あなたたち、恥ずかしくはないの？』……とか、そんな事を言いました。そうすると殆どの隊員達は泣き崩れて『私が間違っていました』と後悔していました。やはり皆、本気で辞めたかった訳ではなかったんですね」

「……………」

「いつかあの人が戻ってきた時に強いチームであること、今ではそれが私たちの使命だと思っています」

「……………そうか」

この逸見エリカ隊員が《西住みほ親衛隊長》でなければ本当に

良い娘なのに……とまほは思った。

エリカはみほが転校した直後、ショックで学校を二日休んでい  
る。

## 鬼神西住5

この日しほは末の娘の初めての晴れ舞台、戦車道の試合を観戦しに来ていた。

家を出る時に「頑張りなさい」と柄にもなく励ますと、みほは緊張した様子もなく、にっこりして言った。

「見ていて下さい」

勝敗は関係なく、全力を出せばそれで良いと思っていた。初陣ではそれさえも難しいだろうが。

だが、そのような樂觀は甘かった。

敵を全車両撃破し、みほは勝利した。

試合はフラッグ戦だった。しかし、みほは殲滅した。文字通り、徹頭徹尾完全な殲滅だった。

しほは恐ろしいものを見た形相で絶句した。

知っていたからだだった。一体あの娘が何を実行したのか、その正体を知っていた。

それは間違いなく『西住流』だった。

今では失われた……そして、継いではならないものだった。

試合が終わり、みほがその報告をしに仕事部屋までやってきた。真顔を作ろうとして必死に笑みを堪えているような表情だった。

対してしほは深刻な心持ちと、表情で告げた。

「みほ、あなたの西住流は邪道よ」

呆然とする我が子に、続けてその説明をしようとする、突然激しく泣き始めた。

しほは、唐突に大泣きし始めたみほに狼狽えた。叱りつけたことで、何故これ程までに泣くのか、理由が思い当たらなかった。

どうしてよいか分からずにいると、みほはそのまま家を飛び出して行ってしまった。

しほは娘をすぐに探し始めた。まほや家政婦の力も借りて方々を探し回った。日も傾いてきて、焦り出した頃に、なんと墓場でぐったりしている娘の姿を見つけた。

とにかく尋常ではないということを感じたので、駆け寄って抱き上げた。

娘の鼓動を感じたくて、強く抱きしめた。

どうやら眠っていただけで、無事のようだった。

理由は未だ分からなかったが、娘を深く傷付けてしまったという自覚はあった。

言うべき言葉が見つからなくて、結局、より強く娘を抱きしめることしかできなかった。



みほは母親のことが好きだった。

優しいお母さんだと思っていた。確かに厳しくはあったが、それは優しさと矛盾するものではなかった。

いつも忙しそうで、母より姉と過ごした時間の方が長いだろう。たまに会話をしていても戦車の話ばかり聞かされた。

一緒に娯楽を嗜むなんてしてもらった覚えがない。

けれど、闇夜が怖くて縋り付いた時、優しく抱きしめてくれた。

その温もりだけで、みほには十分だった。

優しさというものはこの世で最も尊ぶべきものだと、母親から学んだ。

曾祖母……西住戦車隊長に何が切っ掛けで、何時から尊敬の念を懐いていたのかは覚えていない。気が付いた時には深い崇敬の念があった。

ただ、母は曾祖母のことを全然話してくれなかったのは覚えてい

る。教えてくれないのなら自分で調べるしかない。

西住屋敷の巨大な書庫から本を引っ張りだして読み漁った。

読書の習慣はこの時に身に付いた。

本当に色々なことを学んだ。人生で最も有意義な時間であったと今でも思う。

母が教えてくれない、古い指南書に克明に記された、戦車の技法……作戦立案……心得……。

どれもこれも今の西住流には失われたものばかりだった。

これを復活させ西住流に更なる繁栄を呼ぶことこそが、この家に生まれ、西住流の後継者たる自分の使命だと強く思った。

尊敬して止まない曾祖母が、血を流し、命を賭して実行した『西住流』。その誇り高い血が自分には流れている。

偉大な先祖たちが創意工夫し作り上げたものを、失わせてはならないと誓った。

全くの正義感からの誓いであった。

けれど、現実のみほを裏切った。

人生初の戦車道の試合において、独力で必死に身につけた戦法を鮮やかに成功させた時だった。

みほは母親に褒め称えられると思っていた。西住家に生まれたる者の鑑だと……そう言われると、無邪気に信じていた。

「あなたの西住流は邪道よ」

試合の報告に行くと、面と向かってそう言われた。

他ならぬ母に言われた。

大好きなお母さんに、否定された。

みほは大泣きした。そのまま部屋から飛び出して、着の身着のまま家を走り出た。

ここ辺りの記憶が曖昧であるから、相当激しく泣いていたのだろう。

穢されたと思った。

尊敬する曾祖母のことも、西住流のことも、この身に流れる血も、あの誓いさえも……全部が全部否定され、無意味なものに貶められたと感じた。

悔しかった。褒めてもらえると思ったのに。お母さんは何一つ分かってはくれなかった。

様々な感情が容赦なくみほの心を突き刺した。

どこをどう走ったのか、とうとう走れなくなってへたりこんだのは墓地だった。

ここは家族で何度か訪れたことがあって知っていた。

ふらふらと重い足を動かして『西住家之墓』と彫られた墓石まで辿り着くと、それにしがみついてまた泣いた。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

と、ひたすらに謝ったことをはつきり覚えている。泣いて泣いて、泣き続けた。

そのうち涙も涸れて、ぼんやりと墓石を見つめるだけになった。引き裂かれた胸に虚しさが込み上げてくる。

曾祖母も、今は無き先祖も、何も残さなかったのだろうか。遺志は引き継がれることなく、これだけの墓石になってお終いか。

先祖が命を賭して実践した『西住流』。それらは忘れ去られる運命しか待ち受けていないのか。

あの愚かなる母や、卑怯者の姉に引き継がれ、ただただ廃れる未来しか道が無いのか。

全てが無駄だったのか。

私が愛し、崇敬した西住流は他ならぬ西住の血によって否定されるのか。

否！ 断じて否！！

私がいる。

誰もが忘れ、否定し、その誇りを穢そうとも、私だけは断じて許さない。先祖たちは何も残さなかったなどと言わせてなるものか。

彼女たちは私を残したのだ、この、西住みほを。

そのたった一つがある限り『西住流』は不滅だ。

今は邪道と蔑まれ、名も無き、私だけの戦車道。

いつか、いつの日か『正調西住流』を復活させる為に生きよう。

先祖に恥じることのない、堂々とした道を歩こう。

私はその為にここに居る。

みほは立ち上がった。

改めて墓石を見つめると、あちらからも見つめ返されているような気分になった。

みほは物言わぬ墓石に、再び誓った。

西住流を穢す全てを駆逐し、ここに復活させると。



先祖たちの遺志は絶対に無駄にはしないと。  
生きる限りこれに全力を尽くすと。  
西住みほは、ここに鬼と化した。

## 鬼神西住6

みほは大洗女子学園へ転入する前に色々なことを調べた。学園艦の規模、風潮、施設、地形。学校関連のことはさらに詳細に。

今日び、独力でものを調べようと思つて調べられないことなどあまりない。

ただ、みほが最も重視するといつてもよいもの、人間については一通りの情報に目を通したが、実際に会つてみるまで評価は保留していた。

あの日以来、みほは他人の性質というものがよく見えるようになっていた。

よくそうであるように、他人に対して根拠の無い期待を抱くことがなくなった。悪徳と美德は等価値となり、片方に目を瞑るということをしなくなった。

家族とその辺を歩いている人とを並べて、客観的に人格を批判することに何の抵抗も無くなった。

それがクラスメイトであれば尚更だった。

その日、みほに声を掛けてきた武部沙織と五十鈴華。どちらも「友達になりたい」と言つて話しかけてくれた。

他意はないだろう。この二人がいい娘であるというのはよく知つていた。

西住流に産まれたみほにとって、こういう打算や先入観の含まれない友好というのは新鮮で、素直に嬉しいと思つた。

けれど一方で、冷徹なまでの人物評価と計算がそこにあつた。この友好が何をもたらすのか、調べ、観察した全ての要素を加味して考えていた。

みほの感情と理性とは完全に分離されていた。

みほはこれらを意図してやっているわけではなかった。

言わば、ただの習慣だった。



「ひどーい！ そんなのあんまりだよ！」

「様々な事情はあるにしても、それは余りにも……」

沙織と華は同情を顯にして言った。

昼休み、食堂での出来事である。

二人は、謎多きクラスメイト、みほを昼食に誘っていた。

自己紹介もそこそこに（もつとも、みほは既に色々知っていたが）、転校生の身の上話に花を咲かせていた。今までの分、みほへの興味は尽きることがなかった。

物静かで内気な印象のあった転校生は、意外にも物怖じせずにはきはき喋った。それでも表情は少し照れるようにはにかんでいるのが愛らしい。

これまでの学園生活で『A組の良心』という評判が立っていたから、悪い子ではなからうと思っていたが、実際に話してみると想像以上に良い娘であることが分かった。

何しろ「どうしてそんなに親切をするの？」と聞けば、「習慣です」と格好良くも天使のような答えが返ってくるのだから。

これからの素敵な生活を予感し、やはり友達になつて良かったと二人は思った。

そうして最大の謎……どうして大洗女子学園へ、どこから転校してきたのかについて、みほに聞いてみた。

するとみほは急に悲しそうな顔になつて俯いてしまった。

何かまずいことを聞いてしまったのか、にわか二人が慌てると、みほはぼつりぼつりとその理由を語り始めた。

戦車道の試合中の行為を取り沙汰され、実家から勘当されてしまったこと。

その行為に、みほは全く悪気が無かったこと。

友達は許してくれたのに家族は許してくれなかった事。

そして熊本から大洗という遠い地にまで追いやられてしまったこと。

それらの概要をみほは本当に悲しそうに語った。

余りの仕打ちに、思わず二人は冒頭の言葉を漏らしてしまったのだった。

「うん……でも仕方の無いことなのか。私の家は、西住流は頑固で保守的な面があるから……私のことが許せなかったんだね」

「でも、そんなのひどいよ！ だってみほは自分の信じることをしただけなんですよ？」

「娘の信じることを尊重すること、それは流派以前に、家族として当然のことだと思えます」

「ありがとう二人とも。そう言ってくれて、とっても嬉しいよ」

そう言うみほの笑顔はとても儂げで、哀愁があった。

信じたものを裏切られ、家族に嫌われ、独りぼっちで見知らぬ遠くの土地まで来ることがどれほど寂しいことであろうか。共感しようと思う心があれば、実に胸が痛くなる話だった。

何があるうとこの娘の味方でいたい、と善良なる両人が心に決めるに十分な理由であった。

「私ね……」

哀れな友人に慰めの言葉を掛けようとした時、その友人は顔を上げて言った。

「家族はいつか分かってくれると思ってた。そのための努力は、していたと思う。でも伝わらなかった。私は二度も裏切られたんだ」

みほの様子に、もはや悲しみは無かった。堂々と胸を張って二人に向き合っていた。

「それで分かったの。今の西住流はすっかりだめなんだって。長い月日は気高い精神さえもすり減らせて、墮落させてしまっただって。今までのやり方では、到底立ち直らせることはできなかったんだよ」

悔しそうに、みほは言った。

いつの間にか二人は慰めることも忘れ、話に聞き入っていた。

「だからこれからは、やり方を変えることにしたの。だめになってしまったものを守るんじゃない、立ち向かうんだ。一度、完全に壊してしまわなければ永遠に良くなることなんてないって、そう思うから」

みほは辛そうな声色で、それでも胸を張って言った。

「だから私、大洗へ来たことも全然後悔してないよ！ 離れてみなければ分からないこともあるって、きつと神様が……ううん、私の御先

祖様がチャンスを与えてくれたんだと思う。そう……思っていたんだけれど、やっぱり、独りでは心細かったんだ……」

声と同じように、身体も縮こまって言った。

「だから私、今日二人が声を掛けてくれて本当に嬉しかった。もう寂しくない、もう怖くない！ だってこんなに素敵な友達が出来たんだもの！」

花が開いたように眩しく美しい笑顔で、そう締めくくった。

その笑顔に、聞き入っていた二人はしばらく言葉を失ってしまった。

なんて……なんて健気で、力強くて、そして……

「カッコいい……」

そう漏らしたのは沙織であった。何か尊いものを見つめるように頬を紅潮させ、ぼうつとみほを見つめている。まるで恋する乙女の様だった。

華は未だ言葉も無かった。この新しい友人に、酷く感銘を受けていた。

華は五十鈴流華道家元の跡取りである。みほとは元々境遇も近い。

そして、華は自分の華道に行き詰まりを感じていた。何か決定的なものが、足りてない気がしてならなかった。

「二度……完全に壊す……」

華はようやく呟いた。この言葉を忘れないように心の中で繰り返す。この言葉に、先へ進むためのヒントが隠されている予感があった。

この後もしばし沈黙が続いたが、みほの発言で破られた。

「……あ、昼休みが終わっちゃう。急いで食べないと」

みほは照れ隠しのように目線を外し、昼ご飯をかき込むことに力を使い始めた。

その様子に二人もやっと正気に立ち返り、同じくご飯を食べ始めた。

その口元は終始にこやかだった。

この西住みほという転校生と友達になること自体が、どうしよもな

く素晴らしいことに思えた。みほに初めて声を掛ける人間になれたことがなんて幸運だろう！

素敵な日々の予感、将来への希望で一杯に満たされた気分では二人は食事を楽しんだ。



この後、友達となった三人は午後の授業に遅刻しそうになった。

「もー、二人があんなにご飯を盛るから！」

沙織が嘆く。

みほはさらりと応えた。

「ご飯は力の源だから、食べられる時に食べないと」

「みほ……太るよ……」

「みほさんの言う通りですよ沙織さん」

「華は食べすぎ！ それで何で太らないのよ、もー！」

何とか授業には間に合った三人だったが、昼休み中教室で待ちぼうけをして、失意のうちに撤退した生徒会の面々には気がつくはずもなかった。

## 鬼神西住7

大洗女子学園生徒会室には重い空気が漂っていた。

突然の最後通牒を叩きつけられたあの日から、何度となく経験した暗いムードだった。

原因は、昼休みに会う手筈であった西住みほに接触できなかったことにある。

このことに、生徒会長である角谷杏は「また会いにいきやいいんだから」と軽口を叩いて仲間を労った。しかし、広報担当の河嶋桃が「幸先が悪い」「このままでは廃校だ」と大袈裟に騒ぎ立てたせいで、思い出したくもないことを思わずにはいられなくなったのである。

副会長の小山柚子になだめられて今は落ち着きを取り戻したが、如何ともし難い重い空気だけは場に残った。

皆が不安がるのも無理はない。

西住みほは計画の要であり、彼女の力を借りることが出来なければ一巻の終わりなのだ。接触について過敏になるのは当然である。

だからこそ、会長の杏がどつしりと構えることで、少しでも皆を安心させようとしていた。

しかし、うんざりするほど味わったこの雰囲気には、内心の焦りを掻き立てられるようで慣れなかった。

「まー、焦ってもしょうがないっしょ。それより集会の準備、急いでねん」

自分に言い聞かせるように軽く言うと、二人は「はい」と頼りなく返事をして作業にかかった。仕事をしていれば少しは気も紛れるだろう。

杏自身も手元の報告書に目を通した。

それは、この期間で徹底的に調べ上げた西住みほの来歴についてだった。



下校間際のホームルームに「全校生徒は体育館に集合するように」という放送が順当になされた。

続々と全生徒が集まってくる様を壇上から眺めるのは壯観であった。

生徒会に入った時から滅茶苦茶をしていたつもりだったが、うちの生徒はそれにも慣れて（呆れて？）素直に従ってくれるのは有難いことである。この光景が妙に愛おしかった。

生徒会の後輩や風紀委員が声を張り上げて学年別、クラス別になるように誘導している。

何とはなしに集団が分かれると、杏は2年A組の集団辺りから、西住みほを探した。

彼女はすぐに見つかった。

友人とお喋りをしながら穏やかに笑っていた。

杏は意外に思った。報告書によれば、過去に戦車道で鬼のような成績を残し、大洗に転校してきてからは品行方正で学業優秀、まさに文武両道の鑑といった人物像であった。

半ば非人間的な印象を持たせる彼女が、こうして実際に見てみると温厚で親切そうな可愛らしい女子であることに、少しほっとした。

段取りは進み、体育館の照明が落とされスクリーンに『戦車道入門』の動画が流される。動画の準備は桃、ナレーションは柚子が当てていた。

最初から最後まで戦車道を絶賛する内容である。

我々の作業ながら酷い偏向であった。そもそも戦車道の経験もないのに、偉そうにかたるのが訝しい。柚子が「一種の情報操作では？」と言ったのも、なるほどその通りである。

しかし、同じく戦車道の経験の無い生徒達は真に受けて目を輝かせていた。

胸が痛まないでもなかったが、なりふり構ってられない現状であった。

さらに駄目押しとばかりに「戦車道履修者には生徒会権限によって数々の特権を与える」ということを伝えると、生徒達はさらに浮き立った。

これならば、良いだろう。人数確保の目処は立った。あとは人材の



確保である。

「というわけでー、戦車道、ぜひ選択してねー。それじゃあ、解散」  
依然として浮き立つ生徒達にそう告げ、そして付け足した。

「それと、普通1科2年A組の西住ちゃん。ちよつと話があるから、残ってね」

そう言う「西住?」「西住って、あの『良心』の西住さん?」という声が、騒然とする生徒の中にぽつぽつと混じった。

◆ 集会の後、生徒たちはそろそろと退館していった。

西住みほは、しばらく二人の友人と話していた（心配されている風だった）が、やがてその二人とも別れて、いよいよ一人になった。

広い体育館のど真ん中で、ぽつねんと体育座りしているみほの様子は、何だか小動物じみていて哀れだった。

こちらにも生徒会のメンバーを先に帰らせ、残るは三人だけになった。彼処から来る気は皆目無さそうなので、此方から足を運んだ。

ある程度近づくと、西住みほはおもむろに立ち上がった。

「私が西住です」

穏やかな微笑と、それに見合う優しげな声だった。そこからは警戒心の欠片も感じられない。

桃と柚子は朗らかな第一印象を受けた。「いい娘そうだ」とほつとした。

杏は、一瞬足を止めた。両脇の二人が不思議そうに杏を見た。

それもつかの間、いつも通りの飄々とした様子で杏は手を振った。

「やつ、西住ちゃん!」

つかつかとみほに歩み寄って、肩を組んだ。

みほは少し驚いたようだった。

「ご存知の通り、戦車道復活させることになったから」

「そうみたいです」

「それでさあ、西住ちゃんには是非! 戦車道を選択して欲しいんだよね」

「え……どうして」

「そんなとぼけちゃって。実家が戦車道の家元なんでしょー？」  
「でも私、戦車道をやっていない高校だったから転校させられて来たんですけど……」

「話つてのはそれだけ。まっ、そういう訳でよろしく！」

背中をばんと叩いて強引に押し切った。

みほは少しよろけて、目をぱちくりさせた。その後、うーんと悩むような仕草をして言った。

「考えておきます」

実に日本的に返答を濁して「失礼します」とにつこりしてから、みほはその場を後にした。

体育館には三人だけが残された。

みほの背中が見えなくなっただけから、杏は低い声で言った。

「……笑ってたね」

「何だか優しそうな娘でした。やっぱり強引だったかしら……」

「強引でも何でも、手段は選んでられん！ まあ、確かに、その優しさにつけ込むようかもしれないが……」

その後も柚子と桃は罪悪感を紛らわすように、やいのやいのと議論を続けたが、杏は黙って、あの西住みほの笑顔を思い出していた。

笑っていた。

あの優しそうで、揉め事が嫌いそうな彼女が。

転校生が集会で生徒会に名指しで呼ばれる……その状況で不安や警戒心を一切見せず、なおかつ笑ってみせられるものだろうか？

見かけによらず肝が座っている、と判断すればよいのか、それとも……。

それ以上の追求をするには材料が足らな過ぎた。何より、無理矢理押し付けておいて被害者の裏を疑うような真似は、杏の正義感が邪魔をした。

◆ 西住みほは上機嫌だった。

一人帰路につく廊下をスキップでもしたいそんな気分。大幅に手間が省けたと思った。

生徒会が私を必要としていて、それに協力させられる……そういう理由で私は戦車道を始めさせられるらしい。断つたとて、どうせ無理矢理引きずり込まれるのだろうか。

何とも素晴らしい、それでは私は被害者か？

勝手な生徒会に振り回される、右も左も分からない転校生。そんなのだろうか。

どうやら私は、どうあつても闘争から抜け出すことはできないらしい。

これでは私が戦車道を好いているのか、戦車道が私を好いているのか分かったものじゃない。

いいじゃないか。

生きることこそ闘争であり、闘争こそが最大の生の主張なのだから。

私はまだ生きている。生まれし日より、理由はそれで十分だ。

それにしても、あの角谷杏という人。人一倍臆病で、小さな生徒会長……勘が良い。

小胆だからこそ、人を見る目が敏感なのだろう。さつきも何か気がついたらしかった。

構わない。私は嘘はつかない、隠すことなど何も無い。私ほど堂々と生きている人間も、そうはいないだろう。

だが、悲しきかな角谷杏。

あなたには選択肢が少なすぎる。守るべきものの大きき故に、自ずから選択肢を狭めている。

しかし、それも深い優しさと、愛の成すことだ。

ならば尊敬するべきか。優しさは、この世で最も尊ぶべきものなのだから。

あとは、愛……愛か。

いいな、それは、最高だ。

「楽しいなあ」

やはり戦車道はこの世で最も楽しいものだ。

## 鬼神西住 8

角谷杏は生来、小心で臆病な性格であった。

それは自分で自覚していたし、直そうと思っただうにかなるものでもないという事は重々承知していた。

いつも他人の顔色を見て、何を求められているのかを探っていた。他人の期待に添えないことが、何だかとても嫌だった。その事で、他人を失望させてしまうことはもつと嫌だった。

求められていることを確実に実行し、喜ばれるだけの能力が杏には備わっていた。

この性格を優しさと言って良いのかは、今でも分からない。

人間というのは誰でも、腹の中を探られるのを嫌うものだ。自分は誰よりも複雑である、という自負を無意識に持っているからだ。

だから杏は飄々と、適当な人間を振る舞った。

単純な人間を振舞っていれば、その種の安心感を周囲に与えられるからだ。

事実、周囲の人々は杏を誤解した。目論見は、正しく成っていた。

しかし、その強がり、いつしか杏の中に新たな感情を産んだ。

それは恐怖だった。

その振る舞いが、偽りが、露見すること……実は杏が全くの臆病からそんなことをしていると、他人に知られることが、たまらなく怖くなった。

嫌なことから逃れる為にしていた事が、皮肉にも新たな恐怖となつて杏を追い詰めたのだった。

けれど気が付いた時には、もう後戻りはできなかつた。杏はこの先、内なる恐怖を抱えながら、飄々と強がって生きてゆくことしかできなないと思つた。

絶望にも似た諦観が、胸の奥に巣食つた。

それが変わったのは大洗女子学園に入ってからだった。

他人からの要求と、何時もの強がりの結果、生徒会に入ることになつてしまった。

より多くの人目に晒されることは、正直、恐怖を助長するばかりで、とても嫌だった。

そこで、川嶋桃と小山柚子に出会った。

初めは他の誰もと同じように、二人は恐怖の対象でしかなかった。仲良くなったものの、それは仮初の友情だと思った。本当の自分を知れば、失望して、見放されるに違いがないのだから。

しばらくすると、なんと生徒会長に指名されてしまった。他人の要求を察し確実にこなすこと、その苦労をおくびにも出さないこと……それは人目に、杏が有能であることの証明に他ならなかった。

無理だと思った。こんな小心の自分にできる訳がない。

しかし、辞退することは周りの人間が許さないだろう。断るには勇気が必要だった。そして、その勇気が杏には無かった。

杏は他ならぬ自分に追い詰められた。自分ですら敵なのだから、味方は誰もいないと思った。

途方に暮れた杏は、海を眺めて、人知れず泣いた。不安と、恐怖と、そして自分への叱責で一杯だった。

その間、普段は欠かさない周囲への注意が疎かになった。そして、その姿を川嶋桃と小山柚子に見られてしまった。

心配して寄ってきた二人に、どうしたのかと聞かれた。何でもないと答えると、そんな筈はないだろうと言われた。

観念した杏は、適当に事情をでっちあげて逃れようとした。

けれど、話しているうちに本音が漏れ始めて、止まらなくなった。涙も止まらなかった。そして、心の内の全てを暴露してしまった。

杏が最も恐れていた事を、自分からしてしまった。終わった……そう思った。

今にこの二人は軽蔑の視線と言葉を自分に向けるに違いないと思っただ。

けれど、二人はそうはしなかった。

杏より激しく泣き始めたのだ。

二人は泣きながら言った「友達がこんなに苦しんでいるとは気が付かなかった」「私達は友達失格だ」「どうか許して欲しい」。

その言葉に、杏は打たれた。本当の友達だと思っていなかったのは自分だけだったのだ。

この二人は、自分の弱いところも認めてくれるのだと、ようやく気が付いた。

その後、三人は一緒になって泣いた。

悲しかったけれど、そこには真の友を得たという喜びも確かにあった。

泣き終わる頃には、杏は生徒会長になることを決意していた。それを伝えると、二人も付いてくると言ってくれた。

もう、不安も恐怖も無くなっていった。

それから、杏の強<sup>チカラ</sup>がりが変わることはなかったが、恐れは無くなっていた。

それで親友二人の……大洗女子学園の皆の為になるのなら、それで良いと思った。

他人を思いその為に働くこと、何時も強い自分を振る舞うこと……それは杏にとって誇<sup>プライド</sup>りになった。

杏は深く感謝している。自分を変えてくれた、親友にも、この学園にも、返しきれないほどの恩を感じていた。

生徒会長として、どんな事があるうとも、これを守ろうと誓った。

角谷杏は、大洗女子学園を愛していた。

◆ 先日<sup>◆</sup>の全校集会以来、みほは学校の有名人になっていた。

何しろあの生徒会に全校生徒の前で名指して呼ばれたのだ。それがどんな人物なのか、気になるのも当然だった。

何をやらかしたのか、そしてこれから何をするのか……何しろ女子校である、みほの噂は口伝えにあつという間に広まった。

どうやら西住みほというのは『A組の良心』と呼ばれている。見返りや、下心なしに親切を行っては名乗らずに去ってゆく……らしい。

大体こんな風な噂だった。

自然、顔も知られる訳で、みほは先輩後輩問わず挨拶されることが多くなった。

その挨拶に応える時に、みほは片手をひよいと顔の横まで挙げる癖があった。

この手をひよいと挙げる仕草が「何だか可愛い」というので、挨拶をされる頻度はもつと多くなった。

手を下げる間もなくひつきりなしに声をかけられるので、みほの手は挙げっぱなしになった。

挙げっぱなしの手が、今度は「何だか格好良い」ということになり、今やみほを見かけたら挨拶をして手を挙げさせるのが学校で流行り出した。

当の本人は、期待を裏切ることもなからうと、嫌な顔一つせず何時もにこにこして応じていた。

そんな風潮が学校に根付いた頃、みほは校内放送で再び生徒会に呼び出しを受けた。授業終わりの放課後のことである。学校中がざわついた。

沙織や華と放課後の予定を話していたみほは、それを中断された。

「今度は何だろう、また強引な勧誘をしようって魂胆かな？」

「みほさん、一人で大丈夫ですか？」

友人が心配そうに言った。

ここでみほが「大丈夫じゃない」と言えば、本当に付いて来てくれるだろう。良い友達を持ったことを、みほは嬉しく思った。

「大丈夫、何とかなるよ」

「本当に平気？」

「うん」

「では、私たちは教室で待っていますね」

「でも、多分長くなるだろうから、先に帰ってていいよ」

みほの口調は、本当に何でもない風だったので、二人は安心した。

一緒に帰れないのは名残惜しいが、今日はここで分かれることになった。

「みほ、またね！」

「みほさん、また明日」

手を振る友人たちは、少し寂しそうだった。

「さようなら」

みほはにっこりしながら、右手をひよいと挙げて別れを告げた。



## 鬼神西住 9

『普通 I 科 2 年 A 組西住みほさん、大至急生徒会室に来てください。繰り返します。普通 I 科 2 年 A 組の西住みほさん、大至急！生徒会に来てください！』

授業終りの放課後、そういう放送が学校中に流されてから、早数十分経とうとしていた。

西住みほはまだ訪れない。『大至急』の意味を分かっているのだろうか。いや、もしや既に帰ってしまったのかもしれない。

生徒会室には焦燥感が蔓延している。

河嶋桃は部屋を早足でうろつきながらぶつぶつ何か言っており、山柚子は書類を読む目線が同じ場所を行ったり来たりしている。

角谷杏でさえ、その小軀に合わない椅子を頻繁に漕いでいた。

「何故だ！ 何故西住は希望書を提出しない!？」

桃は幾度目になるか分からない問を空中に投げた。もはや返答を求めている訳ではない、苛立ち故の嘆きだった。

その嘆きに二人は沈黙で返した。実際、この二人も答えるべき理由を持たなかった。

西住みほは、この一週間何もしなかった。『A 組の良心』という噂の拡散はあくまで自然発生的であり、みほが自発的に何かをした訳ではない。

そう……選択科目の希望書の提出すら行わなかったのだ。

期限は、今日までだというのに。

二人の友人……武部沙織と五十鈴華は『戦車道』の項目に○印を付けて既にこれを提出していることは調べがついている。

それだというのに、肝心のみほは友人の熱心な誘いを今の今までのらりくらりと避け続けていた。

当然のことながら、その度に生徒会一同は焦りを募らせていった。

そして締切日の今日、その焦りはピークに達していた。

「小山、念のためにもう一度放送を……」

内心の焦燥感に耐え切れなくなつて、杏がそう言いかけた時、部屋

にノックの音が響いた。

三人は顔をはつと見合わせた。

間を置かずに声がした。

「私です、西住です。入ってよろしいでしょうか？」

無邪気極まりない声だった。

杏が一つ息を飲み込み「いいよ」と応じると「失礼します」とドアが開いた。

「お呼びだったので、参りました。何か御用ですか？」

帰りの準備だろうか、みほは学生鞆を片手に持って現れた。やはり、危ないところであった。

「遅いっ!! 何をちんたらしていた!？」

とぼけた様子（三人にはそう思われた）のみほに、桃が叫んだ。

「ごめんなさい……私にも事情があつて」

「まあまあ、桃ちゃん。西住さんはこうして来てくれたわけだから……」

「桃ちゃんと呼ぶな!」

柚子に宥められて、桃は一先ず落ち着きを取り戻したが、荒い呼吸はそのままだった。

「やつ、西住ちゃん。ごめんね、何度も呼びつけて」

ここまで無言で様子を見ていた杏が、ゆっくり話し出した。焦りを表に出さないためにだった。

何故だか、みほにそれを悟られるのがまずい気がした。

「この前の話、覚えてる?」

「戦車道を履修して欲しい、という話ですか」

「それぞれ。でもさ西住ちゃん、まだ希望書、出してないよね?」

「ああ、これですか」

みほは鞆から紙を一枚取り出した。

掲げて見せるそれは、未だ白紙のままであった。

「何だか迷ってしまって、まだ決めていないんです」

のんきに紙をひらひらさせる様子に、三人は目を剥いた。みほは尚も続ける。

「この機に他の道を経験して、視野を広げてみるのも良いかなと思つて……今まで戦車道一徹でしたから」

えへへ、と破顔したみほは少し寂しそうであつたが、楽しそうでもあつた。目の前に新しい道が開けた希望と、喜びに溢れている。

生徒会の面子は、目の前の光景に耐え難い違和感を感じた。こちらの今にもバラバラになりそうな内心と、みほの穏やかな様子が、余りにかけ離れている。

「この香道っていうの、楽しそうですよね。どんな事をするんでしょうか。あつ、でも華さんがやっているっていう華道にも興味があるかも——」

「ちよつと、ちよつと待って西住ちゃん」

語り続けるみほを、杏は堪らず静止した。これ以上聞くのが苦痛だつた。

「西住ちゃんにはどうしても戦車道をやつて欲しいって、言ったよね？」

「そ、そうだ！ お前には戦車道を取ってもらわなければならない!!」「そうです、私たち困っちゃいますよ!」

杏に続き、二人は捲し立てた。落ち着いた調子の杏の発言に対し、これは実に焦りが滲み出している。杏は得体の知れない不安にひやりとした。

これを眺めていたみほは「はあ」と首を傾げた。

「でもそれは、あなた方が決めることではありませんよね？」

みほは、そう言い放つた。

生徒会は絶句した。耐え難い違和感の正体がやつと分かつた。

この生徒には……西住みほには、事の重要さが全く伝わっていないのだ。生徒会トップの三人がどれだけ必死なのか、まるで考慮していない。

何たる鈍感さか！ 桃と柚子は閉口した。

杏も表面は同様であつた。しかし、それは本当に鈍感ゆえの言葉なのか、注意深く観察しても、真のところは判断できなかつた。

焦りが、判断力を鈍らせていた。

「それに……私は戦車道をするべき人間ではないと、家族から……西住流から言い含められています。その為に、大洗女子学園まで転校して来たんです。ここで戦車道を選択してしまつたら、顔が立ちません」

声も細く、顔を伏して事情を話すみほの言葉は、全く筋が通つていた。

加えて、生徒会もあくまで学生である以上、個人の家庭事情を持ち出されては容易に口出しができない。

生徒会は次に言うべき言葉を失つた。あらゆる発言を事前に封じられてしまったのだ。交渉の可能性は、もはや破綻した。

「わざわざ声をかけてくれて、申し訳ないんですけども、やはり私は別の選択をさせて頂きます……あつ、この希望書は帰りに職員室に提出してきますね。大丈夫です、今日中には科目を選びますから」

みほは用紙を白紙のまま鞆にしまった。もうすっかり帰るつもりでいるらしい。

完全に進退窮まつた状況である。このままみほを帰してしまつたら、選択に関与することが不可能になってしまう。流石の生徒会でも、既に提出されてしまった書類の内容を改ざんすることは出来ない。

みほは、今にも「さようなら」と手を挙げんばかりの様子である。早く……早く何かの手を打たなければならぬ。

それは一体、どんな？

そうだ……最後の手段が残されていた！

「そんなことを言っていると、この学校に居られなくするぞ……っ！」  
「そ、そうだよ、悪い事は言わないから素直に従つた方がいいよ？」

心をぐちゃぐちゃに掻き乱された桃は、半ば恐慌状態で声を張り上げた。柚子もそれに便乗する。

こののんきな転校生には脅しはいかにも有効と思われたからだつた。

杏はぎよつとした。

三人で話し合つた最後の手段……『脅迫』は、もし使うことになつ

てしまっても、それは杏から持ちかける約束だった。泥を被るのは生徒会長だけで十分だと、杏が主張したからだ。桃と柚子も、不本意ながらそれには賛同していたはずだった。

しかし、桃と柚子はそれを破って脅迫を行った……杏、脅迫させられたのだ。平素ならば、この二人は杏の言いつけを破るような人材ではない。

意図してかおらずか、学園艦のトップたる生徒会が、転校生にそこまで追い込まれていた。

こうなってしまうては、杏もこの流れに乗るしかない。到底乗り気にはなれない。大切な生徒なかまを無理やり引きずり込むなどと、誰が進んでしようか。

それに先日から、この西住みほについての印象に、得体のしれない何かが付きまとっていた。

今もまさにそうだ。どうにもそれが、杏の不安を煽っている。

心の葛藤で黙っていると、桃と柚子は縫ぬうような視線を杏に向けてきた。

引き伸ばすのも限界だと、口を開きかけた、その時。

「いいんですか……?」

幽かな声だった。

しかし、その時、みほは確かにそう言った。

「それで、本当にいいんですか……?」

みほは笑顔のままだ。むしろ、前より楽しそうな微笑み。

だが、杏は気が付いた。みほの瞳の奥底にあるものの片鱗が、こちらを覗いていることに。

それはどす黒いなにかだった。

杏はそれと目が合ってしまった。

杏は総毛立った。

耐え難い悪寒に、呼吸が乱れ、汗が吹き出る。開きかけた口は、力なく開閉させるのが精一杯だ。

目線を外すこともできない。もし目線を外したら、その瞬間にそれが襲いかかってくるに違いないと断言できる。

何だ……何だ、それは。そんなものを、人が宿していて良いのか。生徒会長となつてから、長らく忘れていた感情が呼び起こされた。恐怖。どうしようもない恐怖が、全身を満たした。

西住みほが瞳に宿しているどす黒いもの……杏にとって、それは恐怖のかたまりだった。

「生徒会長、角谷杏さん……いいんですか、それで」

何も言うことができない杏を、みほはじつと見つめて問うた。

桃と柚子は質問の意味を凶りかねていた。こちらの正義感に訴えているのだろうか。だとすれば、的外れな質問だ。既に腹は括られている。

むしろ、みほが毛ほども動揺しないのに焦っていた。

だが彼女達の長は意味を理解してしまった。

脅迫をするという事……それは敵対するという宣言に他ならない。例えこの場で転校生が屈したとしても、それは潜在的な敵で在り続ける。

それで良いのか、と転校生は聞いているのだ。

私を敵にして良いのか、と。

駄目だ、絶対に駄目だ。この化物を敵に回す事だけは断じてしてはならない。だったらここで手放してしまった方がマシだ。

もしこの転校生に敵と認識されたならば……恐ろしいことになる。

具体的にどうなるのかは分からない、分かりたくもない。

杏は今すぐにでも逃げだしたい気持ちになった。

こんな化物と対峙する事になるなんて、生徒会長になった時は予想もしなかった。

怖くて、怖くて、堪らない。

やはり、自分にはこの様な大役は無理だった。

この化物と対峙する勇氣と、あの時生徒会長の指名を断るのに必要な勇氣は明らかに釣り合っていない。

この小心の全てが恨めしくなった。

西住みほの瞳がこちらを見ている。その目が、すつと細くなった。早く答える……瞳の奥の化物は、そう言っているようだった。

杏は、萎縮して動けなくなってしまうた。今、杏は完全に過去の自分に立ち戻っていた。他人の悪意にことさらに敏感な、臆病者の自分に。

どうしてよいのか、次に何をすればよいのか、全然分からない。昔は、こんな時、何もせず硬くなってやり過ごすことしかできなかった。しかし、それも許してくれそうにない。

遂には吐き気を感じ始めた。

「会長……っ！」

「会長……」

杏は、はっとした。

親友二人が心配そうな上目遣いをしていることに気が付いた。ただでさえこの非常時に、酷く青ざめている杏の様子に狼狽していた。

恐怖しているのは、自分だけではないのだ。

頼られている。

私は、今や生徒会長だ。如何なる困難にも立ち向かい、この学園艦を守らなければならぬ。あの日に決心したのだ。

それが、私の誇りではなかったか。

ならば何が必要だろうか、この化物に立ち向かう為に。

決まっている。自分に最も欠けているもの、それは『勇氣』だ。

ならば何を元に勇氣を引き出すのか。その為の理由を、私は持っているのか。

持っている。何も問題はない。

私は大洗女子学園を愛している。

「頼むよ、西住ちゃん」

杏は頭を下げた。

その小軀は小刻みに震えていた。

「頼む」

交渉でも脅迫でもない。それはお願いだった。

杏の姿は紛れもなく、弱い自分を晒していた。本来、彼女が最も恐れる筈の行為である。

立ち向かったのだ、恐ろしい化物に……自分の弱さに。恐怖など、

この愛校心に比べれば些細なものだ。

所詮、この転校生にはこちらの企みなど通用しない。ならば、最初から誠心誠意お願いする他ないのだ。

瞬間、みほの顔から全ての表情が抜け落ちた。

そして頭を下げた杏の姿を驚いたように、じっと見つめて、またすぐに笑顔になった。

「私には、夢があります」

三人を順に見つめて言う。

「それに協力してくれるなら、やりましょう」

「する！ 協力するとも！」

桃が先走って食いついた。みほは桃を見て微笑んだ。

「入学についてのパンフレット……転校してくる時に、読みました。広報担当の河嶋桃さん、あなたが編集したそうですね」

「え……まあ、そうだが」

「あれは実に素晴らしいです。大洗女子学園の良いところが、現実味を帯びて読み手に伝わってくるようでした。編集者はさぞかし有能な方だと、そう思ったものです」

「な、なんだいきなり……悪い気はしないがなっ」

「もしかして、あの集会の時の映像もあなたが？」

「そうだっ」

「わあ、やっぱり！ 私、あれにも感動したんですよ」

桃は、突然褒められて困惑しつつも、得意気になった。

「私は、戦車道の素晴らしさをもつと世界に広めたい。もつと戦車道を知ってくれたら、好きになってくれたら……その為には、どうしても広報と生徒会の協力が不可欠なんです」

「それだけで、いいの？」

柚子は心配そうに尋ねた。

「ええ、それだけです！ 安心して下さい、戦車道の知識に関しては私も熱に助力します。私は皆で夢を叶えたいんです」

満面の笑みで答えるみほに、桃と柚子の顔も明るくなった。西住みほの協力を取り付けられた！ その達成感と安心感で一杯になった。



まるで、目の前の転校生が光り輝く救世主の様にも思えた。

「それと」

「……なに？」

顔を上げた杏が、懐疑的に尋ねた。

「戦車道の履修者が確定したら、リストを見せてください。一緒に戦車道をする仲間が、とても気になるんです」

杏が首肯すると、みほは嬉しそうに笑った。

配下の二人は全く純真な笑みと捉えたが、杏にしてみれば、みほの笑顔はまるで、共犯者を得た極悪人に見えた。

そして、みほも気がついていない。

杏が、前の自分の問にまだ答えていないことに。

## 鬼神西住10

荒涼たる大地には冷たく厳しい風が吹き、異郷からの来訪者を全く歓迎していかないように思われた。

荒れた大地を踏みしめて、戦車隊は進む。駆動音を響かせながら、ひたすら前へと向かって前進する。

数ある戦車の先頭を走る一台……そのキューポラから半身を乗り出している者がいる。

吹き荒ぶ風を身体一杯に受けて、それでもただ静かに笑っている女がいる。

どこか自分の面影を持つ彼女は、短い黒髪を靡かせて、ただ前だけを見つめている。

女が不意に手を大きく掲げた。戦車隊は一斉に停止をした。

地平線の向こうに目をやると、見渡す限りの黒い影……敵の戦車の軍団が待ち構えている。

戦況は絶望的、味方の軍は既に壊滅し、補給さえ十分ではない。今乗っているその戦車さえ、既に満身創痕の銃痕だらけだ。

それでもあなたは笑うのか。

彼女は、この全ての光景を愛おしむように、静かに笑っていた。

私は不思議に思う。命すら保証できないこの状況で、あなたは何故そんなに穏やかなのだろうか。何故そうやって、笑っていられるのかと。

「楽しいなあ」

彼女は心底愉快そうに独り言ちた。

「私の闘争は終わらない。誰かが続けるようとする限り、永遠に。私の次は子供が、子供の次は孫が、孫の次は曾孫が……なんて素晴らしきことだろう！」

彼女は世界の全てを抱くように腕を広げ、哄笑した。

「私は生き続ける。そうさ」

「こちらを指でさして言う。」

「西住の血の中で」

◆ みほは、胸の高まりに、目が覚めた。

時計を確認すると、まだ日も登らぬ時間であることが分かった。ベッドから起き上がる。こういう夢を見た時は、どうせもう眠れやしない。

速やかにウェアに着替え、日課のランニングの為に外に出た。朝のひんやりとした空気と、潮の香りが心地いい。

大きな交差点まで出ると、一旦立ち止まり、ポケットから折り畳まれた紙を取り出す。近所のコンビニで購入した、大洗女子学園の全体地図である。

みほは転校する前に大洗女子学園の地形を調べたが、実際に歩いてみなければ分からないことの方が圧倒的に多い。現地事情の把握というのは、あらゆる事において重要である。

みほは今日走るルートを決めると、地図をポケットに仕舞った。どんな細かいことも見逃さぬよう、周囲に意識を広げて、再び走り出した。

注意を払いながらも、ペースは落とさない。むしろ身体が温まるにつれ、ぐんぐんとペースを上げていった。

先に決めたルートの最後は、小さな公園に辿り着くように設定していた。ここで軽く体操をして、朝のランニングは終了するつもりであった。

非常に暗い公園だった。灯が切れているようだった。今日は月明かりも出ていない。

子供が遊ぶには少し危ないなと思っていると、公園の藪の方から声が聞こえた。

耳をすませてみると乱暴な男の声が二つと、消え入りそうな女の声。それも「助けて……」と言っている気がする。

みほは、特別何かを思うわけでもなく藪に入って行った。

数分後。何度も何度もお礼を言う、服のはだけた女性に「早く帰った方がいい」とだけ伝えて、みほは藪から出た。

その時、手に持っていた拳大の石も一緒に捨てた。

後は予定通り、身体ほぐしの体操をして、さっさと家に帰った。  
まだまだ登校までには時間がある。みほはウェアから制服に着替え、机に向かった。

今日走ってみて気が付いたことを、それ用の地図に詳細に書き込んでゆく。こうすることで、絶対に忘れることがなくなるのだ。

書き込み用の地図は既に文字で真つ黒になっていた。ほぼ大洗女子学園全体を網羅したと言って過言ではない。

この習慣は、黒森峰女学院に在籍していた頃から続けている。また、寄港する港周辺の地図も必ず事前に手に入れて、分かる限りの情報を書き込んでいた。

今や、ダンボール一杯分の地図が真つ黒になっている。

その地図の全てが、みほの頭には入っているのだ。

大洗女子学園の地図を眺めながら、みほは様々な状況を思案する。状況設定、試行、結論、考察……正調西住流は戦車だけではなく、環境全てを運用して戦闘を実行する。その為の労力を惜しみはしない。目を閉じれば、風景の全てが脳内で構築でき、それを現実と照らし合わせ、未来を予測できるようになるまでが本来前準備の段階なのだ。

戦術やら腕やは、その後である。

みほが幾度目かの結論を得て考察を完了すると、登校するに良い時間になっていた。

広げた地図を仕舞い、細かい身支度を手早く終わらせると、最後に一つの写真立てに面した。

古ぼけた白黒の写真……みほがこの世で最も尊敬する人物の肖像だ。

「行って参ります、曾お祖母様」

みほは、写真の中で穏やかに笑う彼女とそっくりな笑顔で笑うと、学生寮を出発した。

今日は、大洗女子学園に来てから初めての戦車道の授業が始まる日だ。

今日も西住みほの闘争が始まる。

◆ 『大洗万歳！ 西住殿万歳！ 我等の戦車隊長!!』

大地を割らんばかりの大歓声が響いている。道沿いに群衆という群衆が集まって、熱狂的に叫んでいるのだ。道路の向こうから戦車が現れると、その歓声は一層大きくなった。

そうか、これは戦車の凱旋パレードだ。

自らも群衆の中に居る秋山優花里はそう理解した。

理解した途端、興奮が湧き上がってきた。優花里は人をかき分けかき分け、遂に戦車と対面するに至った。

その時、対面した戦車から半身を乗り出して手を振る『彼女』と目が合った。

西住みほ。

優花里が、崇拜していると言って良いほど尊敬している戦車道のトップエースだ。

『大洗万歳！ 西住殿万歳！ 我等の戦車隊長!!』

みほは優花里と目が合うと、につこり笑った。そして、こちらに手を差し伸べた。

それは「一緒に乗ろう」と言っているようだった。

優花里は歓喜に打ち震えた。まるで夢のようだ。

そして、遂に優花里はみほの手を取って、同じ戦車の上へ――

「西住殿万歳!!」

そこで、目が覚めた。

勿論、夢である。

寢床から跳ね起きた優花里は、興奮の余韻も冷めやらぬ、掌を握ったり開いたり、部屋をうろうろして唐突に敬礼してみたり、傍から見れば奇行としか思えないような動作を一通りしてからようやく落ち着いていた。

「なんと……いい夢でありました……」

最後に独り言を言ってから、朝の食卓へ向かった。

朝食を食べながらも、自室から持ち込んだ戦車模型を卓に置いて、にやにやししながら咀嚼していると、母親に「行儀が悪い」と叱られた。

浮かれるのも仕方が無い、今日は戦車道の初授業の日なのだ。

優花里は、この日をどれだけ待ちわびていただろうか。

幼い頃から身も心も戦車に捧げてきた。ありとあらゆる戦車グッズを買い集め、戦車道の近況の情報収集も欠かさない。いつか戦車に乗る日の為に、筋力トレーニングだって行っていた。

高校に進学する時は、戦車道を行っている学校に進学しようとまで考えたが、親元から離れるのは色々と不安があつて断念した。

それから優花里は、高校で戦車道をするのは諦めていたが、なんと今年度から復活するというのだ。その知らせを聞いた時は、天にも登る心地だった。

優花里は身支度を整えて、何時もより早く家を出た。

その時、秋山理容店のウィンドウガラスに貼られたポスターが目に入った。『大洗女子学園 戦車道復活!!』の文字がでかかど強調されている。

選択科目の願出期間が終了してからというものの、学園艦を挙げての戦車道の広報が始まっていた。

そこら中に貼られているポスターを始め、学園艦新聞、ラジオ、果てはローカルTVに至るまで。そこで生活していれば、好みに関わらず戦車道について見聞きするような状態だった。

この一連の流れを、優花里は、ある種誇らしい気持ちで眺めていた。自分が愛してやまないものを、世間全体が評価してくれている気分になったからだ。

今や、戦車道以外の選択をした生徒達は「やっぱり戦車道にしておけば良かった」などと嘆く光景が日常茶飯事だ。

そういう声を聞く度に、優花里は得意気になった。「私は昔から戦車の良さを知っていたんだ！」と大声で自慢したくなる。

だが悲しいことに、その戦車一筋の姿勢のせいで、友達ができたこととはなかった。

しかし、寂しいと思ったことは（あまり）ない。

優花里には心の支えとなる人がいた。

西住みほ。

由緒正しき西住流の戦車乗りだ。

優花里にとって西住みほ選手というのは、まさにトップスターだった。自分と同じ歳ながら、その華麗で鮮やかな戦車道は優花里を魅了して止まなかった。

加えて、見目麗しい微笑みと、カリスマ溢れる口上に、完全にノックアウトされた。

彼女が掲載している雑誌は朝一で買いに行っただし、TV出演者するとなれば、それを録画して、画面に穴が開くほど見返した。

当然ファンレターは何通も何通も送り、ある時、送り過ぎて辟易されてはいないだろうか……と自己嫌悪に陥る程の入れ込みだった。

その西住みほが、なんと今年度、大洗女子学園に転校して来た。

奇跡だと思った。

インターネットでその情報を発見したとき、優花里は「ヒヤッホオオオウ!!」と奇声を上げて飛び上がった。飛んだり跳ねたり叫んだり、それで母親に怒られても興奮は冷めず、血圧が上がって鼻血を流して気絶して、ようやく正気に戻った。

気絶から覚めた時、もしや夢ではなからうかと疑ったが、学校で実際にみほを目にしてから疑いは彼方へ吹っ飛んだ。

しばらくのうちは、近づくだけで血圧がインフレーションするので遠巻きに眺めるだけだった（それでも心臓に悪かったが）。

学校に、みほに挨拶をして手を挙げさせる風潮が流行り出してから、ようやく廊下ですれ違うことが可能になった。

「おはようございますッ!!」

と（声を裏返して）敬礼すると、みほは優しく微笑み、ひよいと手を挙げて「おはようございます」と答礼してくれた。

周りには変な目で見られたが、そんなことがどうでもいい程の歓喜に包まれるのだった。

西住殿は私の顔を覚えてくれていたのだろうか……想像すると沈黙の授業中でも顔がにやついて仕方が無かった。

そして今日という日。

戦車道の初授業で、同じ戦車乗りの仲間として西住みほに謁見する

のだ。

人生最良の日とはこのことか。もう、胸の内をどう表現していいか分からない。

知られざる期待を胸に秘め、秋山優花里は学校へ向かって前進した。



## 鬼神西住 11

風紀委員の朝は早い。

お日様がようやく顔を出すと同時に起床し、こうと定めたルーチンに従いばつちりと身支度を済ませ、生徒の誰よりも早く登校する。

そして『風紀』と銘された腕章に手を通し、校門前に集合である。何時もの通り、一番乗りで集合した園みどり子は、朝の空気を大きく吸い込んだ。この瑞々しい空気を吸うと、身も心も引き締まる心地だ。

風紀委員の仲間がやって来るまで、少しの間一人になる。この僅かな時間に、色々と考え事を巡らせるのがみどり子の日課であり、また、お気に入りの時間であった。

今日も変わらない、平凡な朝だ。

みどり子は「うん」と大きく頷いた。

平凡な日常というのは尊いものだ。定められた服装、規則通りの素早い行動、スケジュール通りの生活……どれもこれもが素晴らしい。

それらに則って生きるというのは、とても気持ちが良いものだ。聞くところによると、世の同世代というのは、代わり映えのない日常を良しとしない者が大勢居るといふ。

だがみどり子は、そんな事を思ったことは唯の一度も無かった。規律に沿って生活するということが、世の正しい風紀を作り上げるのだと信じていたし、それから外れるのは破壊的だとすら思っていた。

だから、道を外れる生徒を見放して置くことなど、みどり子の正義感が許さなかった。その為に、風紀委員長にまでなったのだ。

我ながら、器用な性格ではないと思う。良かれと思つてやっていることが「余計なお節介」だと邪険にされる事など、日常茶飯事だ。もう少し上手くやれないものだろうか……そう自問したこともある。

けれども、それは無理だと分かった。何故なら、その愚直さこそが自分の芯であり、あらゆる行動力の源であることに気が付いたからだ。これを変えることは、何よりみどり子自身が許さない。

結局、それでよいのだ。

疎まれ邪魔にされ邪険に扱われるのは風紀委員の宿命だ。その余計なお節介で社会風紀に少しでも貢献できるのなら、僅かでも救われる生徒が居るのなら、それで上等だろう。

それが自分の覚悟であり、誇りだ。<sup>プライド</sup>

決意も新たに、背筋を伸ばした。「よーし！」と気合の拳を掲げると、丁度風紀委員の学友がやって来るのに気が付いた。

みどり子はにんまりする。あの子たちは共に風紀を取り締まる仲間だ。一般生徒に嫌われようとも、あの娘たちは私の頑張りを分かってくれているだろう。

それでよい。誇るべき仕事があつて、理解者が少しいるというのは、それだけで幸せである。

理想とすべき目標があるなら、尚更良い。

◆ みほは、何時も遅くもなく早くもない時間に登校する。

通学路の途中にあるパン屋から漂う良い香りの誘惑に負け、二、三個のパンを朝ご飯の足しにしてしまうのも何時もの日常だ（おかげで店主とは顔なじみである）。そこかしこに掲示されている戦車道宣伝ポスターを横目に、校門に着く前にはすっかりパンを食べ切ってしまう。

その道中、沢山の生徒から「おはよう」と挨拶される。みほは一々手を挙げて返礼した。

場合によっては、話しかけられることもある。有名人の転校生に、興味があるのだろう。みほは何時もの通り、にこやかにお話しする。すると、相手は決まって良い気分になつて、一日を頑張ろうという意気込みが湧いてくる。

そういう登校風景も、もはや通例だ。

校門にまで辿り着くと、やはり風紀委員の三名が立っていて生徒の身嗜みの乱れなどを、とやかに注意していた。

そして、みほが近づいて来ることに気がつく、三人は一糸乱れぬ動作で片手を挙げた。まるで敬礼だ。

みほも慣れた様子で応じた。少し前から、これが朝のやり取りとし

て定着していた。

『おはようございます、西住さん』

三人は異口同音にそう言った。

「おはようございます。今日も頑張っていますね」

「ありがとう。でも、これが私達の仕事だから、苦にはならないわ」

「それが頑張っていることだと思いますよ？」

「ええ……その、ありがとう」

みほが労いの言葉をかけると、園みどり子が代表で答えた。残りの二人は、尊敬というか、憧れというか……そんな目でみほを見ていた。微笑みかけてあげると、赤面してさっと顔を逸らすのがいじらしい。

朝のやり取りが定着する頃から、みほは風紀委員に目をつけられていた（と言っては語弊があるかもしれないが）。

転校して初めて登校した際、みどり子はみほに声をかけた。風紀委員はタブレットで登校者を管理しているから、それでみほが転校生だということに気が付いたのだろう。

「転校生の娘ね。前の学校ではどうだったか知らないけれど、大洗女子学園では風紀委員わたしたちが風紀を取り締まっているから、よろしくね」

初対面でぶっきらぼうな態度を取られたみほは、それを気にかける様子もなく「よろしくお願いします」と笑顔で頭を下げながら、握手のための手を差し出した。みどり子はちよつと驚いた顔をしたものの、快くみほの手を取った。

みどり子は基本的に風紀委員として初対面にあつては、多少高圧的になる。これは風紀委員の威厳を誇示する為の態度であつて、これを受けた者は、大抵萎縮するものだ。

けれど穏やかそうな転校生は、その様子を微塵も見せなかった。それが意外だったのだ。

相当鈍いのか、それとも胆力が大きいのかは、その時は分からなかった。

それから風紀委員は転校生のことを、注意深く観察していた。みほ

が特別というわけではなく、新しい生徒の素行を観察するのは仕事の  
一環である。

みほの素行は感嘆すべきものだった。

素行優良、学業優秀、それだけでも褒めたいところだが、更にみほ  
は人間的に著しく出来ていた。

困った人を見かけては助け、大変そうだったり悲しそうにしている  
人の機微を見抜き気にかける。それが学校のみならず、一般公衆でも  
その振る舞いは変わらない。

その結果、不利益を被ることになってしまっても、ただ静かに笑う  
のだ。そして、何度その様な目にあっても行いは続けられる。

真の献身がそこにあった。

個々の調査を持ち寄ってこの結果に達した時、全員に感激の波が押  
し寄せた。

風紀委員とは、理想の姿へ生徒を導くことが責務である。理想に近  
付くために、会員自らも厳しい規則に則って生活をしている。

ある意味、風紀委員会とは求道者の集団と言つていいだろう。それ  
について、彼女達自身、神聖視をしている面もある。

その追い求める理想と、新参者の転校生……西住みほとを比べた  
時、そこにどれだけの差があっただろう。

想像力の限り、西住みほは全く理想の体現者であった。

結果から結論を導いた時、風紀委員達は、無言で握手を交わしあつ  
た。感情を口にすれば、途端にそれが俗なものになってしまう気がし  
た。

それで十分だ。それだけで、思いが伝わるのが風紀委員の絆である  
から。

みどり子は、みほと話がしてみたくなった（それはみどり子だけで  
はない）。理想の人物が同じ学校に通っているのだから、その感情は  
当たり前である。

減多に使うことのない風紀委員長権限を行使して、みどり子はみほ  
を風紀委員会室に呼び出した。もちろん教育的指導目的ではなく、お  
もてなしの為である。

放課後。みほは一分のずれもなく、時間きつかりに現れた。

相変わらず緊張している様子もない。いきなり呼び出されて、怖がっているのではないかと心配していたから、救われた気分になった。

客人に椅子を勧めて、お茶や茶請けなどを出すと、みどり子と風紀委員代表二名の、計三人でみほと対面した。

転校生に接触するだけの目的にしては、相当不器用なやり方だった。少なくとも女子高生らしくは全然なかった。

「その……西住さん、今回は、その……ええと……」  
会話の滑り出しまで不器用だった。

それもその筈だ。そもそも呼び出した明確な理由などないのだから。

普段生徒を怒ってばかりなので、こういう場でなんと話してよいのか分からない。

「私は、何かしてしまったのでしょうか？」

みほが怪訝そうに首を傾げる。

「ち、違う！ 西住さんの生活態度は素晴らしいわ！ そうじゃなくて、今日は、その……」

暫しもごもごと言いつつ訳を考えてから、みどり子は意を決した様子を言った。

「あなたと、お話がしたいと思って……」

結局、正直に言ってしまった。別にやましいことを考えているのではない。ならば正面から当たるのが風紀委員の心意気である。

それでも恥じらいがある。みどり子は真つ赤になっていた。

意外な返答に、みほは目をぱちくりさせると、何時もの様になりとした。

「私で良いなら、喜んで」

はつとする様な笑顔に、向かう三人も一瞬見とれてしまった。

それから、堰を切ったような勢いでお話しが始まった。それは、風紀委員側が質問をして、それにみほが答える……というのが殆どだった。

それらの会話から、みどり子たちは、みほの生い立ちや、転校の理由などを知った。

同情しつつも、みほの気高い精神に心奪われた。

みどり子たちは語らうにつれて、心の中の理想形がどんどん明確に作られてゆくを感じていた。

会話に花を咲かせていると、時の経過というものは早い。あっという間に下校時刻になってしまった。

しかし、校則は校則だ。もうお別れしなくてはならない。

みどり子は、最後に、一番聞きたかったことを聞いた。

「西住さん、あなたは何故そんなに人に親切にするの？自分が傷ついても、その理由は何処にあるのかしら？」

みほは迷うことなく答えた。

「優しさはこの世で最も尊ぶべきものだからです。誰かを思いやって行動するのに、理由なんて、私は求めません。それが正しいんです。とっても簡単なことじゃないですか？」

その言葉は雷の様な衝撃となって、みどり子たちの心を打った。

みほの言う『正しいこと』を身を賭して実行することの困難さを、風紀委員は知っている。

『簡単なこと』……そうか、彼女にとってそれは当たり前前の生き様なのだ。

私達が風紀に貢献するのが苦でないように、西住みほにとってそれは苦になり得ないのだ。

なんて、尊い魂を持っているのだろうか。

「でも」

みほは三人を順番に見て、朗らかに言った。

「その志は、風紀委員の皆さんも一緒なんだって、思います」

その言葉を聞いた時、みどり子たちは自然と同時に頭を深く下げた。今こそ、最高の敬意をみほを抱くに至っていた。

礼を尽くすということの意味を、三人は人生で初めて知ったのだ。た。

そういうことがあって、今や風紀委員会の全体は、みほに対して最  
高度の敬意を払っていた。

聞く所によると、朝この校門に立つ仕事をやりたいという委員のメ  
ンバーが激増したようだ。みどり子は固定として、その他二人は人選  
の回転が激しいことに、みほは気がついていていた。

「今日は戦車道の初授業だそうね」

「ええ、そうですね」

「何でも、復活に西住さんが尽力したとか聞いているわ」

みどり子は、校門脇に貼られているポスターを指して言った。

みほは、見慣れたそれをちらりと振り向いた。

「ほんの少し、ですよ」

「謙遜ね」

「本当です」

「でも学園をあげての宣伝はあなたの働きが大きいと、広報担当が褒  
めていたわよ?」

「あの人は大袈裟なんですよ」

「アハハ、それは確かにそうね!」

冷静なみほの分析に、思わず笑ってしまった。

みほが生徒会と協力することになってから、河嶋桃は張り切りに張  
り切っていた。これまでは、いつも裏方な役回りであったのが、みほ  
の熱な協力のもと派手な仕事を受け持ったのだから、それにも領け  
る。

それにしても、その事を自慢げに吹聴して回って、自分自身が広告  
塔の様になっているというのは滑稽だった。当然自慢の内容には誇  
張も含まれているので、それを真に受けた世間では生徒会や西住みほ  
の評価はうなぎのぼりだ。

「何にしても、大洗女子学園の伝統が復活するのは良いことだわ。転  
校生のあなたに成し遂げられるとはね」

「もう私も大洗女子学園の一員ですから、そのために行動することは  
当然です」

「本当に……生徒の鑑ね」

本心からの賛辞に、みほが応えないで、照れたようにはにかむのを、みどり子たちは全く好意的にとらえた。

その様子を見て、みどり子は不意に意を決したように真剣な表情になった。

「西住さん」

「はい」

「あなたがこの学校に協力してくれる様に、私達もあなたに協力がしたい」

少し恥ずかしかったが、それでもみどり子は風紀委員らしく、真っ直ぐに伝えた。

「西住さんの力になりたいの。あなたの為なら、何でもしましょう。これは風紀委員長としての言葉よ」

風紀委員会代表としての言葉だった。つまり、それが委員会の総意であるという宣言だった。

みほは驚かなかった。ただ、目を瞬いただけだった。

決意の言葉を受けて、そして、胸に手を当てた。

「何よりありがたい言葉です。そう言って頂けたなら、遠慮をするのも失礼でしょう。これからは、何事も風紀委員会を頼みにすることを約束します」

みどり子たちの顔がぱつと明るくなった。

『ありがとうございます！』と三人揃って立礼をした。

「こちらこそ、ありがとうございます……私は、そろそろ行きますね。お仕事の邪魔になるでしょうから」

「お気遣い、感謝します」

「では」

みほは何時もの様に別れの手を挙げた。三人もそれに倣う。

「そうだ」

まさに校門をくぐろうとした時、みほは言った。

「今日は、何か変わりありませんか」

みどり子は嬉々として応えた。

「ええっ、変わりないわ！今日も何時もの平凡な日常よっ！」



みほは満足そうに頷くと、今度こそ校門をくぐった。  
その後ろ姿が校舎に消えるまで見送ってから、風紀委員は何時もの  
様に仕事に戻った。

◆ 教室に着くまで、みほは想いを巡らす。

足取りは軽い。

何時もの平凡な日常か。

そうか、そう見えるのか。

毎日監視をする風紀委員をしてそう思えるのか。

いや、だからこそ、なのかもしれない……毎日見ているからこそ。  
教室に着いて、自分の机に座るとみほは目を閉じた。

こうすることで、何時でも、西住屋敷の書庫に戻れるのだ。

そして、心の書庫の本を開いて、その一節を口に呟いた。

『心せよ。この目紛しき現世うつしよ、移らぬものの在るべきか。奔れよ、戦車  
乙女』

目を開く。

変わらない、変わらないか。

そんなものはないのだ。

そう信じるのは、愚かだな。

みほは笑った。

そうしてここで待って、友人達が話しかけて来るのも何時もの日常  
となっていた。

## 鬼神西住12

あの人は死ぬ事ことを恐れもしなければ、かといって、強かったことを言ったりもしませんでした。ただ「愉快だ」と言って微笑みを絶やしたことがありますでした。

私が見聞きした限り、少なくとも、皆様が思っているような勇猛果敢な性格ではありませんでした。けれど、弱音を漏すことには全く縁のない人でした。ですから、勇敢であったことには間違いがないと思います。

今際の際でも同様でした。死の淵にも関わらず、自分を顧みず、後のことを心配しておりました。「後は任せて下さい」と小隊の面々が言うと「じゃあ任せました」と仰つて、やはり「愉快だ」と笑つて、息を引き取りました。

我々は小隊長の最後の命令を、守り続けています……今となっては、私しか残っておりませんが。

◆ 《西住戦車隊長口伝 松尾スミ元上等兵》

軍神西住戦車隊長。

知る人ぞ知る、旧日本帝国陸軍の軍人。

西住流戦車道を世に知らしめた『軍神』。

そして……負の歴史の象徴的人物。

秋山優花里は度々考える。

この人物が、現代に至るまで群集に根強い人気がある理由は何だろう？

確かに彼女は強かった。幾数倍の敵の戦車団を、寡兵弱兵にて打ち破るという戦果報告は、多く後世に伝わっている。

その強者ぶりが、人の羨望を生むのだろうか？

若くして戦場に駆り出され、何度も何度も無茶な戦闘を下知され、最後には一人娘を残して異国の地に散つていった。

その悲劇性が、人の哀れみを誘うのだろうか？

それとも……軍人らしからぬ慈悲を持ち合わせ、何時も部下の平時

を振り返っては、常に無事を心配し、事があれば直ぐに救出に向かう。その優しさに、人は心打たれるのだろうか？

いや、きつとどれも違う。

戦時中、彼女は祖国で初めて公式に『軍神』と認められ、祭り上げられた。特に死後は、国のプロパガンダの格好の題材として、その華々しい実績を声高に公表された。

その最中で彼女は半ば神格化され、おそらくは人格さえもねじ曲げられて、現代に伝わっているのは超人の様なエピソードばかりである。

それらが事実かどうかは兎も角、当時はそれが真実として認識されていた。大和撫子の鑑、死をも恐れぬ七生報国の軍人だと。

しかし今となつてはそれらのメッキも剥がされて、愛国心に基づいた無条件の賛美は鳴りを潜めた。

先に並べた偉業の数々だけならば、別に彼女でなくても似たような人物はいるだろう。何も、その人に固執する謂れもない。

それでも彼女が今でも人の歡心を呼び起こすのは……その底の知れなさが原因だと、優花里は思う。

彼女の成し遂げた偉業……それらは全て日本側みかたに言われた、いわば『正』のものだ。だが、敵側からは、この人の評価は全く異なる『負』の面が強調される。

味方にとつての英雄は、敵にとつての悪夢に他ならず、今に至るまで忌まわしい記憶を伝承していた。

敵、曰く。

現地調達した糧食を摂取したところ、大隊の過半数が謎の中毒死を遂げた。兵站がズタズタになった頃を計ったように攻められ、完全に殲滅された。

圧倒的な数で、西住隊を迂回・包囲しようとして崖際を行進していたところ、崖崩れが起きて戦車の殆どが川に沈み、残された歩兵は為す術なく撤退を強いられた。

敵に捕縛されていた兵士が脱走し帰ってきたと思えば、唐突に発狂し、大勢の味方を撃ち殺した。以降、味方同士で疑心暗鬼に陥り、統

率の取れないまま粉碎された。

敵の戦車隊長と思しき兵を捕らえ、監獄に収容し、翌日尋問しようと監獄に赴いたところ、看守の死体だけが残されていた。死因は自殺だった。

これらは、彼女の仕業だと推測されるごく一部の出来事だ。

西住戦車隊長は不吉そのものだった。

目に見えるのなら良い、主砲で撃ち抜かれるなら納得ができる。しかし、違う。姿の見えない、得体の知れない不幸が降りかかるのだ。必死に関連性を見出そうと努力した者も居た。せめてそれらが敵の謀略だと分かれば、精神的に立ち向かうこともできる。

だが、そういった者は必ず不幸としか言いようが無い事故で死んだ。死因を調査しても、本当に事故としか説明しようがなかった。

そして、その事故を探った者も死んだ。

調査の為の調査、その頓挫……事態は奇怪に絡まり合い、理性では解説不能になった。

どうしようもない困惑。目には見えない第三者が殺しにかかって来るような疑念。

そして、底すら見えぬ恐怖。

たかが小隊と侮った者は、より大きな闇の奥まで引きずり込まれ、用心深い者は真つ先に死んだ。理論主義者は常識が崩壊し、信心篤い者は悪魔に許しを請うた。

遂には他愛のない不手際や、起こって当然の事故までも、彼女の引き起こす不幸の一環だと思ひ込むようになった。

一人一人に限無く分配された深淵は、戦場の認識を濁らせ、目に見えるものの全てを敵だと錯覚させた。

不幸にも彼女に敵対し、そして不幸にも生き残った、とある一兵卒は狂死する直前にこう残している。

『この世の全てが襲いかかってくる——』

一体彼女の実態は如何なるものであったのだろうか。現在残っている情報の断片を組み合わせようとしても、徹底的に噛み合わない。何が真実で、何が虚構であるのか分からない。重要なファクターのこ

とごとくが隠匿されて、研究者は頭を抱えている。

もし、これら全てが彼女の謀略なのだとしたら、これは人間の仕業ではない。

最早それは『鬼』の所業だろう。

派手やかな栄誉と、底知れぬ不気味さ。この人にはそれが混在しているのだ。

こんな人は他にいない。

だから、彼女でなければ駄目なのだ。

その迷信めいた伝説は、現代においても人を惹きつけて止まない。軍事とオカルトというのは、妙な親和性を持っているのだ。

加えて、なんとこの人の直系の子孫が残っている。驚くべきことに、未だ一族で戦車に乗り続け、西住流を名乗っていた。

由緒を正した誇り高き血統、西住流。そして、当世で末の子孫……軍神西住戦車隊長の曾孫こそ、優花里が尊敬する、西住みほその人である。

今時、血統で個人を語るなどナンセンスであることは自覚している。けれど、ミリタリーファンにとって、彼女の血脈を継ぐ者が堂々と戦車に乗り、砲を撃っている姿を見るだけで、言いようのない興奮が湧き上がってくるのだ。

それに、みほは隠しもせず公言していた。

「私の最も尊敬する人は曾お祖母様です」

この言葉を聞くと、どうしても運命というものを感じずには居られないのだ。

鮮やかな手腕で勝利を引き寄せ、強いカリスマで人の心を掴む西住みほ……ミリタリーファンの間では『軍神の再来』だと密かに称されていた。

そのみほが黒森峰女学院を退学に追い込まれた時、界限は強い衝撃を受けた。インターネット上で混乱を極めた議論が昼夜を問わず連日行われていたのは記憶に新しい。

優花里は凄まじい勢いで流れる真偽入り混じった情報の波に一喜一憂しつつ、最後には大洗女子学園に転校するらしいという結論を目

にした時の喜びようといったら、前述の通りである。

しかし、その事について不安もあった。

大洗女子学園に来るといふことは、戦車道を辞める……とはならずとも、中断するということだ。実際、これについて世間の落胆は甚大なものだった（優花里も同様である）。

だが、みほは心底めげなかった。

大洗女子学園で戦車道が行われていないのならどうするべきか？ 簡単だ、興せばいい。これは言うに易いことではあるが、行うに難しいことだ。

しかし、みほは実行した。

自らの能力を最大に振るい、難しいことを現実を為し遂げた。今や、西住みほは生徒会にも関わる大洗戦車道興隆の中核として重要な人物である。

優花里のみほへの尊敬は、本人に会う前から天井知らずだ。これについて、界限も賞賛の声を惜しまない。

そして、幾度も思う。

流石は彼女の末裔だと。

## 鬼神西住13

女子高生に授業を受ける義務があるのは当たり前のことである。

西住みほは、新しい教室にもすっかり慣れて、右中列の席に座って真面目に授業を受けていた……というのは表向きで、頭の中では教師の話とは全く関係の無いことを考えていた。それも女子高生なら当たり前のことである。

こういう時に、女子が考えていることは大抵決まっている。趣味のことだ。

目を閉じてみた。

教室の中を見回さなくとも、何処にどういう人種の人間が居るのか、脳裏に浮かぶようだ。

名前、誕生日、性格、成績、人間関係。更には、このお昼直後の眠たい授業をどういう風にやり過ごそうとしているのか、はたまた心底真面目に聞こうという奇特な生徒がいたものか。

半分眠りに落ちた深い呼吸、携帯電話を弄る音、落書きのペンが走る音……注意をしなくとも、自然と全てが把握出来る。バラバラだった情報のピースがきっちり組み合って、これ以上ない納得を生み出してくれる。

愉快だ。

目を開いて、思わずにやけてしまう口元を、頬杖をついて誤魔化した。全く世間というのは飽きないものだ。楽しいな。環境の変化とこののは、やはり人生にとって必要なものだと思ってしまう。

毎日こうやって時間埋めの観察して良く分かったことは、大洗女子学園は黒森峰女学院とは随分気風が異なるということだ。良く言えば気楽、悪く言えば軽薄。学校全体にそういう風潮があるのは、やはりあの会長の影響も大きいのだろう。

これまでの人生、実家や黒森峰系列学校の教育しか受けてこなかったみほにとって、これは非常に新鮮に思えた。

みほは黒森峰のような社会が普遍的であると無意識に思っていたが、どうも違うらしい。学園艦というのは一種の閉鎖空間だ。狭い世

界の中に生きるのならば、否が応にも常識が誘導される。それは、みほも例外ではなかった。

なるほど、見聞を広める目的であるならば、これは良い機会である。黒森峰では皆、良く言えば真面目、悪く言えば堅物であった。だからみほも、それ相応のふるまいをしてきた。

具体的には、一般的な人間関係において『縦』の線が強固だった。古いしきたりや、伝統というものも重視され、学年や役職による上下関係というものが明確であった。

そういう学校に居たから、みほは『上』を目指した。戦車道部次期隊長の座に就き、個人的親衛隊を結成、話術によって忠を集めた。『縦』の繋がりについては、磐石だと思われる組織を編成したことに自信があつた。

けれど、自分が抜けた後の組織の様子は惨憺たるものであつたらしい。退部志願者が続出し、あわや戦車乗員の定員割れを引き起こしかけた。理由は根本的に単純。

西住みほが居なくなつたから。

その事態を友人から知らされた時、みほは強固な『縦』関係の脆弱性に気がついた。『縦』の繋がりばかり強化してしまったことで、下を束ねる上の結束の要が無くなつた時、ばらばらに崩壊してしまつたのだ。

認めよう。これは失策だった。私はそれに気が付かなかつた。組織再編に苦心したというエリカに申し訳が立たない。

ではこの問題にどう対処しようか？

この大洗は黒森峰のような厳格性がない代わりに、人と人との親和性が高い。黒森峰であれば私の強い者同士がぶつかり合いながら切磋琢磨をする環境であつた。しかし大洗の場合、困難に立ち向かうとすれば、手と手を取り合つて協力するのが適しているだろう。

今までのやり方だけではないけない。『横』だ。

今度は『横』の関係性も強化しよう。元々は適性の無かつた『縦』については既に布石を打つた。

西住流は二度と同じ轍は踏まぬ。『縦と横』。縦横に組み合わせ、よ



り韌やかに、より硬くしよう。その為の方法は――

授業を聞き流しながら、今後の戦略を練っていると、ふと、胸に無力感が押し寄せた。唐突に、この思考が空虚に思えてきたのだ。

失態。完璧だと思った戦略の瓦解……何度経験したことだろう。その度に知恵を絞り対応・改良を試みても、それらは未だに無くならない。持てる全能力をつぎ込んでも0にすることができない。

今度も、どこから問題が噴出してくるのか、想像もつかない。

なんと、ままならぬ事だ。結局、私のしていることは、つまらない小細工の積み重ねではなからうか。

嗚呼、私に姉程の才能があつたなら――

雑多な感情に身を任せていると、今度は唐突におかしくなった。思わず噴き出しそうになる。

私は何様のつもりだ。『軍神』にでもなったつもりか？ その人でさえ、最後には死んでしまったというのに。

私はどこまで行っても人間だ。失態に終わりなんてない。ましてや、私は。

「16歳の小娘」

ボソリと呟く。そうだ、私はこのクラスメイトと変わらぬ女子高生だ。発展途上段階。失態など、当然の事だろう。いちいち落ち込むのも馬鹿らしい、無い物ねだりも下らない。

まだまだ私は足りていない。反対に言えば、進化の余地が十分にあるということだ。

止まらない。私の闘争は、まだ止まらない。

継続。考え続けること、改良し続けること……それを継続する限り、私の闘争は無限に止むことはない。

生きていくことが出来る。

それに、完璧だなんて、何より面白くないではないか。何もかも思い通りになるなんて、それ程つまらない事があるものか。それは全く好みでない。

不測の失態を、あらゆる手段で粉碎するのが西住流だ。

愉快、愉快だ。

想像せずにはいられない。

曾お祖母様もこんな気分だったのだろうか。若くして死ぬ事に、無念を覚えたのだろうか。それを引き継ごうとしている私を見たら、なんと仰られるだろう。

越えたい。あの人の先を続けてさしあげたい。

西住一族が先祖代々、命を紡いできた闘争を、あの卑怯者共のために途切れさせてなるものか。私が先を紡ぐのだ。

それが私の顔向けであり、唯一の鎮魂だ。

新たにまた始まる、愛すべき私の戦車道。今度は前よりも上手く出来るだろうか？ 先祖に恥じない姿を見せることが出来るだろうか？

どちらでも良い。勝利も、敗北も、糧となれ。

何度でも試そう。終わる為に、終わらせる為に。全ては、この闘争を何度でも続けるために。

立ち塞がるが良い、私の行く先を邪魔するが良い。

私は笑ってみせよう。その後で粉碎してやる。

嗚呼、愉快だと――

「西住さん」

不意に、意識の外から呼びかけられた。思案の奥底に潜っていた意識が、急に現実に取り戻される。

みほは頬杖を止めて顔を上げた。

「はい、先生」

「前に出て、こここの問題を解いてちょうだい」

「分かりました」

にっこり笑って、席を立つ。

みほの抱える問題に比べたら、模範解答付きだなんて簡単極まりない。



終業のチャイムが鳴ると同時に、秋山優花里は荷物片手に教室を飛び出した。クラスメイトより奇異の目で見られていたが、そんな事には気が付かなかった（何時もの事だとクラスメイトもすぐに興味を

失った)。

向かうは巨大な赤レンガ倉庫前。戦車が保管されているというその倉庫前が、戦車道受講者の集合場所として伝えられていた。

全力の駆け足で辿り着いた優花里であったが、当然の事ながら、まだ誰も来ていなかった。

一番乗りであります。

何となく得意になり、優花里は大きくガッツポーズをした。誰も居ない事が幸いした有様だった。

うきうきしながら、暫し待っていると、戦車道選択者たちが次々に集まってきた。その数およそ20名、顔だけは知っている女子たちは沢山集まったが、しかし、その中には尊敬する西住みほの姿は無い。

その事に他の連中も気が付いているようで、友人の輪で好き好きに憶測が飛び交っていた。

「んじゃ、そろそろ始めよっか」

刻限が迫ったので、生徒会の二人に脇を挟まれた生徒会長が、何時もの様に飄々として皆に言った。皆はそれに耳を傾けて、ざわついていた集団が、にわかに静まった。

「待って下さい、西住殿がまだいらしておりません!」

と……抗議したかったが、そこまで気心が知れていないので、言葉は飲み込まれてしまった。

一体、西住殿はどうされたのでしょうか……残念でならない優花里が項垂れた、その時。

静まっていた集団は、再び、そして前より騒がしくなった。

とある一人がびしりと手を顔の横まで挙げると、一斉に皆もそれに倣った挙動をした。

項垂れていた優花里が、皆が向いている方を振り向いた先には。

西住みほ。

その人が、何時ものように礼を返しつつ、微笑んで向かってくるのが見えた。

ぱっと、世界が丸ごと明るくなったような感覚。その光源は言うまでもなく、目の前の彼女だ。直ぐさま敬礼をすると、みほは「こんに

ちは」と真つ直ぐに優花里を見て言った。

意図せず身体が震え出す。

『西住殿が此方を見た!!』

それだけで、天にも舞い上がる気持になった優花里は、一瞬実際に意識が飛んでいた。

周りの女子たちも程度の差はあれ、幸福感を覚えていた。

「遅いよ、西住ちゃん。もう始めちゃうところだった」

杏が窺うように言うと、みほは校舎の時計を一瞥した。

「なんの、まだ刻限には早いでしょ」

胸を張って言い張るみほ。堂々としたその姿に、ほうつとため息をつく周囲を目の当たりにして、杏はそれ以上の追求ができず、先の話が続行した。

「皆が集まってもらったのは他でも無い。戦車がここにある」

杏がパチンと指を鳴らすと、倉庫の両扉が音を立てて開いた。

期待の眼差しでそれを見つめる集団。しかし、それは直ぐに困惑の視線に変わった。

倉庫内に安置されているのは、明らかにみすばらしく汚い戦車。「なんだかイメージと違う……」と、皆の代表をする様に沙織が言った。

すると、みほは躊躇いもなくその戦車(らしき鉄塊)に近付いて行って、掌でそれを撫でた。愛しげな眼差しで、上から下までを確認する。そして「うん」と頷いた。

「大丈夫。私が居る、私が乗ってあげる」

おお……皆がどよめいた。西住みほには、この戦車の是非が分かるらしい。それに、眼差しと言葉の何と優しいことか。まるで、長年の友人か、仲間に話しかけるようだ。

羨望せずにはいられない。

私たちも彼女のように成れるだろうか――

「他の者たちは何処ですか」

みほは皆を振り返って聞いた。

「いや、それなんだが……」

申し訳なさそうに桃が言う。

「何処にあるのか分からないんだ。記録にも残っていない。だから、今日は戦車を探すために集まってもらった」

「河嶋さんにも分からないんですか？」

「すまない、西住……」

「手がかりは」

「何も無い、不甲斐ない限りだ……」

「会長」

いきなり呼ばれた生徒会長が、僅かに肩を震わせたことに、みほだけが気が付いた。

会長のすぐ近くまで歩み寄り、尋ねた。

「私は聞いていませんよ」

周りには、全く当たり前の光景に思えたが、尋ねられた当人にとっては違った。

杏はごくりと生唾を飲み込んだ、とても苦い。

「この場で、皆に言おうと思ってたんだ。隠そうとしてた訳じゃない……本当だよ」

「分かりました」

みほは（杏にとって）意外にもあつさりと引き下がった。大きく息を吐き出す会長から興味を失ったように、懐から何か折り畳まれたものを取り出した。

「見て下さい」

それを広げてみせると、大洗女子学園の地図であった。皆が見やすいように、みほは戦車の上に登り、そこに地図を置いた。

意図を理解した集団は、我先にと群がった。

「巨大な戦車が長年人に気が付かれない場所エリアは限られています。それに……何か戦車の喪失に意図的なものを感じます。となると、ココと、ココ……それにココもかな」

みほは同じように懐から取り出したペンで、地図に幾つかの丸を付けた。

「これらの場所を探します。既にグループが出来ているようなので

……よろしい、そのグループで分担しましょう。分かりましたか？」  
「りよ、了解であります!!」

皆が半ば呆然とする中、一番に応えてみせたのは、やはり秋山優花里であった。

その応答に、目が覚めた女子たちは次々に承諾の意思を口々にした。みほは満足げに頷く。

「では散開！ いい報告を期待しています……ね？」  
にっこりと、杏を見て笑った。

「あ……うん。報告は、生徒会までよろしく」  
言葉を失っていた生徒会長は、ようやくそう言うのが精一杯であった。

◆ 「戦車道って、思ってたのと何か違う」

未だにぼやくのは、もちろん沙織である。

目的地までの道すがら、みほを真ん中にして、沙織と華の三人で歩いている途中の事である。今は、先ほどみほが丸をつけたクラブハウス群へと向かっていた。

「そうですね、まさか戦車が無いとは思いませんでした」

一部同意をする華は、それでも妙に楽しそうだった。こういう経験をしたことが少ないからである。

「うん。昔から戦車道をやってきたけれど、戦車を探すのは流石に初めてだよ」

みほも、むしろこの状況を楽しみむ様にくすくす笑った。

「男子にモテるって聞いてたけど、あれって本当だったのかな……？」

「嘘じゃないよ」

「えっ、ホントに!？」

「戦車道を始めてから、モテなかったことがないもん。私の経験上は、だけれど」

「そっかあ！ 私もこれからってことだね！」

「みほさんの場合は、また別の次元の話だと思えますけれど……」

その後も和気あいあいとした雰囲気話し込んでいたが、最近のみ

ほの活躍の話になった時、沙織と華の顔が急に陰った。

「みほ、最近凄いいよね。色々大変な事があつたのに、全然へこたれな  
くつて。さつきも、あんなに堂々としてたし……」

「ええ、とても立派だと思います。でも何だか、遠くの人になつてし  
まったみたいで……」

転校当初、二人はみほの哀れな境遇を聞いて守つてあげるつもりになつた。

しかし、今やどうだろう。みほは立派に自立するどころか、生徒会と協力し、大洗戦車道を打ち立てるまでの働きを成した。必然的に人間関係の輪も広がって、学校の内外共に大きな人気を博している。

守つてあげるところの話ではない。二人が大きく離されてしまったような気分になるのも仕方の無いことであつた。

「なんだ、そんなこと」

しかし、みほは些事であると断じた。

「沙織さん、華さん。私はそんなこと全然思つてないよ。それでも二人が私を遠くに感じてしまうなら、こうすれば良い」

みほは、両脇の二人の手を取つて、指を絡めた。

二人は驚いたように、繋がれた手を見つめる。

「私は此処に居ます、何処にも行きません。こんなにも、近くに居るじゃないですか」

みほは慈愛に満ちた表情で、沙織と華を交互に見つめた。二人は自然と握る手に力が入った。

「身寄りもないこの場所で、初めてのお友達。私は何時も、特別に思つているんだよ？」

ちよつと照れくさそうに、はにかむみほの微笑みは、二人の心を完全に打ち抜いた。涙すら出てくるような感動に、身体は打ち震える。

「み、みほ……」

「みほさん……」

思わず両脇から抱きつく二人の背中を撫でながら、みほは目を瞑つた。『友情』というものの安直さについて、今一度己に注意を促す為だつた。

私はこれから、どれだけ友情というものを持たれていくのだろうか、数える気にもならないが、きつと悪いことではないのだろう。とても曖昧で……操作しなければ、おそらく使い物にならない代物。『横』の関係を作る為に不可欠なそれは『縦』と同様、作るのに大きな苦労はかからないらしい。一方通行で通じた気になってしまうのは、敬意も友情も変わらないな。

こうも安直にそれを集められてしまうのは、やはり美しいからだろうか。私も確かにそう思う。だけれど、それは感情のみならず、確かな理性が合わさった時だけだ。

私にとって、友情の対象なんて、多くは要らない。

嗚呼、エリカ。君に会いたい。

「二人とも、そろそろ行こう?」

「あつ、ごめん」

「失礼しました、あんまりにも、その……」

離れてからも赤面している二人の様子を、敢えて無視してみほは後ろを振り向いた。「その前に」散開した初めから、後をつけてくる気配には、勿論みほだけが気が付いていた。

「その人、出てきて下さい」

木の影に向かって言い放つと、ガサリと音がして、おずおずと人が現れた。

心休まる暇もない沙織と華は、隠れていた不審人物に一部始終を見られていたことにやっと気が付いて、一層赤面した。

「あのつ、そのつ、私、悪気は無くて……ただ、あの……」

しどろもどろに取り繕う追跡者の様子は、本当に悪気が無かったことを皆に察させた。

倉庫前で見えた顔だった。みほたちと一緒に探したくて、ついてきたのだろう。

「秋山優花里さん」

「えっ……」

「そうだよ。普通Ⅱ科2年C組、6月6日産まれ」

「ご、ご存知だったのでありますかっ!?!」



「ええ、勿論。昔から、よくファンレターを送ってくれていたから」

「そ、そんな、覚えていて下さったなんて！」

「あなたの言葉に、何時も励まされていました。これからは仲間として、仲良くしようね」

「こっつ、こっつ、光栄でありますう!!」

みほに差し出された手に触れた瞬間、沙織や華よりも真っ赤になった優花里は、鼻血を噴き出して仰向けにぶっ倒れた。見たことがないくらい幸福に包まれた表情だった。

これはみほにとっては非常に慣れた反応であったが、そのほかの二人にとってはただの事故だった。

なので、戦車探しは一時中断せざるを得なくなった。

## 鬼神西住と親衛隊長1

それは、桜の花もあらかた舞散った春の日のことだった。黒森峰女学院の入学式は、つい先日行われ、新入生達が未来への希望を抱く季節。

新しい教室、新しい友人……ある意味、環境への適応を試される時期であると言えるかもしれない。適応するだけで手一杯というのが、新入生の常であり、美德でもある。

この学園艦巡回バスの中も、新入生で賑わうようになっていた。学園艦内の主な公共交通機関である巡回バスは、黒森峰の生徒であれば殆どが定期を所持している。

バスの中は、意味のない話で溢れているように見えても、女子の間関係の構築において、それは非常に重要な意味を持っているのだ。座席に座ったある二人組も、そういう会話の最中であり、中でも一際弾んだ会話をしていた。会話というよりは、片方が一方的に語り、もう片方は聞き役に徹している様だった。

「——という訳でドイツには偉大な軍人が沢山いるのよ」

気分も良さそうに、大声で話しているのは、長い銀髪の新入生……逸見エリカであった。聞き役に徹しているのは、赤星小梅である。

この二人、どちらも戦車道部志望であって、同じクラスというものもあり、一緒に行動することが多くなっていた。

話の発端は何時ものように戦車道の話題からだった。

黒森峰はドイツの気風に影響を受けた学校であり、戦車道においても同様である。そのドイツの話になった時、エリカはちよつとした知識を小梅に話した。それを小梅が面白がっているうちに（聞き上手というのもあって）、エリカは良い気分になって知識の披露が止まらなくなつた。

実は、それらは入学前にエリカが一生懸命調べた情報であった。元々趣味で調べた知識であったが、それを誰かに話したくなる、というのは人情である。

「でもそれらを凌駕するような軍人が日本にもいるの」

得意げに勿体ぶって、エリカは次の話題に移ろうとした。「へえ？」と小梅も続きを促す。

「かの軍神、西住戦車隊長っ！ あなたも名前くらい聞いたことがあるでしょう？」

それからエリカは、まるで自分の功名であるかのように、軍神の数々の偉業や逸話を嬉々として語った。これが最も人に披露したい知識であった。

元々インターネットや、その手の雑誌から集めた知識である。誇張表現や面白可笑しい改変などがされている事は承知であったが、話のタネとしては優秀だ。しかも西住戦車隊長は、存在自体が冗談のような人であるから、尚更である。

良い気分になっているので、自然に声も大きくなってゆく。周りの人間（戦車道の先輩含む）も、その気持ちは何となく理解出来たし、話の内容も興味のある人間にとっては面白かったから、それに聞き耳を立てることはあれ、誰も注意せずにいた。

「それでね、ここで彼女が行った作戦というのが……」

エリカが早口で話していた、その時。

ちようにど向かいの席から、ぱちんと指を鳴らす音が聞こえた。

不思議に思っただけ話を中断したエリカや小梅を始め、周りの人間も皆その場所に視線を向けた。

そこに座っていたのは、悪戯っぽい笑顔を浮かべる少女。明るい茶色のショートカットの一年生。

西住みほだった。

みほの顔を、エリカは知っている。戦車道界隈では有名人であり、尊敬する人でもある。

その人はエリカの真向かいに座っている。

勿論、話も全て聞かれていた。

まるで自分の手柄のように修飾した、みほの先祖の話を。しかもそれらは、殆どにわかと言って差し支えない内容であった。

そしてみほの表情。悪戯っぽくもあつたが、同時に照れも混じっていた。ひよつとすると呆れも混じっているかもしれない。

この状況の全てを理解した時、エリカは真っ赤を通り越して真紅になった。汗をだらだら流し、何か言い訳をしたそうに、唇を震わせた。それすらも通り越すと、今度は青くなつてその場に縮こまった。継るように小梅を見ると、既に他人の振りを決め込む様相である。

みほは、二転三転するエリカの様子を面白そうに眺めていた。エリカが必死に足元を注視し続けようと、みほは真っ直ぐ先を眺め続けた。

このバスの中で、事情を知って足元を注視していないのは、みほだけであった。

◆ ともかく、これが後の盟友同士の馴れ初めであった。

『西住みほ親衛隊』が組織されたのは、入部期間が終了してから数ヶ月後のことだった。

みほが直接手を出したからではない。これは、平素から特にみほを信仰して止まない、とある隊員が立ち上げたものだった。

この組織は試合において、副隊長車を護衛する目的が主であり、普段は色々とみほの世話をするのが仕事だった。

実のところ、仕事を目当てに志願する隊員など居らず『副隊長の傍に居られるから』という目的の志願者が多数であり、完全に目的と手段が逆転していた。

そういう組織であったから、隊員達は皆みほに心酔していた。まさに身も心も捧げており、玉碎せよと命じれば本当に実行しかねない有様だった。

設立までの数ヶ月、みほは新たな環境を何食わぬ様子で観察していた。戦車道すべての人員の、有能と無能の判断を最終的に下し終えるまでそれだけの時間がかかったのである。

親衛隊の創設後、みほが目をつけた隊員は、皆喜んで取り込まれた。あくまで、自発的に。

黒森峰屈指の精鋭にして、完全なる私設部隊である親衛隊は、大いにみほの活躍に貢献した。

だが、この時点で、親衛隊は不完全だった。

みほが真っ先に見出し、その有能を最も求めた人員が欠落していた。

逸見エリカ。

平時であれば、隊長ともなれたであろう彼女の力を、未だ取り込むことが出来ていないのだ。

故に不完全。みほの要求を、全く満たしていない。

当初、逸見エリカを引き込むことを、みほは問題にもしていなかった。前提からみほを崇敬している彼女を引き込むのは実に容易であると思っていたからだった。

思いがけない事態にも、みほは慌てはしない。

自分の能力を少し割いてやれば、事は円滑に進むであろうと考えたのだ。

よって、彼女へ何時ものやり口を実行した。

甘く美しい口上による洗脳、特別な扱いをする事による誘導……中学時代、みほが完全にモノとした手法を存分にエリカへと注ぎ込んだ。

そして最終段階へと至る時期を見計らって、さり気なく、しかし劇的な場を用意してやって、エリカを親衛隊へ勧誘した。

「あなたの力が必要な。私の傍にいて欲しいな」

皆の前でエリカの手を取り、優しく笑いかけるみほ。周囲の隊員たちは、早くも賛成の声と拍手を送っていた。

「勿体ない光栄です！　これからは誠心誠意、あなたのために働きます！」

歡喜に頬を染めて、エリカは足元にかすず傳く

みほの脳内では、そういう未来が見えていた。周りもそうだったに違いない。

けれど、そうはならなかった……そうはならなかったのだ。

「お断りします」

みほは、耳を疑った。

エリカは恐縮しながら、しかし、はつきりとした拒絶を示したのだ。握っていた手は振りほどかれ、一歩後ろへと退く様子は、心の距離

が離れていることを明確に表していた。

「どうして……？」

絞り出す様なみほの間に、エリカは取り付く島もなく応えた。

「私は、それを好まないからです」

みほの策略は、音を立てて崩れた。

◆ 完全だと思われたそれは、逸見エリカの前に敗北したのである。

「失礼します」

エリカがドアをノックすると「どうぞ」と返事があったので、遠慮なくドアを開けた。

みほは部屋の真ん中に据えられた、黒い革のチェアで待っていた。

「ようこそ！ コーヒーはどうする？」

「え、と……ブラックで、お願いします」

「分かりました。そこに、座って待っていてね」

にこやかな、来客へのみほの対応も、エリカの頭にはあまり入ってはこなかった。

代わりに目に飛び込んできたのは、地図、地図、地図。壁一面にびっしりと、貼られた地図の有様だった。一枚一枚に書き込まれた、おびただしい量の矢印や文言は、一見したのみでは読み解くこともできなかった。

異常。

平常通り、物腰柔らかくコーヒーを準備するみほの振る舞いが、逆に異常性を際立てていた。

エリカが副隊長室に招かれたのは、親衛隊への直々の誘いを断った数週間後のことだった。

副隊長室への招待がかかった時、戦車道部は騒然となった。何しろ、今まで誰も入ったことがないのだ。親衛隊筆頭である隊員や、隊長でさえそうだった。

それが、例の誘いを蹴ったことで、妬みの対象となっていたエリカが招かれたとあっては、騒然となるのは自然なことである。

「お待たせ。はい、どうぞ」

「ありがとうございます……」

苦いコーヒーを飲みながら、エリカは自分が招かれた意味を考えた。十中八九決まっている。副隊長を拒絶した、そのことだろう。

その予想を裏付ける様に、緊張した様子のエリカに、みほは語りかけた。

「この前の事について、話があります」

「そうだろうと、思っていました」

「なら、話が早いよね」

机を挟み、エリカの向かい側に座ったみほは、やはりいつも通りの笑顔だった。

「ぐくりと、エリカは唾を飲み下した。」

「何で、私は断られてしまったのかな？」

「……前に言った通りです」

「好みでない、そう言ったよね」

「はい」

「分からないんだ。私がああなたの好みに、どうしてそぐわないのか、考えても分からないの」

「それは」

エリカは俯いて、回答を濁した。

「あれから、ずっと考えていたんだよ？ 夜も眠れないくらいに。あなたの事を、ずっと想ってた」

「申し訳、ありません」

「教えてよ」

エリカが顔を上げると、みほはこちらを見ていた。何時もの笑顔は消え失せて、真顔になった、みほの瞳。その中に、なにかが居た。それが、こちらを見ていた。

ばけもの。

不定形のなにかをエリカの感覚に当てはめた時、形容すべき言葉が、それしか見つからなかった。

知覚してしまった瞬間、一気に鳥肌が立つ。嫌な汗が、背中から吹

き出た。

此処が密室であることが、急に思い出される。

「ねえ、エリカさん。あなた、敵なの？」

「敵……とは」

「私の敵、黒森峰の敵、西住流の敵……どれでもいいよ。西住みほの敵、粉碎すべきもののこと」

一切の情動が失われた声だった。西住みほの内側のものが話しているのだ。

姉や、母が『化物』と称するそれが、エリカの前に現れていた。

「逸見エリカ。あなたは、私の敵なの？」

これは最後通牒だ。エリカは悟った。

此処で敵になってしまえば、恐ろしいことになる、直感で確信した。

嫌だ。敵になるのは嫌だ。

西住みほの敵にならないためにはどうすればいい？ 決まっている。今からでも「親衛隊に入る」と言えば良いのだ。それで、目の前の恐怖からは逃れられる。

そうしてしまいたい。

逃げてしまいたい。

楽になってしまいたい。

けれど、それは――

私の好みでない。

「――気に入らないわね」

エリカは、みほの瞳を見て言った。

みほは驚愕に目を見開いた。

「気に入らないわ、全く気に入らない。不愉快よ」

立て続けに言った。恐怖が無くなった訳ではない。

むしろ前より恐ろしい。

その上で言っているのだ。言わなければならないのだ！

「どうしてですって？ なら、教えてあげるわ。私はあなたのやり口が気に入らないからよ。大嫌い」



西住みほがこちら見ている。

心臓が爆発しそうだ。本能が警鐘を鳴らしている。知るものか。

「親衛隊に入れば幸せになれるのでしょうか。正直にそう思うわ。誰でもそうだと思っっているんでしょう？ 心も身体も、自分のもののできると、確信しているのでしょうか？ だったら、あなたは間違っているわ」

間違いない。

その言葉が、みほの逆鱗に触れた。

みほはおもむろに立ち上がり、エリカを見下ろした。

敵だ。逸見エリカは、今、西住みほの敵になった。

そのことは、エリカにも伝わった。

みほから発せられ始めた、強烈な敵意。臓腑が搔き回される感覚に、血の気は失せ、吐き気が込み上げる。

それでも退かない。

エリカも勢いよく立ち上がり、どす黒い恐怖そのものに対峙した。「私はあなたを尊敬しているわ。親衛隊の隊員よりも、世の中の誰よりも！ 初めてあったあの日から、私はあなたのことを崇敬している。だからこそ、言わせてもらおう！」

エリカは、己が胸に手を当てて、言い放った。

「私の主は私よ！ その認識を、誰にも侵略させはしない！！ 例え尊敬するあなたにも、誰にも！！ 私を舐めるな、西住みほ！！」

絶叫。

エリカの魂よりの絶叫は、みほの全身を打ち付けた。みほの内側のなにかが、大きく揺らいだ。明らかかな狼狽が、みほの表情に現れた。

逸見エリカの認識は、西住みほの認識を真正面から攻撃した。

みほは、人生で初めて敵を恐ろしいと思った。

こんな敵は……今までに居なかった。どう対処して良いのか分からない。

まさか……まさか、こんなに真っ直ぐに、私を見る人間がいるなんて、想像もしなかった。

みほは、足元がふらついて、崩れるようにして再びチェアに腰掛けた。

今度は、エリカがみほを見下ろしていた。

「——隊長が言っていた。『妹は化物だ』って。私は、そうは思わない。あなたは人間よ……私と同じ」

やはり、エリカは、何処までもみほを真つ直ぐに見て言った。

「西住みほ……あなた、隊長が嫌いななの？」

疑問。やり返すように、エリカはみほに問うた。

「隊長は『みほは私を憎んでいる』と……そうも言っていたわ。本当にそうだとしたら……どうして？」

あの姉は隠れて余計な事ばかり言う……やはり、卑怯者だ。

みほは俯いて黙りながら、思った。

「答えなさい」

エリカが怒気を孕んだ声色で言った。

どう答えれば良いだろう。私は、西住みほとして、どう答えるべきだろう。

私は、どう思っているのだろう。

「——嫌いだよ」

心に浮かんだ通りに、みほは答えた。

「嫌いだ。お姉ちゃんなんて嫌いだ。あんな卑怯者、滅びてしまえばいいんだ」

呪詛を唱えるように、みほは言葉を漏らした。

「嫌いだ、嫌いだ、嫌いだ。お姉ちゃんも、お母さんも、今の西住流も皆嫌いだ。私を認めないもの、否定するもの……私を『化物』扱いるもの、皆嫌いだ!!」

いつの間にか、声が大きくなっていった。

これだけの本心を表に出すのは、本当に、どれだけぶりのことだったであろう。みほは覚えていなかった。

或いは……あの日以来のことかもしれない。西住みほが『鬼』と化した、あの日以来。

「どうして、どうして誰も分かってくれないの!?! 私には正しい、私は間

違っていない!! 先祖の誇りを守るために全霊を尽くす事が、何でいけない!? その正当がどうして理解できない!?!」

みほの瞳に涙が溢れた。

その身の内側に、母や姉の言う『化物』が住み着いてから、決して出ることの無かった、涙。

自分自身、枯れてしまったのだと思っていた涙。

それが今、敵の前で、みほの頬を濡らしていた。

「だったら分かせてやる、先祖たちは正しかったということをして!

西住みほは此処に居るということを! 私を憎むもの全てを絶滅させて、認識させてやる!!」

みほは、机を拳で叩き、叫んだ。

「だから、だから……」

だから、何だろう。

私はどうして欲しいのだろうか。

分からない。頭が痛い。

みほは、頭を抱えて蹲った。

私の欲求は、先祖の誇りを守ることだ。それが西住の者としての義務であり、勤めだ。

それだけで良い、それだけ良い筈だ。

足りないものは何も無い。

私は切り捨てたのだ、あの日に。弱さは全て切り捨てた。

だから、何も要らない——

「見るわ」

みほは、強く抱きしめられた。

何時の間にかエリカが近付いていて、みほに被さるようにして、抱いていた。

「私はあなたを見るわ。誰もがあなただを否定しても、恐れても、私はあなたを真っ直ぐに見てあげる」

優しい声では無かった。むしろ諫めるような、厳しい声だった。

けれど、その言葉はみほの認識に、これ以上なく染み込んだ。

「素敵よ、みほ」

そして、エリカの認識もみほに染められていた。みほの心の底からの慟哭に、この世で最も美しいものを見出したのだ。

全てに否定されようと、折れない精神。

理想を現実にするために、貫き通す意志。

そのために執行する、誇り高き力。

エリカは誤解していた。

みほに潜む『化物』の本質は、エリカが正義であると信仰するものに他ならなかった。

また、みほも気が付いた。

自分を真正面から見てくれる他人が、存在しうるということを。

家族にさえ否定され続けた正義を、認めてくれる者が居たのだ。

「ありがとう……エリカさん」

西住みほは逸見エリカに敗北した。

忌むべきものと断じていた敗北。

それは、みほにとって、愛おしいものとなった。

みほは笑う、何時もの様に。

エリカも笑う、みほの様に。

二人は無言で誓い合った。

この正しき闘争を、必ず完遂させると。

それを妨げるものの、全てを絶滅させると。

私達は『絶対正義』である。

◆ 翌日、西住みほによって逸見エリカの親衛隊長就任が皆に知らされた。

親衛隊の創設者であり、今まで親衛隊長であった隊員は、自主的に戦車道部を退いた。

新たな親衛隊長の就任は、皆に喜ばれた。

## 鬼神西住14

### 《西住一族》

通称、熊本の蛮族。

元は肥後隈本に土着した国衆・豪族。古くは独自に開墾や傭兵稼業を営んでいたが、戦国期に『闘鬼西住』と恐れられた女頭首が、隈本どころか九州各地で悪鬼羅刹めいた武勲を立てたことで、一廉の領地を得た。

『西住流』の始まりはこれである。

当時としては珍しい女頭首が生まれたのは、親戚の男が皆討死したためである。以降、九州で女傑台頭の風潮もあり、西住家頭首は代々女性が務めることとなった。

日本では珍しい戦車チャリオットを用いたことで有名。近年度々メディアにも取り上げられる。

何処の勢力にも肩入れせず、利益多しと判断した側に付くという一族の方針であったが、その領地が隈本の要所にあつたため、度々進攻を受ける。

が、どれ程の戦力差があり犠牲を出そうが、敵を殲滅し、逃げる者は地の果てまで馬で追いかけて確実に殺したため（比喩表現ではない。実際に九州の端まで追いかけた実例がある）、周囲の有力者の間では「西住領は干渉地帯」という暗黙の了解があつたらしい。

従来、地方の小勢力として無名の西住家だったが、豊臣政権による九州征伐の折、土地勘のない上方の軍が西住領に迷い込んだ。それを一族総出で撫斬みなごろしりにしたことにより、天下に（悪）名が広まる。

屈強な精鋭を全滅させた咎の問責のため、西住家頭首『闘鬼』が大坂に呼び出されたものの、放免される。

この問責の場での逸話により『秀吉の命に最も近づいた女武者』として語り継がれることとなった。

加藤清正が熊本に入ると、家臣として勧誘されたものの、それを拒否。後に、熱心な誘いに折れる形で登用された。

清正自身、武勇の人であつたためか、西住の蛮勇はむしろ氣に入ら

れ、重用された。西住としても、清正に対し信頼を寄せていたらしい（その名残に、現在でも西住家は軍神・清正公を熱心に信仰している）。それからは清正の元、各地で暴れまわった。

以降も武家・士族として存続。時代の荒波に揉まれ、何度か一家滅亡の危機に瀕するが、持ち前の不退転でそれを回避する。

西南戦争においては、西住隊は熊本城に立て籠る味方をよそに、城から打って出て西郷隆盛率いる薩摩軍に切り込み、暴虐の限りを尽くし、明治政府方の勝利に貢献した。

この事件は、味方にすらドン引きされ、西郷は「官軍に負けたのではなく、清正公と西住に負けたのだ」と嘆いている。

元々騎馬武芸の家系であったのが近世に至ると、戦車に乗り換えた（この一族、どうあっても鬪争から降りるつもりは無いらしい）。

また、遭難したドイツの船舶を救助したことをきっかけに、ドイツとの親交を深め、後に黒森峰女学院の設立に貢献するなど、文化の面でも評価できる。

第一時世界大戦にて『西住流戦車道』を確立。第二次世界大戦では『軍神』と称される大人物を輩出した。彼女は他国にて暴れに暴れまわり、一躍その名を轟かせる。

戦後、『軍神』は『偉大なる戦犯』の風評を被せられ、お家取り潰し寸前になるが、残された娘（現西住流家元）が一家存続のために奔走したことでそれを回避。

また、その娘は母親の元部下である松尾スミと共に現代戦車道の成立へ多大に貢献。

西住家は、その隆盛と共に多くの庶流が生まれたが、現存しているのは西住流戦車道（本家）と西住流組討甲冑術（分家）のみとなっている。

現在、西住本家で末の子孫である二人の姉妹は、戦車道で活躍しており、将来が期待されている。

◆ また、分家の男子も古武道で活躍している。

◆ 夏の日のおだる様な陽気の中、本来長閑であっただろう平原には、

怒号と悲鳴が交錯し、人間たちは大地に混沌と鮮血を振り撒いていた。

戦場である。

味方の武者は泥と汗に塗れながら、なお敵に挑みかかり、修羅の形相のまま、一方的に打倒されてゆく。

「二番備え、敗走にて御座います！」

「四番備え指揮者殿、お討死！」

「更なる敵の援軍が到着の様！」

開けた平野を見下ろせる、小高い丘の上に構えられた本陣には、矢継ぎに苦しい伝令がもたらされた。

戦場を眺める大将は、齒を食いしぼり、唸った。

これまで、圧倒的な数の敵軍に、じりじりと撤退を重ね、付かず離れずの戦法を取ってきた。しかし、今や城を背にして、撤退の余地は無くなった。

「御大将殿、一旦退いて籠城すべきでござる！」

側近の配下が進言するが、大将は即座に否定した。

「ならん。ここで退かば、反撃の目は失わたものと同じよ！」

「しかし……っ！」

こうならば、最早死中に活を求めるよりあるまい。

大将は、すつくと立ち上がり、大声で命じた。

「馬を引けい！ これより敵中に踊り込む！ 隈本武士たるものの本懐を示して見せよ!!」

周りの配下は、大将が死兵となったことを悟った。「応！」と喝し、いきり立つ兵たちの表情も、大将と同じく死兵と化していた。

その時である。

ごろごろごろごろごろ——

地鳴りの様に奇妙な音が、遠くから、大地を伝わり平野に響いた。乱戦模様の戦場では、その音を気にする者も居なかったが、やがて、その者らでさえも無視出来ぬ大ききさとなった。

ごろごろごろごろごろ。

地鳴りの音に加え、次には、そちらの方から無数の勇んだ喚声、騎

馬が地を駆ける蹄の音が聞こえてきた。

数瞬毎に勢いを増すその音に、敵も見方も手を止めた。

「何事じゃ!？」

側面を固める敵兵が、驚きそちらを振り向くと、恐ろしいものを見た様に飛び上がり、大口を開けた。

「西住の『戦車』だあ——」

その叫びは、しかし、仲間に届くことはなかった。

単騎、突出して先頭を駆ける騎馬武者が、大槍で以てその男の首を跳ね飛ばし、永遠に沈黙させた。

だが、敵にとつて、その叫びを聞くまでもなかった。

最早誰もがそちらを向いて、あるものは歓喜の雄叫びを、また、あるものは恐怖の悲鳴をあげた。

西住の『戦車』部隊！

大鎧を着せた二頭の馬に、二兵ばかり乗る車を引かせ、音を立てて奔走する西住武者特有の兵器数十台。

さらに車に乗った武者は、大筒鉄砲を携えて、今まさに正面へ構えていた。

「撃てええい!!」

先行して突撃した、車を引かぬ単騎の武者が叫ぶと同時に、空を切り裂く雷鳴が響いた。

雷鳴と共に放たれた巨大な弾丸は、敵前列を固めていた兵たちの盾を貫き、鎧を貫き、遂には胴体をも貫いて、その身体を数軒先まで吹き飛ばした。

その轟音に驚いたか。戦車を引く馬が半ば狂走状態となったのを問題にもせず、神技が如き馬捌きで、そのまま敵に突っ込んだ。

戦車は吹き飛ばした兵の身体を轢き抜けて、今度は槍や刀に持ち替えた車上の武者が、走る勢いのままにばっさばっさと周囲の敵を斬りつけた。

そして敵陣の逆側面へ突き抜けると、戦車は反転し、同じことを繰り返す。

大筒鉄砲による射撃と、車上からの攻撃という強烈な奇襲を受けた



敵方は、にわかの大混乱に陥った。

苦し紛れの鉄砲や弓矢の反撃は、人は勿論、馬にまで着せた大鎧と、鉄製の車に尽く跳ね返された。

止める術なくして、何度目かの突撃を受けたとき、常に先頭を単騎で駆けていた騎馬武者が、敵陣中に留まって高らかに宣言した。

天を突く巨大な槍は西住武者の馬印！

「退けえ、退けえい！ 音に聞こえし一番槍！ 『闘鬼西住』とは私のことよ！ 轢き殺されたくなくば、我が道を開けよ!!」

紛うこと無き女の声であった。

戦の鬼と悪名高き闘鬼とは、大鎧に身を包んだ女のことであった。女子にここまで言われては、男の矜持に賭けて引き下がる訳にはいかぬ。加えて、ここで闘鬼を仕留めること叶わば、功名一番であることは間違いない。

歩みを止めた騎馬へ向け、敵の歩兵が前後左右から殺到した。

だが、数で押せば何とかなるというような、可愛げのある女ではなかった。

群がる男たちを闘鬼はにやりと笑うと、手に持った巨槍をぶうんぶうんと振り回し、まるで蚊を払う様に鎧武者を蹴散らした。

長さ十尺（約3m）以上もあり、太さときたら男の腕程もあるその槍を、自分の手足かのように振り回すのだ。

その剛槍たるや！

薙げば一度に三人の敵を吹き飛ばし、突けば背中まで貫通させた。

地獄の鬼のような有様に、敵は恐れをなして次第に怯んだ。そして、何人目かも分からぬ武者が、剛槍に貫かれた時、誰かが「ぎゃあ！」と恐怖の悲鳴を上げた。

情けない悲鳴を皮切りにして、遂に敵は各々が散り散りに逃げ始めた。

「情けなや！ 敢えて挑みかかる猛者は在らん」

不敵な女の挑発も耳にせず、武士の矜持も命あつての物種よとばかりに男たちは逃げ出した。

女は、はっはっはと豪快に笑うと、再び馬で駆け出した。戦車部

隊も後に続き、再び突撃のための陣形を取った。

目指すは敵の本陣、唯一つ。

混乱を極めた敵方の本陣は、撤退の準備さえ出来ておらず、目の前の光景が信じられずに、ただただ呆然としていた。

しかし、轟音をたてて迫り来る戦車の形を目の当りにして、敵の指揮官はようやく撤退の命令を、半ば悲鳴のように下した。

「逃がさぬ」

鬪鬼は巨槍を地面と水平になるような構えを取った。そのまま腰の捻りを目いっぱいを利用して、大きく振りかぶる。

そして、騎馬の疾走もそのままに、巨大な剛槍を投擲した。

投擲された槍は、もはや砲弾と化して、敵の指揮者に一直線に飛んでいった。目を剥いた複数の配下が、咄嗟に指揮者の前に身を乗り出す。

その直後、槍は唸りをあげて飛来した。

槍は一人を貫いて、まだ止まらぬ！

続く二人を貫いて、まだ止まらぬ！

そして、遂に槍は敵指揮官の胸に突き立った！

今こそ、敵は総崩れとなった。

指揮官を失った兵たちは、武器も鎧も捨て、行き先も分からぬまま散り散りに逃げてゆく。

西住の戦車は、敵の本陣を踏み潰し、速やかに追撃戦へと移行した。

この有様を今まで眺めていた味方の大将は、馬に乗ったまま鬪鬼の勇に見惚れていた。

何と、あの女は戦車隊と己の武勇のみで以て、あれだけの敵軍を壊滅させてみせたのだ！

惚れ惚れする様な働きぶりを、何処かこの世のものでないように見ていた大将は、感嘆の声をあげた。

「撃てば必中、守りは硬く、進む姿は比類無し！ 天晴れ西住戦車隊！」

大将の西住戦車隊の勇猛を称したこの言葉は、後々の世まで語り継がれる事となった。

◆  
西住家所蔵家宝・文化財 『西住戦車』  
同上 『兵つはものとおし 徹の槍』

## 鬼神西住15

カラスも巢に帰り始める夕暮れ時。

遠くから彼らの切ない鳴き声聞きながら、大洗女子学園自動車部の面々は、五つの錆びれた鉄塊を前にして途方に暮れていた。

文字通り、錆びれた戦車である。形こそ良く保っているものの、中を弄る側からすれば、もはやスクラップ同然だ。

然もありません。何十年も（酷いものは沼の底で）野ざらしにされていたのだから。

生徒会長が言うには「戦車の洗車はこっちで済ませたから、中身の修理は任せましたよん。あ、明日までに終わらせておいてね。よろしく」とのこと。

無茶苦茶を通り越して理不尽だった。

専門外、しかもゴミ一步手前の機械を一晚で五つ直せとは。もちろんボランティアで。

「クヨクヨしててもしやあないか。まず取り掛かろう」

自動車部らしく一人が前向きに言うのと、やれやれ全くあの会長は、の様な文句を垂れつつ彼女らは作業に取り掛かろうとした。

その時である。

夕暮れの向こう側から、いくらかの群衆が近付いて来るのに気が付いた。自動車部と似たツナギを着た連中が殆どだったが、集団を先導している一人だけは制服であった。

その一人に、皆、見覚えがある。

西住みほだ。学校の有名人が、人を引き連れて向かって来ていた。

「こんばんは、自動車部の皆さん」

日が沈みかけている。

薄暗闇の中で、西住みほはごく丁寧に、手を挙げて挨拶をした。

慌てて礼を返すと、彼女は満足げに微笑んで、後ろに続く群衆のこゝとを紹介した。

「工学科の皆さんです。私が修理の手伝いを頼んだら、快く引き受けてくれました」

そちらを見やると、スパナやレンチ等々を手にした連中が、口々に何かを言っていた。

「ふっ……ひひ……滅多に触れない機関……戦車……」

「こっ……こんなの逃すわけにいかない……到来……大チャンス……」

「弄りたい……弄り倒して……回したい……珍物……ふへ……」

誰も彼も、変態めいた様子で手にした道具と体をゆらゆらさせていた。

自動車部の面子は、思わず後ずさりしてしまっただが、なるほど使えることについては疑いなかった。

「ど、どうもありがとうございます。非常に助かります……」

「このくらい、当然です。会長が無茶を言ったそうですね。困ったものです、あの人はそういうところがあるから」

「分かるんですか？」

「近くに居れば、転校早々にだって、すぐ分かります。きっと必死なんですね」

「必死、ですか。会長は、そういった感情とは無縁に思えますけれど」

「その実は……ってね。そうなる理由もあるんでしょう」

「理由？」

「そう、理由です。きっと、重い重い……だとしても」

みほは、校舎のある一室……生徒会室の方を見つめて、ぼつりと言った。

「私ならもっと上手くやれる」

自動車部には、意味がよく理解出来なかったが、返すみほの視線には力強いなにかを感じた。

頼もしい。

会長への不満が溜まっていた自動車部にとって、この新しい仲間が、今は生徒会の協力者という立場に過ぎない転校生が、非常に頼もしく思えた。

この人なら、現実問題として親切にしてくれる、ピンチの時には助けてくれる……そういう確信が心の片隅に芽生えた。

西住みほという人間に対し、無意識な好意を抱くに十分だった。「人を待たせているので、私はそろそろ失礼します。工学科の皆さん共々、修理、頑張ってくださいね」

する事は全て済んだと言うように、みほは立ち去ろうとした。既に、周囲は大分暗くなっていた。

「あのー！」

自動車部の一人がそれを呼び止めて、大きく言った。

「さっきの言葉、本当にそう思います！ 西住さんなら、この学校を良く出来る！ 上手くやれるよ！」

この言葉に、他の自動車部のメンバーや、工学科まで「そうだ、そうだ」と同調した。工学科も、あの気ままな会長には少なからず苦勞をかけられていた。

決して会長が嫌いな訳ではない、むしろ好意的には思っている。けれど、これについては相對の問題であった。

みほは、振り返りざまにっこりして、一言だけ言った。

「あなた方の仕事に、最大の成果を期待します」

それ以上余計なことは言わず、西住みほの姿は暗闇の中へ消えていった。



「着いたよ。ここが私の住んでる学生寮」

「ええっ、ここ!?」

「あらあら」

「す、凄い……」

みほ、沙織、華の何時もの三人に、今日の戦車搜索時に加わった優花里を加えた四人は、寄り道をしつつ、みほの家へと帰路についていた。

最初のうちは会話も弾んでいたが、歩くに連れて、何だか周りが妙に豪華な建物と雰囲気になってゆくので、妙な気分になり、言葉少なになっていったところだった（華は何時も通りだった）。

「みほ、ここって最高級学生寮だよな？」

「そうだね」

「最高級学生寮って、全国でも超優秀な生徒しか入れない所だよね？」  
「それも、そうだね」

「その超優秀に、みほが入ってるってことだよね!」  
「まあ、そうだね」

詰め寄る沙織に、みほは特に謙遜するでもなく涼しげに応答した。  
そのことについて、特別な思いは全く抱いていないからだだった。

「こっちに転校してくる時、黒森峰まへのがっこう女学園の学長が、色々世話をしてく  
れたの。私は普通の学生寮でも良かったんだけど、好意を無下にする  
のも何だったから」

「そうだったんですね」

「流石っ!! 西住殿でありますっ!!」

三者三様な友人の反応へ適当に応答しつつ、みほは先んじて建物内  
に踏み込んだ。

入口のパスワード・指紋・声帯認証の厳重なセキュリティを抜けた  
後、最上階までエレベーターで登り、長い廊下を歩き、最後は鍵で大  
きい扉を開けて、ようやく一行はそこに着いた。

「ようこそ、私の甍ねぐらへ」

招かれた三人は、扉が開かれた瞬間、大口を開けた。

全く、学生に相応しくない住処だった。間取りが3LDKもあつ  
て、洋室和室があり、備え付けの家具は一人暮らしには余計な程大き  
かった。

しかし、友人たちを驚かせたのはその高級感ではなかった。

本来、一人で暮らしているならば確実に空間にゆとりができる広さ  
だったが、この住処は違った。

ありとあらゆる場所に、クマのぬいぐるみが敷き詰められていた。  
空間にゆとりが有ろうが無かろうが、まさに節操なしといった風  
に、包帯やツギハギだらけの痛ましいクマが並べられ（中には人間大  
のものもあった）、むしろ家が狭く感じられる程であった。

「み、みほさん……これは、一体……」

「ボコだよっ!」

絶句する沙織と優花里を横に、三人の中で最も肝が座っている華が

尋ねると、みほはさも当然の様に応えた。

「いえ、その……この量は……」

「可愛いでしょ」

「あの」

「——可愛いよね?」

「はい、そう思います」

華は考えるのを止めた。間もなく、その他の二人もそれに習った。理解の範疇を超過していた。

家主に案内されるがまま、三人はリビングに通された。

やはりここもクマだらけだったが、客人はこの部屋に常識の安らぎを求めて目をきよろきよろさせた。すると、ある棚上の空間がすつきりしていることに皆気が付いた。

クマの代わりに置かれていたのは、一つの小さい写真立てだった。

「こつ、このお方はあつ!! まさかつ!!」

これには優花里が大袈裟に反応し、写真立ての傍に飛んでいった。ブルブル細かく震えながら、それを凝視する。

白黒の写真の中では、若い女性がにっこり笑っていた。

「かの軍神、西住戦車隊長では!?!」

優花里は視線を写真とみほの間で忙しく行ったり来たりさせ、二人を見比べた。

みほは優花里の様子を面白そうに眺めて「そうだよ」と言った。そして、優花里の脇から写真立てを取ると、それを皆に見やすいように自分の顔の脇に並べて見せた。

「私の、曾お祖母様。大好きな人」

照れくさそうにはにかむみほの様子と、写真の中で穏やかに笑う彼女の姿は、本当によく似ていた。写真でさえこれなのだから、きつと実物と並んでみたら、より似ているのだろうか。

「みほさんに似て、凛々しい方だったのですね」

「すごい、そっくりだよ! みほは曾お祖母ちゃん似なんだね」

「似ているのはご尊顔だけではありませんよ!!」

優花里は興奮冷めやらぬ調子で続けた。



「西住殿の曾お祖母様は、それはもう凄い人でっ！ 日本陸軍の伝説的英雄であり、戦いぶりはそれはもう凄まじくっ、日本史上初めて正式に『軍神』と認定されたのであります！ 今なお語り継がれる伝説の、その先を紡ぐ者こそ、まさに！ 西住みほ殿であるのですっ！！  
これまで打ち立てた偉業は国内外共に数知れず、そしてこれからは此処大洗でさらなる偉業を——」

「優花里さん」

「ハッ……」

「その辺で」

留まることを知らない優花里の語りを、みほは制した。ここまで暴走気味に誇張されるのは、流石にぼつが悪かった。謙虚さは尊ぶべきだ。

「うう……申し訳ありません……」

「ゆかりん、今イキキしてた……」

「アグレッツシブですね」

沙織と華の生暖かい視線に優花里はしょんぼりした。

またやってしまった……こんな調子だから友達ができないんだ……西住殿にも幻滅されてしまった……。

優花里は慙愧の念に絶えなかつたが、みほは別段気にする様子もなく（こんな状況には慣れていた）、写真立てを優しく棚に戻すと、話を切り替えた。

「さて、晩御飯を作りますよう。せっかく買い物をしてきたんだから……そうだねっ！ 私、料理にはちよつと自信あるよ。男は胃袋から落とせつて言うし！」

「落とせたことあるんですか？」

「それは、無いけどお……」

何時もの沙織の空回りど、華の容赦ない合いの手という、普段の軽快な調子の会話に戻ったことで、妙な雰囲気は一掃された。

優花里はほつとすると同時に、戸惑いも抱いた。何しろ、こんなに友達と仲良くすることなんて今まで無かったのだ。

どう振舞つて良いのか分からず、その場でおろおろしていると、み

ほに肩を叩かれた。

「一緒に、作ろう?」

「はっ……はい!」

それだけで優花里の表情は、ぱっと明るくなって、何となく表情がだらしなくなつた。

みほは、実家の飼い犬を思い出した。あの子は元気にしているだろうか。

「うわーっ、みほの家の台所、皆で並んでもまだ余裕がありそうだよ。羨ましいいい」

「普通ではないですか?」

先に台所に行つていた二人の声が出た。みほと優花里が一緒に行くこと、沙織が目を輝かせてあちこち見ていた。

「凄く立派なキッチン……みほはよく料理するの?」

「うーん、私は人に作られるばかりで自分で作ったことはあんまりないかも」

「あら、それでは私と同じですね」

「ハー、お嬢様だねえ……キッチンが勿体ないよ……」

宝の持ち腐れとはこのことか、沙織はため息をついた。

「あの、取り敢えず買ってきた食材は冷蔵庫に入れちゃいますね。西住殿、よろしいでしょうか?」

一家族でも余裕がありそうな大きい冷蔵庫を指して、優花里が聞いた。みほが「いいよ」と直ぐに答えたので、それを開けると、優花里は驚いた様な困つ様な顔をして言った。

「い、入れる場所がない……」

まさか冷蔵庫の中にもぬいぐるみか!?

軽い恐怖を抱いた沙織と華も、冷蔵庫を覗き込んだが、想像とは違ふようだった。

通常の意味通り、冷蔵庫はぎっしり食材で満たされていたのだ。

「うわっ、冷蔵庫ばんばんじゃん! しかもなんか品目がバラバラっほいっ」

「全国のお友達がその土地の名物を送ってくれるの。昨日一気に届い

たから、そんなになっちゃった。どうせだから、それも料理しちやおう」

「まあっ！ それは素敵ですね！」

「いや、こんなに食べられないでしょ？」

「何時もは一人で食べてるし、平気だよ」

「私もお手伝いします」

「あなたたちの胃袋は一体どうなってるのよ!？」

「新潟の美味しいお米も沢山有るよ、30キロくらい」

「お米くらいなら私でも炊けます、任せてください」

「もう好きにして……」

こと食事となると女子離れた様相を呈すみほと華、これで太らないのだから全く羨ましかった。

けれどこれだけの食材、料理のしがいがあるなあと沙織が思っていると、未だ黙って冷蔵庫の中身を覗いていた優花里が、やけに小さい声で言った。

「あの、西住殿……これは……」

「それは黒森峰名物のノンアルコールビール。私の好物だったから、友達を送ってくれたんだ」

「それは分かるのですが、その缶の奥にあるものたちは……」

「お米のジュースに麦のジュースにブドウのジュースにお芋のジュースだね」

「でもこれ度数が」

「ジュースです」

「度数」

「ジュースです」

「了解しました！」

◆ 何も見なかったことにした。

その後、皆で料理に四苦八苦しながら、何とか冷蔵庫の中身を料理し尽くした。料理を盛り付け、華が大真面目に炊いた悪ノリのような量のご飯をよそって、それらをリビングのテーブルに並べると、大洗

のあんこう鍋を始め、全国津々浦々の名物がずらりと揃う壮観となつた。

全部でとんでもない量だったが、みほと華があらかた片付けたお陰で、皿は綺麗さっぱり空になった。

「あーもうダメ！ お腹いっぱい！」

「もう食べられないでありますう……」

「ごろんと後ろに身を投げ出す一般人二名を眺めて、超人二名は「大袈裟だなあ」と内心に思った。

「凄く美味しかったよ。調理次第で、こんなに美味しくなるんだね。皆で作るのも、とっても楽しかった」

「お料理も乙女の嗜みですものね。これからは少しずつ身に付けていきたいです。また一緒に作りましょう？」

「ここまで食べっぷりが良いと、料理の苦労の殆どを引き受けた沙織の気分も良くなって、にんまりした。

「あーあ、こんなに食べさせる相手が彼氏だったらもつと嬉しいのになあ」

「武部殿はこんなに素晴らしい料理が作れるんだから、すぐに出来ますよー！」

「うう、ありがとう……ゆかりんは優しいね……よよよ……」

こうして談笑していると余裕が出てくるもので、クマだらけに見えていた部屋も、実はそうばかりではないことに気が付いた。

戦車関連の本や小物など、普段のみほらしいものが散見され、何となくこの部屋にも違和感を感じなくなってきた。

「西住殿のお姉様も、その……ボゴがお好きなのですか？」

「何度も勧めたんだけど、結局ボゴの良さは伝わらなかつたなあ」

優花里は興味本位で聞いた。戦車道ファンとして、この姉妹には大いに興味があるからで、この答えには少しほっとした。

「みほのお姉ちゃん？ 寄り道した戦車ショップでテレビに出てた人だよね？」

「うん、そうだよ」

「凛々しくて、何となくみほに似てたよね。私も妹がいるけど、みほみ

たいな妹だったら喧嘩なんかしなかつただろうなあ」

「そんなことないよ。私だって、大きい喧嘩もしたし」

「えー、そうかなあ？　けど……もし一人っ子だったら、それはそれで寂しかったかも」

「もし一人っ子だったなら——」

「え？」

「ううん、何でもない」

みほは頭を振って、不意に傍らの棚から二つ折りの板を取り出した。机の上にそれを開いてみせると、白黒のモザイク模様が現れた。収納されていた駒が、カラカラと音を立てて転がる。

それは、チェスの盤面であった。

「お姉ちゃんによくやったんだ。これ、本当はお姉ちゃんのなんだけど……持つてきちゃった。誰かできる？　久しぶりにやりたくなっちゃった」

「おお、チェスってなんかカッコいいね」

「将棋ならできるんですけど……」

「あ、私できますよ！」

優花里が勢い良く手を挙げたが、直ぐに曇った顔になった。

「けれど、相手になるかどうか……」

「どうして？」

「だって、その……西住殿はとても強そうですから」  
「強い」

その言葉に、みほは大きく笑った。

「私なんて、とてもとても。だって——」

みほはブラックのクイーンの駒を手にとって、それを弄びながら言った。

「お姉ちゃんに勝ったことなんて、ただの一度もないんだから」

## 鬼神西住16

冷泉麻子はある種の天才である。

物心ついた時より、何事についても麻子は経験という過程を飛ばし、明確に示された理論があれば、最適な解を体得する事が出来た。現実を広く客観的に把握し、問題を炙り出し、正確な予測を立てることができた。

これ故に、周囲から『神童』扱いされるのも尤もなことであった。

麻子は自身の有能について驕るような性格では無かったが、己が実行可能な物事の幅が非常に広いということは、その頭脳で理解していた。

自分の才能に、ある意味万能感を抱いていたと言ってもいい。ちよつと注意を割いてやれば、何でもできる——それは確かに、事実に基づいていた。

この万能感が打ち砕かれたのは、ある事件が切っ掛けだった。

両親が事故で死んだ。

麻子はそれを予測できなかった。

全く慮外の、どうにもならない場所から理不尽を叩きつけられたのだ。驕っておらずとも、自分が全く冷静に思い上がっていたことを知らしめられた。

死別する直前、麻子は親と喧嘩をした。

親が合理的でない馬鹿なことを言うから、それに真つ向から反論したのだ。

何時もの事だった。喧嘩の顛末は、何だかんだで麻子の合理的な言い分を親が許容してくれて、仲直り。そうなるはずだった。

そうなるべきはずだった。

けれど、現実は？

両親は、麻子を理解しないまま、許してくれないまま、死んだ。最後に見た親の顔は、怒った顔だった。

馬鹿なのは、麻子の方だったのだ。

天才故に、気が狂うほどそれを理解してしまった。

実際に狂った。

異常に血圧が下がり、寢床から出れなくなった。遂には部屋からも出なくなり、ろくに食事も取らず、人と会うことを拒み続けた。

祖母が慰めなのか激励なのか、よく分からない言葉を掛け続けてくれたが、麻子は理性の檻に閉じこもり、それを聞こうとはしなかった。

このまま何もかも終わってしまったえば良いと思った。

こんな馬鹿な自分は要らないのだと、確信していた。

何処を探しても、自分がのうのと生き永らえる理由が見つからなかったのだ。

それを救ってくれたのは、武部沙織だった。

幼馴染みの沙織は、暗い部屋に入ってきて、ただ抱き締めて泣いてくれた。麻子には抵抗する気力も無く、されるがままにしていた。

それが何日も続いて、麻子は薄らと考え始めた。

『何の為にコイツは私を抱き締めるのか？ 誰の為に泣いているのか？』

到底、理性では分からなかった。

きつとコイツは感情だけで動いているのだ。理解しようとするだけ無駄だ。

麻子は思考を放棄した。

理解不能の幼馴染みから伝わってくるのは、強く抱かれる温もりだけになった。

麻子は抱かれたまま眠りに落ちて、そして、夢を見た。

両親の夢だった。

何時ものように些細なことから喧嘩して、言い争って、でも最後には必ず許してくれて……二人で抱き締めてくれた。

麻子は思い出した。

私は抱き締めてくれた二人のことを抱き返すのが、何よりも愛おしかったのだ――

目を覚ますと、まだ沙織は抱き締めてくれていた。

気まぐれに、抱き返してみた。

沙織は一層強く抱いてくれた。

「温かい」

事実のみを言った、なんの意味も無い言葉。

けれど、麻子の胸には様々な思い出が津波のように押し寄せた。

朝起きて、ご飯を食べて、見送って、迎えてくれて、話して、喧嘩して、仲直りして、一緒に寝て……何でも無い、普通の思い出だった。でも、二度と叶わない、温かい日常。

麻子は、他ならぬ己の頭脳とある結論に至った。

私は両親の事が大好きで、両親も私の事を愛してくれたのだ。

理性の檻から心が漏れ出した。

漏れ出した心は溢れ出て、声となり、涙となった。

沢山泣いた。沙織も一緒に泣いてくれた。

十分だ。この想いさえ残っているならば、それで良い。生きてゆく理由に十分なんだ。

武部沙織は、冷泉麻子にとって特別な人になった。

彼女を何と定義しよう？

親友——彼女への想いは、最早それに収まりきるものではない。

恩人——返しような無い恩と感謝で一杯だけれど、きっと本人は否定するだろう。

家族——それは有り得ない。麻子にとっての家族とは、先立ってしまった両親と、今一緒に暮らしている祖母だけだ。そこに含めようという気持ちはない。

結局今でも、この幼馴染みをどうして定義すれば良いのか不明だ。

嗚呼、それでも構わない。この胸に、変わらぬ心があるならば、それで良い。

理論も理性も超越した愛情。それを思い出させてくれて、与えてくれた人。

私は今日もそれに生かされている。



麻子はこの日も寝坊した。

だからといって急ぐ気にもなれず、低血圧による憂鬱な気分で「なぜ朝は来るのだろう」と無為なことを思いながら、ふらふら道を歩ん



でいた。

このままゆけば、遅刻過多によつて留年の可能性があるというの分かつているのだが……どうしても布団の魔力から逃れられないのだった。

同じクラスの沙織には、今日も叱られるのだろうか。「おばあに怒られるよ！」とか言つて。

それを想像して、ますます学校に行きたくなかったが、最近の沙織の変化を思い出して気が変わった。

沙織がクラスの転校生の話ばかりをするようになったのは、つい最近のことだ。

性格がどうか、最近の働きがどうか、生い立ちがどうか……麻子にとつては心底どうでもいい話だったので、そういう話題になった時は寝転がりながら適当に相槌をうっているのが常だった。

しかし、頻繁に話を聞いているうちに、段々もやもやとした気持ちになってきた。

物事をはつきりさせる性分の麻子にとつて、これは非常に珍しいことで、自分でも意外に思った。

麻子は天賦の才能によつて、これまで様々なことを予測してきた。過程を飛ばして、いきなり結論が頭に浮かんでくるため、人に説明するというのは苦手だ。

しかし、西住みほに対して、何故こんな気持ちになるのか、思考しても原因が全く理解できなかつた。

気持ちが悪い。

他人について、こんな気分を味わわれるのは初めてだ。

沙織の心を一気に掴んでしまったことへの嫉妬か？

否。そんな下らないことで心を乱されるような性格はしていない。沙織が他者と仲良くなるのも平常のことで、気にすることじゃない。

ならば周囲からの期待を一身に集めることへの羨望か？

否。他人からの評価など気にしたことは無い。むしろ、新たな学園の星の出現は喜ばしく思う。

余りにもするりと、新しい環境に馴染んだ転校生に非の打ち所は何一つ無いではないか――

「それか」

麻子はある事に気が付いた。

完璧過ぎるのだ。

通常、転校生が新しい環境に馴染むのはどれだけの時間がかかるだろう。少なくとも、きつと西住みほの様に早くはない。

しかもこの女、人と人との間に入り込むだけではなく、極めて影響の大きい活動を積極的に行っている。

ここまでなら『凄い人』なのだ、無理矢理納得はできた。

しかし、これらについて、誰も違和感を抱いていない。

麻子は『誰も違和感を抱いていない』という現状に違和感を抱き、胸をぎわつかせているのだ。

人の尊敬を瞬く間に集める。ぼつと出の人間に生徒会が重大な仕事を担わせる。周囲の人間に違和感無く溶け込む――これは果たして、通常成り立つものなのか？ なんの画策も無しに、出来ることなのか？ あの笑顔の下には、何の意図も無いという保証はあるのか？

分からない、気持ちが悪い、もやもやする――

「……不気味だ」

麻子が独り言のつもりで呟いた、その時。

背後から突然声をかけられた。

「大丈夫ですか」

色の無い声。

振り向くと、そこに居たのは……件の西住みほだった。

呼吸が一瞬止まった。

「ふらふらですよ、冷泉麻子さん」

「どうして、名前」

「私たち、同じクラスじゃないですか」

「……そうだったな」

「肩、貸しますよ」

「いや、いい」

麻子はできるだけしゃつきり歩こうとしたが、身体が言うことを聞かない。低血圧ばかりのせいではないことは、明らかだった。

その様子を見たみほは、強引だが、優しい手つきで麻子の腕を取って自分の肩に掛けた。

「行きましよう」

みほは明るく笑いかけた。

至近距離で見るみほの笑顔には、本当に裏表が無いように感じられて、麻子は何より、そう感じてしまった自分に対して足が竦んだ。

上手く歩くことができない麻子の、ほぼ全部の体重をかけられているにも関わらず、みほは全くふらつかない力強い足取りで通学路を進んだ。

やがてたどり着いた校門前には、何時ものように風紀委員の三人が立っていた。

『おはようございますー！』

一糸乱れぬ様子で手を挙げた三人に、みほも丁寧に応じた。

「冷泉さん！ これで連続245日の遅刻よ！ それに西住さんにまで迷惑をおかけして!!」

状況を見て事情を察したらしく、みどり子が憤慨して言った。

「よう……そど子」

「そど子じゃない、園みどり子!!」

「うるさい、お前の声は頭に響く……」

「なんですってえ!?!」

みどり子は手持ちのタブレットを振りまわした。

「西住さん！ これからは冷泉さんを見かけても助けてあげなくて良いわよー!」

「そういう訳にもいかないでしょう」

「いや、いい」

麻子は肩に掛けていた腕を振り解いた。みどり子と対面して何時ものやり取りをしたことで、普段の冷静さを取り戻したのだ。何時もはうざつたいとしか思わないみどり子だが、この時だけはちよつと感謝する気持ちになった。

「これからは西住さんの力を借りることも無い。私は、一人で歩ける」  
「本当に」

「本当だ」

みほの問に、麻子は真つ直ぐ目を見て答えた。

その目からは、やはり、何も読み取る事はできなかった。みほの瞳の光は何もかも完全に隠匿していた。隠しているなにかがあるのかすら掴み取る事はできない。

「じゃあこれからは遅刻もしないのね？」

「それは無い」

「はあ!？」

みどり子のとやかく言う追求をあしらいつつ、麻子は皆を残して、今度はしつかりした足取りで校門をくぐった。心底気味の悪いこの場から直ぐに離れたかったのだ。

「冷泉さん」

直ぐに、背後からみほに呼び止められた。

麻子は唾を飲み込み、深呼吸をしてから「何だ」と振り向く。

「朝は嫌いですか？」

みほは首を軽く傾げていた。麻子は、その無邪気な仕草の裏を探ろうとしたが、徒労だった。

「……そうでもないさ」

自分に言い聞かせるように言って、麻子は今度こそ早足で場を去っていった。

みほは去ってゆくクラスメイトの背中をずっと見つめていたが、やがてその姿が校内に見えなくなると、ぽつりと呟いた。

「ほし。」

その呟きは、風紀委員にすら聞こえないぐらい微かであった。

## 鬼神西住17

蝶野亜美一等陸尉は戦車道協会本部面会室の扉の前で、ごくりと唾を飲んだ。先程から、なかなか扉を叩く覚悟ができないでいる。

この場所へ亜美を呼び出したのは、戦車道協会最高幹部役員——松尾スミだ。そして、この部屋の中で待ち受けているのも同人である。

一体、若輩者の自分に如何なる用であろう？ 何か無意識に不手際をしてしまったのだろうか？

いくら考えても答えは出ない。

こういう時は直進あるのみ——昔、恩師からそう教わった。

意を決して扉を二度叩く。強く叩きすぎた。

亜美はひやりとする。まだ身体が強ばっているらしい。

「入りなさい」

内側から返ってきた返答は明朗であったが、怒りは無い。大いにほつとして「失礼します」と扉を開いた。

洋風の部屋には机を挟みソファが二つあって、奥の方に老女が杖を両手で突いて座っていた。

「蝶野亜美一等陸尉、ただ今参りましたっ!!」

敬礼をして、声の限りに名を張り上げると、老女は可笑しそうに笑った。

「ここは軍隊じゃない」

老女は向かいのソファを指して「掛けなさい」と勧めた。亜美は言われるままに恐縮しつつ腰を下ろす。

亜美は、この老女……松尾スミ元陸軍大尉と向き合うと、その威圧感に改めて圧倒された。これが本当に齢九十を越す老女の風格であろうか。

穏やかな雰囲気ではあるが、しかし目は爛々としていて、背筋をぴんと伸ばしたとしても自分より小さい筈なのに、圧倒的に大きく見えるのだ。最終階級で語るならば、自分と同程度であるのに、全く別次元の気迫である。

更に、今は退いたとはいえ、長らくスミは戦車道協会の会長であっ

て、今でも彼女が一声出せば協会全体が損得ではなく義理で動くだろう。事実上の最高権力者ではないか。

そんな人間に対面していると思うと、小一尉の掌には否応なしに汗が吹き出た。

「一体自分に、その、何の用事ででしょうか」

「そう怯えなくてよろしい……まずは茶でも飲みなさい」

「は、はあ」

亜美は予め机に置かれていた茶を一気に喉に流し込んだ。味なんぞ分かるものではなかった。

それを見て、スミはまた少し笑って、話を切り出した。

「君は昔、西住流に指南を授かったと聞くが」

「はい、西住しほさんには随分お世話になりました。今の自分があるのは、西住師範のお陰だと常々思っております」

「結構。では、君はしほさんの娘姉妹については知っているかな」

「まほさんと、みほさんですね。存じ上げております。残念ながら、直接会った事はありませんが……師範は、子供たちのことを随分と愛おしく思っているようでして、話だけは頻繁に聞かされました。それを本人たちに直接言っただけで差し上げれば良いのに」

「あの娘らしい。昔から引つ込み思案の照れ屋だ」

クククと肩を揺らしてスミは笑う。

亜美は、尊敬する師範が『あの娘』呼ばわりされる強烈な違和感に苦笑した。師範が『あの娘』なら、更に若輩の自分は一体何者になつてしまうのだろうか？

「その娘さんたちの妹方……みほさんが例の事件で、黒森峰女学園から大洗女子学園に転校となったことも知っているのだろうか」

「……はい。随分と騒ぎになりましたので」

「数日前、大洗の生徒会から正式な書類を提出されてね。大洗女子学園の戦車道は復活する事が決定した」

「えっ!?!」

蝶野は大いに驚いた。大洗女子学園といえば、数十年前に戦車道が廃止となった学校である。だからあれほどの騒ぎとなったのだ。

「それはまた……随分と急な話ですね」

「何でも、全国大会出場を考えているらしい」

「まさか!」

冗談だと思つて亜美は笑つたが、スミの表情は真剣であつたので「……まさか本当に?」と思わず聞き返してしまった。スミはにやりとして頷く。

「しかし、大会の通例から言つて……いえ、そうでなくとも無謀過ぎるのでは」

「確かに厳しいだろう」

「今年でなくとも、実力を付けてから出場する選択もあるのに」

「その通り」

「いくらみほさんが居るといっても、他の隊員が付いてこれないでしょう」

「それでもやるのだ、やつてしまうのだ——何故なら彼女は『西住一族』だから」

『西住一族』。

その言葉で、亜美は過去に学んだ西住家の歴史を思い出した。戦国の乱世から脈々と続いてきた『闘争』の歴史である。

「私は七十年、彼女たちを側で見してきた。その間、彼女たちがやると言つてやらなかつたことは唯の一度だつて無い。事の大小区別無しに。それを受け継いできたのだよ、あの『一族』は。数百年間、それのみ是として生きて、死んで、そして紡いできた」

スミは杖で強く床を突いて言った。

「真に、みほさんは血を濃く受け継いでいらつしやる。嬉しや、あの方の遺志が潰える事、未だ無し」

杖を震わし、何処か遠くを見つめるスミの目は、激しく燃え盛つていた。それは、現代では目に掛かる事の無い『軍人』の苛烈さだった。そして——その目の底に、激しさとは対極のものが現れていた。それに気が付いた途端、亜美の身体は一挙に冷えきつた。

「大洗女子学園の戦車道復活の書類が届くと同時、手際の良い事だ、特別講師の派遣依頼が届いた……みほさんの請願書付きでね。私はこ

れを良く吟味したが、君が適任であるとの結論に至った。それが、君を呼び出した理由である」

「あ、あなたが、直々に……」

「そうだとも」

スミはすつと目を細め、亜美の目をじつと見つめて聞いた。

「受けてくれるだろうか」

激しさではない。この軍人の目の底で揺らめいているのは——完全に冷徹な『狂気』だった。

◆ 選択の余地は、あるわけがなかった。

空から戦車が降ってきた。

落下傘パラシュートを開き、轟音を立てて着地した10式戦車は、吹き飛ばした学園長の高級車をわざわざ踏み潰し直してから、こちらに向かってきた。

赤レンガ倉庫前に集まっていた戦車道履修者の面々は、目の前のあまりな光景に理解が追いつかず、ぽかんと口を開けるばかりである。

だから、迫ってきた戦車のキューポラから凛々しい女性が顔を出し、大きな声で挨拶したのにも、苦しく返礼するのがやっとだった。

「紹介する。特別講師の蝶野亜美一尉だ。今日は我々を指導するためになんぞわざわざお越しいただいた」

戦車から降りてきた蝶野教官を、涼しい顔をした桃が説明した所で、ようやく事態が飲み込めた女子たちは「よろしくお願いします」と口々に言った。「何故わざわざ戦車で来たのか?」とか『車を踏み潰したのは故意なのか?』とか色々疑問はあったが、そこをついてはならない気がしたので、心内に封印することにした。

実は全員、本日指導教官が訪れるということは知らされていたのだが、あまりの衝撃に記憶がすつ飛んでいた。皆は徐々にそれを思い出し余裕が生まれたので、この凛々しい(変な)教官について、あれこれ女子らしく質問した。

亜美はやはり堂々と(変な)回答をして場を和まし、質問に区切り



がつくと、意気揚々に手を叩いて言った。

「さあ！ では皆さん、早速戦車に乗り込んで頂戴！」

しかし、生徒たちは顔を見合わせるばかりで動かない。亜美が妙な顔をすると、柚子が言った。

「失礼ですが、まだ一人……西住さんが来ていないので、そういう訳にはいきません」

「西住？」

その名を耳にした途端、蝶野の目が鋭く光る。

「それは、遅刻ということかしら？」

全くけしからん……といった風に言うと、生徒たちは一斉に首を振った。

「西住は遅刻をしません。それに、まだ刻限には間があるでしょう。」

西住は必ず来ます」

みほに対する全面の信頼を代表して桃が言った。これには生徒たちも頷いた。これまでの経験から、桃の発言が全く正しいということに確信があつたのだ。

この事情が飲み込めない蝶野は、一層怪訝な顔をして生徒会長の方を見たが、当人は視線を伏して合わそうとはしなかった。

「……西住殿っ!!」

突然大きな声が響いた。それはやはり、常に彼女の影に注意を払っている秋山優花里が発した声だった。

生徒たちは一斉にばつと手を挙げる。

先程までの和やかな雰囲気からは想像もつかないような『規律』だ。驚いた亜美は皆の視線の先を追って……その人物を見て、固まった。

黒い少女だった。

ジャケツトも、シャツも、ネクタイも、ズボンも、靴も、手袋さえも……全てが漆黒だった。光の反射を徹底的に拒んだ生地素材は、黒をより黒く見せているようだ。

亜美だけではなく、この場の全ての人間が、この『黒』に視線を吸い取られた。

唯一、ジャケツトの襟に付けられた、バルケンクロイツ鉄十字を型どる銀バッジが、

やけに眩しく感ぜられた。

黒衣装の少女は自らも手を軽く持ち上げて、皆が空けた道を歩きながら、ごく自然に上座——指導教員の元へと向かった。

そして、言葉に詰まる亜美の目の前に立つと、徐ろに黒い手を差し出した。

「西住です」

何でもないように、西住みほは微笑んで言った。

亜美は、差し出された黒色の手を取るべきか一瞬躊躇した後、それを握った。熱いのか、冷たいのか——手袋越しでは判断がつかなかった。

「蝶野よ。蝶野亜美、一等陸尉」

警戒心をなるべく出さないようにして、亜美は名乗った。みほは、全ての事情を知っていたように落ち着いて「よろしくお願いします」と応えた。

「西住殿、その格好はっ!？」

優花里が、耐えきれないという風に尋ねると、みほは生徒たちの方に向き直って応えた。

「戦車戦闘服。今日は戦車に乗るものだと考えていたから」

「前の学校のものですか!？」

「私物だよ。前に親衛隊おともたちから貰ったの。貰ったのはいいんだけど、これまで使う場面が無かったから……この機会に、ね」

そこまで言うのと、皆が揃って「格好いい」とか「似合っている」とかはや囁し立てた。その中で、桃は無言でみほをじっくり観察して、何かを閃いたように何度も一人頷いていた。

「西住さん!!」

急な亜美の怒気のこもった大声に、生徒たちは水を打ったように静まった。教官の眉間が寄せられている事に、直ぐに気が付く。

「西住さん、あなた、先に皆が集まっているのを知っていて、それを気にもしないで何時も一番遅くに来るのかしら?」

「ええ、仰る通りです」

「あなたは隊長なのでしょう? だったら誰よりも早く来て、事前の

準備なり、隊員の管理をするなりを率先してすべきよ。そこまでせずとも、最低限皆と一緒に来て、何事も協力するべきではないのかしら？」

「全く賛成できません」

教え子を叱るような口調は、皆の肩を縮こませたが、みほは瞬き一つせずに即答した。

この態度に鼻白んだ亜美は、次には更なる怒気を漲らせて、何かを言おうとしたが、みほに遮られた。

「副隊長!!」

「……ひゃいつ?!」

自分が呼ばれた事に気が付いた桃は、慌てて返事をした。

「首尾はどうなっているのです。説明を」

「ああ……完了している。雑務は全て処理しておいた。戦車の点検修理、物資の運搬、日程の調整、隊員の点呼まで全て、全てだ。そしてお前が来た。これで終始万全だ」

「よろしい」

みほは満足げに頷いた。

「何も問題が無い。これは、とても素晴らしい!」

ぱんと手を一つ叩き、みほは腕を大きく開いて見せた。そして、教官へと振り向くと真っ直ぐ目を見て、朗々として言った。

「蝶野教官。私は、共に仕事に当たる仲間について全面的信頼を置いていますし、その逆も然りであると思っています。私が何時も最後に顔を出すのは、この信頼関係を信じているからです。信頼しているからこそ、仕事を任せられるのです。隊員を管理するなど……それこそ不信の象徴であると断じます。私に、そんな真似はできません」

みほは、話に聞き入る隊員たちをゆっくり見渡した。

「私は隊員一人一人に、最も適した役割を与えます。それに対して、最善を尽くす事のできる環境を作るのが隊長の役割であるのです。また、そういう環境こそ、隊長として私が望むものであるのです。何でもかんでも首を出して、それを妨げることは忌むべき悪習であります」

黒装束の少女は後ろ腕を組み、半ば敬礼の様な姿勢で亜美に向き合っていた。これは、目上の者に対し、決して礼を失すべきではないという態度の表れだった。

「協力と馴れ合いとは、似ているようで性質を異にします。集団で物事を実行する場合、それを混同してはならないのです。それを不自然に混ぜてしまつては、一人の人間が本来果たすべき目的を見失い、そして、責任の所在も曖昧になってしまいます。誰が何をすべきで、その責任は誰が負うべきか？ これを明確にしなければ、いずれその集団の脆弱性が露呈し、敵につけ込まれる決定的な隙になりうるのです。これは全く好みでない」

みほの口調は淡々としているようで、その実、熱が込められていた。教官に窘められた事に対し、理性的に反論しつつも、そこには信念に基づく熱意があつた。

その話術は、どうしようもなく他者の意識を引き込んだ。

「ですから、私自身の流儀に基づけば、あなたの仰ることは『悪』であり、全く賛同しかねるのです」

最後にそう締めくくると、一同を沈黙が支配した。

相変わらずみほは亜美の目をじつと見つめていて、そして、生徒も皆そうしていた。皆、教官の次の言葉を待っているのだ。

それに気が付いた亜美は、困惑こそしていたが、先ほどの怒りは欠片も残っていないかった。ここまで完全に反論されては、それ以上言うことも無かつた。

むしろ、自分の浅はかな発言を恥じる気持ちすらあつて、それを素直に言葉にした。それが出来るほどの度量を蝶野亜美は持ち合わせていた。

「西住さん、あなたの言う通りよ。私が軽率だったわ、謝ります」

素直に頭を下げる亜美に、みほも「こちらこそ、生意気を言いました」と礼を返した。

この『大人が言い負かされた』とも解釈可能な光景を目撃して、しかし、教官を軽んじる気持ちを抱いた生徒は一人も居なかった。

むしろ『自分の過ちを素直に謝ることの出来る尊敬すべき大人』で

あると解釈した。ここに至るまでの全ての演出が、そう理解させる為の助けをしていた。

「……松尾さんに、何か言われましたか？」

みほは上目遣いに、悪戯っぽく聞いた。

内心の事情を読まれ亜美は驚いたが、隠し立てする事でもない。また、正直に話した。

「言われたわ。それはもう、丁寧」

「あの人は何と？」

「『毅然として厳しく指導するべし。名家の出身だからといって甘い扱いをするのは、私が許さないし、何よりきつと本人が許さない』と。そりゃもう、恐ろしいお顔で……」

「あはっ」

みほは大きく笑った。

「あの人は良く分かってる！ 流石、西住一族と最も長い付き合いなだけあります！」

嬉しそうに黒い手を合わせてはしゃぐ素振りには、一転して、年頃の女子が見せる可愛らしさがあつた。

まるで親戚のお土産を喜ぶ様相であり、亜美も連られて微笑した。それは、強ばっていた雰囲気を一気に解す役割をした。

「ああ、楽しい。こんなに愉快なのは偶ですよ」

気が済むまで笑った後、涙を擦りながら言った。

その後、みほは深呼吸をして皆を見回し、笑顔が戻ったことを確認すると「さて」と言つて姿勢を正した。

「今日はどんな訓練を付けて頂けるのでしょうか？」

尋ねられた亜美も、気持ち良さげに、大きな声で応えた。

「実戦訓練よ！ 戦車に慣れるにはブーツと動かしてダーツと操作してドーンと撃つのが一番なんだからっ!!」

勢い良く拳を握る亜美に、隊員たちは再びぽかんとさせられる事となったが、黒い少女は何時も通り、屈託なく微笑んだ。

「それには全く賛成です」

## 鬼神西住 18

初めて戦車に乗った時のことを良く覚えている。

熊本の夏の虫が耳を破る程の声で鳴いていて、それに負けないくらい私の心臓も高鳴っていた。

まだ身長が届かなかったから、お母さんに抱き上げてもらって、やっと中に入り込んだ。

中は暗くて、狭くて、少し怖かった。

目を細めてきよろきよろすると、一番高い位置にある座席を見つけた。

私は、恐る恐る座ってみた。

不思議な事が起こった。

そこに座った途端、起こった出来事だった。

虫の声が聞こえなくなった。

心臓は止まってしまった様に静かになった。

喜びも怖さも、遥か遠くに往ってしまった。

私の中に有ったものの全てが消え失せてしまったのだ。

代わりに、別のものが湧き上がってきた。

それは先ず心臓を支配した。支配された心臓は、それを血に乗せて、身体中に送り出した。胴を、腕を、足を、内蔵を……一つの鼓動と共に、身体の隅々にまで、それが満ちてゆくのを感じた。

そして、血が頭にまで達した時、私は自然と顔を綻ほころばせた。

私は戦車について未だ何も知らなかったけれど、一つだけ確信した。

『私は世界で一番楽しいことを始めようとしている』

その確信は、とても愉快に思えた。

私は戦車から這い出ると、上からお母さんに飛びついて、素直に今感じたことを話した。するとお母さんは「きつと、あなたは特別な才能を持っているのね」と言って、頭を撫でてくれた。

私はお母さんが褒めてくれた事が、何より嬉しかった。これから戦車に乗ってゆける事がどうでもいいくらい——本当に嬉しかったん

だ。

◆ 蝶野教官の指示通り戦車に入ろうとした女生徒一同に、誰がどの役割で乗り込むのかという小さな悶着があった。だがそれも、生徒会が一人一人の割り当てを発表したことで落ち着いてきた。

ある意味一方的とも言えるこの段取りは「一体何を基準に決められたのか？」という素朴な疑問を生んだが「西住隊長の意見を参考に、各々の資質を慎重に見極めて決定した」「今後不満が出るようならば、これを吟味する」という説明で納得を得た。

そもそも、戦車道について右も左も分からないような人間ばかりだったから、特に異議も出ず、むしろ「西住隊長の決めた事なら」という安心感があった。

みほたちのチーム（仮にAチームとなった）の割り当ては、車長がみほ、砲撃手が優花里、装填手兼通信手が沙織、操縦手が華となった。車長がみほであるのは暗に認められている様なものだったが、他の割り当ての理由については何も伝えられなかった。

「どうしてこういう風に決めたの？」

沙織が興味津々にみほに聞くと、華と優花里もそれに倣ったが、聞かれた方はにこにこするばかりで何も答えなかった。

皆が戦車に乗り込む中、みほたちもⅠⅤ号戦車に入ると、各々の席に座った。

「鉄臭いです」

「狭い上に、暑苦しい……」

「へへへ……いよいよ戦車を動かす時が……!」

三者三様の反応を見せる中、みほは静かに深呼吸をしていた。

みほに教えられた華がエンジンをかけると、音と共に大きな振動が身体に伝えられる。

「ヒヤッホオオウ! 最高だぜえええ!!」

エンジン音を聞いた優花里が、唐突に腕を掲げて叫んだので、沙織が身じろいで目を丸くした。

「人が変わった……」

それに気が付いた優花里は「すみません……」と一転して縮こまる。「こういうのをパンツァーハイだなんて言うのかな……みほ？」

沙織が可笑しそうに振ると、みほは無表情にじっと目を閉じて何も答えない。ただ静かに深呼吸だけをしている。何度か呼びかけたが、まるで反応が無かった。

何も聞こえていないかのようだ。

どうしてしまったのか……皆が段々と心配になってきた時、みほは一際大きく空気を吸い込むと、目を開いた。

「ああ、良いな」

息を吐いて、安らいだ声で呟く。

「本当に久しぶりだよ。一体どのくらい離れていたんだろう？ とにかく長かったよ。思えば、随分息苦しかった気がする……やっぱり、この場所は良い。私は、此処にいるべきだな」

みほの来歴を知っている三人は、はっとしてみほを見つめ直した。今や安らぎは去り、みほの顔は、今まで見た彼女のどの表情とも異なっていた。

壮絶。

言葉にするならば、それが最も当てはまる様に思えた。吐き出した気は車内に満ちて、全員の意識を鋭く刺した。

沙織は優花里のことを「人が変わった」と称したが、その比ではなかった。戦車乗ったこの少女は、これまでとは全くの別人であった。

三人は思い知る。

これが西住みほ!!

西住流戦車道継承者にして、一族直系の末裔。

数々の試合にて無数の敵を粉碎し、無敗。

海外交流戦にて完全試合をやったのけ、日本戦車道ここにありと知らしめた強化選手。

名声の末に讃えられた名は『軍神の再来』。

そして——居場所を追われた悲運の少女。

三人の脳裏にこれらの知識が駆け巡り、そして悟った。

たった今、現界した彼女こそがその人なのだ。



そして、本来ならば、この場所に居るはずもない逸人とチームを結成している者こそ、自分たちなのだ。

それに気が付いた時、三人の身が震えた。今現在すらも、凄まじい幸運に見舞われている事に気が付いたからだだった。

皆にとつて別人と化した黒装束の少女は、その様子を見て、仲間たちの心境の変化を全て見抜いた様に言った。

「こんにちは、諸君」

西住みほは、やはり、笑っていた。

◆ 総員が乗り込みを完了させると、練習試合の開始地点にまで移動せよという指示が出た。

操縦手の生徒たちは、地図やマニュアルとにらめっこして、悪戦苦闘しながら運転をしたが、Aチームは比較的速やかに移動した。

これは車長<sup>みほ</sup>が外に半身を乗り出して常に周囲を確認し、移動の指示を出しているためだった。

その指示を出す時に、操縦<sup>は</sup>手の肩を足でとんとんと優しく蹴るのだった……指示を出される毎に、華は何だか身体中が痺れる様な感覚に陥って、度々操縦の手が止まってしまった。

兎も角、時間が掛かったものの全チームの配置が完了すると、教官からの通信が入った。

「今回の試合は最後まで生き残ったチームの勝利です。つまりバーツと動いて、敵を見つけたらドーンと撃てば良いのよ！」

相変わらず随分ざっくりとした説明だったが、次には真面目な口調になって言った。

「戦車道は礼に始まり礼に終わります。全員、礼！」

『よろしくお願ひします！』

生徒たちは、直接見える筈もない相手に向かって一斉に頭を下げた。中でもみほは、一番長い時間、神妙に頭を下げていた。

「試合開始！」

◆ みほが頭を上げると同時、状況は開始された。

「さて、どうしましょうか」

試合開始の号令が下されると、華が後方を振り向いて尋ねた。他の二人も同じく、そちらを見た。皆、引き締まった顔をしている。

「お互いの位置は割れています」みほは地図を広げ、ある一点を指で指した。「私たちはここです。ちようど、他のチームに囲まれている様な場所にいます。あの教官も粋な事をする」面白そうにする車長に、優花里が危惧を表した。

「包囲されますか」

「十中八九そうなるでしょう」

「しかし、今回は各々が敵同士です。そんな連携を取ってくるものではないでしょうか」

「敵の立場で考えると、ね」

この言葉の意味について少し考えただけで、非常に納得ができた。相手にとっては、西住みほが敵なのだ。少しでも勝利の確率を上げるのであれば、連携攻撃の選択しか有り得なかった。

「包囲が完成する前に抜けます。28地点の草原へ……少し用事もあ  
るから」

「用事？」

不思議な事を言うみほに沙織が反応した直後、間近で爆発音が響いた。沙織が悲鳴を上げる。吹き飛ばされた無数の石礫が車体を打ち、無機質な金属音となって内部に反響する。

戦車の砲撃だ！

仰天する三人を余所に、みほは直ぐさま外に顔を出して、それが最も近くに配置されていたCチーム（歴女チーム）であることを視認すると、手を叩いて喜んだ。

「来たぞ来たぞ、思った通り！ ほら、何してるの？ 前進、前進、戦車前進！」

◆ I V号戦車はアクセル全開で走り出した。

お日様ほかほか野原の真ん中で、切り株を枕に気持ちよく昼寝をしていた冷泉麻子は、唐突に始まった爆音の連鎖に無理やり叩き起され

た。

「……何の騒ぎだ」

せつかく授業をサボって快眠を貪っていたというのに、それを中断されたせいで気分を害された。どうせ眠るのなら、気持ちの良い睡眠を選ぶ。それが冷泉麻子の素晴らしき人生哲学だ。

寝ぼけ眼を擦って周囲を見渡してみると、森の方から一直線に戦車が突撃してくるのが見えた。

「ん!？」

これには麻子も一瞬たまげたが、直ぐに事情に思い当たる。確か今日は新しい選択科目——戦車道が開始される日であった。きっと私はその実習地に居合わせてしまったに違いない。

落ち着きを取り戻した麻子は、向かってくる戦車をよく観察した。複数の砲撃と地面の爆発を巻き込みながら前進する戦車の速度は、今すぐに轢き殺されるというような速度ではない。また、後方からの砲撃も、その角度から考えて向かってくる戦車が盾となるので、まず当たる事は無いだろう。むしろ下手に逃げた方が危険だ。

麻子は瞬時に考えを整理すると、もしも戦車が停止してくれなかった時の為に、飛び乗る覚悟と身構えをした。

それと同時に、戦車の上に身を乗り出す黒い女に気が付いた。その途端、麻子は思い切り苦い顔をする。

あれは西住みほだ。

突撃してくる戦車の問題よりも何よりも、今朝出会ったこの女に再会するのが嫌だった。

戦車は麻子が足を踏み切る直前の距離で停止した。

みほはキューポラから全身を出すと、何度か戦車を踏み台にして、身軽に麻子の元にまで着地した。

「また会いましたね——」

その嬉しげな声を耳にした途端、麻子の胸に強烈な悪寒が荒れ狂った。

この女、今朝よりも遥かに、理性では説明不可能な不気味さが増している。あの時には纏まとっていなかった、突き刺さるような雰囲気も

だ。これは、全身黒装束の効果であろうか。  
違う、違う！

服装だなんて、そんな些細なもので引き起こされる変化ではない。あの目を見てみる、人格そのものを異にしているではないか。この短時間で、人はここまで変えられるものなのか。

いや、それも違う。

あの時、僅かにも見抜けなかったこの女の本性——それがこれなのか。

「西住さん……で合っているよな」

麻子は確信が持てずに、思わず聞いた。

「如何にも、私は西住です。今朝、会ったじゃないですか」

「覚えてる、記憶力は良い方だ。私が聞きたいのはそういう事じゃない」

「ここで何をしているんですか？」

みほは麻子の疑問を全く無視した。麻子は唇を噛んだが、確かに今尋ねるべき事ではないことが分かったから、素直にみほの質問に答え

た。  
「……休んでいた。この辺りは、普段人氣が無いからな。戦車道の実習地になっていたとは知らなかったんだ」

「そういう事でしたか」

「直ぐに立ち退く。邪魔をすすまなかった」

一時でも早くこの場を離れたくて、麻子が身を翻すと、みほに手首を掴まれた。

鳥肌が立った。

「危ないですよ」

「はなせ」

「そうはいきません」

「はなせっ！」

麻子は手を振り解こうとしたが、みほの握力はそれを許さなかった。益々気分が悪くなつて、本気で腕を振り回すと、みほがいきなり手を離したので、麻子はバランスを崩して尻餅をついた。

「——大丈夫ですか」

地面に手を付いた麻子を見下ろす黒い女は、太陽を背にしている、その人影の中に麻子は収まっていた。

とてつもない寒気がした。

逆光でみほの顔は暗くなり、よく見えなかったけれど——それでも麻子は見たくなくて、顔を伏した。

恐ろしいものがそこに有ると直感したのだ。

幼い頃、両親が事故で死んだ時、世界に対して感じた得体の知れない恐怖。麻子はそれを想起していた。

みほのそれは、子供のわがままの世話を焼く母親の如く、ほんの僅かな勘気だった。ほんの一瞬。みほの内側から噴き出したなにかは、それだけで麻子を屈してしまった。

「みほ、危ないよ……って、あれ？ 麻子じゃん」

突然外に飛び出して戻ってこない車長を心配した沙織が、戦車の横扉から顔を出した。

蹲うずくまった麻子に集中されていたみほの視線がそちらに外れた。

「沙織っ」

麻子は立ち上がって、そちらに駆け寄った。

正しく、幼馴染みが救世主に思えたのだ。彼女には、本当に救われっぱなしだった。

「どうしたの麻子、こんな所で……あーっ、また授業サボってたんでしょ！ ダメなんだよそんなんじゃない！」

「分かった。もうしない」

「……やけに素直じゃない。そんなに怖かったの？」

沙織は麻子が涙目になっている事に気が付いた。

「そんな事はない」

「でも涙が……まあいいや。ほら乗って、危ないから」

「いや、しかし」

「意地張ってないで——きやっ!?!」

至近弾が着弾した。小石や土が頭から勢い良く降り注ぐ。

まだまだ相手との距離は遠く、此方の状況がよく見えていないのだ

ろう。

「もーやだ！ 麻子、早くしてよお!!」

沙織が麻子の手を引きながら絶叫する。

それでも麻子は迷っていた。取り乱す沙織と、至近弾にも平然としているみほを見比べて困惑する。

みほは、戦車に登りながら麻子にだけ聞こえる声で囁いた。

「冷泉麻子さん、選ぶのはあなたです」

最早、麻子の言う不気味さを隠そうともしていない。

「今朝、言いましたね。『自分で歩ける』と。ならば、選んで下さい。乗るも乗らないも、あなたの自由」

「う……」

麻子は呻く。

身体が冷えきっている。沙織の手の暖かさだけが伝わってくる様だ。

「迷い無く、躊躇い無く、他ならぬ自分の足で前進して下さい」

目の前の恐怖から逃れる事と、手を繋いだ安らぎの中に飛び込む事

——麻子は選択を迫られた。

気持ちが悪い。足がおぼつかず、視界が歪む。

思い出すのは、辛かった事と楽しかった事。この板挟みになった時、私は一体どうしてきただろう。

辛かった時、苦しかった時、何時も自分だけではどうにもできなかった。助けてくれたのは、一人の幼馴染み。

今もこうして手を繋いでくれている、大切な人。

「沙織……」

そうだ、今までもこうして助けられてきたんじゃないか。それで間違いないんだ。

今度も、それで正しいに違いない……！

「乗る」

麻子は応えた。

問題を天秤に掛けて、重きであったのは大切な幼馴染みであることに確信を持ったからだだった。

「それで良いんですね」

「ああ、良い」

確認を行うみほに、直ぐに返す。

その目に迷いが無いことを見ると、みほは「乗って下さい」と愉快そうに言った。

「乗るなら最初から早くしてよう……っ」

嘆く沙織に抱き抱えられるようにして搭乗する麻子の顔は安堵に満ちていた。経験上、最も正しい判断を下した事に自信があったからだ。

しかし、理性が伴わない確信を抱いたことが、生まれて初めてであることには気付いていなかった。

## 鬼神西住と親衛隊長2

黒森峰女学園戦車道部においては、学年ごとに与えられる仕事が多くなる。

特に一年生は物資の運搬、装備の手入れ、戦車のメンテナンスなど、雑務が多い。また、訓練の内容についても、戦車に乗れる機会は比較的少なく、基礎練習がほとんどだ。

なにせ大所帯である。戦車の数にも限りがあるし、訓練を積んだ上級生が優先的に搭乗訓練を行うのも道理である。

毎日毎日大量の砲弾を磨いて運び、その後で倒れるまで走らされる過酷な訓練は、根性と忍耐を鍛え、また、それに耐えられない人間をふるい落とす狙いもあった。

このように、一年生はある意味の洗礼を受ける訳だが、決して上級生からぞんざいに扱われたり軽んじられたりすることは無かった。

上級生の誰もが、この洗礼を乗り越えてきていたし、裏方の地味な仕事全てを支えているという事実が身に染みているからである。

厳しくも誠実な上級生の元であるから、一年生はそれに憧れ、不満も無く粛々と任務に励むことができる。

厳しい戒律、そして互いの尊重と尊敬があるからこそ、黒森峰の固い上下関係は成り立っているのだ。

未だ一年生であった西住みほも、その組織構造に文句など無かった。

むしろ、彼女の望むべくものであった。

入学後直ぐにレギュラー入りし、なおかつ副隊長に叙任されたみほは、確かに妬みの対象であったが、実力はずば抜けており、一年生が受け持つ仕事も謙虚にこなしていた。

故に、その妬みは悪い方向にはゆかず、良い意味で競争意識の引き金となった。

『西住みほ親衛隊』が創設された後にも、この流れが大きく変えられることは無かった。親衛隊の目的の一つには、みほが指示を出すことで、件の雑務をより確実に円滑にすることも含まれていたのだった。



この時点で親衛隊は組織から完全に独立していた訳ではなく、むしろ綿密に関わり合って、相互に益を生み出す存在であった。これは喜ぶべきことであり、組織全体から承認を取り付けられるのは、実に自然な事であった。

これにより、みほは指揮系統の上位に入る事に成功したが、配下に雑務を押し付ける様な真似はせず、自ら率先して仕事を請け負った。それが、非難の封殺と、評判の向上に繋がることを知っていたからだった。

とある日、一年生は戦車の部品の運搬を任されていた。

戦車の部品というのは一つ一つが大きく重いため、女子がそれを運ぶのには苦勞する。勿論みほも参加しており、重い部品を軽々と持ち上げては次々に運んでいた。

みほが何個目かの部品を運び終えた、その時だった。

大きな部品を置こうと腰を下ろした、小柄な親衛隊員がバランスを崩し、傍らに居たみほに激突。そのまま、転倒に巻き込んだ。

コンクリートの床に落ちた鉄の塊は、派手な音を立てて周囲の部員たちに異常事態を知らせた。「何事か」と一番最初に飛んできたのは親衛隊長、逸見エリカだった。

「あっ……ああっ！」

転倒した小柄な隊員が、痛がるのも忘れて叫んだ。続いて周囲の部員たちも同じくどよめいた。

視線の先には、転倒に巻き込まれたみほ——その指先から滴る、鮮血があった。

転倒の際、部品の鋭利な一部がみほの人差し指と中指を薙いだのだ。裂傷は深く、今この時にも血が溢れ出し、コンクリートの床を染めていた。

「あなたッ!!」

凄まじい形相でエリカがいきり立ち、親愛なる副隊長を傷付けた犯人を打とうと、平手を振り上げた。傷付けてしまった当人も、それを甘んじて受け入れようと、ぎゅっと目をつぶる。

「待って」

エリカの手が振り下ろされる直前、懲罰はみほに静止された。

「止めないで下さい。コイツはあなたを傷付けました！」

「だからこそ、罰則は私が決める」

「しかし」

「私は、待てと言いました」

「……分かりました」

親衛隊長は主に実に忠実であった。渋々手を下ろすと、みほの半歩後ろに立って、床に蹲る犯人を、今にも噛み付きそうな敵意の眼差しで威嚇するに留まった。

みほは、滴る流血を改めてまじまじと見た。その様子は、まるで痛みを感じていない風だった。

口端を歪ませ、他人事の様に笑う。

「あはは。赤い」

みほは、切り裂かれた二本の指をゆつくりと口に運んだ。自らの血の味を確かめる様に、徐に、じつくりと、それを舐め取った。

静まり返った倉庫に、指を舐める艶かしい音だけが響いている。唾液と血液が混じった体液が、みほの唇を染めてゆくのを、隊員たちはただ眺めていた。

ごくり。その光景を目撃した誰かが無意識に唾を飲んだ時、みほの指は口から離れた。

その指を、未だ蹲っていた加害者に向けて差し出した。

「舐めて下さい」

僅かに上気した表情で、みほは命令を下した。

唾液に塗れた指の傷。その内側からは、激しく血が溢れ出し、滴り続けている。

それを差し出された加害者は、羞恥心に赤面し、命令に従うのを躊躇った。しかし、冷たいコンクリートに落ち続ける副隊長の血を見て、激しい罪悪感と——それよりも強い「何て勿体ない」という気持ち湧き上がってくる。

それら全ての感情が混じり合い、最後に残ったのは、主に対する無限の敬愛であった。

加害者は、固く掌を組んで、恐る恐る主の指に唇を付けた。流血が、口の中に注ぎ込まれる。

鉄の味。

けれどそれは、優しくて、濃厚な味。

唇を離す。その時には、一抹の名残惜しさがあつた。

「親衛隊、整列」

みほが鋭い声で号令を掛けた。

惚けていた親衛隊員たちは、はつとして、半ば反射的に隊列を組んだ。

「連帯責任です。一人づつ、この血を、私の血を舐めて傷を癒しなさい」

逆らう者は誰も居なかつた。

行儀良く並んだ隊員たちは、何かに突き動かされるようにしてみほの元に跪き、血のように紅潮した頬で、それを舐め取つた。

口付けだけをする者、舌で舐める者、大胆に指をしゃぶる者——忠義の尽くし方は、一人一人違ったものであつた。共通していたのは、その行為に誰も多大な時間を掛けた事、そして、終わらせる時には「惜しい」という表情をした事だつた。

「エリカ」

そして、最後に残つた一人をみほは呼んだ。

「さあ」と、みほは急かす。

「あ……みほ……」

導かれるまま、エリカは膝まづく。

全ての光景を目撃していたエリカは、正に、焦らしに焦らされていった。

心臓は信じられないほど早打ち、経験した事が無いほど気持ちの悪い汗をかいている。謎の陶酔感に頭はくらぐらし、頬が燃えそうに熱い。

差し出された親友の指から流れる血を見つめる。これを舐めたら、私はどうになつてしまうのではないだろうか。

自然と息が荒くなり、大きく口が開かれた。なかなか、決心がつか

ない。

その様子を見て、みほは加虐的に頬を歪ませると、だらしなく開かれたエリカの口に指を滑り込ませた。

「う……………っ!？」

唐突に口内に含まされた異物への嫌悪……………じんわりと広がる鉄の味……………信仰する親友の味……………。

「あう……………えうう……………」

思考をまとめきれなくなったエリカが苦しげに漏らすのが、嘔吐えずきであるのか、喘ぎであるのか、それはエリカ自身にも分からなかった。その訴えを気にもせず、みほの二本指は口内を蹂躪し尽くした。

歯茎をなぞり、歯の裏を撫で、舌を弄ぶ——エリカが涙目になろうとも容赦は無い。

みほは、面白味よりも快樂の方を強く感じ始めていた。もはや、この行為は責任の返済ではなく、単に欲求を満たすためだけの行為に他ならなかった。

血塗れた指は、欲望に従って更に奥へ。

「げ、え……………っ!」

指が喉の入り口まで達した時、エリカは大きく嘔吐いた。みほは、一層激しい快樂を感じて、その指をもつと奥へ——  
がりっ。

瞬間、エリカの牙がみほを襲った。それは周囲にも聞こえるほど強い反撃。みほは、笑顔を引き攣らせ、反射的に指を引き抜いた。

見れば、裂傷の以外の新たな傷——大きい歯型がくつきりと刻まれており、その傷からも、うっすらと血が滲み出していた。

みほは呆然として、新たに付けられた傷を眺めた。何が起こったのか、咄嗟に理解ができない。

エリカに目をやると、彼女は立ち上がり激しく咳き込みながら、しかし、真っ直ぐにこちらを睨んでいた。

『あまり調子に乗らないことね——』

その目は、はつきりと言っていた。

されるがまま蹂躪される事を、エリカは決して良しとはしなかった

のだ。全くの忠誠心による反撃——みほに刻んだ齒型は、その意思の表れであつた。

「あはっ」

みほは、途端に愉快になつた。

「あはははっ！ ははははははははははっ！」

エリカ、エリカ、エリカ！

こんなに愉快な事はそうはない。そうだとも、君はそういう女だ。その魂は決して屈しない。断じて私に従わない。

だから好きなのだ。だから私は君が好きだ！

響き渡るその笑声は、エリカの反撃に対する明確な返答であつた。

みほは涙を浮かべて笑い続ける。堪らなく嬉しいのだ。噛み付いてくれた事が、みほにとつて、何よりの幸福なのだ。

そして、みほが信ずる所の、この世で最も愉快な出来事であつたらだ。

「親衛隊よ！」

笑いを治めたみほは、傷ついた手を振り上げて、皆に向けて言った。

エリカを筆頭に、隊員たちは、傾注の姿勢を取つた。

「あなたたちは私の血を飲んだ。私に流れる、絶対的な私の証明を取り込んだ。これより私は、あなたたちの血となり肉となる。片時も離れる事は有り得ない。我々は、名実共に、血を分けた姉妹きょうだいとなつたのです。血盟。我々は血で結ばれた！」

振り上げた手を固く握り、それを自らの胸に押し当てた後、隊員へ向けて突き出した。

拳からは血が滲み出している。

隊員たちの注目は、血の滴る拳に集中した。今や、血の一滴は忠義の一滴であつた。

「親衛隊よ！ 血盟こそが汝の名誉！」

遂にみほは宣言する。

親衛隊の絶対訓義にして史上方針——それが今、樹立されたのだつた。

この場の誰もが信じていた。

栄光ある『血盟』が揺らぐなど万に一つもないという事を。  
副隊長の元、必ず勝利を収める事を。  
闘争の歓喜が、無限に継続する事を。  
実際にみほも信じていたのだ。  
永遠など、有り得ないというのに。

## 鬼神西住19

まだ戦車にも乗らない頃、みほと一緒によく悪さをした。仲良く二人揃って、物を壊したり、他所の子供と喧嘩をしたり、怪我をしたりさせたり、小さい命を祖末にしたりした。

平素ならば悪さの後は、忙しい母親に代わり、家政婦の菊代さんに怒られておしまいになる事がほとんどだったが、その時ばかりは運が悪かった。

その日、二人で一緒に屋敷の倉にこっそり忍び込み、先祖伝来の家宝を持ち出した。

ぶかぶかの甲冑（文化財）を着込み、初代様の西住戦車（文化財）に乗っかり、格好いい本物の刀や槍（文化財）を振り回して、夢中になつて遊んでいると、珍しく帰宅していた母親にうっかりそれを目撃された。

その時の母といったら、般若ですら裸足で逃げ出すような形相だった。

肝を潰した私たちは咄嗟に逃げようと試みたが、甲冑の重みで上手く走れず、敢なく御用となった。

装備を身ぐるみ剥がれた後、母の執務室（説教部屋と呼んでいた）に正座をさせられて、小一時間、普段見せないような凄まじい剣幕で叱られた。

話の内容はさっぱり覚えていないが、とても足が痛かったのは覚えている。早い話、まともに説教を聞いてはいなかったということだ。

その不真面目な態度で母は余計に腹を立てたらしい。拳骨をくらう事はなかったが、代わりに別のお仕置きをもらった。母は目を釣り上げて「そんなに倉に入りたいのなら、入らせてあげましょう」と言うのと、両手でそれぞれの首根っこを掴んで、宝物倉とはまた別の倉に引きずっていかれた。

日の当たらない場所にひっそりと佇むその倉は『誉れ倉』と呼ばれていた。内部には先祖が討ち取ったと伝わる髑髏しやわいこつぽが柵一面にずらりと並べなれており、呪詛の囁きが聞こえることがあるという噂も相

まっつて、普段は不気味られて誰も近付かない場所だった。

私もみほも、入らされるのは初めてだった。

妹などは、その倉に近付いただけで号泣して許しを乞うたが、泣きを入れるには少し遅い。二人揃って中に叩き込まれ、外から鍵を掛けられてしまった。

実際に閉じ込められてみると、光源は小さい窓から入る弱々しい陽光のみで薄暗く、そこにぼんやりと浮かび上がる無数の頭蓋骨は、仇かたきの子孫である私たちを、恨めしげに睨んでいる様に感じた。

この場所は、明らかに外界とは空気が違っていた。日照の問題だけでは説明できないほどの薄ら寒さと、取り憑いてくるような重く湿った気が、倉の中には充満していた。

「お、お、お、おねえちゃん……こ、こわいよ……こわいよ……つ」  
ぶるぶる震えて、小便を漏らしながらしがみついていた妹に、その時、私は全く注意が向いていなかった。

しんと静まり返っているはずの倉に、声が聞こえていた。

それは、無念の亡霊の仕業であつたのだろうか。

ぼそりぼそりと、無数の髑髏の一つ一つが、小さく低い声で私たちに姉妹に向けて何かを言っていた。詳しい内容は聞き取れない。しかし、それが怨念の類である事は直ぐに察せられた。

何故だか、私にはそれが分かつたのだ。

怯える妹に、脅かしてくる怨霊。

けれど、私が注意を払っていたのはそんなものではなかった。

「すごい……すごいぞっ！」

私は、興奮の極地に居た。

余りの恐怖で涙すら出ない妹の腕を振り払って、私は棚の一角に近寄った。ざっと見回してみた中で、一番大きいと思つた髑髏——私はそれを手に取つてまじまじと眺め、普段の様に色々いじつてみた。

当然ながら、私の頭よりも大きい。けれど、中身の詰まっていな首は意外と軽いのだなと思つて、鞠の様にぼんぼん投げてみたりした。

平手で叩たたいてみると、変な音がした。面白くなって、もう一度叩い



てみると、やつぱり変な音がした。私は、柵一面にずらりと並んで  
いる髑髏を改めて見た。

面白い悪戯を思いついた。

一旦、手に持っていたそれを柵に戻すと、手前側の柵の端まで寄っ  
ていって、一番目の髑髏の額を平手で叩いて音を出した。それを皮切  
りに、奥に向かって並べられた髑髏を順番に叩いて、ぽこんぽこんと  
次々に音を出した。

柵一列叩き終わると、私は拍手をして、大いに笑った。こんな滑稽  
な事はあるまい無いと思つた。

笑いながらみほを見ると「何をしているのか分からない」と言いた  
そうに、目を見開いていた。

私は妹に近寄つて、腰が抜けているらしい彼女に手を貸して立ち上  
がらせた。

「お姉ちゃん、怖くないの?」

小便漏らしをどうからかつてやろうと考えていると、みほが恐る恐  
る尋ねてきた。

「全然怖くない」

「どうして。私は凄く怖いよ。こんなに沢山のガイコツ……見たこと  
ないよ」

「そうなんだ!」

私は目を輝かせて、興奮気味にまくし立てた。

「こんなに沢山のガイコツ、首だよ、みほ! 私たちのご先祖様はこん  
なにも沢山の敵をやっつけてきたんだ。凄い事じゃないか。私たち  
はその人たちの子供の子供の子供の……いつくかは分からないけど、  
その人たちの子孫なんだ。強いぞ、カッコいい!」

「カッコいい?」

「そうだ、強くてカッコいい」

「私も、カッコいい?」

「私もみほも、お母様もだ。皆カッコいい」

「私たち強くてカッコいい!」

みほは喜んで、格好いいポーズ(自称)をした。妹は「強い」とか

「格好いい」とか言われるのが好きなのだった。

小便漏らしの癖に、と私はおかしくなって、また笑った。

「ほら、みほもやろう。こうだ」

手近な髑髏を叩いてみせると、みほも真似をして叩いた。やはり変な音がするので、二人してはしやいだ。

その途中で、少し心配そうにみほが言った。

「こんな事して、お化けとか出ないかな。私、それが怖いよ」

「大丈夫だ」

私は胸を叩いて請け合った。

「お母様が言っていた。ご先祖様たちの霊が、何時も私たちを守ってくれているって。だから安心だ。それにな、こいつらは既にご先祖様にやられて、この有様だ。もしも幽霊が出てきたって、私たちが負けっこない。そうだろう?」

「そっか……だったら平気だね!」

それから、いつも通りの馬鹿騒ぎだった。

目に映る髑髏全てを叩きまくる大演奏会。いくつか地面に落としってしまったが、割れなかったから問題無い。

いつの間にか、髑髏からの恨めしげな囁きは聞こえなくなっていた(理由は何となく分かった)。薄ら寒さや、重く湿った空気も、消え失せてしまっていた。

代わりに何処からか聞こえてきたのは、また別の人たちの声——笑い声だった。

『あは——ははは——あはは——ふふふ——』

誰とも分からなかったけれど、他人の笑顔というのは訳も無く自分を楽しくするものだ。

私は笑った。妹も、一緒に笑った。あちらもそれにつられて笑った。倉の中には、笑顔が溢れていた。

全く、本当に楽しいお仕置きだった。

一体どれくらい遊んでいただろうか。重い倉の扉が開かれたのは、日が傾き始めた頃だった。

入ってきた母の顔には「やりすぎてしまったかしら」というちよっ

とした罪悪感が映っていたが、私たちの姿を見て一変した。

その時、私たちは髑髏を叩いた時の微妙な音の違いを聞き分けて並べ直し、ドレミファソラシドの音階を作ろうと夢中になっていた。

試行錯誤の結果、地面やそこら中に髑髏が散乱しており、一見して地獄のような光景だったろう。

「あつ、お母さんだ。凄いなだよ、これね」

みほが嬉しそうに頭骨を抱えて駆け寄ると、母は「きゃ」と短い悲鳴を上げてみほの脳天に拳骨を食らわせた。

余りに突然で理不尽な暴力に、みほは暫し呆然とした後に声を上げて泣き出し、頭骨を放り出して私に抱きついた。

「え……あなたたち……何が……？」

何事が起っているのかと当惑している母に、私は説明した。

「お仕置を受けて、倉に閉じ込められていました」

「いえ、でも、これは……」

「大丈夫です。片付けます」

私は泣き喚く妹を宥めると、母の見ている前で散らかした者共を片付け始めた。私たちは普段から、遊んだ後は自分で片付けなさいと厳しく教えられていたのだった。

髑髏を全て棚に戻し終わると、自分の足で堂々と外に出た。母は始終を見守っていたが、怒っていないのか許すべきなのか、何とも微妙な顔をしていた。

やがて、疲れた様のため息をついて言った。

「本当に、あなた達を頼もしく思うわ」

皮肉混じりの言葉だったが、その時の私たちにとっては完全な褒め言葉だった。私は大きく胸を張り、妹も真似っこをして胸を張った。

何と言っても私たちは『西住』なのだ。

この程度の事ではへこたれない、鋼の意志を持ち合わせている。屋敷に帰る途中で、みほが私の手を握って（母は娘の手を握る事を必死の形相で拒んだので）話しかけた。

「お姉ちゃん。私ね、お姉ちゃんがお姉ちゃんであって良かったよ」

「なに、突然」

「ぎつきの事、私だけだったら怖くて我慢できなかつたもん。でもね、お姉ちゃんが凄いいから、私も凄くなれたの。一緒に居てくれて良かった。だから、私のお姉ちゃんがお姉ちゃん嬉しいうつ」

「良く分からないな」

私は苦笑した。

「でも、そうだな。二人一緒なら、私たちは強くなれる。その通りだ。私はお前の姉で、お前は私の妹……私もそれが嬉しいよ、みほ」

「本当に？」

「本当さ」

「じゃあ、約束っ」

「ほう、何を約束すれば良い」

「何時までも一緒に居ること！ 私は、もしもお姉ちゃんが困った時には助けてあげる。だから、私が怖がったり迷っている時には、今日みたいに引っ張って欲しいの」

みほは、約束げんまんの小指を立てた。私は迷わずそれに自分の小指を絡ませて、約束した。

「約束する。私はみほの前に立つ。困った時にはお前を頼り、お前が迷った時には案内しよう。私たちは、何時でも一緒だ」

指を離すと、みほは「わーい！」と叫びながら私や母の周りをぐるぐる走った。母はそれを叱ったが、みほは決して止まる事はなかった。

傾いた日に照らされて、長い影が妹に付いて回っていた。

——何処からか、笑い声が聞こえる。

まただ。私はきよろきよろ辺りを見回した。母でも、妹でも、私でもない。空から聞こえてくる様で、地面から聞こえてくる様でもある。

何かがあると必ず聞こえてくるこの笑声は、誰のものかも分からない。確かな事は、ずっと昔から私たちを見守っていてくれる人たちのもの……それだけだ。

そして、どんな時も側に居てくれるその人たちを、私は家族のように思っていた。

「ほら、みほ。笑われているよ。しゃんとしないよ」  
母の言う事を聞かないみほを、私からも嗜めた。確かにみほは立ち止まったが、不思議そうに首を傾げた。

「何言ってるのお姉ちゃん、そんなの聞こえないよ」  
陽光が、大地に佇む全ての者に長い影を落としていた。  
気が付けば、私にも。

◆ 幼少期、西住しほがお仕置きをされた時は、失禁だけでは済まなかった。

◆ 西住みほが去った後の黒森峰女学園戦車部は、危うく空中分解しかけたが、それは逸見エリカの働きによって防がれた。

戦車道部部长にして隊長、西住まほはこれに感激し、エリカを副隊長に叙任した。

全く、ここまでは順調であった。

まほは、みほが抜けた事をきっかけに組織改革を目論んでいた。  
妹が作り上げた鉄の結束は、過去には隊全体を静かに侵食しつつあったが、結束の要が消失したことにより崩壊した。逆にこれを利用し、副隊長に依存しない、新たな組織構造を形成しようとしたのだ。

しかし、この事件により組織構造上の欠陥——すなわち『西住みほ親衛隊』の台頭は、崩壊を以てして、更に顕著となってしまった。

事実上、隊長に服属しない独立勢力を率いているのは、他ならぬ黒森峰戦車道部復興の立役者——そして親衛隊長の逸見エリカだった。

彼女は戦車道部を一枚岩にしたいというまほの意見とは全く反対に、新たに獲得した副隊長の権限を存分に利用して、かなり露骨に親衛隊の独立気運を高める為の方策を打った（戦車実動訓練の優先権、独自に組まれた他校間試合、など）。

エリカは自らを称し、親衛隊長兼副隊長代行とした。

水面下で着実に勢力を伸ばしていったみほのやり口と比較して、エリカにはかなり強引な面があり、そのため、みほが副隊長として居た頃には有り得なかった、親衛隊員と非親衛隊員の軋轢が大きくなりつ

つあった。

まほにとつて、エリカの暴走は完全に予想外だった。

みほの元に就いていた頃の彼女は、まるで精密機械の様に正確で、命令に対し絶対的に忠実であった。独断専行など、万に一つにも有り得なかつたのだ。

今更になつて、この我の塊のような女を完璧に御していた妹の手腕に舌を巻くこととなつた。

ともかく、このままではいけない。

まほは強い危機感を覚えていた。このままでは空中分解どころか、味方同士相討つ事態になりかねないからだ。

隊員同士の軋轢は、既に口論などの形で現れ始めている。早く何とかしなければならぬ。

取り急ぎ、まほはエリカを隊長室に呼び出すと、自分勝手な言動について詰問をした。

「エリカ、最近のお前の言動は目に余る。副隊長としての自覚はあるのか」

「代行です、隊長」

努めて厳しい口調の詰問にも、エリカは豪然として応えた。まほは鼻白む。

「……では、代行。隊長として命ずる、親衛隊を即刻解散せよ。今の黒森峰には、毒にしかない」

「拒否します」

「命令だ」

「拒否します。親衛隊に関する命令権を、あなたは持つていません」「エリカ！」まほは声を荒らげた。「みほはもう居ないんだぞ！ 何時まであいつに縛られ続けるつもりだ」

エリカは真つ直ぐ己の隊長を見つめていた。その視線の中に、畏れといった情動は僅かにも含まれてはいない。

彼女が畏れるのは、この世に一人だけだった。

『血盟こそ我が名誉』!!」

副隊長代行は固い意思でもつて断じた。その迫力に隊長は怯む。

エリカの何処までも真っ直ぐで、狂気と言えるほど固い自我の込められた瞳を向けられるのが、まほには苦しかった。それは、長く迷いを取り除けない自分と比較してしまうからだ。

「それが親衛隊の絶対訓義であり、至上方針です。我々に号令をかけられるのは唯一人。そして、あなたはその人では断じてありません」話は終了したという風に「失礼致します」とエリカは一方的に敬礼をした。その手首に銀の腕輪ワレスレットが閃く。

腕輪には『血盟Meine Ehre heißt Keianこそ我が名誉』と刻まれており、それこそが名誉ある親衛隊員の証であった。親衛隊員が皆身につけているもので、まほはそれを見かける度に嫌な気分になった。

そんな事情を気にもせず、親衛隊長は身を翻し、速やかに退出しようとしてドアノブに手を掛けた。その背中に、絶句していたまほが、苦しげに問うた。

「一体、何がお前にそこまでさせるんだ。その固い忠誠は誰に尽くしている。お前は賢い、あいつの正体にはとっくに気が付いていただろう。それなのに、何故……」

エリカの手は、ドアノブに掛かったまま止まった。

「私には分からない……随分前から、分からないんだ。あれが恐ろしくないのか。全てを知っていて、なお頑なに忠を尽くし続ける理由は何だ。教えてくれ、エリカ……」

今にも消え入りそうな声だった。妹が宿す底のない闇——それを知っていて肯定するエリカの精神がどうしても理解できなかったのだ。

「そうやって逃げてきたんですか」

エリカは、背を向けたまま、己の隊長の顔を見なかった。

「そうやって目をそらして、あの娘から逃げ続けてきたのですか。一度だって正面から向き合おうとせずに、最後には追い出した。私にとっては、その卑怯な心の方が理解できません。あなたたちは、本当に、どうして……」

まほは、エリカの強い声に徐々に震えが混じってゆくことに気が付いた。

「家族でしょう、血の繋がったかけがえの無い人でしょう？　なのに、どうして憎むだなんて事ができるのです。家族が寄り添ってあげないで、誰が支えてあげるんです。誰があんな娘を認めてあげられるのですか。あんな娘は……みほは、あんなにも真っ直ぐだったのに」

声の震えを無理やり抑えて、続ける。

「私はあの娘を守れなかった。手を差し伸べる事すら叶わなかった。あの時は、そのための力が無かったからです。滑稽でしょう？　主を守れない親衛隊だなんて。情けなくて、恥ずかしくて、死んでしまひそうですよ」

最も副隊長を慕い、事件に対し最もシヨックを受けていたのは間違はなくエリカだった。数日間、学校にも来れず、戦車道部にも現れなかった。誰もが、まほさえも、折れてしまったのだと確信していた。けれど這い上がった。

そんな彼女の言葉だったから、部を離れようとしていた隊員たちは耳を傾け、そして留まったのだ。

立ち直れない程の衝撃を受けて心が砕かれても、苦しみに胸を切り裂かれると知っていても、なお立ち上がる不屈の精神——エリカは間違ひなく、みほに相応しい親友であったのだ。

「だったら私は強くなる！　大切なものを守るだけの力を手にし、次こそは何も取りこぼさないように。それがせめてもあんな娘に報いる事であり、誰の為でもない私の信念だからです。私は逃げない——あなたのように」

そう言ったのを最後に、ドアは二人の間を隔絶した。遂にエリカは、まほの事を見ようとはしなかった。

この会話が、親衛隊の問題について、何が決定的になってしまった予感があった。それだけが、何もかも異なる二人に共通の想いであった。

遠ざかるエリカの長靴ブーツの音が聞こえなくなるまで、まほは安心してた。やがて静寂が訪れると、頭を抱え呻き、それすら過ぎると、手足を投げ出し薄ら笑いを浮かべた。

完全に打ち負かされた。反論するだけの意志も材料も、まほには備



わっていないかった。

エリカはこれを契機に、更なる暴走を続けるだろう。

隊を統率する事さえも叶わない隊長は、きつと遠からず誰からも失望され、やがては捨てられる。少なくとも、明確な強い信念を持つている者に付いてゆく方が、遥かに頼もしいからだ。

右も左も敵だらけ。味方は誰もいない。もはや笑うしかない。

「嗚呼、羨ましい」

そんな中、最初に浮かんだのは、妹への羨望だった。

逸見エリカという無二の理解者を得た事への羨み——そして、自分には居ないという絶望。

もしやエリカであれば……と淡い希望は消え去った。

しかし、考えてみれば当たり前か。

自分自身を嫌う人間が、好意を寄せられる訳が無いのだ。

手足を投げ出したまま、机に突つ伏した。何も考えたく無い、未来を思うのが辛い。

それでも考えなければならぬ。

配下の暴走、隊の不仲、くすぶ燻る元副隊長への未練、家名の重圧——が  
んじ絡めで身動き一つ取れない思いだ。

どうしよう。

我ながら余りにも情けない事態だった。

頭は真っ白で、もう泣きそうだ。

まほは、涙がこぼれないように目を閉じて、思案の全てを心の動きに丸投げした。

とにかく、逸見エリカ。彼女が目下の問題だ。説得は失敗した。更に勝手をやる事はほぼ確実だ。今後何をするにも立ちほだかるだろう。

エリカが有能であるのは全く疑いが無い。何かを企んだとして、それを実行し、成功させるための才覚が備わっている。

もしや、妹の名前を笠に着て勢力を拡大し、反逆を起こす事もあるかもしれない。

つまり『敵』になったという事か。

逸見エリカは敵であることが確定した。以後はそれを念頭に置いて物事を思案すべきだ。逃げるという選択肢は、元から存在しない。やり直すチャンスはくれてやった。しかし拒絶された。だったら私がすべきことは。

「殺してしまおうか」

——言葉は、余りにも自然に零れ落ちた。

だから、自分が何を言ったのか、まほはしばらく気が付かなかった。やがて、ぼんやり意味に気が付くと、まほは目を見開いた。

「え……………」

今、私は何を言った？

「う……………あ……………あああああつ」

まほは、椅子から跳ね上がった。既に発せられてしまった言葉を取り消す想いで、両手で口を塞ぐ。

しかし、取り消せる訳がない。

直後襲ってきたのは、猛烈な嘔気。口を塞いだ両手は、そのまま、口内にまで上ってきた吐瀉物を防ぐための役割を果たした。

何とかそれを飲み込むと、今度は鳥肌と冷たい汗が吹き出た。

何を言った、何を言ってしまった？

がたがたと震えが止まらず、歯を噛み合わせる事ができない。足に力が入らず、腰が抜けた様に再び椅子に腰掛けた。

耐え難い静寂。

荒い呼吸と、心臓の音だけが大きく響いている。

何という事だ。

私は息をしながら、心臓が血を送り出している！

そのことが、この世の何よりも恐ろしい。

『あは——ははは——あはは——ふふふ——』

誰かが笑っている。静寂の中に、私を嘲笑う声が聞こえ出した。

まただ。またあいつらだ。

強く耳を塞ぐ。

嘲笑は益々大きくなる。私を指さして笑っている。

「黙れ、黙れ……っ」

まほは力無く叫ぶ。

嘲りは止まず、頭の中になお響く。

一度覗かれてしまったては、それが返ってゆくまでに、相当の時間を要する事を、まほは経験上知っていた。

まほは心に強く念じる。

人には優しくしなければならぬ。他人の意思は尊重しなくてはならない。自らの目的のために犠牲にする事などあつてはならない。だからそんな事を考えてはいけぬし、思つてもいけぬのだ。

「——本当にそう思うのか、君」

すぐ耳元で囁くような女の声があった。

びしやり。濡れた音を立てて、何か肩に落ちてきた。恐々と目だけをそちらに向けてると、血濡れの掌が両肩に置かれており、そこからどす黒い血が滝のように伝っていた。

背後に、誰かが居る。

「ひっ」と喉が鳴ったとき、まほの肺は空気を受け入れるのを拒否した。体感温度は一挙に氷点下まで下がる。

女は、囁き続ける。

「君。私の愛しい君。違うだろう。本当はそうじゃないだろう。嘘は、いけないな」

「嘘、なんて、ついていない」

「いいや、嘘だ。君は本心ではそう思っていないんだ。私には分かる」  
「黙れ。あなたに私の何が分かる」

「分かるさ。だって君の八分の一は私なんだから……いや、これは案外少ないかな？」

その女は、くすくすと不気味に——そして耐え難いほど魅惑的に笑った。

「人に優しくか。自ずから正しくあらうとするとは、立派な考えだ」

「そうだ。私は正しくあらねばならない。人間として、主将として、西住の後継者として、間違つてはならないんだ」

「けれど、私が悪だと言うならば、嘘つきだつて悪だろう。正直者であれよ。自分を欺くということは、この世で最も低俗な所業だと思わないかい」

「断じて、自分に嘘などついていない」

「妹が羨ましくはないか」

「……なに？」

女は、まほの声色が変わった事を聞き逃さなかった。

微笑んだ女は、甘美に囁き続ける。

「あの娘が羨ましくはないのか。自由で正直で、生きる事を存分に謳歌している妹を、羨望した事は？」

「そんな、事は」

「無いと言い切れるのか、本当に？」

まほは言葉を継ぐ事ができなくなった。自分を信じるための現実が、絶対的に欠如していた。

正義とは、悪とは？ 今になって、分からなくなってしまった。

肩に置かれていた女の腕が、そつとまほの胸に回った。そうして抱かれる温かさが、心理的なものなのか、物理的なものなのか、判断が不可能になっていた。

その腕からは、濃厚な血の香りがした。けれど何故だか、ずっと昔から覚えがあつて、心の底から安らげる香りだった。

「嗚呼……なんて可哀想な君。ずっと我慢してきたんだね。色々なものに縛られて、自分を抑圧してきたんだね。誰にも理解されず、救ってもらえないのは苦しかったでしょう。でも、もう我慢しなくて良いんだよ。こつちへおいで……こちらはとても楽しいよ。私たちなら、あなたを分かちあげられるから——」

「う……う……う……」

まほは、ぼろぼろ涙を流した。堪えていた全ての感情が、決壊したのだった。

例えどれほど恐ろしい相手でも、こんなに優しい言葉を掛けられたのは生まれて初めてだった。母親にだって、こんなに優しくされた事はない。

そう、お母さんにだって。

『どうして分かってくれないの……どうして助けてくれないの……お母さん……!』

何度思った事だろう。

私は、何時だってお母さんに助けて欲しかったのに、あの人は分かるうともしてくれなかった。

それを、この人は分かってくれる。

私は、独りではなかったのだ。

「愛しい君。ほら、こつちを見て頂戴——」

女の手が、まほの顎を優しく掴んだ。

まほは抵抗もせず、背後を振り向こうとした。

扉が勢い良く開いた。

三人程の隊員が、銀のブレスレットを閃かせて乱暴に踏み込んでくる。見覚えのある、親衛隊員だった。

一人が椅子に座っているまほを発見すると、不愉快そうに言った。

「いらっしやるなら、返事をして下さいよ」

まほは、呆然と口を開けた。

背後を振り返って見ると、そこには無機質な壁があるだけで誰も居なかった。肩にも、血痕など残っていない。

最初から、そこには誰も居るはずがなかった。

途端に、血の気が引いた。

私は何を見ようとしていたのか。誰に話しかけられていたのか。何処に連れて行かれようとしていたのか。

私は、何に成ろうとしていた？

今度こそ本当に腰が抜けた。腰どころか、全身に力が入らなくなつた。

顔面蒼白になった隊長の様子を見て、親衛隊員たちは誤解をした。「親衛隊の迅速な行動に、西住隊長は度肝を抜かした」と思ったのだ。先程と同じ隊員が、したり顔で咳払いをすると、改めて言った。

「お察しの通りです。代行の命により、あなたを一時拘束します。ご了承ください……お連れしろ」

それだけ言うと、他の二人が速やかにまほの両腕を拘束した。それは反抗を防ぐ目的での行いだっただが、まほは自力での歩行すら困難だったため、両側から肩を貸す形になった。

そういう形で隊長室から運び出され、長い廊下を引きずられるまほは「ありがとう、お前たち、本当にありがとう」と、うわ言の様に繰り返していた。

もちろん、三人の親衛隊員にとっては意味不明だった。

後日、黒森峰女学園戦車道部にて逸見エリカは『親衛隊長兼副隊長代行兼部隊長代行』に就任した。

## 鬼神西住20

広大な雑木林を見渡す事の出来る監視塔の屋上、蝶野亜美一等陸尉は双眼鏡で各車両の動向を観察していた。

特に気になるAチームは、練習試合の開始当初から逃げ回ってばかりいる。例え西住師範の娘といえど、他全チームから総叩きを受ければ、選択肢は無いらしい。

直撃を食らわないよう必死に蛇行しながら逃げる様子は、如何にも頼りなく見えた。

「やっぱり、意地悪だったかしら」

ちくりと胸が痛み、亜美は双眼鏡から目を離した。西住みほ指揮のIV号戦車を囲うような初期配置を指定し、この展開を誘導したのは紛れもなく亜美自身である。公明正大を旨とする亜美にとって、実に不本意であり、また不相応な行いだった。

自分が情けなく思えてきたところを、頭を振って否定する。これは、決して自分の意志からの行いではない。

命令なのだ。

戦車道連盟最高幹部役員、松尾スミ老女史の厳命。西住みほの指導に当たれば、特に厳しく指導せよ。これを全うせねば、身の振り方を考える事となる——そう命じられた時の、苛烈な眼差しを思い出すだけで、冷たい汗が吹き出した。

額の冷や汗を拭い、亜美は再び双眼鏡を覗き込んだ。

逃げ惑うAチームはもちろん、他チームも必死で試合に臨んでいるのが動きで分かる。どんな思惑があれ、試合に全力で取り組む少女の健気な姿に、やはり罪悪感を覚える一方で、懐古の念が滲み出す。

あの頃は、私もああだった。純粹で真っ直ぐな戦車乗りの少女——けれど、今や少女を虐める側か。

「大人って……辛いわね……」

切なげに、ぽつりと呟いた。

◆ 亜美は命令の真意を何一つ理解してはいなかった。

道中で冷泉麻子を拾ったI V号戦車の状況は、依然として変わらず、敵から逃げ回るばかりである。

III号突撃砲の攻撃は断続的に続き、ほとんどが大きく外れるものの、時には至近に着弾する事もあった。腹の底を震わす様な轟音。特殊カーボン装甲により、危険は無いと分かっているにも、Aチームの面々は着弾の度に首を竦めた。かなり際どい窮地に立たされている事が、初心者目にもはっきり分かる。

不安になつて、頼るべき車長に目をやる。ほんの少しでも、安心材料が欲しかったのだ。

だが、その期待は、そもそも的外れだった。

彼女らの車長は、あろう事か上半身を戦車の上に露出させてはしゃいでいた。

「いいぞ。もっと撃て」

これは一体、なんて有様だ？

黒衣の少女が満面の笑みで、無邪気な子供の如くぱちぱちと両手を叩き、忙しなく足踏みをする様は、明らかに常識の範疇を飛び越していた。

何度か「危ない」と注意したものの「それじゃあ面白くない」取り付く島もない返答だった。

まるで娯楽だ。彼女にとって、敵の砲撃すらも楽しみの材料なのか。

きつと異常な行為なのだろう。何となく頭は回るのだ。しかし、みほの余りに堂々とした喜び様は、戦闘という非日常、一種の思考停止状態において、理屈を飛ばして伝染した。

萎縮していたチームの面々は、自然と頬を緩ませ、肩の力を抜いた。この状況に不釣り合いな車長の有様が、無性に面白味を帯びている様に思えたからだった。

怖がる我々を余所に、一番えらい人は狂喜している——これがジョークでなくてなんなのか！

笑顔というのは、不安や恐怖を麻痺させるための本能だ。どんなに怖くとも、ともかく笑ってしまえば、実はその通りなのではないか、と



いう気になってしまう。

そして、実際にその通りになつてしまった。彼女らは、現状について、一つ重大な誤解をしていた事に気が付いた。

恐怖や不安を無くすのではない、そもそも楽しむべき場面なんだ！  
今やAチームの面々は、引き起される何もかもが面白く見え始めていた。そうなつてしまえば、みほの言動も異常にはなり得ない。

ならばきつと、それが普通だ。

その認識こそ、西住みほの『仲間』足りうる第一歩なのだ。

「停止して下さい」

「はい……」

逃げ回って辿り着いた、橋の前に差し掛かった時、みほは足で指示を出した。靴で背中を優しくなぞられた華は、身震いして、ブレーキペダルを踏んだ。華の頬は紅潮している。

「沙織さん、チャフスモーク展開。しばらくの間、敵の視界を塞ぎます」

「りようかいっ」

上半身を乗り出して、遠くの背後を気にしたまま、みほは続けて指示を出す。装填手として暇をしていた沙織は、嬉々として従った。

車体後方に備え付けられた発煙機から、直ぐ様煙幕が展開されたことを確認してから、みほは一旦座席に戻った。

「橋を渡る前に、役割の再編成を行います。華さんは砲撃手、沙織さんは通信手、優花里さんは装填手へ」

突然の命令に皆は驚いたが、文句は言わなかった。みほが言うのなら、きつと間違いはないのだろうと思つたからだ。

「あれ、では操縦手は誰に？」

速やかに交代せんと、座席から腰を上げた優花里が疑問を呈すと、華と沙織もそれに頷いた。みほは、にこりとして言う。

「冷泉麻子さん。操縦手はあなたに」

「……なに？」

拾われてからというものの、沙織の隣で、我関せずという風に無表情を貫いていた麻子が初めての反応を示した。流石に聞き流す事の出

来ない内容だった。

「どうしてそうなる」

「それが良いと私が判断したからです」

「やらないぞ」

「やってもらいます」

「お前がやれば良い」

「操縦は苦手です」

「そもそもやり方が分からない」

「はい、どうぞ」

みほは、冊子を差し出した。『I V号戦車運転マニュアル』表紙にはそうあった。それなりの厚みがあって、読み解くには時間がかかりそうだとということが、傍目にも分かる。

「今、ここで、覚えて下さい」

「無茶を言うな。普通の人間にそんな芸当が出来るかつ」

「でも、出来るでしょう。あなたなら」

みほは、さも当然の様に言った。

麻子は言葉に詰まる——コイツは、一体、私の事を何処まで知っているのだ？

「……出来る出来ないの話じゃない。やりたくないと言っている」

麻子は、質問に対して明言をせず、意図的に論点をずらした。

問題を複雑化し、曖昧に誤魔化すためには、感情を絡めてしまうのが一番であると麻子は知っていた。特に、女子にとっては。

しかし、理性と感情とが完全に分離されている相手にとっては、至極無意味なあがきだった。

「私は『選べ』と言いました」

マニュアルを差し出したまま、みほは目を少し細めた。眼力の鋭さが数段増した気がした。

底冷えするような想いが胸に蘇える。麻子は視線を逸らそうとして、失敗した。みほの瞳には、何故だか人を釘付けにしてしまう力があつた。

「確かに言ったはずです。私は提案をして、あなたが選択をした。誰

に強制された訳でもない。戦車に入る事を、自分で選んだんです。それは、参加するという決断である事に他ならないし、私もそれ以外を認めません」

「それは」

戦車の中に居て、最もできる人材に仕事を割り当てる——みほは車長として、至極全うな事を求めていた。既に新たな位置に就いた皆もそれに同調する。その中の沙織の存在が、特に麻子には効いた。

みほの追求に直面するに至り、麻子は慌てて過去の自分の言動を想起する。

自分で選んでしまった。そうか、あの時。考え無しに、ただ感情任せに、何時もならば絶対にしないような選択をしてしまった。否、最も愚かな選択をさせられたのか。私がここにいる時点で、目論見は終了していたのだ。

今や、みほは車長としての立場から、正論を言うだけで良い。その言葉はどこまでも正しい。撃ち崩す事など、できやしない。

やられた——その事に、今気が付いた。

「私の最も嫌いな事の一つは、嘘を吐く事です。他人を陥れる嘘ではありません。自分に吐く嘘——紛れもない自分の決断を反故にして、己自身を裏切る事です。それは卑怯、卑劣な行為であると思つています」

「綺麗事だ」

「そうですね」

「だが、ああ、言う通りだ」

麻子は潔く観念した。往生際が良くないのは、見苦しい。

それはある意味の諦観。しかし、それは麻子の聡明な思考を再び循環させるための引き金となった。みほに拘束されていた心が緩み、狭まっていた視野が広がりを見せた。

麻子は横目に、隣でおろおろしている沙織を認めた。どんな時でも他人の事を心配する馬鹿で、善良なる幼馴染だ。

自分の落ち度はどうでもいい。全て己に跳ね返ってくるだけだし——しかし、この女は、たかが私を陥れるために、大切な幼馴染をだし

に使ったのか。

気が付いた途端、麻子はみほに対し、恐れ以外の感情が沸き上がってくるのを感じた。

怒り。

恐怖を吹き飛ばす程の怒りが、麻子の胸を満たした。何もかも呑み込んでしまいそうなみほの瞳を、真っ向から睨み返す。

珍しい事だ。他人のために憤るなど、自分にもできるんだな——激情を抱いていても、麻子の頭の片隅には、冷静な部分があった。

感情と理性の分離は、何もみほだけの特権ではなかった。

「よーせ」

麻子は、みほの黒い手からマニュアルを引つたくと、空いた操縦席に飛び乗った。手にした冊子を凄まじい勢いでぱらぱらと捲つたと思えば、一瞬で裏表紙まで達してしまった。

背を向けたまま、読み終えたものを肩越しに勢い良く投げ返す。顔に飛んできた冊子を、みほは特に驚いた様子もなくキャッチした。

「覚えた」

操縦桿を握りながらの宣言に、沙織たちは度肝を抜かれた。

「今あ!？」

「流石学年主席!」

麻子の頭脳は、何時にも増して冴えに冴え渡っていた。理由は簡単だ。やる気の違いである。

騒ぐ連中を意に介さず、麻子はまた、はっきりした声で言う。

「今回だけだ。西住さん、今回だけは協力してやる。私が、自分で決めた事だからな。責任は負うとも」

麻子の心理に呼応する様に、エンジンが唸りを上げる。

みほは、よほど嬉しそうに頷いた。

「任せます」

「腰を抜かすなよ」

「させてみては?」

「ぬかせ」

アクセルペダルが一気に最奥まで踏み抜かれ、全員に激しい加速度

が襲った。

同時、展開されていたチャフスモークが霧散する。晴れた煙の後ろには、更に数台の戦車が追いつがって来ているのが確認できた。

◆ Aチームの渡河先にまで、わざわざ回り込みに来た38tのEチーム（生徒会チーム）は、完全に調子に乗っていた。

特に、Aチーム包囲作戦の発案者にして砲手を務める河嶋桃は、周囲が呆れるくらい興奮していた。

あの西住みほに面食らわせてやるという意気込みがあつたし、さしもの彼女でも全車両相手に勝つのは難しいだろうという楽観もあつた。

「はっはっはー！　ここがお前らの死に場所だっ！」

興奮で赤くなった桃の威嚇（？）と共に、雑木林を抜けた38tは、ようやく橋の全体が見通せる場所まで辿り着いた——と同時に、今度は桃の顔が真っ青になった。

「うわっ！　うわわわわあっ!!」

桃がスコップ越しに目にしたのは、猛烈な勢いで橋を突っ切り、真正面から突進してくるIV号戦車だった。不安定な吊り橋をものともせず、出力全開だ。

慣れていない者、それと小心者にとって、巨大な鉄の塊が迫ってくるのは恐怖でしかない。

桃は防衛本能から、反射的に引き金を引いた。しかし、心技体のいずれも揃わぬ砲撃だ。当たる道理がない。

大きく外れた砲弾は、IV号を止められない。いや、もし当たったとしても止まらなかつたかもしれない。

そう思わせる程の突進の勢いそのままに、IV号は、ほぼ零距离から38tを砲撃した。鉄同士が衝突する高い音が鳴り響き、吹き飛んだ38tから白旗が上がる。

IV号は速度を緩めず、敵車体の右横すれすれを走り抜ける。次なる目標は直ぐそこに居た。

「何だかヤバアいつ！」

「えっ、なにになに?」

「何が起こってるの!?!」

「わかんない」

この時、Eチームの直ぐ後ろには、Dチーム（一年生チーム）のM3リーが付いて来ていたのだ。

取り敢えず先輩の後ろに付いていれば安全だろうとタカを括っていた一年生たちは、突如として撃ち破られた状況に対応できず、一斉に甲高い悲鳴を上げた。

再装填と僅かな砲塔角度の調整を済ませたIV号は、容赦なくこれを砲撃。搭乗人数が多いM3の内部はめっちゃめっちゃにされ、戦車は素直に降参の白旗を掲げた。

なおも速度を落とさないIV号は、煙を上げるM3の後方をドリフト気味に旋回、瞬時にして背後の吊り橋へと砲口を向けた。

おっかなびっくり橋を渡りながら、一部始終を目撃していたIII突は、追い回していた筈の獲物がいきなり凶悪になった事に咄嗟の理解が追い付かない。それ程、IV号の変化は顕著であった。

「撃てーッ!」

「駄目だ、外したっ」

「次弾装て……ああ、!」

装填手のカエサル（本名、鈴木貴子）は慣れない装填作業に焦りが加わり、砲弾を取り落とした。不幸な事に、落とした砲弾は足の甲を直撃した。

IV号はこの隙を見逃さない。

砲塔を回転させるより早く、キャタビラ足で横角度の微調整を終えてしまうと、間髪入れず砲撃。

III号突撃砲は、哀れ吊り橋の中央で沈黙した。

これに困ったのは、III突の背後に付いて橋を渡っていた八九式中戦車である。

前に進もうにもIII突が邪魔で進めない、後ろに進もうにも不安定な吊り橋の上でバックできる程の技術が無い——完全に立ち往生を食ってしまったのだ。

「前にも後ろにも進めませんキャプテン！」

「皿突が邪魔で狙いがつけられませんキャプテン！」

「根性で何とかするんだアー！」

根性ではどうにもならない状況も世の中にはある。

進退窮まった八九式は、その場でもがいた。まずい状況から必死に抜け出そうと、慣れないハンドル捌きで、落ち着きなく前後左右の運動を繰り返したのだ。

その行動が仇となった。

ただでさえ不安定な吊り橋に、戦車二両も乗っているのだ。その上で暴れたりすれば、どうなるか。

「おい、やめろっ。こっちは動けないんだぞ。無理に動くな……うおっ！」

「根じよ……うわわっ！」

その時、もがいていた八九式は皿突に追突した。自走能力を持たない皿突は、最早ただの重りだ。与えられた外力に従い、停止位置がずれる。

結果は必然的だった。道の片方に重心が寄り過ぎたのだ。

吊り橋は、重量が掛けられた側へ、一挙に傾いた。二両の戦車は、傾いた方向へ滑り寄せられる。

いくら側面に転落防止の鉄線が張られているとはいえ、崖下へ転落するのは時間の問題に思われた。

「危ないー！」

誰かが叫び、悲鳴を上げた。

いや、誰もが同じ感想を持ったに違いない。

少なくとも、彼女以外は。

「撃て」

普段通りの声調で、みほは命じた。

命令に従い、側面からの照準を完了させていたⅠⅤ号は八九式を狙撃した。

急所を確実に抜かれた八九式は、側面から弾かれた。皿突とは逆側へ弾け跳んだため、左右の釣り合いが保たれ、吊り橋は正常位置へ落

ち着いた。

崖下への転落は、防がれたのだ。

煙と白旗を上げた八九式から、車長の磯辺典子がきよとんとした顔を出した。

「有効！・ Aチームの勝利！」

教官によつて、試合終了の号令が高らかに宣言された。

全車両殲滅。

それが、Aチーム初の戦果となった。



## 鬼神西住21

校内練習試合の後始末を全て終えた大洗の女子たちは、一日の疲れを癒すため、大浴場へと訪れていた。

生徒会の特権により貸切となった大浴場は、多少年季の入っているものの、戦車道履修者のみにとっては十分広い。粋な計らいに喜びつつ、少女たちは自然とチーム毎に集まり、今日の試合を振り返りながら、のびのびと入浴を楽しんでいた。

浴槽の真ん中辺りで元気にしている一年生とは違い、みほたちは縁に寄りかかり、ゆったり湯を満喫しながら会話に花を咲かせていた。

内容は、やはり今日の試合の事である。

「蝶野教官、褒めていましたね。特にAチームは大活躍だった！」

興奮覚めやらぬ様子の優花里が、大袈裟に手を広げて言った。沙織や華は嬉しげに頷き、みほは目を閉じたまま薄く笑う。

敵チーム全てに半包围されてからの完全殲滅という華々しい初戦果は、大いに教官の関心を集めたのだった。明らかに試合の流れを仕組んだであろう亜美は「グツジョブベリーナイス！」とIV号の乗組員を讃える言葉を惜しまなかった。

特に吊り橋での攻防は、その対象になった。

「最後の五十鈴殿の砲撃は、実に見事でありました。あの逼迫した状況で、あんなに正確で冷静に引き金を引けるだなんて。これが初めてだなんて信じられないですう！」

「ありがとうございます」

華は少し照れて、頬に手を当てた。

「けれど、あれは私の功績だなんて、あつてないようなものです」

「と、言いますと？」

「みほさんが角度単位で逐一指示を出してくれていましたし、何より……」

華の言葉は、少し離れた位置でげんがりしている麻子へと向いた。

「狙いの調整は、車体の位置取りでほとんどが付いてしまっていました。私は、本当に引き金を引くだけで良かったんです。冷泉さんのお

陰ですね、有難うございました」

「……おう」

華は丁寧<sup>テイネイ</sup>に頭を下げる。

褒められているにも拘わらず、当人は居心地が悪そうに応じた。麻子は試合が終わった時からずっと難しい顔をして、自分からは何も言おうとしない。

また、みほとの間には絶対に沙織を挟む形を取り続けていた。

「操縦ホシヨウによって狙いを定める」

みほは閉じていた目を片方だけ開けた。

「麻子さんがやってのけたのは、最終的に操縦手に求められる技術であり、最も速やかに敵を撃破するための技能。地面の凹凸おうとつを瞬時に見極めて、敵との相対位置を計算、繊細な操縦桿捌きによって理想的な場所ホシヨウへ着ける」

「そ、それって凄い事なの」

二人の板挟みになっている沙織が、麻子とみほの間で、視線を忙しなく交互させながら尋ねた。

「とつても高度な事だよ。戦車を自分の手足にしなきゃ、絶対に出来ないし……本当なら長年の熟練を経て、ようやく身に付くかもしれない腕うでなんだけどね」

「マジで凄かった！ やるじゃん、麻子！」

「興味無い。疲れるだけだ」

だから構うな——と言いたげに、麻子は皆に背を向けて目を閉じた（沙織から離れた訳ではない）。

脱力し尽くして、小柄な体躯を湯船にぶかぶかと浮かばせる麻子の姿は、とてもそんな優れた事ができる人間には見えなかった。

幼少の頃から、あらゆる分野で飛び抜けた才能を発揮する麻子を間近で見えてきた沙織でさえ、そのギャップには慣れていない。

天才の習性は考えても分からないので、沙織は「そこが麻子の可愛いところ」と妙な納得の仕方をする事になっていた。

そんな、自分の能力がつまらないものであるかの様に受け答えをした麻子を、みほは両目を開けてじっと見つめていた。その瞳に、暗い

ものは写っていない。

ただ微かな、何かしらの感情が写っているだけであつた。

「つまり、全て西住殿の采配が正しかったという訳ですね」

優花里が、些か個人的に過ぎる見解を示した。

「あの局面で、あの窮地で、冷泉殿の才能を見出した慧眼……まさに西住殿でなければ成し得ない采配と言えましょう！」

「……うん、確かにそうだね！」

「みほさんには人を見る目も備わっているんですね」

優花里のみほを褒め称える言葉に、沙織と華も便乗した。きらきら輝く純真な瞳で、自分たちの隊長を見つめる。三人の高揚した頬は、湯に当てられたばかりではないのは明らかだ。

みほは、喜びに満ちた彼女らの顔を見て、うんざりした。もちろん、表情には出さない。

彼女たちは、とにかく、初めての勝利を喜びたいのだ。特に深い考えも無い、ただ感情的に。故に、突飛な論法にも安易に乗ってしまう——みほにとっては、何時ものパターンだった。

深い考えが無い故に、勝手に深読みをするのだ。

麻子があらゆる事柄に対して、天賦の才能を持っている——使えると判断できたのは、優花里の言う『慧眼』とやらの仕業ではない。

生徒会から確保した全生徒名簿の綿密な分析プロファイリングと、実際に接触し観察した成果だ。

生半可をした覚えは無い。

全ては骨を折って、一生懸命に努力した成果なのだ。

それが全て『慧眼』のお陰か。

本当に、そうならよかつたのに。

慣れた事だ、文句などない。

『自分を見て欲しい』だなんて、そうそう叶う筈もないのだ。誤解させるように仕向けているのは、他ならぬ自分である。ただ少し、腹立たしいだけだ。

そう考えてみれば、やはり、地元は良かったな——

「……………ふっ」

やはり、疲れているな——かなり我が儘な心の動きに気付き、みほは我ながらおかしくなった。心の支配を緩めると、直ぐにこういう身勝手に飛んでしまうのが、我が身の悪いところだ。

こんなつまらないものが、私の『素』か。  
けれど、まあ、それも面白い。

この時のみほは、傍からであれば、敢えて謙遜をせずに静かな微笑みで返答をするという、実に天才的で、頼もしいものに見えた。

本人の内心とは裏腹に、三人は重ねて誤解をした。

『彼女は確かな自信に満ちている！』この心証は、隊長に対しての敬意を一層深める事となった。

例え意図せずとも、みほにはこういう誤解をさせる術が身に染み付いていた。これも、みほの積年の努力の結果であった。

「ねえ、みほ。ずっと気になっていたんだけど、どうして私を通信手にしたの？」

「その事、私も気になっていました。どうして私が砲手なのでしょうか……」

敬意も新たに、全く戦車道が初心である華と沙織（優花里は知識だけは豊富である）が、最後の疑問を解消しようと、みほに訊いた。

「沙織さんは、誰とでも仲良くなれる凄いコミュニケーション力をもっているからね。それは、何より転校生だった私が知っているもん。だから通信手になれば、お互いの意思疎通が一番上手くいくと思っただの」

「ええっつ、やっぱり、みほもそう思う？」

「華さんは、華道の経験がとても深いから。私も少しかじったことがあるけれど……花を生けるのって、もの凄く集中力を使うんだよね。その集中力が、きつと砲手の仕事にも活かせると感じたの」

「そんな、華道の腕前だなんて、本当にまだまだで……けれど、光栄です」

あまり謙遜しない沙織と、大いに謙遜する華。二人の反応に違いはあったが、内心で思っている事は一緒である。

自分たちがみほを良く見る様に、みほも此方を良く見ているのだ。

そうして、お互いに良く見つめ合う事は、友人として素敵な事だと、二人は同時に強く思った。

「あ、あのう……私は……」

恐る恐る、といった風に優花里が小さく手を挙げた。本当は黙っていても良かったのだが……沙織と華の事が羨ましくて堪らなかつたのである。

みほは優花里に目を移すと、無言で近付いた。二人の胸の膨らみが触れてしまいそうな距離……みほは両手を伸ばして、優花里の二の腕を優しく握った。そのまま、何度か揉みしだく。

「ににににしじゅみどのっ!？」

もちろん、優花里は真っ赤になって狼狽えた。

しかし、みほは気にしない。両手を二の腕から肩に移し、同じ様に揉みしだく。それが終わると、両手は脇腹をなぞって通り、最後には腹を撫でて、やっと優花里の身体から離れた。

その頃には、優花里は茹でダコと同じ色だ。

「良い身体」

満足した様に頷いて、みほは言った。

その言葉に、何か他意を見出した沙織が黄色い声を出す。

しかしながら、それも勘違いである。

「思った通り、引き締まった筋肉をしてる。毎日トレーニングを欠かしていないんだね。装填手は体力勝負だから、優花里さんみたいな人が理想形かな」

みほの労いを込めた微笑みで、優花里に積年の思いが蘇る。

戦車道に憧れを持ってから、報われる日を夢見て、毎日毎日繰り返ししてきた筋力トレーニング。女の子らしくないと親には止められ、同級生からは偏見の目で見られ、時には自己嫌悪に陥る事もあった……それが今、一番認めて欲しかった人に、ようやく。

優花里の目尻からは、自然と涙が溢れ出した。

あと鼻血も。

何だか知らないが、急に涙と鼻血を流し始めた優花里に、ともかく周囲は驚いて介抱し始めた。

だが、みほが近付くと余計に酷くなるので、少し離れている事にした。

◆ 「あ、あのうっ」

優花里から少し離れた先で、みほは直ぐに、とあるグループに話し掛けられた。どうやら、今までタイミングを計っていたらしい。

「八九式の、ええと、バレーボール部の皆さん」

「あはは……正確には部でなくなってしまうんですけどね……」

苦笑いをしつつ、代表して話し掛けてきたのは(元)バレーボール部のキャプテン、磯辺典子だった。

みほが「どうかしましたか」と訊くと、典子は少しの間迷っていたが、やがて意を決したように大声で言った。

「西住隊長、さっきの試合ではご迷惑をおかけしました！ 助けてもらって、本当にありがとうございます！」

『ありがとうございます！』

(元)部員たちも、典子に続いて深々と礼をした。彼女たちの大声は、呆れるほど浴場全体に響いたので、否応なしに他のグループの注目が集まった。

「私たちの戦車が危険な動きをしたせいで、他のチームも危険に晒してしまいました。運転していたのは私です！」

「私はそれを急かしました！」

「見ているだけで、何も言えませんでした！」

「ごめんなさい！」

「いや、根性で何とかしようと思った私が一番悪い！」

堰を切ったように、一斉に謝罪をするバレーボール少女たちは、それでもお互いを庇い合っていた。「私が、私が」と責任を自分だけに負わせるための主張は、眺めているだけでは永遠に終わりそうになかった。

みほは暫くその議論を見ていた後、何時もの様に、小さく手を挙げた。

彼女たちの議論は、ぴたりと止んだ。

「良く分かりました。けれど、何故私に？ 謝るのなら、別の人でしよう」

「あの後直ぐに、III突の人たちには謝りに行ったんです。皆、笑って許してくれました。凄く危ない目に合わせちゃったのに……」

「気持ちの良い人たちですからね」

「それで、言われたんです。私たちは気にしていないから、謝るのなら西住隊長に……って」

「なるほど」

つまり、投げられた訳か——みほはそう理解した。

「簡単に許してもらおうなんて、思っていないんです。本当にすみませんでしたー！」

『すみませんでしたー！』

再び深々と頭を下げる彼女らの姿を見て、みほは、何故投げられてしまったのかを悟った。

この者たちは許しを請うておきながら、許してもらおうとっていないのだ。むしろ、遠回しに罰してくれと言っている。

なるほど、面倒くさい。

スポーツマン精神によるものだろうが、特に怒りを抱いていない相手にこういう事を望むのは、謙虚を通り越して卑屈だ。

スポーツ根性と言うより、これは軍人根性に近いものがある。

前の学校くろもりみねであれば、一発張はつぱんってやれば済んだのに。

「顔を上げて下さい」

「いいえ、上げません！」

「私は、謝罪を望んでいる訳ではありません。人は失敗するものです。まして初心であれば尚更です。それを何故悔いる必要がありますか」

「他の人に迷惑をかけたんです」

「確かにそうです。けれど、許してもらったんでしょ？」

「西住隊長に助けてもらった事を忘れた訳じゃありません」

「あれは私だけの働きじゃありませんよ。IV号の皆が居たお陰です」

「でも、でも……何か報いなければ、気が済まないんです！」

意地になって食らいついてくる典子に、みほは眉をひそめた。  
なんだ、手強いな。

少し意外に思った。元バレーボール部のが根っからのスポーツ少女だと言うことは知っていたが、ここまでのスポ根論者だとは思わなかった。最早、引つ込みが付かなくなっているらしい。

面白い連中だ。

だったら望みのものをくれてやる。

「——だから何だ」

みほ言葉に、酷く冷たいものが混じった。

浴場全体の空気が一気に凍りつき、この会話に注目している者たちに緊張が走る。普段から柔和なみほが、そういう態度を公然の場で示すのは初めてだったのだ。

言われた方は、ぎよつとして下げていた頭を持ち上げた。

「あなたたちの気が済もうが済むまいが、私に関係あるんですか？

そんなのは知った事じゃない。私は必要だと思った事を、ただ静かに実行したに過ぎない。恩に思われる様な事は何もしていない」

みほの目は、思わず視線を逸らしてしまいたくなる程の冷たさに満ちていた。

しかし、バレーボール部のメンバーは、恐ながらも真っ直ぐな視線で相対していた。持ち前の根性が、そうさせていた。

「今この時、気が済んだところで何になるんです。それは卑屈な、唯の自己満足であって、失敗を帳消しにする事などできやしない。過去の過ちが消える事は決してない。ですから、あなたたちがすべきなのは、失敗を胸に刻み、忘れない事です」

みほは、彼女たちに負けないぐらいの大声で言う。

「次のために前へ進む！ 私が望むのは、それだけです」

静まり返る大浴場の中、バレーボール部は、ハッと、自分たちが叱られたのだと気が付いた。

妥協のない厳しい態度は、むしろスポーツ根性の塊である彼女たちの胸を打った。冷たい声ではあったが、話の内容は、むしろ熱血であると捉えられた。



バレーボール部の血が滾る。

『ありがとうございます！』

彼女たちの、一際大きい感謝の声が浴場に響き渡った。

それはまるで、部活の顧問へ頭を下げている光景だった。



「――馬鹿らしい」

麻子は一人呟いた。

一件落着いたというように、楽しくお喋りしている周りの連中が心底愚かに思えてくる。

どいつもこいつも、人を信頼するという行為に抵抗を持っていないのか。どうしてそんなに簡単に、心売り渡す事が出来る。相手がどういう人間なのか、深く考えたりはしないのか。

腹立たしい、胸がむかつく。

麻子は無言で静かに立ち上がる。一刻も早く、このむかつく場所から去りたかった。これ以上の関わり合いはごめんだ。

それに何より、自分が此所に居るといふ現実に腹が立つ。

「どこ行くの、麻子」

浴場から出ていくスライドドアに手を掛けようとした直前、沙織に呼び止められた。その発言で、皆の意識が、一気に背中に集まるのを感じた。

麻子は小さく舌打ちをする。

沙織め、私の事を良く見ていやがる！ 畜生、何て有難い事だ。

「帰る」

振り返らず端的に言うと、背後がざわついた。

私がこのまま、残るとでも思っていたらしい。

「ちよつと待って！ 麻子が居なくなったら誰がI V号の操縦をするのよー」

「戦車道を選択した人がやれば良いだろ。私は既に書道を選択している」

取り付く島もない調子で、麻子はドアを開ける。

「冷泉殿が居て下されば、私たち助かります！」

「先程の操縦の腕は見事でしたっ」

「……今回だけだと、私は言ったはずだぞ。そもそも、私がこの場にいるのがおかしい話なんだよ」

沙織たちが騒ぎ出したのを皮切りに、他のチームからも「やめないでください」とか「お願いします」とか、必死の懇願が投げかけられた。

相手にするつもりはないが、彼女たちの愚かな一途さには、うんざりすると同時に心が痛む。

彼女たちは悪くない、ただ騙されているだけなのだ。ならば、騙す方が悪いに決まっている。

麻子はちらりとみほの方を見たが、普段のように笑みを浮かべているだけだった。

一番焦るべき人間が余裕ぶっているのには、無性に腹が立った。

「麻子、遅刻ばかりで単位足りてないでしょ。このままじゃ留年しちゃうよ。私のこと、先輩って呼ぶ事になるよ、良いの!？」

「全て私が招いた事だ。そうなるのなら、受け入れる。なあ、沙織先輩」

「おばあにだって凄く怒られるよっ!」

「ぐ……」

一番の弱点『おばあ』をもちだされて、麻子は一瞬言葉に詰まった。

その隙は、見逃されない。

「まあまあ、沙織さん」

みほの腕が、優しく沙織の肩に置かれた。

自分に触られる以上の嫌悪感が、麻子を襲う。

「冷泉さんは、嫌がつているよ。さっきの判断が間違っていたとは思わないけれど……でも、出来ればこれ以上の無理強いはしたくないんだ」

「……みほが、そういうなら」

「ごめんね、冷泉さん。もう二度と、迷惑は掛けないから——」

その時、麻子を見た。

切なそうに笑うみほの腕が、まるで蛇の様な靱やかさで、沙織の首

に絡みつこうとしている光景を。

西住みほの瞳から一切の光が消え、あの時の恐ろしいものが、沙織に焦点を合わせているのを――

「やめろッ!!」

麻子は咄嗟に叫んだ。

「やるっ、操縦でもなんでもやってやる! だから、だから……」

これ以上、私から奪わないでくれ――麻子の脳裏に、家族を失った時の感情が過ぎった。

いきなり大声を出した麻子に驚いた皆がざわつき出した頃には、既にみほの腕は、元の湯の中に沈んでいた。

「ど、どうしたの麻子」

「さ、沙織……お前、何ともないのか」

「何ともって、どうにかなってるのは麻子の方じゃん!」

「何でも、ない……何でもないんだ」

一先ず息をついた様子を、みほは面白可笑しそうに、目だけで笑っていた。まるで小馬鹿にする様な視線に、麻子は気付かされる。からかわれた。

みほがしたのは、脅迫ですらなかった。

愚かであると断じていた周りの人間と麻子が、みほにとっては変わらない愚か者である事を認識させられたただけだ。

信頼関係の隙、みほはそれを突ついただけなのだ。

そして、またしても選ばされた。

自分で選択してしまつた。

「やってくれるんだね、冷泉さん。こんなに心強い事はないよ。これからは一緒に、皆で進んでいこう!」

みほが、嬉しそう言った。

どの口でそんな白々しい事が言えるのか、理解が出来ない。

一斉に拍手が沸き起こる。

やめろ、そんな事をするんじゃない。

「麻子、私も嬉しいよ! 一緒に戦車道が出来るだなんて。みほのためにも、頑張ろうねっ」

沙織が湯船から上がって、抱き着いてきた。感動的な雰囲気、場に流れる。

やめろ、やめてくれ。

沙織、お前までそんな事を言うのか。

私は何のために、誰のために。

くそ、くそ、くそっ！

卑怯だ。こんなのはずるいぞ。

私が欲しいのなら、正々堂々挑んで来ればいい。

なのに、こんな、沙織を使うだなんて。

安心してしまっじゃないか。

畜生、この鬼め。

腹立たしい、腹立たしい、腹立たしい――

この怒りを、いつか、思い知らせてやる。

◆  
新しい仲間を歓迎する拍手は続く。最早、この流れは止められない。

浴場の一角、生徒会のグループも、皆に倣って拍手をしている。

「どうかされましたか会長」

「嬉しくありませんか？」

喜びを顔全面に表した桃と柚が、あまり乗り気でない杏に気が付いた。

「なーんか、凄い顔してるね。冷泉ちゃん」

「そうでしょうか？ 何時もあんな感じの仏頂面だと思いますけれど」

「疲れて眠くなったのかもしれないよ」

「いやあ、そうじゃなくて……まあ、分からないならいいや」

杏は、新たな操縦手をじっと見つめた。

間違いない。彼女は、怒っている。

人一倍、他人の悪意には敏感な杏は、それを直ぐに察した。

「仲間に、なっってくれるかな」

心配そうな会長の呟きに、親友たちは「もちろんです！」と元気よ

く答えた。

### 鬼神西住と親衛隊長3

寒いほど独りぼっちだ。

◆ 黒森峰女学園戦車道部『西住みほ親衛隊』主催の盛大な誕生日パーティーは大いに荒れた。

普段は気を張り続けている黒森峰の生徒たちが、主役が無礼講宣言をした事で、反動によつて些か騒ぎ過ぎたのだ（誰かが特別なジュースを持ち込んだという原因もある）。ようやく場が静まったのは、深夜も近くなつた頃だった。

大量のプレゼントをやつとの思いで整理した主役……西住みほは、外のベンチに腰かけている。

大きく息を深呼吸をする。すっかり秋の様相である外気と、パーティー会場の熱気とは大違いだ。

一切が冷たく静まっている。

不意に、耐え難い寒さを感じた。

誰かが近づいてくる気配がした。

その人物は、無言で隣に座る。

エリカ。

その姿を認めると、少しだけ寒さが和らいだ気がした。

二人は無言で居た。既に今日の言葉は、出し過ぎるほど出している。

だから、無言でいた。

「副隊長」

長い沈黙を破つたのはエリカだった。

「先ほどの醜態の事、親衛隊には、きつく言っておきます」

「許すよ」

「はい」

再びの沈黙。

これは、エリカが本当に言いたい事ではないなと感じた。不器用な女だ。

「今日はありがとう」

みほは、自分から切り出した。

「いいえ。当然の事です」

「お姉ちゃんは、来なかったね」

「隊長にも声は掛けたのですが、忙しいらしくて」

「毎年の事だよ」

「そう、なんですか」

「うん。毎年、そう」

「偶然でしょうか」

「違うかも」

「薄情な人」

エリカの歯に衣着せぬ物言いに、みほはくつくつと笑った。

まほに「ここまで言ってしまうる部員は、そうは居ない。」

「最後に家族に誕生日を祝ってもらったのは？」

「毎年、電話をもらいます。プレゼントも、郵便で」

「そっか」

「……みほ」

「なに、エリカ」

「私があなただを祝福するわ。来年も、再来年も、何時までだって」

「ありがとう」

「本当よ」

「疑ってないよ」

「そういう目をしてた」

「そんな事ない」

「絶対してた」

「じゃあ、してたかも」

「嘘じゃ、ないんだから」

詰め寄るエリカの顔には必死さの他に、別のものが浮かんでいる。

「そんな顔しないで」

「どんな顔よ」

「悲しそうにしてるよ」

「してない」

「嘘」

「してないっ」

エリカは頑なに言っつて、顔を背けた。

それで、また静かになった。

エリカの耳が赤くなっている。

その姿が、無性に愛おしく思えた。

みほは、エリカに近づいていって、肩をくつつけた。

「なによ」

「寒いから」

「嘘ね」

「そうかも」

「ずるいわね」

「だめかな？」

「……いいわ。私も、寒かったから」

「嘘ばかり」

エリカは顔を真っ赤にして「嘘じゃないっ」と言った。



## 鬼神西住22

澤梓には夢がない。

一度とて、将来というものに対して望みを持った事がない。

無気力という訳ではない。むしろ、同級生の誰よりも今を一生懸命に生きているという自負がある。

それで手一杯なのだ。今に全力でぶつかって、それから先だなんて、考える余裕もない。

生きる事に真面目であるからこそ、夢など見ないのだ。そもそも、不確定であやふやな未来について、何か要望する事自体が無責任ではないか。

今を真面目に一生懸命に生きていれば、自ずと未来も拓ける——それが梓の昔からの自論だった。

梓には妹がいる。

妹は梓とは正反対な、破天荒な性格だった。

何時も他人に迷惑をかけっぱなしで、片時も目が離せない子供だった。

両親は、梓が小さい頃から頻繁に「梓は手の掛からない良い子ね」と言った。その後は必ず「それに比べてあなたは」と妹に言い聞かせて、掛かりきりで世話を焼いていた。

「しょうがない子ね」と言いながらも、笑顔で妹の頭を撫でる両親の事を、梓は大人しく見続けてきた。

妹は常に夢を抱いていた。小さいものや大きいものを、同時に幾つも持っていた。

それに向かって無鉄砲に走り出しては、挫折したり、成就させたり——その過程では、必ずと言っていいほど人に迷惑を掛けていた。

梓にとっては無責任の極みだった。自分の勝手のために、他者を巻き込むのは忌むべき行為であると信じていたからだ。

しかし、妹の周りに居る人々は笑っていた。不利益を被っていると、妹と一緒に笑っていたのだ。

どうしてだろう。

梓には、理解が出来なかった。

高校進学の前、両親に将来の夢を訊ねられた。

梓が「ない」と答えると、両親は悲しい目をして「何かあるだろう」

「どんな小さな事でもいい」と催促をした。

何も答えられず俯いていると、両親は言った。

「妹を見習いなさい」

自分がとても情けなくなった。

どれだけ心の内を説明した所で、言い訳にしかならない気がしたから、黙っている他なかった。

両親を失望させてしまったと感じた。きつと夢とやらを持っていないのが罪であって、だから叱られているのだ。

自分が妹より劣っているから、怒られたのだ。

梓を成立させていた自信は、崩れ去った。

同級生たちですら、それを語った。

仲良くなった五人の友人は、きらきら輝く目で、あれだこれだと語り合っていた。梓は本心をひた隠し、愛想笑いをするよりなかった。

物静かな梓の姿を見て、友人は言う。「梓は大人だ」と。その度に責め立てられている気分になり、苦しくなった。

妹や友人が当たり前のように持っている『夢』。けれど私は持っていない。生まれてこの方、考えた事もない。

他人に劣らない様に努力してきた。

立派な人間になろうと何時も願ってきた。

信念に基づいて、生きてきた。

けれどそれは、全部間違っていたのか。

どれだけ懸命に今を生きたところで、私は何者にもなれないまま、唯々終わってゆくのではないだろうか――

一度胸に巢食った自問が消える事はなく、答えが出る見込みは皆無だった。

誰かに頼る事も出来ない。罪悪感と劣等感、そして羞恥心が、空虚な心を曝け出すのを躊躇わさせた。

自分の人格に責任を持ってないというのは、誰より責任感の強い梓に

とつて無上の苦しみであった。

闇の中を孤独に彷徨うも同じ不安に、梓は押し潰されそうになつた。

そんな時だったのだ。

彼女が——西住みほが現れたのは。

彼女は全校集会の壇上で夢を語り——そして実行した。

ばらばらな人間を纏め上げ、一つの共通意志を持った群勢として昇華させる——それは最早、個人の夢を超越した『大義』だった。

梓は直感した。彼女は人間としての大きさが——格が違う。

それは闇の中に見つけた、たった一つの光明。

澤梓は、西住みほの光に心を奪われた。

◆ この日貸し切られた会議室には、練習試合の作戦会議と称されて、生徒会役員と各戦車の代表者が集められていた。

昼直後の必須選択科目の時間。緊張感のある会議中であっても、締めきらず、どことなく穏やかな空気が流れている。大洗の主要メンバーとは、そういう人間の集まりであった。

「——この様に一両が囷となり、聖グロ部隊を包囲する。そこを高所から全力で叩くっ！」

河嶋桃は言い切ると同時、ホワイトボードを叩くと「どうだ」と言いたげな目で一同を見渡した。

目の下には薄らクマが出来ている。恐らく、昨晚寝ずに考えた作戦なのだろう。その割に安直で、誰にでも思い付きそうな作戦であるのは、彼女らしいと言えるだろうか。

「悪くないと思います」

静かに聞いていたみほが言うと、桃の顔はぱっと明るくなった。

そもそも、今回の作戦立案を是非任せて欲しいと熱望したのは桃であった。どうやら副隊長としての意気込みがあつたらしい。みほどころか周囲の誰も期待していなかったのだが、ものは試しと任せてみた結果がこれだった。

みほは二度と作戦立案を桃に任せない事を決断した。

「この作戦を土台に、詰めてみましょう。聖グロリアーナ女学院にすら通用するように。結論は試合前日までに出します」

こめかみの辺りを指で撫でながらみほは言う。

遠回しに落第であり二度手間だと言われているのだが、桃は褒め言葉として受け取った様で、得意気に胸を張ってから着席をした。

チームメイトたちは、生暖かい目でそれを見守っていた。

とかく桃というのは、争い事に関して徹底的に、いつそ清々しいほど無能であった。卓上ならまだしも実戦となると一層それが顕著する。しかも、どうしようもない単純さを抱えているから「もしかして馬鹿者なのでは？」というのが直ぐにばれる。

けれども、これらは桃の本質である、至って善良な平和主義と純粹に拠るものであったから、疎まれたり嫌われたりする事は殆ど無いのだった。

「試合の宣伝はどうなっていますか」

みほは話題を変えた。

「ああ、西住に勧められた通り大々的にやっている。出店も呼んだ。なかなかの集客が望めるだろう」

「資料は」

「これだ」

桃が差し出した資料は宣伝ポスターや出店の内訳など、ある程度の量があったがみほは素早く目を通した（麻子程ではなかったが）。

読み終わると、みほは打って変わって笑顔で、満足気に頷いた。

「この短期間でよくここまで。良い、実に良いと思います」

「ふっ、ふん。当然だ」

「特にこの学園内新聞は良い。特別号ですか」

みほは資料の中から『遂に実働、大洗戦車道！』と大きく見出しの付いた新聞を取り出して見せた。

学園内新聞とは、文字通り、学園内に配られる新聞だ。学園艦内全ての家庭に配達されるため、陸にある学校と比べたら、比較にならない程の影響力がある。

「ああ、新聞部には特別に予算を下ろした。新聞の出版には結構掛か

るからな。そうしたら連中、やけに張り切つてな……力作だそうだ」  
「学園内新聞というのは、ああこれは黒森峰の事ですけれど……どうにも角張つていて退屈なものだとばかり思っていました。けど、大洗のものは良い。自由で、面白くて、それでいて力がある！是非筆者に会つてみたい。ええと——」

「王大河だ。放送委員兼任、二年生。メディア関連に熱心な奴でな。広報で色々と目を掛けてやっている」

「放送委員」

感動したように大きく息を吸つて「益々良い」と続けた。それを聞いた桃も誇らしそうだ。

争い事については役立たずな桃であったが、本来の持ち分である広報については、全く有能であった。

最も、みほはそれを期待していたから未だに桃が戦車道に関わる事を許していたのだが。

唯々無能な人材を傍に置いておける程、戦車道は甘くない。外の敵はともかく、内の敵は真つ先に処理すべきだ。

みほは意を決した。

「河嶋さんに頼みがあります」

「なんだ、言つてみろ」

「今日限りで、副隊長を辞めてもらいたいんです」

「なっ、なんだとうっ!?!」

突然の解任宣言に、桃は音を立てて席を飛び上がった。

顔を真つ赤にして、今にもみほに噛み付きそうな勢いだ。傍らの柚子に「まあまあ」と宥められたが、それを跳ね除けてみほに迫った。  
「どういう事だ西住、私の何が不満だと言うんだ!?! 私はちゃんとやってきただろう、今だつて!!」

ヒステリー紛いの剣幕で喚く桃の唾液が顔に掛かったので、予想していた反応とはいえ、みほは少し不快になった。

しばらくは喚かせておいたが、やがて桃の座席を指さすと、静かに言った。

「座つて下さい」

「聞いているのか西住っ」

「座って下さい、会議中です」

「だから、答えを」

「——座れ」

声量ならば、桃の何分の一に満たない低いもの——しかし、その一声はこの場の全員を震え上がらせた。

桃は「くうん……」と鼻を鳴らすと、あっという間に席に戻って、隣の柚子に頭を撫でてもらった。

「河嶋さんには、今以上に広報に専念して欲しいんですよ」

「ええと……どういう事？」

桃が震えてしまつて応じられそうになかったので、代わりに柚子が訊ねた。

「もつと手広くやりましょう。まずはこの新聞、陸でも配布を行います。町内放送もねじ込んで下さい。試合当日の装飾や、もてなしも豪華に——これだけ大切で重大な仕事は、副隊長と兼任などできないでしょう。河嶋さんには、有能な働き者でいて欲しいんです」

その言葉で、桃は多少持ち直した。柚子を気にしながらも、自分で応える。

「人と時間と予算が余計に必要なだ」

「できますか」

「できる」

「では、そのように」

無事に話は付いた、という風にみほは一つ手を叩いた。周囲も、ほつと息を吐く。

しかし、それを良しとしない者がいた。

「待ってよ西住ちゃん」

今まで成り行きを見ていた生徒会長……角谷杏が水を差した。

「どうしました会長」

「私は広報の仕事は今のままでも十分だと思うよ。これ以上必要なのかな？」

「必要です」みほは即座に断言した。「我々が一丸となるためには、宣

伝広告は絶対に欠かせない要素です」

みほの言う『我々』とは、非常に広い範囲の人々を指していた。今は良くて学園艦内の団結に過ぎない——しかし一体、その範囲を何処まで拡張しようと企んでいるんだろう？

みほを中心とした輪が広がる事を、具体的な根拠も無く、持ち前の臆病な警戒心で杏は危ぶんでいた。

「……だとしても、それは西住ちゃんが決める事じゃないよ。これは生徒会の権限であって、一生徒が進めて良い案件じゃない」

「会長、西住は学校の事を想って言っているんですよ」

「そうです、良い事ではないですか。我が大洗女子学園の活躍が広まるんですから」

杏の心も知らず、桃と柚子は言う。他のチームメイトたちも「そうだそうだ」と便乗した。

まるで杏の方が悪者扱いだ。皆のみほに対する深い信頼が、正論をねじ曲げてしまっている。

杏はとても悲しくなった。今や、どちらがより信頼されているのかが目に見えてしまったからだ。思わず涙目になる。

みほは「ふーん」と腕を組んで、思案する素振りをした。やがて小首を傾げ、軽く言った。

「やめますか？」

杏は、ぞつとした。

軽妙な笑顔の、瞳の奥に潜む思惑に気が付いたからだだった。

そうだ——この女は何時でもやめれるのだ。何故なら、大洗女子学園に何の思い入れもないから。良くて便利な手足か、道具くらいにしか思っていないからだ。

西住みほにとつて、学園の末路だなんて心底どうでもいいのだ。

それにもかかわらず、杏は、生徒会は、学園は、みほに頼らざるを得ない。それしか道がない。

気分次第で何時背中を押されるかも分からない崖っぷちの状況——杏はそれに思い当たってしまった。

まるで追い討ちを掛けられた様で、杏は涙が溢れ出ない様に唇を噛

むのが精一杯になった。

みほが嘲笑うかの如き視線で見てきたため、屈辱に顔を伏せた。だが、この印象は杏の誤解である。実際には、みほは嘲笑ではなく、愛しみの視線を向けていたのだ。

なんて可愛い人。

努力家で、勇敢で、仲間想いの素晴らしい人。

けれど誰より恐ろしがりで、臆病な人。

それ故、今にも粉々に砕けてしまいそうな人。

可哀想に。

優しく抱き締めてあげたい。

でも、同じくらい背中を押してしまいたい。

どっちが良いかな？

私なら、どうとでもできるんだ――

数秒間、縮こまった杏に目を奪われていたみほは、この感情が会議に無用であるばかりか非道徳であると気が付いたので、強制的に思考を中断した。

「他には」

一人一人の顔を見渡してみても、それ以上の異議の申し立ては無かった。

沈黙は許諾である。

話し合うべき議題はまだあった。次が一番大切なのだ。

「さて、そうだったので副隊長の座が空いてしまいました」

「私が続投しても良いのだが……」

「不可能です。後任を決めます」

あつさり切り捨てられた桃を他所に、会議室はざわめいた。チームの代表者全員が集められているのだ。この中の誰かが選ばれるであろう事は、容易に予想出来た。

みほは微笑んで、徐に一人を指す。

「澤梓さん。私はあなたに任せたい」

「え……えええっ!?!」

まさか自分ではないだろう……無意識に可能性を排除していた梓



は思わず叫んだ。

「なるほど、良いかもしれないな」

「納得の人選です！」

「ちよ、ちよと待つて下さい！」

隣に座っていた皿突のカエサルや、八九式の典子が合意するのに、梓は必死に手を前で振った。

直ぐにみほに向かって問い掛ける。

「どうして自分なんですか」

「それが良いと思ったからです」

「無理無理無理っ、絶対に無理ですっ。私なんか副隊長だなんて」

「それは困ります。他に任せられる人が居ないのに」

「他の人の方が絶対にマシですよ！」

「理由は」

「え……」

「無理だと思う理由を教えてください」

「ですから、私ごときには土台無理で……」

「やってもいない事を、根拠も無く最初から諦めるんですか」

みほは眉間を寄せ、不機嫌を隠そうともせずと言った。

「卑屈だ」

しまった——梓は己の失敗に気が付いた。

日頃から、西住隊長を良く観察していたから知っていたのだ。

隊長は、曖昧な態度や煮えきらない発言を好まない事を。そして特に——明確な理由もなく己を落とす行為を非常に嫌っている事を。

きつとそれは、優しさの裏返しなのだ。自分の尊厳と同じように、他者の尊厳を大切に思っている証拠だ。

焦っていたとはいえ、自分はそれを踏んでしまったのだ。

みほは厳しい視線で見つめてきている。

梓は何か弁明をしなければならぬと思った。けれど上手い言い訳が何も思い付かない。あれこれ必死に考えたが、結局、梓はうなだれた。

「……本当に、私には無理なんです」

「どうして」

訊ねるみほの口調は厳しいものだったが、今の梓には何故だか心地良いものに思えた。

「私には才能が有りません。戦車道を始めてから、まだほんの少しの間ですけれど、分かるんです。私に指揮者の素質は無い。ただ成り行きで車長をやっているだけ……お飾りなんです」

己で言った言葉で、一人梓は落ち込んでいく様だった。改めて本心を言葉にしてみれば、やはり、辛いのだ。

「皆、一生懸命なんです。戦車道は凄く楽しいって、笑っています。楽しんでやっているから上達も早くって……私もそれに負けない様に頑張っているんですけど、全然ダメダメで。皆に頼ってばかり、追いついてゆくのもやっとな……本当に、見捨てられないだけマシですね」

梓は笑顔を作った。

無理矢理に愛想笑いを作るのは、もう慣れてしまった。

「って何言ってるんでしょうねっ。こんな事どうだっていいのに。だから、その、私には副隊長は無理だと思うので他の人にお任せします。所詮、

私には無理なんです。だって、私、には——」

——夢が有りませんから。

声が震えて、先を話す事ができない。今にも涙が落ちそう。

駄目だ、笑わなきゃ。心配させてしまう。西住隊長が困ってしまう。

笑え。それが大人だろう。

真面目で大人な澤梓。それだけが取り柄だろう。

笑え、笑え、笑え——

「笑うなッ!!」

一喝。

みほは立ち上がり、梓に歩み寄ると胸倉を掴んで持ち上げた。

身体は容易に宙に上がる。

梓は潤んだ目を見開いた。

「己の努力を笑うな。それは絶対に許さない。許されていい筈がない。才能、才能だと？　それが何だつていうんだ。いいか、はつきり言っておく。不遇の環境、身体的不利、才能の欠乏！　これら一切の障碍しょうがいは、人の信念を阻む事など決してできない！」

悔恨に歯を食いしばり、突き返す様に襟首を離した。梓はよろめいて、元の座席に落ちた。

「だから、そんな事を言わないで……」

「人の……信念……」

人の信念。梓が信じられなくなった代物——けれど、西住隊長は誰よりもそれを信じているのだ。そして、立派にやってみせている。それに比べ、自分のなんと情けない事か。

呆然としていた梓の瞳から、一滴が垂れた。

それを始まりとして、溜まっていた涙がどんどん落ちてゆく。

小さな啜り泣きだけが、会議室に響く。

人前で泣く事は恥ずかしいと頭で思っているにも、止めることは叶わなかった。

みほの激昂は半ば演技である。

情に厚い隊長をアピールするための、茶番だ。

ただ、怒りの発端が痛い所を突かれたのに由来するのは、間違いない。そこを否定する気は、みほには無い。

そうだ、だからこそ彼女を副隊長に選んだのだ。

「皆が言います。西住隊長みたいになりたいって、何時かあんな風になれたら良いのにつて——でも私はそう思いません、思えないんです。だって私は私だから。今を生きている私だけが、唯一の私だから……っ」

「それで良い」

梓が濡れた顔を上げて、尊敬する隊長を見た。

「あなたは私にはなれない。その通りだよ。同じように、私もあなたにはなれない。なりたいたとも思わない。そうです、私は私だから。それで良い。西住みほは、澤梓が欲しい。ありのままのあなたが欲しい」

みほはしゃがみ、梓の手を取った。

「あなたは今の自分から逃げなかった。とても辛い事です。認めたくない自分、劣っている自分——普通なら目を瞑る。気付かない振りをして、黙殺してしまう。けれど、あなたは勇敢に立ち向かった。どうにかしよう」と誠実に努力した。私はその能力が欲しい。副隊長にはあなたしかいない」

「けど、隊長。私が副隊長になっても、きっと誰も付いてきません。隊長と比べて、どれだけ私が小さく見えるでしょうか」

「それこそあなたの決める事じゃないよ。少なくとも私は、あなたに背中を任せてみたいと思った。そして——」

みほは、会議室を見渡した。

感極まった仲間たちが、静かに行く末を見守っている。典子などは、号泣する所を必死に抑えて、静かにしようと試みていた。

「皆が決めることです。どうです、異議がありますか」

『異議なし！』

口を揃えて発せられた同意の言葉は、梓の感涙を頂点に達させた。声を抑える事も忘れ、梓は泣いた。

みほは大きく頷いて、再び真っ直ぐ梓の目を見た。

「もう一度聞きます。副隊長をやってくれますか？」

隊長の問い掛けに、梓は勢いよく立ち上がり、敬礼をした。

「やります、私にやらせて下さいっ!!」

この時から、澤梓は副隊長となった。

抱えていた無上の苦しみから、救われたと感じていた。

ようやく自分は、皆と同じ入口に立てたのだ。ならば私は、何処までも駆けて行こう。西住隊長の命があったならば、何だっでしょう——

そして、梓は知らなかった。

用意された入口が、一体何処に続いているのかを。

## 鬼神西住23

聖グロリアーナ女学院との試合も差し迫ったその日、集合場所の倉庫前に顔を出すと、戦車が戦車でなくなっていた。

カラフル、キテレツ、トンチンカン——それを何と表現して良いのか、誰にも分からない。

元戦車の愉快な乗り物が陳列されているのを目撃して、第一に優花里が悲鳴をあげた。

「あんなに可愛くて格好良かった戦車たちが何か別のものにつ!？」

わなわなと身体を震わし頭を抱える優花里の隣で、みほは啞然として大口を開けたままだ。大袈裟にしないでだけで、より大きなショックを受けたのはみほの方かもしれない。

「すみません西住隊長、私はやめようって言ったんですけれど……」

副隊長に就任したばかりの梓がおずおず言った。彼女率いるM3中戦車リーはショッキングピンクにカラーリングされて見るも無残な有様である。

他にも38(t)は趣味も目にも悪いゴールド、八九式は私情の塊な文字の羅列、II-II突は時代背景の混沌としたカラーに旗指物——純粋な戦車好きにとっては吐き気を催すような冒瀆的な光景であった。

「おおおう……あんまりです、あんまりでありますっ! 西住殿もそう思いますよね!」

「……あは、はははっ。あはははははっ!」

話を振られた途端、突然みほは笑い出した。開いた大口をもっと大きくして、腹の底から笑った。ひいひいと腹を抱え、膝を叩き、涙を流している。

今度は周りの人間が啞然とした。

何しろみほが公衆の面前で笑い転げるだなんて始めてだったし、想像もできなかったからだ。

「ひどい、これはひどいっ! 最悪だ、あんまりだよ。こんな馬鹿やらかすとは流石に思わなかった。何だこれは? 戦車の良さもへった

くれも無いじゃない。あなたたち頭がおかしい、飛んでるよ！」  
「に、にしずみどの……」

もしや怒りの余り感情が裏返ってしまったのでは——と思った優花里が肩に手をやろうとすると、みほはそれを振り払った。

振り払ったその手で、ピンクのM3リーをばんばん叩く。

「面白い、面白過ぎる！ この馬鹿共、程度を考えろ。卑怯だ、これじゃ面白過ぎて怒るに怒れないじゃない！」

そう言っただけなら笑う隊長に連れられて、この事件の首謀者たちも控え目に笑い出した。

唯一、優花里だけは真剣な形相でみほに問う。

「塗り直しますよね？ まさかこのまま試合に臨むのは」

「いや、このまま出ましょう」

「ええっ!？」

「きつとたまげるよ聖グロは。あの気取った連中、目玉を飛び出して驚くに違いない。ティーカップが落ちて割れるぞ！ ああ楽しみ」

相変わらず大笑いしたまま、みほは優花里の背中を強く叩く。普段みほの言う事には絶対賛成の優花里が「そんなあ……」と言って、この時ばかりは肩を落とした。

それは余りに滑稽で、色々な先入観がぶち壊される様な光景だった。

控え目に笑っていた者たちが、大きく笑い出す。またそれに連れられて近くの人間が笑い出す。気が付けば、全員を巻き込む爆笑の渦となった。

彼女たちの隊長はなかなか狂ったユーモアセンスを持っていた。



大洗女子学園から練習試合の打電を受けたダージリンは、その場で返答をした。

「結構ですわ。受けた勝負からは逃げない主義ですの」

堂々と優雅に応え電話を切ると、後輩のオレンジペコが怪訝な顔をしながらティーポットに湯を入れる。それでも何も述べない奥ゆかしい後輩に、ダージリンは微笑を浮かべた。

意見を促されていると察したペコは、手を止めて先輩に向き合った。

「ダーズリン様、その、よろしかったのですか」

「あら、何の事かしら？」

話を促しておいて恍ける先輩を意にせず、ペコは話を進める。

「提案された日にちには、大手の学校からも練習試合の申し出が幾つかあったではありませんか。それを蹴ってしまうのは」

「大洗女子学園では格が下だと？」

「そうは言っていないません。ただダーズリン様が迷いなくお決めになった理由が分からないんです」

「ふふっ……」

ダーズリンは勿体ぶって笑い、一つ紅茶に口を付けた。困った顔の後輩が可愛いので、ついこういう意地悪をしたくなってしまったのだ。

散々焦らした後で、ダーズリンは疑問に答えた。

「ペコ、どうやらあの噂が本当だったのよ」

「あの噂って……まさかっ」

「そう。追放された黒森峰の副隊長は、大洗女子学園に居る。今、確認を取ったわ」

「そんな。本当に会えるのですか、西住みほ様につ！」

ペコはうっとりした表情で、顔に手を当てた。頬を紅く染め、上の空で虚空を見つめる様子は、乙女そのものだ。

ダーズリンにも、気持ちは痛いほど分かる。かつて、自分もそうだったからだ。

彼女たちの世代は皆、西住みほに恋をしていると断言しても過言ではなかった。

数年前、中学生時代。彼女たちが目撃した西住みほは、それ程までに鮮烈だった。

日本で最も由緒ある流派、西住流。その娘というブランドは、伝統や名誉といった肩書きを重んじる聖グロにとっては非常に大きな意味を持つ。

その家に産まれただけで高貴であり優雅なのだ——聖グロに限らず、世間にはそういう暗黙の偏見が確かに存在していた。

普通の少女ならば押し潰されかねない重責。

しかし、西住みほは笑っていた。笑いながら、立ち塞がる全ての敵を粉碎したのだ。重責をもともせず、ただ微笑み勝利する彼女は、正に優雅そのもの。また、無口な姉に代わりメディアに姿を現す事の多かつた彼女の口上は、芸術的なまでに美しく、多くの戦車乙女を虜にした。

こうなると、偏見も重責も彼女の名声を高めるための材料に過ぎなくなつた。

決定的になつたのは、ジュニア戦車道国際交流試合。中学生にとっては世界最高の舞台での出来事だつた。

優勝はおろか、勝ち進む事すら難しいと言われていた国際戦——西住流は全てを覆した。

日本代表チームは西住姉妹の指揮の元、無敵の絶対王者と謳われたドイツ代表チームを撃破し、史上初優勝の偉業を打ち立てたのだ。

煌びやかな優勝旗と、国旗を合わせて掲げる姉妹の姿は、目撃する全ての者に誇りを抱かせた。

『これが日本の戦車道!!』

多感な少女たちは、憧れ、そして恋焦がれた。

彼女と肩を並べて歩む事が出来たら、同じ夢を見る事が出来たらどんなに良いだろう。

ダージリン自身、テレビ中継に齧り付いて、この様に思ったのを覚えてる。

ダージリンが高等部に入った時、迷わず戦車の道へ進んだのは、間違いなく彼女の影響があつた。仲間にはなれなくとも、せめて好敵手として相對してみたい——そんな想いがあつたからだつた。

その想いが今、成就したのだ。

けれどしかし、ダージリンは浮かれる気分にはなれなかつた。

西住みほに対する複雑な感情が、安易に喜ぶのを妨げていた。

「……ダージリン様、どうさかれましたか」



「どうもしていないわよ、ペコ」

「でも、全然嬉しそうではなさそうです。あのみほ様ですよ？ 前々から戦ってみたかと仰っていたではありませんか」

「そうねえ、嬉しくないと言えは嘘になるわ。けれど、嬉しいばかりと言えはそれも嘘になるわね。正直、複雑な気持ちよ」

「それは……私が聞いても宜しいのでしょうか」

「そう望むのなら。あなたになら、私も話す事が出来る。けれどその前に」

ダージリンは空になったティーカップを差し出して悪戯っぽく笑った。

「お代わりを頂けるかしら？」



二人がそれぞれ紅茶を一服し、一つずつスコーンを割った時、ダージリンは語り出した。

「ペコ、前任の隊長は知っている？」

「アールグレイ様、ですね。噂だけは聞いています。けれどその名前前は……」

「禁忌<sup>タブー</sup>、ね。本当に優れた隊長だったのに、今や口に名前を出す事すら許されない聖グロ戦車道部の汚点。そして、私の最も尊敬する人」

ダージリンは懐かしむような、悲しむような遠い目をした。

「その人の話を、するわ」

ペコはごくりと喉を鳴らす。常に余裕を見せている先輩が、何時になく深刻な面持ちをした事に緊張をしたからだだった。

「私が高等部に上がってからも戦車道を続けようと思ったのは、みほさんの影響があったから。これは、前に話した事があったわね」

「はい。当時最も憧れていたとも、聞きました」

「そうね、その時点ではその通りよ。けれどその後、尊敬の対象は直ぐに変わったわ。アールグレイ様……マイペースで、お転婆で、感情的な、全然聖グロらしからぬあの人に、私は憧れた。今では、そんなこと口に出す事も出来なくなってしまうたけれどね」

「一体どうして……そんな事になってしまったのですか？ どうして

こんな酷い事に」

「慌てないの」

ダージリンは一口紅茶に口を付けた。

「最初こそ、私はアールグレイ様を敬遠していたわ。嫌っていたと言ってもいい。だって、聖グロの隊長らしい優雅さなんて、欠片もなかったんだもの。良家のお嬢様だなんて全然信じられなかった……それに、よくからかわれたりもしたしね」

「……ダージリン様が私にするよりもですか？」

「そんなものじゃなかったわよ。苛められてるんじゃないかと思ったくらいちよっかいを出されたの。あの人なりの愛情表現だったのでしょうけれど」

ダージリン様の意地悪も愛情表現ですか——ペコはよっぽど聞こうと思ったが止めておいた。

「けれどそんな人でも、一度戦車に乗れば優雅そのものだった。如何なる時も慌てず冷静に対処し、美しい隊列を組んで行進しながら、一滴たりとも紅茶を零さない。敵の挙動を見ただけで作戦を看破し、味方の細かい感情をも瞬時に把握する神がかり的な直感——これは今の私でも真似する事ができないわ。あの人は、正真正銘の天才だった」

「だから、付いていこうと思ったのですか？」

「それもあつた。でも本当の理由は、あの人が心の底から学校を愛していたから。誰よりも聖グロを愛し、発展させ、守護しようとしていたからよ。アールグレイ様の愛校心には敵わない——そう思ったから、私はあの人に付いていこうと決めた。それで、私は副隊長に任命してもらった」

勿論の事だったがダージリンにも後輩の時代があつた事を、ペコは想像できなかった。ペコの中のダージリンは、絶対的な隊長であり、不動の先輩だ。

アールグレイという人の性格が、少なからず今のダージリンに影響しているのかと想像すると、少なからず尊敬の念が湧いてくる。

「アールグレイ様は戦車道界における聖グロの立場向上のために、

色々な方法を取っていたわ。勝利するための戦術の構築は勿論、戦車道連盟とのコネクション作り……特に他校との外交の腕は見事だった。張り巡らされた情報網を伝って、戦車道のある学園艦全ての情報が入ってくる体制を作り上げた。今の聖グロが情報に通じているのは、アールグレイ様のお陰なのよ」

「知りませんでした、そんな事……てつきりダーズリン様が作り上げた体制だとばかり」

「私だなんて、アールグレイ様の遺産を辛うじて維持させているに過ぎないわ」

ダーズリンは苦笑して後輩の誤解を解いた。

「そうして情報網を作り上げたアールグレイ様は最終段階に移った。深淵な戦略の集大成……それが黒森峰女学園との相互協定だった」

「西住流……!」

ペコはハツとした様子を睨み開いた。

「西住流。そう、今年の全国大会準決勝、聖グロはアールグレイ様の指揮をもつても黒森峰に敵わなかった。西住姉妹！私がかつて焦がれた西住流に、私の最も尊敬する隊長は敗れたのよ」

「まさか、それが原因で!」

「いいえ。確かに勝負に敗れたのは悔しい事だったけれど、相手は名高き西住流。敗北もやむなしという意見の方が大きかった。問題はその後……最後の全国大会に敗れたアールグレイ様は結果を受け入れていたけれど、納得はしていなかったのよ」

「そのための、相互協定ですか」

「正解よペコ。アールグレイ様は相互協定に乗じて黒森峰の強さを――西住流の強さの秘訣を見極めようとした。表向きは相互協力、友好関係の強化と言ってるね。それを発表した時は、それはもう評判が良かったわ。黒森峰と聖グロ、戦車道の名門校が手を取り合ったのですから。しかも黒森峰の代表は、西住みほ。黒森峰戦車道部の外交は、彼女が取り仕切っていた。協定に合意するために彼女がこちらの学園艦に来訪した時は、もう、お祭り騒ぎだった」

「みほ様が聖グロに訪れたのですか?!」

「ふふふ……ちようど今のペコみたいに皆興奮していたわね」

私もね——ダージリンは付け加えると、紅茶に口を付ける。ペコはまた自分が興奮してしまった事に気が付いて深呼吸をしたが、胸の高鳴りは治まりそうになかった。

「アールグレイ様とみほさんが同じ卓で向かい合っている光景は、今でも瞼に焼き付いて忘れられないわ」

「尊敬する人の上位二人が揃った訳ですからね……!」

「ペコの言う通り、まるで夢みたいだった。みほさんと直接話は出来なかつたけれど、私に笑いかけてくれたのよ」

「う、羨ましい」

「私も、会議を終えてみほさんと握手をするアールグレイ様が羨ましくて堪らなかつた」

「そんな、握手だなんてっ。きやーっ!」

「落ち着きなさい、オレンジペコ」

遂に言葉に出して制止されたペコが落ち着くまで、実に紅茶二杯を飲みきる時間を要した。

頃合を見計らってダージリンは再び語り出す。

「みほさんとの握手、これが契機だった」

「喜び過ぎてしまったとか」

「その逆よ。アールグレイ様はみほさんの手に触れた途端、みるみる青ざめていったの。滝のように汗を流して、肩は震えていた。近くで見ている私が心配になって駆け寄ったら『来るな!』と大声で止められた。あんなに焦った隊長は初めてだった。そして、アールグレイ様はみほさんの手を振り払うと、この協定は無かつた事にして欲しいと、突然言い始めたのよ」

「え、そんな、どうして……」

「分からない、それが分からないのよペコ。みほさんが理由を聞いてもアールグレイ様は頑なに拒み続けた。遂に逃げる様に部屋から出ると、持ちうる全ての力をもって協定を無かつた事にしようと試みたわ。副隊長の私が訊ねても、はつきりとは答えてくれなかつた。必死の形相で、今にも泣きそうになりながら……」

ダーズリンは、先程見せた遠い目をして続けた。

「けど、あんなに騒がれて、賛同されていた相互協定を無かった事にするなんて不可能だった。既に合意のサインは済ませていたのだから、道理にも通らなかつた。それでもアールグレイ様は主張し続けた『黒森峰とは手を切るべきだ』ってね。アールグレイ様への賞賛の声は、そのまま非難の声に変わったわ」

「それじゃあ、まるで」

「当時、皆が言ったわ『隊長は狂ってしまった』と。自分で持ち出した協定を自分で破棄しようとしたのだから、当然ね。正式な引退まではまだ時間があったのだけれど、アールグレイ様は強引に隊長から引きずり下ろされた。そして、私が隊長になったのよ」

ダーズリンは大きく嘆息して、覚悟を決めた。これから、一番辛い話をしなければならぬ。

「隊長を下ろされたアールグレイ様はOG会への入会も許されず、完全に立場を失った。そうね、簡単に言うのと干されたのよ。『乱心した隊長』として、徹底的に存在を揉み消された。聖グロの華麗な歴史に、汚点があつてはならないと言われてね。そうして私の隊長は、破滅した」

「……その後、黒森峰との相互協定はどうなったのですか。今、その様な話は何も聞きませんが」

「私が隊長に就任した直後、みほさんも黒森峰を追放されたのよ。決勝戦の事故の責任を家から問われて、ね。双方の責任者が急に居なくなつてしまったものだから状況が混乱して、結局立ち消えになつてしまったわ。誰も幸せにならない、本当に残念な結末だった」

「そんな……」

ペコは項垂れた。まさか、そんな不幸な出来事が影で起こっていたとは、想像だにしなかつた。

何時も余裕を湛えているダーズリンに、そんな過去があつたとは。

「一体アールグレイ様はどうして、急に意見を変えたのでしょうか。それだけが分かりません」

「私もよ、ペコ。それだけが分からない。アールグレイ様は天才肌で、

直感に基づいて発言することはあったけれど、決して道理に反した事は言わない人だった。何より、誰よりも学校を愛していた。そんな人が突然、愛する学校の評判を落とす言動をするものかしら？ きつと何かしらの理由があったはずなのよ」

「でも、誰にもそれを打ち明けなかった」

「そう、誰にも……私にも。あの人は目に見えないなにかと孤独に戦い、消えていった……！」

今まで淡々と無機質だったダージリンの声に、震えが混じった。目には僅かな潤みが見て取れる。

ダージリンが他人に弱みを見せる事など、滅多にない。それ程までに、アールグレイの事を慕っていた証拠だった。

「打ち明けて欲しかった。あの時、私にお心を話していてくれたのなら、こんな風にはならなかったかもしれない。それなのに、どうしてあの人は。私が信用出来なかったから、なのかしら。私が力不足だったから……」

「ダージリン様」

ペコは静かに席を立つと、背後からダージリンの肩を優しく抱いた。

当時副隊長であったダージリンの立場を自分に置き換えてみれば、心の痛みは十分過ぎるほど伝わった。

「私には、アールグレイ様のお気持ちは分かりません。けれど、少なくとも私はダージリン様を心から頼っています。ですからダージリン様も私を頼って下さい。未熟者ですが、心の支えくらいにはなってみせます」

「……ありがとう、オレンジペコ」

ダージリンは涙を拭う。

最早、聖グロの隊長は自分なのだ。後輩に慰められているようでは、本当にまだまだだった。

今度はちゃんと背筋を伸ばして、ダージリンは優雅に言う。

「見極めるわ。この練習試合は正に絶好の機会。西住みほという人間がどういう人物なのか、この目で確かめる」

「未熟ながら、お供致します」

意思を固くしたダージリンは、まるで騎士の様に畏まるペコを頼もしく思った。

ダージリンはアールグレイを無念に思うと同時に、何処かで恐れていたのだ。もしかして自分も同じ末路を辿るのではないかと。しかし、その恐れは今、霧散した。

そうだ、私は一人ではない。本心を打ち明ける事の出来る仲間が、ここに居るのではないか。

安心すると、急に悪戯心が出てきた。

畏まるペコに向かい、訊ねてみる。

「ところでペコ。あなたの一番尊敬する人はみほさんかしら、それとも私？」

「愚問です」ペコは即答した。「ダージリン様に決まっています」

「あら……」

後輩を困らせてやろうと思っていたダージリンは、予想外の答えに戸惑った。逆にペコは「してやったり」という表情を浮かべている。

暫しの沈黙の後、二人は大いに笑った。

「ペコ、あなたのそういう所が好きよ」

## 鬼神西住24

西住みほの破門と転校が正式に決定した時、戦車道を有するあらゆる学校は、あの手この手で彼女を引き込もうとした。特別奨学金、特待生待遇、最高の訓練環境——西住みほを引き込む事、即ち黒森峰一強のパワーバランスを突き崩すチャンスに他ならないからだ。

ダーズリン属する聖グロリアーナ女学院も、随分熱心に誘致活動をしたが、遂ぞ実現はしなかった。

西住本家——彼女の母が決して首を縦に振ろうとはしなかったからである。あくまで、戦車に関わりのない普通の少女としての生活を娘に求めたのだ。

そして条件に沿う学校に限定して、娘には選択権を与えた。結果本人に選ばれたのが、大洗女子学園だった。

西住みほは何故大洗を選んだのだろう。

転校先を選ぶにあたり、彼女に提示された条件は「戦車道が行われていない学校」だと、それだけだった筈だ。

西住家の本拠は熊本だ。条件に沿う学校は、きゅうしゅう近場にもあった。

それが何故、はるばる大洗くんだりまで……？

これについては色々な議論があった。「傷心の余りなるべく本家から離れたかったのだ」とか「心を癒す親友が大洗にいるのだ」とか「実は裏で本家から命令されたのだ」とか、いずれにしても、余り前向きな理由ではないように思われた。

世間の目は明らかに少女に同情的であり、対して西住本家には批判的だった。

それでも結局、真相は藪の中。

確かなのは、その選択に何かしらの意図が働いた事だけだった——到着間際の大洗の沿岸。学園艦のデッキに立つダーズリンは目を凝らして、その景色を眺めている。

「この町に何か秘密があるのかしら」

見極めてみせよう。心中に渦巻く、西住みほに対する様々な疑念——それらに決着をつけるためにこの町にきたのだ。



ダージリンは静かに集中力を練った。不要な情報は切り捨て、大切な情報を何一つ見逃さぬように。

故に、クマらしき残酷なキャラクターを掲げた、寂れた建物の事など注意を払おうとは思わなかった。

◆ 艦を降りた途端待っていたのは、人々の歓声と、華やかな管弦の音色だった。

戦車が行く道沿いには、所狭しと地元の住民が押し寄せ、各々手にした聖グロの校章旗を高く振っている。派手に花吹雪を撒き、今にも戦車に群がってきそうな住民を、風紀委員の腕章をした生徒が必死に押さえ込んでいる。

英国風に威風堂々とした行進曲を奏でる吹奏楽部は、一人残らず正装だ。先頭の指揮者が、演出過剰気味に張り切って指揮棒を振っている。

屋台の数も尋常ではない。こうして戦車で進んでいるだけで、何処からか香ばしい匂いが漂ってくる。人の集まりが、更に人を集めているようだ。

気を張っていた聖グロ指揮官、ダージリンは大いに当惑した。隊長でさえそうなのだから、一般隊員たちは尚更だった。

自分たちは、練習試合に来たはずが、何かの手違いで祭りの真っ只中に放り出されてしまったのではないか？

しかし、住民たちは明らかにこちらに向けて聖グロの名を叫んでいる。戦車だ、戦車だ、と目を輝かせて手を振っている。

当惑しつつも戦車から顔を出した車長たちが、ともあれ期待に応えようと小さく手を振り返せば、わあっと一斉に歓声が大きくなった。

今度は笑顔で大きく手を振り返すと、それに比例するように歓声も大きくなった。

「あれが名高い聖グロリアーナ女学院」

「なんて高貴な振る舞いだろう」

「戦車は勇ましいぞ」

「素敵ねえ」

こう言われれば、全く、悪い気はしない。

訳も分からぬまま良い気分にした聖グロ隊は、人波の誘導に従い、やがて試合待機所に辿り着いた。

待機所には、外部からの視界は遮られる構造の天幕テントが張られていた。

「ようこそ、お嬢様方」

入口を潜ると、思わぬ低い声を掛けられた。驚き振り向くと、天幕の内側で英国執事の格好をした若い男が数人、にこやかに佇んでいた。

全員、反射的に心臓が高鳴ってしまう。

聖グロはお嬢様学校だったが、女子校だ。男という生き物には、免疫が無い。

赤面して何も言えなくなってしまう彼女らを、執事は座席へ案内すると、今度は一人一人へ丁寧に紅茶を注ぎ、茶菓子を出した。

恐る恐る紅茶へ口を付けると、芳醇な香りと、上品な口触りが一杯に広がった。菓子は頬が蕩け落ちてしまいそうな味わいで、はしたないと知りながらも、つつい腕が伸びてしまう。

舌が肥えている聖グロ隊員たちが、感心する程の腕前——彼らが怪しい店舗の執事ではなく、訓練を受けた本物プロであることは疑いなかった。

皆が皆、ほっと息をついた。

なんとという、もてなした。

何のために遠路遙々茨城にまで来たのか、一瞬忘れてしまいそうな怒涛の享樂。

彼女たちが何とか体裁を保っていられたのは、この時パンツァージャケツトを身に纏っていたからで、もし普段の制服であれば確実に呑まれていただろう。

天幕の入口が翻った。聖グロ隊員たちは、会話に花を咲かせるのを中断して、そちらを見る。

先んじて入り、垂れ幕を持ち上げる少女は、服装からして大洗の生徒だろう。

後に入ってきたのは、黒い少女だった。

「……西住さんっ」

その笑顔だけは、忘れる筈もない。

気合が抜けていた訳では無いが、不意を打たれたダーズリンが驚いて席を立とうとする。

「ああ、どうかそのまま」

手の平を出して抑えたみほは、執事が引いた椅子に腰掛けた。その隣に、先んじて入ってきていた制服の少女も座る。そうすると、二人は直ぐに頭を下げた。

「大洗女子学園隊長、西住みほです。本日は、よろしくお願いします」  
「同じく副隊長、澤梓です。よろしくお願いします」

ダーズリンは、みほの見るもの全てを安心させるような柔らかな笑顔の前にして、しかし、緊張の息を飲んだ。

憧れ抜いたその人が、自分と同じ立場として対面しておられる。それを無邪気に喜べたなら、どんなに幸福だったか！

どうしても、背後に透けて見てしまうのだ。心から慕っていた、先代の隊長の姿を。見えない何かを恐れ、自ずから破滅へ向かった、アールグレイの涙を。

「聖グロリアーナ女学院隊長を務めております。私が、ダーズリンですわ。こちらこそ、よろしく」

万感の思いで、ダーズリンは名乗った。

黒い少女は、変わらぬ柔らかさで迎えた。

「お久しぶりですね、ダーズリンさん」

「……覚えていてくれたのね」

「それはもちろん。こうして話すのは、初めてでしょうか」

会話の傍ら、みほはテーブルを指で二度突いた。控えていた執事が、慣れた手つきで紅茶を注ぎ、新たな客人二人の前に出す。

みほは執事おとこに見向きもせず（梓は終始どきまぎしていたが）、ただ静かに紅茶に口を付けた。

一連の所作が余りに滑らかで板についていたので、ダーズリンはうっかり見逃しそうになったが、それは本物の執事に対しての、本物

の対応だった。

そうだった。彼女は紛れもなく、本物のお嬢様なのだ。改めて、ダーズリンは西住みほという人間を良く観察した。

終始その表情は穏やかで優しい。出されたカップを控え目に両手で傾ける姿にも、年相応の可愛らしさが滲み出している。

だが、その手は黒い。

漆黒の革手袋が、素肌の色を晒すのを拒んでいる。

手だけではない。シャツも、タイも、ジャケットも、ズボンも、ブーツに至るまで全て光を反射させない、黒い素材に身を包んでいる。それは白基調の制服を着ている隣の副隊長と対比されるようで、余計に際立っていた。

唯一、襟元に付けられた、鉄十字バルケンクロイツを型どるバッジの銀がやけに眩しく感じられた。

人間模様と服装とが、まるで対極。けれど不思議な事に、違和感を感じないのだ。

気高く気品があり、柔和に思っても一度戦車に乗れば凜々しく、そして何より実力がある——それを知っているから、自然と受け入れてしまうのだろうか。

むしろ、似合っているとまで思った程だった。

一挙一動にまで注視していると、それに本人が気が付いた。微笑んだまま、ぱちぱちと何度か瞬きをして見せる。

冷静に目を合わせてはいられない。その意味での神経の太さをダーズリンは持っていなかった。

彼女は魅力的だ。

「良い匂い」

みほは、カップを置いて大きく息を吸った。

「とても繊細で、落ち着く香りです。爽やかで上品な渋みがあつて、それから色も……」

みほは続けて何かを言おうとして、やはり止めた。聖グロリアーナの諸君の前で、あえて長い感想を言うのも野暮だと思ったからだ。た。

だから、ただ微笑んで「美味しい」と言った。

「私はもっぱらコーヒばかりで、紅茶に詳しくないのですが、これは何という葉なんでしょうか」

「ええと……」

ダージリンは少し口ごもった後、照れた様に自分を指差した。他の隊員たちも、一斉にダージリンを指差す。

みほはぼかんとして、やがておかしそうに笑った。

「なるほど、なるほど。道理で美味しい訳ですね。嗚呼、これは良い紅茶です」

恐らく執事が分かかっていて淹れたのだろう。そういう粋な悪戯心は、みほの好むところだった。

可笑しみを抑えきれないように、くつくつと笑い続ける様子を見て、構えていた聖グロ隊員も心を解きほぐされていった。

噂に聞く西住みほとは、その実可愛らしくて、ユーモアの分かる少女ではないか！

この場にいるほぼ全ての隊員は、みほと直接顔を合わせるのが初めてであったが、その第一印象は良好なものとなった。

「西住さん、この様に厚いおもてなしをして頂いて一同感謝していただきますわ」

「いえ、私は何もしてませんよ。少し口を出しただけですから……それに、実を言うと、おもてなしの為ばかりでもないんです」

「というと？」

みほは英国風に二段になっている菓子皿に手を伸ばし、とある一つを摘み取って、丸ごと口に放り込んだ。幸せそうに味わって、飲み込む。

みほが急にはしたくない事をし出したので、ダージリンは目を丸くした。

「マカロン、美味しいですね。私、これには目がなくなってますよ。今日も密かに楽しみにしていたんですよ」

「まあっ」

「それに、ほら」

みほは殊更に辺りを見渡した。壁際には、何人も執事が控えている。

「こういう風に男性に囲まれていると、何と言うか、ええと……」

「へえ?」

「悪い気はしない」

「みほさん、まあ、何て事を仰るの。はしたなくってよ」

「同意してくれませんか」

「ずるいわ。私だって嘘は吐きたくないのよ。何て答えればよろしいのかしら?」

「答えなくたって良いんです。ただ顔に出してくれれば」

「困るわね。うっかり頬を弛める訳にいかなくなってしまうじゃない。ずうっと仏頂面だなんて、疲れてしまいそう」

「それはそれで、淑女らしくて素敵だと思いますよ。特にダーズリンさんなら」

「お上手なこと」

「なんの、本心ですよ」

「ああ危ない、そうやって誘っているのね。その手には引つかからないわよ。聖グロリアーナ女学院の生徒なれば常に淑女たれ。皆だっ  
てそう思っているはずよ……ねえ?」

すまし顔のダーズリンは隣に座っていたオレンジペコに向かって話を振った。

「はびっ!」

余りにも唐突で、二人の会話に笑いを噛み殺す事で精一杯だったペコは素っ頓狂な声を出した。「あわあわあわ」と何やら手で空中を掻く様子に、ダーズリンは大袈裟に眉間に手を当てる。

「ああもう、がっかりだわ」

「も……申し訳ありません……」

「ふぷっ!!」

しよぼんとなったペコを見て、今度は梓が耐え切れずに嘔き出した。

みほは、じろりと梓を見て言う。

「何を笑いますか。私たちが真剣に話をしているのに」

「す……すみません……」

副官二名が揃って小さくなってしまった姿を、隊長たちは厳しい視線で見つめ、その後お互いに頭を下げた。

「うちのオレンジペコが無作法を致しました」

「こちらこそ、副隊長が失礼をしました」

深々と礼をした隊長二人の背中を、申し訳なさそうに見つめていた副官二人は、よく見るとその背中が小刻みに震えている事に気が付いた。

会話を邪魔した事で、もしやそれ程の怒りを買ってしまったのか——と思ったのは、まさに束の間であった。

「ふ……ふふふ……うふふふふっ！」

「くっ……くく……あははははっ！」

直後、ダージリンとみほは同時に顔を上げて、大笑いをした。抱腹絶倒である。

ぽかんとしていた生真面目な副官たちは、やがて自分がからかわれていた事に気が付いた。怒りやら安堵やら羞恥やら、ごった返しの感情に顔を赤くする。

目尻を擦りながらダージリンは言った。

「初めて知りましたわ。西住さんって意地悪で、面白い方ですよのね！」

「ええ、全く困った事に良く誤解されるんです。メディアの弊害でしようね。本当は大した人間ではないんですよ、私は」

『軍神西住』だなんて尊称されていますものね。正直を言うと、今の今まで私もその口だったのよ」

「おこがましい！ 私、『軍神』ですって？ それは、ただ曾お祖母様のための名です。憧れではありますが、同一化しようなどとは思った事も有りません」

「家名に誇りを感じてらっしゃるのね」

「はい……時代錯誤と思われるかもしれませんが」

「そんなことはないわ。とても素敵な事だと思えます」

二人は同時に紅茶に口を付けた。

みほは再びマカロンに手を伸ばして、幸せそうに味わった。あんまり美味しそうに食べるので、ダージリンも一つ取って食べた。そして目を丸くする。

驚いた、これは、本当に美味しい。

思わず弛みかかった頬を、咄嗟に引き締める。

まだ駄目だ。今暫し、根底の所では気を張っていないなくてはならない。本当に知りたい事が、まだ残っている――

「それにしても、お元気そうでした。あんな事があつた後ですから」

遂に、ダージリンは切り出した。

西住みほの本質、今こそ見極めん。

「……転校の事ですね」

「本当に、ご無念でしたでしょう……？」

「ええ、まあ……」

みほは顔を曇らせて、それを誤魔化す様に、また紅茶を飲んだ。僅かに目が泳いでいるのを、ダージリンは見逃さなかった。

効いていると、ダージリンは思った。

「我が聖グロでも、当時はみほさんの話題で持ちきりでしたのよ」

「あはは……お騒がせしました」

「今でこそ、こうして戦車道を通じて交流していますけれど、つい最近までこの学園で戦車道は廃止されていたと聞きます。それをみほさんが再び盛り立てられたとか」

「私だけの力ではありませんよ」

「そうは言っても、この短期間……大したものです。骨が折れたでしょう？ それほど戦車道が恋しかったのかしら」

「ええ、と……」

みほは口ごもる。

やはり、何かやましい事を隠しているのか。その隠し事は、果たしてアールグレイの悲劇に関わっているのか――

「……本当は、戦車道をやるつもりなんて無かつたんです」

みほは、観念した様にぼつりと言った。



「転校させられた事が悲しくて、ショックで……もう戦車道なんてやりたくないと思つて、ここまで来ました。無責任ですけれど、遠くなら何処でも良かったんです。でもある日、生徒会長に声を掛けられたんです——」

それからみほは、詳しい経緯を語った。失意の中、友達に昼食を誘われた事、孤独が救われた事、会長に無理矢理に勧誘された事、それで戦車道復活のために奔走している事——涙ぐましい健気な努力に、この場の全員の胸は急激に切なくなつた。

「——それで私は、ここに居ます」

シンとなつた天幕の中、みほは語り終えた。

聖グロ隊員は情緒溢れるみほの語りに、胸を抑えた。オレンジペコは感涙の滝を流している。

ダージリンは、みほに最も近い位置の梓を確認した。オレンジペコ以上に、何もかもを垂れ流している。

どうやら、虚言ではないらしい。

「酷い話。戦車から離れたくて、その一心で流れ着いたのでしよう。それが、生徒会長とやらの私情に巻き込まれて、さぞかしお辛かつたでしょう……?」

「もちろん最初は不幸だと思いましたが。でも、今は違います」

「それは、どうして」

「昔は、さつき話していた通り、私は色眼鏡で見られる事が多くありました。どこへ行つても西住流の娘、家元の産まれとして、心から歩み寄つてくる人は誰もいなかった」

ただ一人の大馬鹿しんゆうを除いて——みほは心の中で付け足す。

「誰も彼も本当は自分が一番だと思つていくせに、それをひた隠しにして卑屈な目で見上げてくる。憧れや敬意の他に、打算が透けて見えるようです。それは何より私を苦しめた。全く、好みでない」

誰もが息を呑む。こと聖グロに至つては、みほの言葉は、より深く突き刺さる。名誉名声を重んじる聖グロにとって、それを否定しきる事は決してできない。

ダージリンにも、強く思い当たる節があつた。

「けれど、大洗女子学園は違いました。多くが私の事を知らなかった。真つ白だったんです。西住の娘ではなく、未知の一人の人間として接してくれた。だから私は、真つ白の状態に色を付ける事が出来る。本当に嬉しかった!」

「あなたには、仲間ができたのね」

「ええ、大切な人たちです」

「そう……」

一つ頷いて、ダージリンは沈黙した。

みほは仲間を作ったと言う。けれど、逆に大切な人を失った者もいるのだ。

彼女に、問わねばなるまい。

「西住さん……アールグレイという人を覚えている?」

その名を出した途端、オレンジペコを始め、隊員たちは凍結した。聖グロ最大級の禁忌<sup>タブー</sup>、まして他校の生徒の前で口に出して良い名前では無かった。

「先代の隊長さんですね。随分ご無沙汰していますけれど、お元気でですか?」

「そうね、きつと、お元気だと思うわ」

「あの人は強かった。去年の全国大会、黒森峰が最も苦戦を強いられたのは、間違いなく聖グロでした。ですから、あの人に相互協力を持ちかけられた時には、とつても嬉しかったんですよ?」

「あんな事になってしまって、残念だったわ」

「あ……」

みほは気が付いたように畏まって、頭を下げた。

「その件は申し訳ありませんでした」

「どうして謝るの」

「私が途中で抜けてしまったせいで、せつかく持ちかけて下さった話を台無しにしてしまって……出来るのなら、アールグレイさん本人に直接謝りたかった」

「無理よ」

「やはり、怒らせてしまったのでしょうか」

「そうではないけれど……ねえ、みほさん、本当に何も知らないの？」  
「ええと……何か……」

困惑気味に首を傾げるみほの表情からは、外面以上のものは読み取れない。答えに困っておろおろしているのが、むしろ可哀想になった。

これが演技であるならば、余程の役者だ。ダージリンには、その可能性は極小さいものであると感ぜられた。

「こちらの話よ。変な事を言っでごめんなさいね」

「いいえ、こちらこそ……」

過ぎる程に恐縮するみほを見て、ダージリンは小さな恥を感じていた。

こんな無垢な少女を疑うなど、どうかしている。雲の上に感じている少女は、気高い魂の持ち主で、それでいてずっと親しみのある性格だった。

渦巻いていた疑念は、杞憂だったのだ。きっとアールグレイの悲劇は、西住みほとは全く関係のない事が原因だったのだろう。

勝手に疑い、あまつさえ問い詰めようと企んでいた自分が恥ずかしい。

「西住さん。改めて、今日はよろしくお願いします」

人格評価の結論をつける様に、ダージリンは決意して立ち上がり、手を差し出した。

みほは革手袋を取り、照れた様子で控え目に応じた。晒された手の平は、なんてことは無い、普通の可愛らしい手だった。

そして、遂にその手を取り合う。

何も起こらない。

ただ、オレンジペコが羨ましそうに見ている。

「西住さん」

「みほ、で良いです」

「じゃあ、みほさん。良い試合をしましょう」

「はい、お互いに」

微笑み、見つめ合った時、ダージリンは気が付いた。

好敵手の纏う黒装束。その漆黒よりも、なお黒い——吸い込まれそうな色を、彼女は肉体に持っていた。

西住みほは目の色が一番黒いのだ。

◆ 天幕から出た直後、みほは不意に梓の手を握った。手袋は取ったままだ。

「きゃ、隊長っ」

「感じる？」

「そんな、感じるだなんて、言えません……」

「手の感触、何を感じる？」

「あ、ごめんなさい……隊長の手は、ゴツゴツしています。でも嫌な感触ではなくって、これまでの努力を表している様で、むしろ心地がいいです。それから優しさが滲み出ているような温かさが——」

「うん、ありがとう」

梓が何時までも喋り続けそうだったので、早々に手を離れた。

それから、手の平で何度か空気を咀嚼してみて、口を歪めた。

そうだろうさ、当たり前だ。

肉体まで鬼にはなっていない筈だ。

ただの可愛い少女の筈だ。

これで何かが伝わる訳もない。

馬鹿馬鹿しい考え違いだ。

ダーズリンという女、がっかりだ。

拍子抜けだな。

人の悪意より善意を信じたがる、ただの善良で、愚かな人間だった。

あのアールグレイの後継者だというから、全力ではぐらかしてやろうと思ったのに。

あれなら、ここまでもてなしてやる必要も無かったか。

比べて、あの女は本物の天才だった。

去年、結果的に勝てたのは、指揮者の資質如何ではなく、単に部隊の練度の差だ。

その女が、探りを入れてきた。表向きは相互協力と銘打って。

だから、あててやった。

そうしたら、最終的に自滅したらしい。

もう少し立ち向かって来るのかと期待していたのに、ダージリンの言う通り、本当に残念だ。

きつと繊細に過ぎたのだろう。

臆病で、小胆で、学校を愛している故の有能と繊細——おや？

みほに気がつきがあった。落胆から一気に愉快になる。

そうか、そうか。

彼女は似ていたのだな、うちの会長と。

そうと知れていれば、もう少し優しくしてあげたのにな。

全く化けの皮を被るのなら、何重にも被っておくべきだというのに。

それにしても、無邪気な愛嬌を振り撒いてやるのは非常に疲れる。

前の様に『縦』の繋がりを作る方が余程楽だ。

でも、まあ、仕方がない。

滅ぼしてやる価値も無い善良で愚かな人間は、笑顔で支配してやるのが一番良いのだ。

## 鬪鬼西住Ⅰ

華々しい宴会の席での盛り上がりは最高潮に達しようとしていた。積年の働きを評価されての加藤主計頭かすえのかみ清正、肥後転封の上、大幅加増の知らせは、長年親しんできた友たちにとつても喜ばしい知らせであり、こうして集まって宴会を開いたのだった。

「儂は九州という地はとんと知らぬが、かの地一番の猛将とは誰を呼べば良いのであろうか」

酔いも大分回った頃、ふと誰かが言い出した。

それを皮切りに、誰もが口々に私見を言い出す。

全く男というのは、昔からこういう話題が大好きであった。

「島津中務大輔なかつかさだゆう(家久)という者だな。最後の最後まで楯突いた島津どもの中でも一等の兵つわものじゃ」

「いや、関白殿をして鎮西一と称された立花左近将監さきののしょうげん(宗茂)の事であらう。かの者の忠義忠節、実に天晴」

「あいや待たれよ。主計頭(清正)が九州に入られるからには、主計頭が第一であるに決まっておる」

結論はいつまで経っても出なかった。そのうちに肥前の熊だの、雷神だの、阿蘇の軍師だの意見が出て、酔いも手伝い収集が付けられなくなった。

埒が明かぬと覚った 酔っ払い共は、遂に主役である清正に意見を求めた。

「主計頭はどう思う」

これまで静かに様子を見ていた清正は「皆々の意見、もつともである」と前置きをして、話し出した。

「じゃが儂は、皆の言った誰でもないと思う」

驚いたのは客人だ。意見が出尽くしたと感じたからこそ意見を求めたのだから当然である。異口同音に「それは誰ぞ」と清正に尋ねた。

清正ははつきりと答えた。

「九州一の猛将とは、我が配下、西住右馬助うまのすけのことよ！」

そう言った清正の表情は、どこか気持ち良さげであった。

「その者は女子おなじの身で在りながら、馬に乗らば風の如く走り、槍を突かば三人までを容易く貫き、種子島で狙わば針の穴をも通す。皆々が先に出した猛者共とて『鬪鬼西住』の名に恐れをなして手を出さなかつたというではないか。加えて先の戦において、奴は上方の大軍に退かぬばかりか、大立ち回りをしてみせた。西住せいすけの流儀りゅうぎというは正に九州一……いや、儂は日本一と言つても良いと思つておる！」

清正の宣言に、誰もが赤い顔を見合わせた。

九州征伐の折の西住の蛮行はもちろん知っている。しかし『鬪鬼』が女子である事や、實際隈本の小勢力である事から、噂に尾ひれのついた眉唾だと捉えていたのだ。

「疑つておるな」

その様子を見て、清正は言つた。皆は正直に首肯する。

「儂もそう思つておつた。所詮女子よ、玉無しよ、とな。それが大坂で見えた時、見事覆つたわ」

「何があつた」

「それは見る方が早かろう」

清正は手を叩いて人を呼んだ。

暫くすると、手に長い物を携えた小姓がやつてきて、清正に渡した。

清正はそれを見せびらかすように掲げる。

「我が愛槍よ、元は十文字槍であつた。今や、片鎌じゃがな」

「これは……折れておるのか」

「折られたのよ。右馬助と立ち会つた時にの」

「まさか！」

皆は笑つたが、清正の顔は真剣であつたので、次第に笑声は小さくなつた。

まじまじと、片鎌になつた槍を見る。

清正と言へば、言わずと知れた賤ヶ岳七本槍が一人。当然、槍にも並ならぬ心得がある。それがまさか、女子に折られるとは――

「これを折られた時には、天狗の鼻もへし折られたわい。そして決めたのじゃ。何としてもこやつを家臣に召し抱える、とな」

「思い出した。お前、あの時珍しく大坂に出てきたと思つたら、足繁く

何処かに通っておったな。てつきり女でも出来たのかと笑ったもんだが」

「ま、全部は間違っではおらんわな」

それからの宴会は清正による家臣の自慢話ばかりになった。

それは殆どのろけと変わりなかつたが、それを指摘すると、清正は槍を振り回して怒ったので、黙って聞いている他なかつたという。



## 鬼神西住25

ダージリンは危うくティーカップを取り落としそうになった。すんでのところを持ち直したが、中身の紅茶は大いに揺れている。今これに唇を付けたら、顔中を濡らす事になりそうだ。

「どうかされましたか？」

相對する西住みほが心配そうに首を傾げた。

如何にも白々しい。

「み、みほさん。その、後ろのものは」

「戦車ですよ」

「それは私にもそう見えるのだけれど」

「はい、自慢の戦車です」

「本当に？」

「本当です」

戦車だという事ぐらい輪郭を見れば分かる。けれど、心が受け入れ難いと訴えているのだ。

シヨッキングピンクM3リーに、歴史観ごちや混ぜ三突、戦車道に一切関わり無いメッセーじ入り八九式、黄金に輝く成金仕様38(t)。

何て珍妙奇天烈、何て騎士道の欠片もないゲテモノ、何てふざけた、何て、何て、何だって――

強い目眩にふらついたダージリンを、慌ててオレンジペコが支えた。

大洗の隊員たちは揃って口元をひん曲げ相手を観察していたが、それでもティーカップから液体は零れなかったので、無念そうな顔をした。

試合前の挨拶を待つ平原に、両チームは、お互い戦車を背に整列していた。

確かに向こうから派手な物体がやって来ると、さつきから思っていた聖グロチームであったが、何かの宣伝車だろうと推測はしても、戦車だろうとは露とも思っていなかった。なので中から大洗チームが

ぞろぞろ出てきて、整列し始めた時には目玉が飛び出た。

彼女らは甘いもてなしを享受しつつも、静かに闘争心を練り上げていた。あの程度の懐柔で骨抜きになっていては、到底強豪校の選抜メンバーなど務まらない。

あの西住みほが、どんな恐ろしい戦車隊を率いて来るのか——警戒と畏怖によつて、心を武装していた。

それだけに、落差が大き過ぎた。

素晴らしい紅茶ですと親切に説明されて、心をときめかせて待っていたら、出されてきたのがインスタントコーヒーだった時の様なシヨックだ。

明らかにユーモアの域を逸脱している。

「あつ、平気ですか。お確かに」

すまし顔で気を遣う大洗の隊長を、聖グロ隊員たちは、よもや信じられないような目で見つめた。繰り返し、変態戦車とそのすまし面を見比べてみる。その麾下たちは、にやけ面で口をもごもごさせていた。

一つの推測が立った。

まさか、西住みほ様に限つてまさかなのだが。もしかして我々を—

舐めてゐるのではないか？

その推測は、聖グロの矜持を横からビンタした。

先程とは別の意味で手が震え出す。それでもなおティーカップの中身を零すことは無かったが、握力が柄を砕いてしまいそうになった。

ふざけやがって——

我々は高潔な騎士道を穢す者には何人たりとも容赦しないのだ。例え誰であつても、誰であつてもだ。

「随分、個性的でいらつしやるのね」

ペコの腕を離れたダーズリンが低い声で言った。仲間からして何とか平静に見えたが、所詮装いに過ぎない。その証拠に、手の平では石を作っているではないか。

「良いでしょう、おかしくって」

「あなたは、これで笑えるのかしら」

「笑いましたとも、そりやもう。腹を抱えて。あ、笑っていいんですよ」

「結構つ……ところで、どういいうおつもりで、装飾を？」

「もちろん、負かすおつもりで」

「それは大きな勝算の現れかしら」

「見たところ、我々とあなた方では、どうも大差ないようですよ」

「……というと」

みほは、ダージリンの背後で紅茶片手に整列しているレディ気取りを一瞥して、鼻で笑った。

「滑稽でしょ？」

ダージリンは、無礼者の顔に紅茶をぶちまけてやりたい衝動を抑えるのに全理性を費やした。白塗りの柄に、ひびが入る。

何だ、何だ。これは挑発か？

それにしても手が込みすぎている。挑発のためだけに、戦車をこんな風にしたりしない。ただでさえ格上の相手に、迷彩効果を塗り潰す様な、そんな馬鹿な真似はしない。

此奴らは本気だ。本気で舐めてかかっている。騎士道を、聖グロ、戦車道を侮辱しているのだ。

撤回する。

長い間抱いてきた彼女への憧れ、正体不明の恐怖、実際に出会ってみて再認識した敬意——全て撤回だ。今は全部忘れて、容赦無く叩き潰してやる。

意図的な挑発であろうが、もう退くものか。これで黙っていては女が廃る。仮にも淑女を名乗るのなら、張っていないければならぬ誇りがある。決して譲つてはならぬ矜持がある。

敢えて土足で踏み込んで来ると言うのなら、宜しい。迎え撃って差し上げよう。

「悪いけれど、手加減なんてものを期待しないで頂戴ね。例え如何なる相手でも『敵』であれば全力を尽くす、それが聖グロの流儀ですか

ら——宣戦布告よ」

俄に聖グロ隊員たちはざわついた。

宣戦布告。それは聖グロにとって真なる敵と認めた相手への『礼』と、同時に「絶対に叩き潰す」という決定である。

ダージリンが隊長に就任してから、これを明確に宣言したのは初であつた。

本気で怒っていらつしやるのね——隊員たちは息を呑んだ。

淑女は敵意を隠さず、卑怯な奇襲を行わない。事前に敵意を宣言し、その上で、正々堂々と謀略を巡らす。

それが『騎士道』に則つた決闘であると信じているからだ。

「名誉にかけて、ですか」

「それが何かあなたに分かるのかしら」

「さあ？　どの辺にあるものかも知りません」

「……………ッ」

ダージリンは言葉を詰まらせて、肩を震わすと、一転踵を返し戦車へと向かつた。隊員たちもそれに倣う。

誰も言葉は残さなかつた。

しかし、最後に見せた淑女らしからぬ鬼の形相が、大洗女子に全てを伝えた。

かつ剥いでやつた。

みほは、歪みそうになる唇を必死に噛んで表情を殺した。

先の態度は、もちろん画策しての挑発、心にも無い安い侮辱である。

しかし「滑稽」と言つたは、あながち嘘でもなかつた。

行動原理が理解不能だ。

こうでもしてやらなければ相手を『敵』と見なさず、宣戦布告も打てない腰砕け。

言われずとも、こちらはとつくに済んでいるぞ。

常在戦場。

我等は初めからずっと『敵』同士なのだ。

ならば、無言で叩けば良い。音の一つ出なくなるまで潰せば良い。親切な宣言なんて、必要も無い——だが彼女らは絶対にそうしない。

気付いていないのだ。

無意識のうちに、自分を高みに置いている傲慢さに。相手を敵と見なさない事こそ、見下し果てた侮辱であるという事に。

それを棚上げして目先の義憤に燃えるのか。

これを滑稽と言わずして何だろう。

嗚呼きつと、淑女とやらには永遠に成れそうにないと、みほはつくづく思った。



身も竦む様な断崖絶壁。

その縁に伏して、みほと優花里は双眼鏡を覗いていた。試合開始直後、予定通り速やかにこの地点に到達してから、ずっとこうしている。

視線の彼方には、聖グロチームが巻き起こしているであろう土煙が高く昇っている。戦車のシルエットは、未だ発見できない。

「いやあ、怒っていましたね。ダージリンさんの怒り顔なんて滅多に見られませんよ」

「あはは、流石に心が痛んだよ」

「それは本心ですか？」

「笑いそうだった」

「ですよねえっ!!」

「内緒だからね……しい、見えて来たよ」

「あつ、すみません……」

ようやく見えてきた戦車の影を、二人は暫く無言で観察した。

発見。確認。機影、五輜！

マチルダⅡ四輜を、先頭のチャーチルMk. VII（恐らく隊長車だろう）が率いる様な形での横列だ。

砂塵を巻き上げ荒野を進む鋼鉄の馬は、双眼鏡越しにも意識に迫り来る。営々と積み上げられた『理』に基づく美しい行進は、威圧感のみならず、何処か高貴を思い起こさせる様だ。

一糸乱れぬ陣形は、練度の高さ、チームの格を無言のうちに語っていた。

「勇ましいなあ。アレクサンドロスか、はたまたヘラクレスか」

「でなければヘクトルカリユサンドロス、ですわっ！」

「あははっ、それぞれ」

「しかし西住殿、本当に見事な隊列でありますな。あれだけ怒らせた直後だというのに」

「そうかな？ 良く見てみて。綺麗に見えても、一輛一輛が先行しようと思卷いてる。らしくもない。何時もの調子とは、違う」

「え、え、そうですか……？」

優花里は指摘された事を踏まえてじっくり観察してみたが、全く分からない。試合前に聖グロ研究会と称して、過去の試合映像を擦り切れる程見たが、映像の中の行進と今の行進に差があるとは感じられない。

きつと西住殿にしか見えない景色なんだ——優花里は、らしく自分に言い聞かす。知識と経験に裏打ちされた深遠な洞察力は到底小生の及ぶ所ではないのだ。

優花里は諦めて双眼鏡から目を離した。

気後れする事だ。

私は、幾らかでも西住殿の助けになれているのだろうか。西住殿が自ら偵察に出ると言うから、嬉々としてお供すると申し出たけれど、まるでお役に立てていない。むしろ邪魔になっているまで有り得るのではないか——

情け無げに、未だ遠方を臨んでいる隊長を見ると、横顔に垂れる髪が崖から吹き上げる強風に靡いて、激しく頬を叩いていた。それをうつとうしように何度も払い除けるみほの様子は、何だか可愛らしくも艶めいていた。

少し思い付いた。

優花里は双眼鏡を置いて後ろに回ると、荒ぶる横髪をそつと両手で頬に押えつけた。髪の毛はふんわり、もふもふしていた。ちよつとひんやりした頬の温度が、手に気持ちいい。

みほは敵から目を離そうとはしなかったが、微笑んで「ありがとう」と言った。

「こんな事でしかお役に立てず……」

「凄く助かるよ。そのまま、頼むね」

「はっ、ひゃい！」

西住殿のお役に立てて、しかも接触している。

なんて役得!! やっぱりお供を申し出て良かった——あつ、何だか良い匂いがする——

みほが一つの結論を出すのに、そう長い時間は要らなかった。

髪を押さええる両手を優しく払い退けると、すつと立ち上がる。現実  
に引き戻された優花里は、みほの思案が纏まった事を悟った。

「如何でありましょうか」

憧れの西住流の見解はどんなものか。

優花里は好奇心のままに尋ねた。

「聖グロは柄にもなく冷静さを欠いてる。ううん、今だけじゃない。  
今日、聖グロは何一つらしい事をしていない——させなかつたからね。緊張、憧憬、憤怒、心を掻き乱すありつたけを盛ってやった。慣れない事をする、目が曇る。闘争の機微を見落とす。とすれば、必ず嵌る」

みほの顔には子供の様な笑顔が、みるみる広がっていく。

「愉快だなあ」

崖に立ち、敵を遠く見下ろす隊長に、優花里は畏怖した。

試合前からも、敵の勝ちうる要素を限りなく排除する——これが西  
住みほの闘争!

美しいまでの勝利を重ねてこれたのは、きつと目に見えぬ場所でも  
戦っていたからに違いない。

自分はそれを、画面の中ではなく、紙面の上ではなく、実際に目撃  
しているのか。

世間では西住家次女の、真正面から当たらない巧妙な戦い方は、従  
来の西住流の信義とは異なっていると頻繁に言われる。

だが、実際はどうか。

西住みほは勝利へ突き進む意志の純粹結晶だ。

彼女こそ、本物の『西住流』なのだ!

「では勝てますか!?!」

「そこは戦術と腕かな」

詮無き問いにも、みほは楽しそうに答えた。



操縦席に深くもたれ、日除けの操縦教本を顔に被せて、いびきをか  
く麻子は、まるで戦場に身を置いているとは思えぬ様子だった。

と言うより女子高生としてどうなのか、沙織が呆れて首を降る。  
操縦席の天井を外から叩く音がした。

「麻子さん起きて」

偵察から戻った我らが隊長の声だ。直後、同行していた優花里と共  
に車内に戻ってきた。

麻子は怠そうに教本を放り投げて、操縦桿を握った。

「撃つて敵の注意を引き付けます。目標、敵隊長車」

「おを」

「はい」

麻子が戦車を旋回させ大まかに狙いを定め、華がスコープを覗いて  
精密照準を行う。

みほは相変わらず上半身を露出させて、敵から目を離さない。ま  
あ、相当離れているし、至近に弾着すれば上出来だろう。

一瞬後に響く砲撃音。

当たった。

.....

この距離で当てるのか。

「すみません。弾かれました」

「え……ああ、撃破が目的じゃないから大丈夫」

予想外の結果にみほは一瞬間の処理がつかなくなつて、申し訳無さ  
そうに謝る華に応えるのに一拍置く事になった。

頼もしい事だ。これもまた才能の成す神技だろうか。

みほは、湧きかけた仄暗い感情に厚い蓋をして、眼前の状況に集中  
した。

こちらに気が付いた敵勢は、怒りの矛先目掛けて果敢に突進を敢行  
してくる。隊列が乱れるのもお構い無しだ。今度は優花里にも分か



る程、怒り狂っているのがあからさまであった。

それはそうだ。

本当の意味で、不意に横から（しかも隊長車を）ぶたれたのだから。この分だと、直ぐに登ってくるだろう。

「ちゃんと気付いてくれたみたい。うわあ、くわばらくわばら……麻子さん」

「注文は」

「IV号に食いつかせる為に、まず登ってきた敵に背中を視認させます。それから合図を出すので、最短距離で殺戮地点キルゾーンに入って下さい。早いほど良い」

「荒っぽくなるぞ」

「それも面白い」

「笑つてろ」

ぶつきらぼうに返事をした麻子は、徐にヘアバンドを付け直し、長い前髪を全てかき上げた。指十本を順番にぽきぽき鳴らし、操縦桿ハンドドルを握り直す。

ぎよつとしたのは沙織である。

掴まる手すりを求めてばたばたし始めた様子に、優花里や華は首を傾げる。

沙織は知っていた。

幼馴染がこの形態（曰く、マジモード麻子）を取る時は、絶対に穏やかならぬ事態に発展する事を。

ど、ど、ど——

眠っていたIV号のエンジンが唸り始める。

その猛りが増す毎に、普段眠たそうに半分落ちている麻子の瞼は開かれていった。

この断崖を唯一通る登坂道、その背後から土煙が立ち上り始めた。それを確認したみほが腕を高く上げ、発進合図の待機をする。

車内に緊張が走る。

「隊長、追手は早いのか」

「とつても」

「怒っているか」

「まるで火の玉だね」

「怒っているから、早いのか」

「うん、きつとそう」

「そうか——」

怒、怒、怒——

麻子は獰猛に歯を剥いた。

両頬を深く引き裂く歯列は、その持ち主を笑っている様にも、怒っている様にも見せた。

その隙間から大きく呼気を吐き出し、誰も——沙織でさえ聞いたことのない、恐ろしい声色で言った。

「だったら、誰も私に追い付けない」

直後、土煙の中から遂に敵を発見した。

隊長の腕が鋭く振り下ろされる！

「戦車前進ッ!!」

加速装置が踏み抜かれる。乗組員に激しい加速度が叩き付けられた。

◆ 同時、敵の一斉砲撃が開始された。

眠りから解放されたIV号戦車は荒道を猛烈な勢いで駆け抜ける。

装甲に劣るIV号は、背後からの砲撃を食らえば白旗は免れない。それを緩急付けた動きで何度も避け続け、時には飛び出した岩を盾にする事で防ぎ、尚且つ敵との距離を離し続ける麻子の運転技術は正に神がかりであり、聖グロを驚嘆させた。

しかし、その中身は阿鼻叫喚の様相を呈していた。余りにも三次元的な動作が激し過ぎるのだ。

女子たちが趣味で置いた小物はもちろん、重い砲弾さえも、この狭い空間に跳ね回る。

「あららららら、お尻が痛いです」

「ヒヤッホオオウ！ 最高だぜええ!!」

「まままま麻子おっ、もうちよつと、優しく、優しくしてえ！ 吐き

「そうだよおっ！」

「黙れ、荒っぽくなると言っただろ。文句なら上の隊長殿に言え。それとも後ろのクソボケ共に言ってみるか？」

「ひいひい……何か麻子がこわい……！」

幼馴染の抗議を全く取り合わず、一心不乱に運転する麻子の髪は激しく上下に揺さぶられ、怒髪天を衝いている様に見えた。

通信機にしがみついて「もーやだ！」と沙織が絶叫する一方で、みほは指揮もせずに黙りっぱなしであった。

みほは戦車に乗って昂ると、笑ったり手を叩いたりする無邪気を発揮する癖がある事を、皆は連日の練習で知っていたから、この沈黙を逆に不思議に思った。

どうしたのだろう、まさか怖気付いている訳でもあるまいに――

「――Heute wollen wir ein Liedlein singen, Trinken wollen wir den k·hlen Wein！」

その時、混沌極まる車内に響き出したのは、勇ましい異国の歌であった。

みほは笑う代わりに、手を叩く代わりに、大きく歌い始めたのだ。皆がぽかんとする中、優花里だけは派手に吹き出して、一通り笑った後、みほに合わせて合唱を始めた。どうやら、何の歌か知っているらしい。

「Und die Gl·ser sollen dazu klirren, Denn es mu·, es mu· geschieden sein！」

語感からすると、英語ではない。

これは……恐らく独語だ。

みほの歌を聞いたのは誰もが初めてであったが、独語特有の力強い旋律がみほに合っていて、非常に美しいと感じられた。優花里以外の乗組員に分かったのは、そこまでであった。

どうせロクな歌ではないだろう、と麻子は勘繰ってこそいたが（実際にそれは正しい）。

賑やかなるIV号は殺戮地点に差し掛かった。既に敵部隊を大きく引き離れた、余裕の到着である。

この間指揮を任されていた新副隊長、澤梓が、作戦通り味方部隊を高台の上で待機させていた。

「西住隊長、何時でもやれますっ」

IV号は速やかに高台上のポジションに登り、みほは歌唱を中断し、得意気に息巻く副隊長へ「重畳」と短く応じた。

改めて地形を確認する。

IV号が走り、敵が追って来る唯一の登坂道は道幅が狭く、両側を切り立った崖に囲まれている為、回り込みは不可能。

その終点は、おあつらえ向きの高台になっていて、そこに広く陣取れば、敵が左右から並んで登ってくる隙に上から一方的な半包囲射撃が可能になっている。

「まずい作戦だ——」

みほは、河嶋桃が提案した作戦を心内で酷評した。

上記の全ては、それに見合うだけの練度があつてこそ話である。網にかける魚は、相応でなければならぬのだ。

この作戦を今の大洗で仮に実行したとすれば、砲撃の足並み揃わないまま、あれよあれよと逆包囲されチエツクメイト。

しかも、拳動が余りに露骨だ。

味方一輛で一本道に誘い込んで、その先が高台である。そんなの地図を眺めていれば、怒りに正気を失っていたって看破できるだろう。

そうだ、尽くは敵に見抜かれている。

敵は作為を見抜いていて、危惧の如く、逆包囲せしめんと追ってきているのだ。

聖グロリアーナの高水準の練度であれば、大洗など一捻りにできる。

「なればこそ」

みほは右手を、ひよいと軽く顔の横に挙げた。

『砲撃準備』の手信号であった。

各車の砲手は引き金に指をかける。

遙か向こうに、土煙が高く登っているのを、砲手たちはスコープ越しに認めた。

すぐそこにまで、遂に、敵は迫って来ている。

初めての实战、相手は強豪聖グロリアーナ女学院！

ここで外せば作戦は全て瓦解するという事実が重くのしかかり、また「もしや引き金を引いても弾が出ないのでは」という妄想が駆け巡る。

否が応でも砲手たちの呼吸は乱れ、震え、手の平には嫌な汗をかいた（特に桃の狼狽ぶりを見るに耐えなかった）。

無意識に安息を求めて、視線が揺れ動く——いや駄目だ、一点に集中しなければ当たるものも当たらない——

「今回は殲滅戦です」

その時、砲手の耳に声が届いた。

皆が誰より信頼する、友達の声だった。

「殲滅戦……殲滅ですって！ 良い響きですよ。何だかこう、うきうきしちゃいますね。最後の最後までやるんです。これから私たちは、一緒にそういう戦場を作るんですよ。嗚呼、本当に、本当に——」  
声がぶるぶると震え、最後は囁くように「戦車道は、愉快だ」と言った。

砲手たちは、笑った。

西住隊長は何も変わらない。戦車道が好きで好きで堪らないのだ。そんな人の指揮下で、有ること無いこと悩むのも馬鹿馬鹿しい。

いつの間にか、呼吸の荒波は凪いで、汗も引いていた。張り詰めた緊張は、戦車好きな隊長の意志に応えたいという真心に代わった。そうだ、何もかも楽しんでしまえば良い——彼女の様に。

砲手たちは、真つ直ぐな視線で、改めてスコープを覗いた。  
敵が見えた。

狭い道を我先にと争う、猛烈な覇気を感じる。

やはり心底怒っていた。

隊長の手は下ろされない。

まだだ、まだ引き付ける。

敵戦車の順番が決まった。

五輛縦隊、隊長車を最後尾チャイナルに置く慎重ぶりだ。怒っていても最低限の判断力は健在らしい。

一度決まってしまうえば、後は前進あるのみ。聖グロの突進力は、益々増したように見えた。

砲撃合図は出ない。

砲手は歯を食いしばって、指先がすべるのを耐えた。

敵は間もなく、高台へ登る分岐点に差し掛かった。

ここを通過されれば敵は左右に展開し、後はおしまいだ。

合図は出ない。

まだか、まだか、まだか。

もう、耐えられない――

誰もが独断で引き金を引こうとした、その時。

「撃えーっ!!」

叫びと共に、隊長の手は下ろされた。

高台上で一斉に爆音が鳴り響く。

だが、敵戦車には一切命中しない。

大洗は、敵を狙ったのではなかった。

道の両脇にそびえる、崖を狙ったのだ!

貫かれた崖の中で、徹甲榴弾A P H Eの小爆発が連鎖した。崖内部が破壊され、弾着地点を中心に全面にひびが広がってゆく。

次の瞬間、巨大な岩が雪崩をうって聖グロ戦車隊を襲った!

聖グロ隊は突然の事態に驚愕し、足を止めていた。

それが最悪の判断であった。

特に先頭を走っていたマチルダⅡは無事で済まなかった。

砲身の直上に崖崩れが襲来し、それをいとも容易くへし折った。

煙を噴いて白旗を掲げる先頭車と、落ちてきた岩が合わさり、後続の戦車は完全に立ち往生を食った。

次に降り掛かってきた厄災は、大洗戦車隊の一斉砲撃である。前提

として、高所に展開していた大洗の砲撃は、定石を外れず一方的なものであった。

一列縦隊で身動きが取れず、しかも混乱状態の聖グロは甘んじてそれを受ける他なく、ようやく態勢を立て直し、統制を取って殺戮地点キルゾーンを抜け出せたのは、二輦目のマチルダⅡが白旗を振ってからであった。

大洗の損害零に対し、聖グロの損害二。

五対五の殲滅戦であることを考慮すれば、正に殺戮であった。

聖グロ隊が高台へ到達した時、そこは既にもぬけの殻である。みほは完全に引き際を見切っていた。

呆然としたダージリンがキューポラから半身を露出させた時、見えたのは大洗町市街地へ続く道を走り去る、遠目にも丸分かりな、ふざけたカラーリングの大洗戦車隊の背中であった。

頭の中が真っ白になったダージリンは、暫し風に吹かれるままになっっていた。味方の動揺した通信にも、何も反応が出来ない。

ぴくりと、不意にダージリンは顔を上げた。

微かに、風の中に声を感じたからである。

それは、歌声であった。

ダージリンは耳を澄まし、それを聞いた。

そして、その意味を理解した時。

それまでの憤怒以上の激情が心を支配した。

ダージリンは猛獣のような表情で歯を食いしばり、己の戦車を拳で叩いた。何度も何度も、その美しい手に血が滲むまで叩いた。

その歌は謳っていた。

『我ら英国へ進撃する、英国へ進撃する』と。

◆

今日は歌いながら 冷えたワインを飲もう

そしてグラスを打ち鳴らそう

私は別れなければ 行かなければならないから

その手を私に渡しておくれ あなたの真白き手を

さようなら愛しき人よ さようなら愛する人よ

さようなら お元気で  
我ら進撃する 我ら進撃する  
我ら英国へ 英国へ進撃する



## 鬼神西住と親衛隊長4

その日の目覚めは悪かった。

昨夜はセツトしなかった筈の、携帯電話のアラーム音が鳴っている。

重戦車の様に低く唸って、布団の中から手を伸ばし、叩き壊してやろうかと画面を覗くと、それが目覚まし音ではなく、電話の呼び出し音である事によく気が付いた。

陸の、家族からだ。

携帯を耳に当てると、此方が何か言う前に「エリカ、誕生日おめでとう！」と鼓膜を破る様な大声が響いた。それからも色々大声で捲し立てるので、喜ぶ間も無く、割り込む隙も無い。

遂には「母さん、うるさい」と、親に言いたくもない事を言う羽目になった。

すると母も徐々に沈静化して、改めて「おめでとう」とか「元気でやってるの」とか他愛も無い事を話した。

私は終始適当に相槌を打っていただけだったけれど、一通り話し終えると、母は最後に「ありがとう、エリカ」と優しく言って通話を終えた。

自分の何に対して感謝されたのか、皆目分からなかった。

沈黙した携帯電話の画面を見ると、メールが一通届いていた。送り主は姉バカと表示されていた。

内容は『誕生日おめでとう』と、面倒臭さが透けて見える様であったが、一応『ありがとう』と返しておいた。返信は勿論来なかった。

姉妹なんてものは、それで十分なのだ。

これ以上は、鬱陶しいだけ。

今日は期末試験後の休みで、予定も無い。果たすべき責務は全て果たしたので、再びベッドに沈もうと試みた。

がしかし、健康的な生活習慣が染み付いた身体は朝食を望み、頭は冴える一方だった。

珍しく戦車道の練習も無い日だというのに、結局は定刻通りに起き

てしまった。

仕方無しに朝食を済ませ、制服を着込み、髪を梳いていると、行き先も決めていない癖に何処かに出かけるつもりでいた事に気が付いた。

家にこもっているのは別に嫌いじゃないのに、何故そんな行動をしているのか、自分で自分の説明がつかなかった。

妙な違和感を感じながら、銀の腕輪に手を伸ばす。『Mine Ehre heißt Klann血盟こそ我が名誉』と彫られたそれを装着するのに、未だ一片の迷いも感じなかった。



家を出ても、やはり何処に行くでもなく、学園艦上をぶらついているうちに昼になった。食料を求めて入った馴染みのコンビニできよろきよろしていると、店員に怪訝な目で見られたので、慌てて買い物を済ませて出た。

その後はコンビニのビニール袋をぶら下げて、休む事無く巡回している通学バスで学校に向かった。

足の向くままに任せていたら、戦車のガレージに辿り着いてしまった。誰も居らず、ガレージの扉には鍵が掛かっている。当然だ。黒森峰戦車道部においては、休息も訓練の一部なのだから。

むしろ何で私は休んでいないのか。

職員室にまで鍵を借りに行くと、先生に変な目で見られていたまねなかった。

逃げる様にガレージに転がり込んだ私は、独りで愛車のティーガーIIを眺めながら食事を取ったが、戦車は何のおかずにもなりはしなかった。

胃が満たされた後は、備品の手入れをする訳でもなく、戦車の周囲を歩き回ってみたり、射撃訓練場をうろろろしてみたり、空っぽになった副隊長室の扉を開け閉めしてみたり——とにかく実のない行為を繰り返し、そのうちに日が暮れてしまった。

一体私は何をしているのだろうか？

傍から見れば……否、自分をして奇行としか言いようの無い行為に

貴重な休日を費やし、残ったのは疲労と虚無感だけだ。

例え狂ってしまったと指差されても仕方がないではないか——  
自覚した途端、急に肩が重くなつて、失意のうちに学校を去る事にした。

帰りのバスの中では、やはり独りで、一番後ろの広い席に座った。  
夕日が横から射し込み、世界の全てを朱に染めている。ふと窓の外に目をやると、海に沈みゆく太陽が見えた。

「ああ」

それが理由も無く悲しい光に見えて、私はらしくもなく涙ぐんだ。  
涙が一筋流れて、慌ててそれを拭いた。

こんな女々しい感傷は、逸見エリカに似合わない。ロマンチストつて柄でもないだろう。

心底自分が気色悪い。

夕日が眩しいと言うのなら、今すぐ目を閉じてしまえば良いと分かっている。

けれど、どうして。

私はそれを、ずっと眺めていたいと思ってしまったのだ。

◆

バスを降りて、私はとある場所に向かっていた。

今度は確固たる意志を持って、足を動かしている。

あの場所で夕日を見たい——正直まだ気色悪かったけれど、そう思ってしまったものは仕方無い。一度決めたのなら四の五の言わずに行動あるのみ、理由なんてどうでもいい。

私はそれ以上何も考えない様にして、ひたすら足を動かした。

海沿いの閑静な高台に、ぽつんとあるベンチ。

ほとんど人が訪れず、物思いに沈みたい時には丁度いい——何て言えば聞こえは良いが、要は誰も寄り付かない朽ちかけの腰掛けだ。

思い入れがあるでも、頻繁に通っている訳でもない。ただ見聞きして知っているだけだ。

普通の女子高生なら、制服で座ろうだなんて気には絶対にならないだろう。

だが、今日の私は普通ではない。  
奇行と言うなら今更だ。

とにかく私は、何があるうとその場所に座ると心に決めた。これを撤回してしまつては、本気で私が私でなくなつてしまふ気分すらしていた。

我ながら訳が分からない。

今日一日、謎の原動力に突き動かされてここまで来た。きっと今回も徒労で終わるだろう。しかし、そのことで怒りは欠片も無い。

何故だか、少し悲しいだけだ。

私は早足で高台を登った。

一日中歩き回つて、くたびれた足に喝を入れながらずんずん登つた。

そして勢い良く高台を登りきつた時、海から水平に射し込む陽光が目を灼いた。思わず手で顔を覆い、細めた目を徐々に開くと、ベンチに人影がある事に気が付いた。

逆光で真つ黒に見える人影に、しかし、私は確信があつた。

みつともなく駆け出したくなる気持ちを必死に抑え、少しでも格好をつけようとする私は滑稽だろう。最早格好なんてつくものでもないのに。

けれどそんなのもう、どうでも良い。

私は歩いて、近付いて、そして――

「エリカ」

黒い影は、振り向かず私を呼んだ。

私が抱いた確信は、向こうにも通じていた。

「みほ」

その名を口にするだけで、全ての徒労が帳消しになる気がした。

私は暫しその気持ちを噛み締めていて、みほが「座つて」と言うまで立ちっぱなしだった。

私はみほの隣に、少し間を開けて座つた。古いベンチが、今にも壊れそうに軋む。

「遅いよ、エリカ」

「待っててなんて、言っていないわ」

「私に会いたいかなあつて思ってたんだけれど」

「どうしてそんな事が分かるの」

「エリカは分かりやすいから」

「残念ね。見当違いよ」

「違うの？」

「的外れも甚だしいわ」

「じゃあ、どうして此処に」

反射的に否定したは良いものの、咄嗟に言葉が出てこない。

私は何かそれらしい理由を考えたが、今日一日の己の奇行が頭によぎると、実は全く彼女の言った通りであつて、言い逃れは不可能であるように思えた。

自覚すると急に頬が熱くなってきた。

そんな、そんな事のために私は、狂ってしまったのか。畜生、何て事だ——

「夕日。夕日を見に来たのよ」

「……あはっ」

「なによ」

「だって夕日、夕日だって。あははっ、エリカが夕日を」

「なっ、別に良いじゃない。私だって女子なんだから」

「女子」

みほはくつくつ笑うばかりで、真剣に捉えてくれなかった（実際言い訳なのだが）。しかし、良く考えれば、私の発言は悪い冗談も良い所だ。

恥ずかしくて反論する気も起きず、ただ黙ってそっぽを向いた。せめて見に来たのが夕日で良かった。赤くなっているだろう頬は、隠してくれるだろうから。

「ごめんごめん。そうだよ。偶にはこうして見るのも、良いよね」

神妙な顔を作つて、みほは一応謝ってくれたが、頬の熱が引くまで顔を見る事が出来なかつた。知つてか知らずか、みほもじつと待っていてくれた。こういう所が、本当にありがたい（絶対に言わないけれ

ど)。

私は話題を変えるべく話し出した。

「そんな事より、期末試験はどうだった」

「うーん、まあまあ」

「あなたの『まあまあ』は信用出来ないわ……」

「そっちはどうだったの」

「被害甚大ね」

「駄目だよ。文武両道が戦車道部の部訓なんだから」

「この時期やる事が多過ぎるのよ。先輩たちがこの前卒業したばかりで、その引き継ぎも終わらないのに勉強なんてしてる暇が無かったわ」

「言い訳だね」

「そうよ」

先輩たちは本当に最後の最後まで面倒を見てくれた。去年の全国大会で十連覇を飾ったというのに、それでも後輩を心配して、教える事は全て教えてくれた。

私たちは、その恩に報いなければならぬ。

「でも本当に大変なのはこれからよ、みほ。先輩たちが居なくなつたからには、全体的な練度も下がる。今年の全国大会を制するには、隊員を徹底的に叩き直さないと」

「そうだね」

「親衛隊も放つては置けないわ。新生も入ってくるし、更に規模を拡張して、今までとは違う教育方針を決めなくちゃならないわ。これからは、私たちも先輩になるんだから」

「うん」

「あなたも今年からは本格的に立場が固まるわ。もう誰にも揺るがせない副隊長として、皆をまとめて——」

「エリカ」

みほは私の話を遮って、言った。その声には有無を言わせぬ決意めいた響きがあった。

夕日が黒い海に沈みかけた、その時だった。

「転校が決まったよ」

私は、硬直した。

最も聞きたくない事を、最も言つて欲しくない人から聞いた気がした。

辛うじて、声を絞り出す。

「今、何を、言ったの」

「今日正式に破門されたんだ。私はもう『西住流』を名乗るのは許されないんだって」

「分からない」

「大洗女子学園っていう学校に行くの。戦車道は、やってない学校。だから、今年全国大会に出るのも——」

「分からないわっ!」

私は立ち上がって叫んだ。

みほの言っている事が一つも理解出来なかった。

「その件は部の皆で嘆願して許してもらったじゃない、それなのにどうして、今更っ!」

「……お母さんは、許していなかったんだよ。ううん、許すつもりなんて最初から無かったんだと思う」

「大洗って何処よ、九州!」

「茨城県」

「知らないわ」

「関東だよ」

「知らないっ!」

耳を塞ぐ私に、みほは困った様に首を傾げた。

私は、自分ばかりが取り乱して、当の本人が冷静でいる事に一番腹が立った。

みほの胸ぐらを掴んで無理矢理立たせる。驚く程に抵抗が無くて、またそれが私の怒りを誘った。

「あなたはそれで良いの。この黒森峰女学園を、故郷を捨てろって言

われているのよ!？」

「離してよ」

「それどころか、西住流の名前までっ。あなたは今まで戦車道に命を賭けていたんじゃないの。何時の日か『正調西住流』を復活させるって言ってたでしょ!？」

「言った」

「だったら泣きなさいよ、喚きなさいよ。何でそんなに冷静でいられるの。悔しいのなら、悲しいのなら、此処に残りたいって母親にぶつければ良いじゃないっ!」

「無駄だよ」

「どうしてやらないうちから分かるのっ!？」

私はみほの襟首を掴んだまま揺さぶった。

何もかもに絶望した様な渴いた目は、私の憧れる西住みほという人間に、余りにも似つかわしくないと感じた。

みほにだけは、そんな目をして欲しくなかったのに。

「エリカ、今日は誕生日だよね」

みほは不気味な程の無表情で言った。

何度も何度も首を揺さぶっているうちに、遂には陽が沈み、朱に代わり闇が世界を支配していた。

「それに何の関係が——」

「電話はもらった?」

「え……」

「前に、私の時に教えてくれたよね。誕生日は毎年家族から電話をもらうって。それで、お母さんとは何を話したの? 仲が悪いつていう姉さんからも、連絡くらいはもらったのかな?」

「う、あ」

「良いよね、エリカ」

私は堪らず手を離して、立っていられずに、その場に崩れた。覗いてしまった。

みほの渴いた瞳の奥に巢食ったなにか——それを覗いて見えたのは、悲しみでもなく、憎悪でもなく——荒れ狂う嫉妬だった。



とても、その顔を見ればしなかった。

みほに『敵』だと認識された時でさえ目を逸らさず、正面から立ち向かった私だというのに、今の弱った彼女を見る事に耐えられなかった。

私は幾千の敵を恐れない。

例え最後の一輛になって、絶望に追い詰められ、強大な力に脅かされようとも、私は迷い無く進んでゆく事が出来るだろう。

己の道を貫き通した、その果てのものを恐れ、歩みを止めるぐらゐならば死んだ方がましだ。

だが、何という事か。

たった独りの、哀れな子供を直視する勇氣を持たなかった！

みほの言う様に、産みの親から電話をもらった時に、私が何を思ったか。この世に一人の姉に返事を返す時に何を感じていたか。

私は、ひたすら面倒臭いと思っていた。

独りの子供がどれだけ求めても、得られない絆をぞんざいに扱ったんだ。

みほは見抜いているんだ。

私は、分かりやすいから。

その無意識が、どれだけこの子を傷付けてきたのだろうか。

私は西住みほという戦車乗りを理解してきたのだろうか。尊敬する副隊長、理性の人間、恐ろしい化物——そして無二の親友。

それら全ての面を間違ひなく知っていた。

しかし、何もかもを奪われて、最後に残った見るに耐えない姿は知らなかった。

罪の意識に押し潰されそうになりながら、私は涙を落とした。

みほが泣かないから、代わりに私が泣いたのだ。

「嗚呼、どうして。あなただけが全てを失わなければならないの。どうして、あの人たちは何もかもを奪っていくの——」

独りの少女をこんなにしたのは誰だ、瞳の奥の化物を育てたのは誰だ、泣かさなくしたのは誰だ！

誰もかもだ。勿論、私すらもその一端だ。

誰も気付いてあげなかった。ひたすら目前の化物をおぞましいと忌み嫌い、自分の罪など全く存じなかった。この子の必死の叫びに、嘆きに、延々と耳を塞ぎ続けてきた。

今のみほを作り上げたのは、この世の全て——この世の全てが、彼女を望まなかつたのだ。

嗚呼、あの人たちがほんの少しでも、この子を見てあげたなら、きつと。

「私ね、お母さんに言われたよ」

平伏した私の頭上に、無機質な声が投げ掛けられた。私は顔を上げたが、辺りは余りに暗く、既にみほは背を向けていた。

「転校先は何処に行けば良いんですかって聞いたの。そしたらね『何処でも良い』だって。『何処へでも好きな所へ行け』って言うんだよ。それで本当に良いんですかって聞いたら『良い』って——」

みほは、その場から歩いて、海への落下を防止する柵にもたれると、濁いた笑いを浮かべて言った。

無機質な声は、僅かに掠れていた。言葉を喉から押し出すのが、難しい様だった。

「何処でも同じだよ。此処じゃないなら、私の育った故郷じゃないなら、西住の家が無いなら、仲間が居ないなら、戦車道も出来ないなら——あなたが居ないのなら！」

みほは顔に両手を当てて、暗い海に向かって叫んだ。誰に向けた訳でもない、独りきりの叫びだった。

「なのと言われたんだ『何処でも良い』って。何処でも良い訳がないでしょ。私は……私は、ずっと此処に居たのに。ずっと此処に居たかったのに。私は、何の為に——」

最後は海に消え入るように、声は無くなった。その後には言うべき言葉すら、失ってしまった様だった。

みほは顔に両手を当てたまま、私に振り向いた。

「エリカ、やっぱり私は正しかった。西住流は、もう駄目だ。許容の歪みを越している。誰かが正さなくちゃならない。最後の不安要素も奪われた。今、ようやく分かったよ」

みほは手を退かし、私を真つ直ぐ見た。

その目には、最早嫉妬は映っておらず、新たな煉獄の炎が灯つていた。

私の知らない人間になってしまった気がした。

「失つたものは取り返す、手に入らないのならもう要らない。だから私は今度こそ、正しい闘争を始めよう。私は西住流を救う！ どれだけ時間を費やそうと、必ず成し遂げてみせる。その為になら敵を滅ぼし、己を殺す。例え毛の一本、心の欠片に至るまで、この心身を惜しみはしない。大義を回復し、正しい『道』を歩く！」

新たな生きる指針を得た様に、熱い熱意を込めて、みほはそれを宣言した。身体に活力が漲り、生命力が迸っている。今まで以上の強い意志を、全身から感じた。

また一つ、みほは強くなったのだと確信した。

私は、涙が止まらなかった。

何故なら、その気高い意志が、不退転の強さが、みほにとって無価値であると感じてしまったからだ——そして、それをみほに伝える事が、どうしても出来なかったからだ。

「エリカ、約束して」

みほは、伏した私の手を強く取って立ち上げた。

「私は此処を去ってゆく。その後で、どんな敵が現れても畏れず、黒森峰と共に闘って。例え傍に居なくても、無謀にも勇敢に立ち向かう、あなたはあなたで在って欲しい——私の好きな、逸見エリカで在って欲しい。そうでなければ、私は居なくなる事が出来ないよ」

私はみほの手を力の限り握り返した。

涙でぐしゃぐしゃになりながら、それでも心の限りを尽くして約束した。

「約束するわ。私は闘う、命の限り。どんな敵も粉碎してみせる。私私が私で在る為に。あなたが好いてくれた、私で在る為に。私は、絶対に西住みほを忘れない！」

「……エリカ、エリカ。私の、たった一人の」

最早、言葉は要らなかった。

真つ暗な世界の中で、私たちは何も言わずに抱擁した。

私は泣いた、みほは泣かなかつた。

みほは去つてゆく。

私は残る。

我々は、離れてゆく。

私は、抱き合つた温もりを感じながら、密かに誓つた。何時か、何時の日か、私はみほを取り返す。やられたままでは、決して終わらせない。そんなの私が許さない。

Meine Ehre heißt Klein  
血盟こそ我が名誉！

みほが独りきりで闘う様に、私も独りで闘い抜いてみせる。邪魔しようとして試むならば、何人たりとも粉碎してやる。

身体が一体化してしまふ程に強く抱き合つて、みほは私の耳元で静かに言った。

「お誕生日おめでとう。此処に居てくれて本当にありがとう、エリカ」  
鈍い私はやっと気が付いた。

そうか、私の母親は、そういう想いで――

## 鬼神西住26

「ダージリン。一番恐ろしい敵が分かるかい」

「怒っている相手ですか」

「平静を欠いた相手は逆に手玉に取れるさ」

「性根の悪い人とか」

「こちらも根性を悪くして考えれば良い」

「まさか、己自身などと言うのですか」

「そんな殊勝な話を私がすると思う？」

「……分かりません、アールグレイ様。意地悪です、教えてください」

「ダージリン、実に簡単な事なんだ。けれど皆、成長する過程で忘れてしまう。一番恐ろしい相手、それはね——」

◆ 「指揮者としての姿勢の問題かな」

聖グロリアーナの戦車隊を遠く置き去りにして、大洗市街地へ向かう道すがら、西住みほは請われるままに、自身の哲学を述べた。

「敵を見て、味方を見て、これを知らなければならぬ。敗北の価値とは何か、勝利の益とは何か、考え続けなければならない。でも、それに囚われてしまつては全く本末転倒。私は勝利に固執した幾人の指揮者に会つてきた。彼女らは、目先の勝利を得たいがために目を血走らせていたよ。けれど私の感想は何時も同じ——底が知れる」

面白くも何とも無いと、無敗の指揮者は淡々と続ける。

「指揮者というのは、頭の片隅で理性を分離しておかなければならぬ。でなければ、真の目標を見失つてしまうからね。そうなつてしまつと結局最後に残るのは、勝ちでも負けでもない。不毛だよ。仮にも皆の信頼を受け、一軍を任される身であるなら、個人的な感情に皆を巻き込んだりならない」

電波に乗せて言葉を飛ばした先で、各車の車長たちは無言で何度も頷いた。

「結果、こうなる。つまりダージリンさんは、指揮者としての誠実を欠いたつて訳だね」

背後を振り返っても、既に形すら見えない敵勢の惨憺たる有様を想像して皆はにやりとした。

「けれど西住隊長」

沙織が一年生チームからの電波を受信した。車長の梓が、少し言うのを躊躇ってから言う。

「私は、私たちは、西住隊長に付いていくのが楽しくあります。隊長は、よく笑いますから」

副隊長の心を聞いたみほは、顎を撫でながら沈黙した。余計な事を言ってしまったか、と梓が後悔し始めた時、みほは神妙に言った。

「それを言われると、痛い」

通信上で、誰かが吹き出した。連られて、皆も笑った。

我らの隊長は実に素直だ。良きも悪きも、事実をありのまま受け止められるという美德を持っている。そんな人に付いてゆける事は、幸運だ。

苦笑するばかりのみほは、梓の素直な言葉が存外鋭い指摘であると感じていた。

確かに、今述べたのは黒森峰時代の哲学だ。昔はそうそう口を開けて笑う機会など無かった。統率者として、軽くなってしまうと考えていたからだ。

だがきつと、大洗に向いているのは、違う手法なのだ。友達か。

全く、その関係性には馴染みが無かった。

自身を上置くのではなく、並列に溶け込ませる手段を、良く習得していなかった。そして、その効果についても未だ計り知れていない。

「そうだ西住、作戦名を決めろ」

みほが思索していると、桃からの通信が入った。瞬間的に、みほは意識を切り替える。

「作戦名？」

「そうだ、何かあった方が格好がつくだろう。引き締まる」

「確かに、名前は大切ですよね」

珍しく桃の提案が的を射ていた。

みほは暫し真剣に考えて、自信まんまんで伝えた。

「こそこそ作戦ですっ！ 地の利がある町にこそこそ潜みながら、敵の隙を狙う作戦なので」

「こそこそ……作戦……？」

皆が皆、顔を合わせた。桃はそれきり絶句している。

次の瞬間には、通信上に爆笑が飛び交った。

耳がきーんとなって、思わず顔をしかめたみほは咽喉マイクのイヤホンを外した。

何時もこうだ。昔から頭を捻って一生懸命に考えた作戦名を伝えるとき（あの西住みほ親衛隊でさえ）皆して笑うので、こればかりは姉に任せきりだった。

簡潔で分かりやすい良い名前だと思っただけけれど――

いくら考えてもさっぱり理由が分からないので、みほは首を傾げる他ないのだった。



「やめて下さいダーズリン様、おやめ下さいっ！」

ダーズリンが何度目かも分からぬ拳を戦車に叩きつけようとした時、悲鳴にも似た声を上げてオレンジペコが腰にすがり付いた。

「お願いです、もう傷付けるのは、やめて下さい」

ペコの今にも泣き出しそうな顔を見て、このぐらいで戦車が傷付くわけないだろうと思っただが、腹心の視線の先――己の手を見ると、血塗れになっている事に気が付いた。

滴る紅に気が付いた途端、遅れた痛みがやって来る。振り上げた拳は下ろされず、ダーズリンは苦痛の表情を浮かべて拳を胸に抱え込んだ。

言葉にならない唸りをたてる。

何たる無様！

怒りに我を忘れ、ひたすら敵の尻尾を追いかけた結果がこれだ。烏合の衆らしい、間抜けな作戦だと思っただけでいい。我々は、逃げ惑う狐を追う狩人のつもりでいたのだ。その実、誘い込まれていたとも知

らずに。

「私たちは、何様のつもりで……っ」

ダージリンは一人悪態をついた。何が余裕だ、淑女だ。この様を見て、誰がそれを語れるものか。

傷がずきずき痛む。血が流れる程に頭は明晰になってゆく様だ。

そして、ようやく思い出したのだ。獲物に過ぎぬと断じていた敵が、誰だったか。憧れ、敬い、畏れていたその人が誰だったか。

彼方なる敵は常勝無敗『軍神』の再来だ！

矜持は畏れを霞ませ、怒りは敵を忘却させる。

つまりは全てか。今日の全ての段取りは、仕組まれた茶番であり、間抜けにも踊らされたのだ。

権謀術数は聖グロリアーナの十八番である。我々は読み合いに負け、そして戦車戦でも負けようとしているのか。

大洗は戦車のみを破壊したのみにあらず、積み上げられた自信をも粉碎していったのだ。

何が完全なる勝利であり、敗北であるのか——西住みほは理解し、それを欠片も敵に覺らせる事なく、実行した。

舌を巻く絶技。

敵に回して、これほど厄介な相手がいるだろうか。

『軍神』の再来——言うなればただの言葉。しかし、言われるからには理由がある。今初めて、その理由の重みが、肩にのしかかった。

ダージリンは何時もの減らず口すら叩けず、顔を伏して歯を食いしばる他なかった。

ふと、指に重みを感じた。真つ赤になった目をやると、ティーカップが指先に引つかかっているのに気が付いた。

とうに紅茶なかもなど残ってはいない。先の落石の衝撃で、四方八方に撒き散らされ、多くはタンクジャケットの染みになっていた。

役割無くして、それでも指先にぶら下がり続けるカップ——ダージリンは神経が切れそうになった。

「総員に伝達」

激情に震える声で、随分長い間ぶりの指令を下した。



「カップを手放しなさい。ティータイムは終わり——淑女はもう終わりよ」

試合中でも常に紅茶を嗜む余裕を持った淑女たれ——不変の伝統は聖グロに入学した時から言い聞かされてきたし、言い聞かせてきた。

それを棄てると、ダージリンは言った。

聖グロ隊長として、これは衝撃発言だった。他校の生徒には理解しがたいであろうが、紅茶を退けるといふのは彼女らにとって大問題なのだ。

これは最早、何振り構わずぶつかるといふ他はないという、ダージリン断腸の思いの現れだった。

後々OG会に文句を言われること間違いない。

しかし、しかしだ、ここで勝負を投げ出し、最後の矜持までも失うよりはずっとマシだ！

「ダージリン様、お言葉ですが、それは無理かと」

隊長車専属の通信手が言った。

「無理、無理ですって？なるほど、あなたたちは伝統にしがみついて矜持を棄てるつもり。嗚呼、だとすれば情けない。私は沈まぬ太陽の沈む時を見ているのね！」

天を仰いで嘆く隊長に、通信手は恐縮しながら申し開いた。

「違うんです、ダージリン様。手放したくとも、できないのです」

「……どういふことかしら」

「先の落石騒ぎで、皆カップを落として割ったらしいのです。もう誰も手が空きです、恥ずかしながら……」

「えっ、皆、割ってしまったの」

「はい一人残らず、全員です。今カップを持っているのはダージリン様だけですよ」

ダージリンは、啞然として手元を見た。聖グロ最後のティーカップ。底に僅か数ミリばかりの紅茶がゆらゆら、惨めにも取り残されていた。

神経がぷつりと切れる音がした。

「……あはっ、あはははははははっ！」

堪えようもない可笑しさが込み上げた。ダージリンは「うふふ」でも「おほほ」でもなく「あはは」と哄笑した。手の痛みも忘れ、今度は違う意味で車体をばんばん叩く。

オレンジペコなどは、行為の意味を解せず顔面蒼白になっている。そうだろうとも、この可笑しみは隊長にしか理解出来まい。

ダージリンは状況を忘れた様に笑い続けた。

やがて、ふつと笑い止めると、ティーカップを振り上げ、思い切り車体に叩き付けた！

最後のカップは高い音を立て、正に砕け散った。散った欠片の一つ一つが陽光を反射させ煌めいた。ダージリンは「スツとしたわ」と爽やかな顔で言った。

「少し、ほんの少しだけ私の肝が据わっていたみたい。なら、そうね。私が率いるしかないのでしょうね。それで？ あなたたち、まだ闘志は健在かしら」

その声からは怒気が消え去り、むしろ穏やかでさえあった。下で青くなっていた腹心が、はつと隊長を見上げ、息を飲んだ。

その透き通った碧眼にあったのは、確固たる覚悟。あらゆる感情を続べた、決して掻き消せない心の炎。

美しい。

これまで見てきたダージリンの表情で、ペコは今ほど華麗な姿を見た事は無かった。

ダージリン様の覚悟にお応えしたい——既に宣戦布告は済んでいる。ならば責務を果たさねばなるまい。

ペコは唇をぎゅつと噛んだ。

「……被害甚大、されど我ら士気軒昂！ 決してこのままでは終われません。あなたの命令を下さい。それで私たちは何処へでも駆けま  
す、どんな敵とも闘います。さあ命令を！」  
オーダー

皆を代表して、オレンジペコが先んじた。胸に手を添える様は、まるで騎士道シヴァルリイに準じていた。

消沈していた隊員たちも、口々に応じた。消えかけていた闘志の炎

が、ダージリンの覚悟によって再び灯されたのだ。

息を吹き返した仲間の返答に「よろしい」と満足げに伝達し、無線機から口を離すと、足元の騎士ナイトを見つめた。

「ペコ、一番恐ろしい敵が分かる？」

何時かの思い出を想起しながら、ダージリンは問うた。ペコは上目遣いに首を傾げる。

「それはね、笑っている敵よ。何故なら、純粹に闘いを楽しんでいるから。楽しみが一番大切で、それ以外は二の次。だから主観に基づく躊躇いが混じらない。重大な決断をも即刻下す——勝ち負けなんてどうでもいいから。始末に負えない」

「そんなの……」

「狂っているわ。凡そまともな精神じゃない。闘うために闘っているだなんて。でもね、初めはきつと誰もがそうなのよ。戦車に乗って、闘う事自体が楽しくて仕方がない——あなたにも覚えがなくて？」

「……はい」

「普通、その純粹は、無垢は、時と共に忘れられるわ。成長か、慣れか、或いは限界を感じて。でももし、それを保ち続けているとしたら」

「まさか、それが西住みほ様だと？」

「どうかしら、笑いにも色々ある。本物偽物、喜怒哀楽。人は様々な理由で笑うものよ。みほさんの笑顔の由来が何なのか、はつきりとは分からない。けれど——」

ダージリンは目を閉じ、瞼の裏に思い描いた。

西住みほの、まるで天使の様な笑顔。裏がある様にも、無い様にも思える吸い込まれそうな微笑み。

耐え難いほど、蠱惑的な口元を。

「焦がれるわよね」

恋する乙女の様な甘い吐息と共に、ダージリンは呟いた。口端がすうっと開かれてゆく。

闘うために闘い、ただ楽しむ。

常軌を逸した精神構造。

けれど、もし、そうなれたのなら——

「私はアールグレイ様程に優れた指揮者ではないわ。采配も、頭脳も、勘でさえ劣る。才覚であの人を上回る事は決してできない——けれど、たった一つだけ私が優っているものがある」

人知れぬ恐怖に押し潰された前隊長。その悲惨な最期を思い出す。あの人ならば、もつと賢しい選択をしたに違いない。

しかし、別人に成り代わる事はできぬ。自分は自分の選択でしか、生きれないのだ。

今こそ迷いは消えた。

ダーズリンは目を見開く。

「愚かさよ」

次の瞬間、ダーズリンは「戦車前進」の命令を下した。誰もがその命を待っていた。生き残った三輜は、限界まで引き絞られた矢の様に、大洗市街へ向けて猛然と突き進む。

「こんな格言を知っている?」

そのすがら、ダーズリンは全体へ通信を入れた。

『英国人は、恋と戦争では手段を選ばない』

前へ前へと進む戦車隊。

その先頭に立ち、背筋の凍るような美しさを湛え笑う隊長の姿に、ペコは妙な既視感を覚えた。

紅茶も持たず、満面の笑み。余裕も優雅さも無く、ひたすら前へ突き進む——こんなダーズリン様は未だかつて見た事が無いはずだ。

ペコは暫く考えて、自らも笑った。

そうだ、まるで、乗り移った様ではないか。

「調子、出てきましたね」

今や聖グロの誰もが笑っている。

前へ前へと、敵へ向けて、嬉々として進んでいる。まるで、何かが乗り移った様に。

愚か。きつと敵の隊長に言わせれば、笑ってそう評すのだろう。



こそこそ作戦の発動された大洗隊は、文字通り街中に各々潜んでいた。敵部隊を大きく引き離れたがために、余裕の潜伏である。

中でも歴女チームは突撃砲の本領である待ち伏せを敢行していた。「細工は上々だ」

車長であるエルヴィンが得意げに言った。他のメンバーも同様だ。元來車体の低いⅢ突は待ち伏せに適している。しかも今回、もう一捻りしてあった。

Ⅲ突を飾っていた旗指物を抜き取り、道端の柵に括り付けた欺瞞作戦である。これに誘われた敵戦車を死角から撃とうという算段だ。

実は少し前に、みほから「旗で居場所がバレるのでは？」と指摘を受けていた。目から鱗とは正にこの事。さては西住隊長は諸葛孔明の生まれ変わりと、しきりに感心しつつ（この辺りに練度の低さが窺える）、一計を案じたのであった。

冷静さを欠いた聖グロでは、この計は決して見破れまい——歴女チームはたかを括り、敵が直進してきた場合、現れると思しき正面ばかりを臨んでいた。

しかし、いつまで経っても現れない。

いい加減に焦れてきた、その時である。

衝撃は後ろからやって来た！

想定外の激しい揺れに、乗組員は前に投げ出された。その後、おりょうが慌てて操縦桿をがちやがちやするが、既に操作不能。

Ⅲ突は白旗を挙げていた。

砲撃したのは、迂回してきたマチルダⅠⅠであった。



「すみません西住隊長、Ⅲ突行動不能です！ 面目次第もありません——」

歴女チーム最後の全体通信が入ると、Ⅳ号戦車内は騒然となった。これは他の車内でも同様である。

Ⅲ突は大洗チームの中でも貫通力が高く、大いに活躍が期待されていた。それが、最初の被害となったのだから当然の反応であった。

「作戦が見破られたって事!？」

沙織が通信装置に向かって叫び、更に部隊の動揺を助長した。「どうしましょう西住隊長」とか「これも作戦ですか」とか、安息を求め

る通信が殺到し、自業自得ながら沙織が苦心する羽目となった。

その中で優花里は平静を保とうと努力していた。いま腹心（自称）である自分まで取り乱せば、親愛なる西住殿の負担になると思ったからだ。

それでも、視線ぐらいは——と、横目でみほを見る。と同時に「うわあああつ！」と叫びたくなった。

みほの顔から全く笑顔が消えていた。

目は泳ぎ、汗が一筋流れている。

口が何度か空いたり閉まったり、出すべき声も失った様だ。

まさか、まさか——ピンチなのですか？

優花里は遂に聞くことが出来なかった。

◆

嫌な汗が頬を伝うのが分かる、激しくお腹が痛い。

みほは、自己との闘いの最中に居た。

皆に悟られる訳にはいかないと、必死に感情を堪える。油断すると、今にも化けの皮が剥がれてしまう。

今にもこの場で抱腹絶倒しそうだ!!

表情筋に渾身の力を入れて、上昇しそうな口端を抑える。今は絶対に笑う訳にはいかない。その皺寄せが腹筋に来ているようで、とても痛む。鍛えていて良かった。

素晴らしい。幾ら何でもここまで大馬鹿だとは思わなかった。

そうでなくては。戦車乙女たるもの、そうでなくてはならない!

今日この日では、ほとんどの戦車乗りから失われてしまった愚かさというものを、ダーズリンは持っているのだ。

つまりお仲間だ。

みほは、背後から麻子の背中を見た。視線を感じたのか、それまで微動だにしていなかった肩が一瞬跳ねた。

肩越しに振り返り、じろりと烈火の如き瞳をみほに向けると、直ぐに視線を戻した。

みほは、大いに満足して口に手を当てた。唇の歪みを自覚したからだ。それを見て優花里は一層悲愴な顔をしたのが、また面白かった。

良いぞ、そのまま来い。

私を倒してみせろ。

前の女アーデルレイの様に、がっかりさせてくれるなよ。

楽しませろ。

私を、もっと楽しませて。

## 鬼神西住27

中学生の時、神に成ろうと思った。

神聖不可侵。天にも匹敵する絶対的な存在として君臨することで目標へ到達しようと考え、実行に移した。

失敗した。

新旧の戦車乙女たちに須らく崇め奉られる事には成功したが、話はそれまでだった。皆は思考を止め、どんな重大な決断をも他者に丸投げする様になった。

全く好みでない骨抜きを量産しただけに終わった。

高校生の初期、指導者に成ろうと思った。

強固な人間的意志、鉄血の絆を用いて主従関係を形成する事で目標へ到達しようと考え、実行に移した。

失敗した。

指導者を失った群は速やかに崩壊した。強い主従の絆は、友と友とを繋ぎとめる役割を果たさなかった。ただ強い権力を手にしても、より強い権力に睨まれてしまっただけは何の意味も無かった。

居場所を追われ、全てを失った。

では、次は？

次は何に成ろうか。



敵の様子が変わった——生徒会長、角谷杏は持ち前の過敏性で、いち早く感づいた。

生徒会長チームの38（t）は町の海鮮料理屋付近に潜伏しており、現場の状況は断続的な無線でのみ知る所であったが、研ぎ澄まされた第六感にも匹敵する危機察知能力が働いたのだ。

直後、歴女チームの皿突が撃破されたという凶報が舞い込んだ。直ぐに無線が混乱し、杏の危惧が的中した事を示した。

敵の様子が変わった。果たして、この気付きを隊長に——西住ちゃんに知らせるべきか。

いやだ。



杏は、奥歯で舌を噛んだ。これは、周囲に知られないよう不安を押し殺すうちに身に付いてしまった習慣だった。度を越すと口の中が血の味で一杯になり、その度に杏は自分の性を嫌悪するのだった。そうなるのが嫌だったので、杏は隊長に無線を入れる事に決めた。何もかも負の感情に突き動かされた行動であった。その自覚があったので、やっぱり杏は自分の事を嫌悪した。

「西住ちゃん、聞こえる？」

意を決して咽喉マイクに手を当てると、暫くしてIV号に繋がった。

『はい、聞こえますよ』

「今大丈夫かな」

『この通話以外をカットしました。どうにも騒がしくってしようがない』

「いや、忙しいなら」

『会長から繋いでくるなんて、よっぼどの事でしょうから』

「本当にどうでもいい事なだけだよ」

『聞きましょう』

これ以上の有無を言わせぬ響きを感じたので、速やかに話すことにした。

「……敵の様子がおかしいよ。さっきまでの、迸る様な怒りを全然感じない。今も皿突の策が看破されたでしょ？　これは怒りと言うよりは、その——」

『殺意』

杏が表現に迷った所を、みほは容赦無く、どこか楽しそうに断言した。じわり、と杏の口中に鉄の味が滲んだ。

『感情任せにあらざる、極めて純粋な敵意。必殺の心構えを感じます。許容も容赦も躊躇いも無く、全能を殺しに傾ける——敵さんも、ようやくしゃんとしたようですね』

「に、西住ちゃん。それって大丈夫なの」

『大丈夫じゃありません。とても拙い』

「何とか、なるよね」

『それを考えるのが指揮官ですから』

「もしも負けちゃったら」

みほは少しの間黙って、不思議そうに尋ねた。

『会長、何をそんなに心配するのですか？ 勝敗に固執するとならぬ事にはならない、さつきも言ったでしょう。敵はそれを捨てたのです。ならばこちらにも気持ち良く迎え撃とうではありませんか』

「でも西住ちゃん……」

『でも、何ですか』

先程から歯切れの悪い杏に、みほは少々焦れた様だった。杏の喉奥が変な音を鳴らした。

みほは非常に温和で、滅多な事では腹を立てない。だが、一方で煮え切らない態度を取られるのを嫌っている事は周知の事実である。

無論、杏も良く知っている。

故に杏は何度目かの腹を決める事となった。

「西住ちゃんはさ、未だかつて負けた事がないんでしょ？ だから、もし、今日この試合で負けちゃったら。私たちのせいで無敗伝説が終わっちゃうのかな、なーんて……」

返ってきたのは長い沈黙。

やはり西住ちゃんといえども、かのジレンマからは逃れられないのだろうか——杏は、常勝の裏に隠された苦しみを知っていた。

勝ち続ける事で、周囲は期待する。次はどうか、また次はどうかと。

そして期待に応えられなければ失望されるのだ。

他人というのは何時だって無責任な理想を押し付ける。

杏は何より他人に見放されるのが恐ろしかった。自分が独りで生きてゆけぬ、独りの弱い人間である事を自覚していたからだ。

それに、期待をかけてもらっているのに応えられないのは、卑劣な裏切り行為であるかのような気持ちがあった。

故に強者を演じた。

杏は確かに有能だったために、何度も期待に応える成功を収めた。そして、必然他人の期待も膨らんでいった。

他人は更なる成果を求める。際限はない。君はもつとできる、あなたはもつと頑張れる、もつともつと！

恐怖から逃れるために、更なる恐怖を積み上げる。杏がこの自己矛盾に気が付く頃には全て手遅れになっていた。

飄々として軽く仕事をこなす、頼れる生徒会長——今やそれが杏の評価であった。

他人は杏を評価する。際限はない。

苦しみに終わりはない。

最早何もかもが追いつかなくなって、破綻するのを待つだけだ。きっとその日は遠くないと、杏は震えて待っている。

まして、西住ちゃんはどうだ？

正直言つて、杏とは比べ物にならない名声を勝ち得ている。学内どころの話ではない、みほは全国の戦車道関係者にとっての星だ。

西住流直系の後継者。

全日本戦車道大会十連覇達成。

潜った戦場は数あれど、常勝無敗。

桃李成蹊、圧倒的な求心力。

そして『軍神』の再来。

その伝説が、終わる。

もしも自分がその立場だったなら——杏は身震いした。きっと無意識のうちに舌を噛み切つてしまふだろう。

果たして彼女は具体的な敗北を想定しているのだろうか——そもそも常勝の人生を歩んできた人間が、敗北など想定出来るものなのか。

積み重ねた栄光が大きい程、挫折の反動は大きいものだ。

もしもみほが、未熟な大洗チームのせいで負けたと人間的な逃避に走った時、矛先は何処に向くのだ？ 自暴自棄になって、何もかも滅ぼそうとするのではないか？

だったら私が一身に受け止めよう。

その覚悟だけは、とうの昔に決めていた。

杏は学園艦を愛している、生徒会長である事に誇りを持っている。それに反して保身をするくらいなら、胸を張って破滅へ進もう。

その一点だけが、何もかもに懐疑的であった自分が、柚や桃に出

会って得られた成長であると信じている。

きつと杏が本当の意味で破滅するのは、大切なもの全てを裏切つて逃亡する時に他ならないのだ。

自分自身の業に殺されるのは心底恐ろしい。けれど、愛するもののために立ち向かつて殺される事に躊躇いの欠片も無い。

だが、これすら必ずしも尊い勇氣に基づく覚悟とは言えない。

少なくとも頼れる生徒会長として、評価を落とさぬまま消え去る事が出来る反面があるからだ。その後待つ安息を求めないと言えば、それは嘘だ。

何処まで行っても臆病が付きまとう、己の性分に嫌気がさした。本当に、こんな歪に捻じ曲がった自分が大嫌いだ――

長らく沈黙を保っていた無線から『くすくす』という、押し殺したような声が出た。

杏の首筋に鳥肌が立つ。みほの笑いというのは、あらゆる負の感情をほじくり返すのだ。

果たして西住ちゃんの回答や如何に――奥歯で舌を噛んで杏は待った。

『会長は可愛いですね』

「かつ……あ、いだっ!？」

口の中でがりつつと嫌な音がして、とんでもない痛みが杏を襲った。

余りに、余りにも予想外の答えだった。

『全員、落ち着いて聞いてください』

みほは生徒会チームに限定していた回線を、突如チームに向けて開き、杏との会話は強制的に中断された。

怒声や悲鳴で混乱を極めた全体無線がさつと静まり返る。みほの声は常時穏やかだったが、そこに込められた聞かせる力というのは誰よりも強かった。

『敵の様子が変わりました。会長が気付いたんです。今や激情は去り、敵は極めて冷静です。理由は定かではありませんが、何かしら精神的な切り替えがあったようです。つまり我々は、ようやく強豪・聖グ

ロリアーナ女学院を相手に得る』

大洗女子たちは思い出した。

こそこそ作戦の本質は、文字通り逃げ回って隙を窺う事にあらず。まともにも相手をしていないという点に肝があるのだ。

強敵に対し、まともにもぶち当たっていたのでは玉碎必至である。であるから、あの手この手で敵の戦意を削り、ぼやかし、煙にまくことで優位を得たのだった。

それが消えたという事は——つまり、拙い。

兵法に疎い彼女らでも、そのぐらいは判断できた。

「に、西住隊長どうしましょう……」

副隊長の梓が、不安そうに聞いた。誰もが同じ気持ちであった。

逃げでも攻めでもなく、ひたすら判断の丸投げである。余りの消極性に、みほは多少気分を害した。

こういう点でやはり、十分に義務を果たす優秀な副官が恋しくなる。せめて戦意鼓舞の一つや二つ出来ないものか。

一つ叱り飛ばしてやりたいところではあるが、機が悪い。後輩の叩き直しを密かに誓いながら、みほは命令を下した。

『どうもこうもありますか？ 戦況これに至りては、徹底的な迎撃あるのみ。戦場に在って向けられた殺意には、更に上乘せした殺意でもって返礼せねばならない。それが礼儀、作法というものでしょう。よって、こそこそ作戦を破棄。もつとこそこそ作戦を発動します！』

みほは敵に現在の潜伏位置が完全に読まれている事を断言した。それに対抗するために、地元ホームの利を活かし絶えず潜伏場所を変え、居場所の特定を阻止するための詳しい経路を、各車輛へ向け微細に命令した。

その命令は余りにも高度であり情報量が多かったので、各車長たちは混乱して何度も聞き返した。その度にみほは丁寧丁寧に説明し直したが、遂には諦め「随時状況報告を聞き、逐一新たな命令を下す」という形を取らざるを得なくなった。

それで車長たちはほっとしたが、一方で隊長の負担は尋常ではない。つまり車長たちの思考を逐一代行しなければならぬのだ。全

ての戦闘状況を完全に把握しなければ到底不可能な芸当であるが、それでも何とかなってしまうのが、西住みほという指揮者であった。

虚しいかな、彼女たちは隊長の卓越した能力に気が付く事すら出来ない。それを判断するための経験値すら足りていなかったのだ。

ただ隊長に寄りかかれたという、無責任な安心感が胸にあるのみであった。

独り戦車に見識のある優花里だけが、隊長を誇らしそうに、また心配そうに見ていた。

一方でみほは苦労をおくびにも出さず、一通り命令を下し終えると、最後に言った。

『それと会長。あなたの察知能力は私ですら及ばない鋭さがあります。ですから、何か勘付いた時には遠慮せずに言ってお下さい。必ず聞き入れましょう。通信終わり！』

それだけ言うとお通信を切った。

頬をさすって舌の痛みに耐えていた杏は、危うくまた同じ箇所を噛みそうになった。

「凄いですね、西住さんにも認められましたよ。会長には戦車道の才能もあつたんですね」

「当たり前だ。何と言っても生徒の中で一番偉いものだからなっ」

柚と桃が、無邪気に喜ぶ。

杏の本性を知っていて、配慮も出来る二人であつたが、如何せん他人を疑う事を知らなかった。

きつと、他の車内でも同じ様な会話がなされているのだろう。

また一つ他人による杏の評価が上がってしまった——杏は「ひと思いに殺せ」と叫びたくなつた。



大洗の戦車隊を撃滅せんと、優雅さをかなぐり捨てた聖グロリアーナ部隊は無類の強さを発揮した。

ダージリンより彼女らに下された命令は単純明快  
サーチ・アンド・デストロイ  
『見つけ次第殺せ』である。

分かり易いのは良い——部隊の一輛を任せられ、また『ルクリリ』の

名を与えられた少女は、むしろ少年らしく口端を上げた。

聖グロに入学して以来、一度も無かった滾りに満ちているのだ。確かに聖グロの戦車道は美しい。見惚れたからこそ入学したのだ。しかし、そこに熱狂は存在しなかった。賢く優雅であつても熱が無いのでは、土壇場で根負けしてしまふ。何代も前から改善すべしと言われ続けた聖グロの弱点——それが今、唐突に打ち破られたのだ。

全戦車乙女の憧れ、西住みほの敵対によつて！

ダージリンは歴代で突出して優れた指揮者ではない。けれど、とんでもなく愚かな異風者だ。如何に取り繕つても、周囲にはばればれだったから、隊長として持ち上げられたのだ。

これはルクリリの私見だが、どうも聖グロリアーナ女学院には猫かぶりが多い。特に戦車道部というのは、そんな連中の吹き溜まりな気がする。何処かの誰かの様にあからさまなのも居るが、それは例外だ。

本当はもつとはしやいで腕を振り回したいのに、周囲を憚つて自粛しているのだ。

聖グロ戦車乙女はヤワじゃない。抑圧されれば、当然反発するだろう。

そうして溜まりに溜まった欲求が、ダージリンがティーカップを叩き割つたのを発端に爆発した！

新しい聖グロが始まる予感があつた。

歴史と伝統のみを口実に戦うのでは、戦車に苔が生えてしまふ。熱い闘志を秘めてこそ、英国を魂の故郷とする我々の面目躍如というものだ。

それにこつちの方が、どうやら肌に合っている。

ルクリリは不敵に歯を見せ身震いした。

新たな旋風をもたらす、今代隊長ダージリンと軍神西住みほ。この二人が同じ時代に相対する事自体が奇跡であるように思えた。

その瞬間に立ち会う事が出来たのは、一人の戦車乗りとして全く幸運であり、恐らく後々まで自慢の種になるだろう——

不意に、数十メートル先の交差点を一輛の戦車が横切つた。一見し

て軽戦車と見まごう小柄な体軀、ルクリリは即座に大洗の八九式であると判断した。

「早く追え！ 射界に捉えたら即時発砲せよ。早く、早く」

ダージリンの『見つけ次第殺せ』の命令を遵守せんと、太い三つ編みをぶるんぶるんと振り乱し、大声で煽り立てる。

先の交差点を折れると、八九式の姿形は失せていた。否、この短時間で距離を稼げる道理はない。何処か物陰に隠れているのだろう。ただでさえ目立つ外装（バレー部が何とかいう舐めたペイント）なのだ。

不意の奇襲を警戒しつつ辺りを見渡すと、あるではないか。ちんけな戦車が潜むにはおあつらえ向きの、立体駐車場が！

逃げ回る子鼠には相応しい隠れ場所だと、ルクリリはほくそ笑みながら、八九式とは対照的に大柄のマチルダーイーを駐車場出口の真ん前に堂々陣取った。直後、立体駐車場が稼動するサイレン音が響き出す。

来い。シャッターが開いた瞬間、ズドンと一撃をお見舞いしてやる——と見せかけて！

「馬鹿め、そんな手に騙されるかつ！」

ばつと背後を振り向いたと同時に、予め砲塔を旋回させていたマチルダーイーは発砲した。ルクリリは、正面の立体駐車場と同時に背後から湧き出て来る車庫スペースの存在を看破していたのだ。

正面から撃ち合って八九式がマチルダーイーを抜ける訳が無い。故にその可能性は容易に排除出来た。

我ながら何と冴えていようか——砲煙の向こうで白旗を上げる八九式を透視して、ルクリリは得意気な笑みを隠そうともしない。

然して微風に砲煙が流された時、そこ有ったのは空白からであった。

「え、なにっ」

理想と現実とがにわかには解離して、ルクリリから馬鹿の様な声が出たのと同じ、そいつ等は現れた。

正面でも背後でもない——両脇から敵が出現したのだ！

地元民でもなければ気が付かないような曲がり角、意外に広い堀の



裏——八九式とM3リーは、こそこそと息を潜めていたのだ。敵が自らキルゾーンに入つて来るまでを。

「この軽戦車があ!!」

一杯食わされた事を知り、激昂しつつもルクリリの退避命令は素早かつた。しかし、前後を立体駐車場に阻まれ、左右から敵が迫つて来るこの状況、逃げ場が有るとしても上しかない。

まさか戦車が空を飛べる訳もなかった。

背後を向いていた砲塔の旋回も間に合わぬ。左右から突つ込んできた二輛の戦車は、容易くマチルダIIへと密着した。

「アターックー!」

「撃てえー!」

典子と梓の号令と共に、左右よりの零距离、同時三発射撃が敢行される。如何に装甲に優れる英国戦車と言えど、これにはひとたまりもない。

甲斐なく煙を噴いて、マチルダII——とルクリリは速やかに沈黙した。



「やった、やりました西住隊長。これで残り二輛です!」

沈黙した敵戦車の両脇を挟んだまま、M3リー車長、澤梓は歓喜の報告を行った。

梓たちDチームを含め、典子たちBチームも、これが初撃破である。しかも相手は強豪、聖グロリアーナ女学院。彼女たちの喜びもひとしおだ。

鬼の首を取った様な——とは正にこの事であった。

『はい、分かりました。早くその場を離れて下さい』

打って変わり、みほの対応は何処か冷めていた。梓の視界の端には、ガッツポーズで喜ぶ典子が入っている。

どうやら、今のファインプレーが西住隊長には上手く伝わっていないらしい——なので梓は隊長にも喜んでもらおうと、このすごさどうにか伝えようと努力する事にした。

「とにかく凄い音でした! 戦車が三発同時に撃つので音が大きく

て……そう、磯辺さんのタイミングもバツチリでした！ 私たちの戦車こんな色ですから、隠れていてもばれちゃうんじゃないかってドキドキしていたんですけれど、相手は全然気が付かなくて」

『梓さん、そこを離れて下さい』

「分かりました。それにしても西住隊長の作戦はすごく、凄いです！

これなら聖グロにだって遅れません。やっぱり西住流って本当に凄いですね！」

『副隊長、早く、そこを離れ——』

突如爆音が響いた。

みほの荒らげた声は梓に届く事はなかった。それよりも、撃破した敵を挟んだ向こう側で、無惨に吹き飛ばされる八九式の姿に目を奪われていた。

吹き飛ばされた八九式を更に押し退けて、硬直する梓の前に姿を現した一輛の戦車。

重装甲にして鈍重、しかし確実に地面を走破し、敵を撃ち抜く性能を持った戦車——チャーチルM.K.VII。

聖グロ隊長、ダージリンの搭乗する指揮車輻であった。いつの間に接近されていたのか。ともかく、今現実には砲をこちらに向け、徐に迫り来っていた。

「てっ、たい……てっったあい!!」

半ば悲鳴じみた号令であった。そこまで至り、梓はようやくみほの命令を実行する気になったのだ。

操縦手が焦燥した様子で「あい」と叫び、M3リーは尻に帆を掛け逃げ出した。

梓は猛烈に悔いていた。

同時三発射撃が凄い音だったと自分で言った。なれば当然、敵にも聞こえているという事実は何故気が付かなかったのか。

西住隊長の発動した『もつとこそそ作戦(かわいい)』とは、一撃即離脱が肝要であると何故忘れていたのか。

私のばかばか、と梓は頭を激しく掻き毟った。

だが幾ら自分を罵った所で事態は好転するものではない。今にも

敵が追いつがって来よう。

恐る恐る背後を振り返ると、敵の隊長車は撃破された味方の車体に阻まれ、即座の追撃が出来ない様だった。

梓はほっとした。逃げ出した尻を撃ち抜かれるという、浅ましき極まりない終わりを迎える事は無さそうだ。

それも今だけだ。

じきに味方の死体をも押し退けて、あの巨体がやって来る。そう思うと、梓の背筋は震えた。

西住隊長に泣き付くか？ いや、それでは余りにも情けない。梓にも、副隊長を任されたというささやかな矜持はある。

命令を直ぐに聞かなかった拳句の様なのだ。自分たちで何とかするべきだろう。

思えば此処は大洗町。自分たちの地元ホームではないか。撒こうと思つて出来ない事は無いはずだ。

「よし、逃げるよ。このまま真っ直ぐ行けば入り組んだ場所があったはず。そこをジグザクに走って、撒いてしまおう」

幾ばくか平静を取り戻した調子で梓は言った。

この時点では、正しい判断であった。

しかし、梓は再び背後を見て身震いしてから、付け加えてしまったのだ。

「そ、そうだ。スモーク展開！ 敵の視界を塞いでから逃げよう」

名案だと梓本人は思っていたし、車内の仲間もそう思った。それに、敵の視界を塞ぐだけではなく、自分たちからも敵を見えなくしてしまう事で、少しでも安心を得られるとも思った。

だから、市街地で煙を焚く事に一切の抵抗は無かった。

それが、致命的な判断ミスであるとも知らず。

## 鬼神西住28

澤梓の率いるM3リーが足を止めたのは、大洗の入り組んだ路地を何度も折れ曲がった末の事だった。

キューポラから恐る恐る顔を出し、閑散とした住宅街を回し見て、あの悪鬼の如き敵戦車（梓にはそう見えた）の影が無いのを確認すると、ほっと息を吐く。

梓は顔を引っ込めて、通信手の宇津木優季に隊長車へ通信を繋ぐよう求めた。

「こちらDチーム。西住隊長、聞こえますか」

『——はい。こちらAチーム、感度良好』

間も無く、敬愛なる西住隊長の柔らかい声色が返ってくると、恐怖に縮こまった心が解かれてゆく気がした。

「隊長、本当に申し訳ありません。一時は追い詰められてしまいました……何とか逃げ切りました。でも磯辺さんたちは——」

梓はルクリリのマクルダーIを撃破してから、八九式がダーズリンに撃破されるまでの流れを簡潔に話した。何と怒られるであろうか。終始おっかなびつくりの報告であったが、みほは平素の口調で『そうですか』と言ったのみだった。

彼女には他に着眼すべき所があったからだ。

『それで、今、何処かな？ あなたは敵から逃げ切ったと言ったけれど、私の認識からも逃れてどうするの。私が認識外の作戦行動について保証できるとでも？』

「あつ……す、すみません。直ぐに確認します」

何だか謝ってばかりだと恐縮しつつ、懐から地図を取り出した。首を捻りながら、何度も東西南北を手の内で回転させて、何とか現在地を割り出す。

「ええと、E—4地点、辺りだと思えます」

『随分と走りましたね』

「申し訳、ありません……」

ああ、失望された——梓は大袈裟に肩を落とした。

梓にとって、西住みほとは暗闇の中に見出した、たった一つの光明である。

梓は自身を何の取り柄もないばかりか、退屈な人間だと卑下していた。生きていても何も成しうる事の叶わぬ、停滞した人格だと軽蔑していた。

自分が大嫌いだったのだ。

しかし、西住隊長は自分でも気が付けなかった美德を見出してくれた。信頼を置かれ、副隊長に拾い上げてくれた。

地味な事だったかもしれない。

けれど「あなたはあなたそのままが良い」と西住隊長に言われた時、どれだけ救われた事か！

生まれて初めて自分を許し、好きになる事が出来たのだ。

梓にとって、西住みほとは間違いなく、人生を丸ごと変えてしまうような救世主だった。

生きる指標とも言えるだろう。

そんな西住隊長に見限られるのは、身も心も引き裂かれるのと同義だった。今や自分は、彼女に生かされており、彼女のために生きていくのだとすら思っていた。

それ自体、少女にありがちな感傷であり、陶酔的なロマンチズムである事実に梓は無自覚であったが——ただ見捨てられたくない。

梓はその一心で弁明、らしきものを試みた。

「けれど西住隊長、敵は完全に撒きました！ 煙幕を焚いて、見失わせたいです。ですからお願いします、どうか挽回の機会を——」

『今何と言いました？』

必死の弁明は、唐突に遮られた。

みほの柔らかかった口調は、鋭いものに変わっていた。

「どうか挽回の機会を……」

『それじゃなくて、その前。煙幕と言いましたか？』

「言いました」

『もしかして今も焚いているの』

「えっと、ちよっと待って下さい」

再び顔を出して、戦車後部を確認する。

煙幕は、未だもうもうと立ち上っていた。

閑散とした住宅街の真ん中で、M3リーは煙を立てていた。

もったいない——梓はそう思い、直ぐに止めるように言った。

「煙幕、出しっぱなしでした。でも今止めました。すみません、もったいなかったですね」

『説明が必要ですか？』

「えっ……」

『説明が必要かと聞いたんだよ、副隊長。E-4地点でしたね、そこは何処ですか』

「此処は静かな住宅街で……」

『まだ分からないか』

梓は困惑した。質問の意味が全然分からなかったのだ。分かるのは西住隊長の声色がどンドン、どンドン恐ろしく——そして楽しそうになってゆく事だけだった。

『だったら耳を澄ましてごらん。答えの方からやって来るぞ』

梓は地震を疑った。

「ごごご——と地を唸らせる重低音が耳に届いたからだ。隊長に言われるままに耳を澄ませ、音を聞く。やはり大地そのものが鳴っている様に聞こえたが、おかしい、揺れを感じない。

音は益々大きくなる。

その低音に、金属の掠れる音が混じった。

やがて気付く、その音は大地から鳴っているのではない。左右から同時に聞こえる故の錯覚であると。

斯くして威容は現れた。

Y字路をM3リーを挟み撃つ形で、新手のマチルダIIに、あの恐怖の女王、チャーチルMK.VII——大地を踏みしめ、堂々と。

その砲を向けられた時、梓の脳裏に八九式がいと容易く蹂躪された情景が蘇った。その情景と、今まさに自分の置かれた状況を照らし合わせ——胸の奥底を凍て付かせた。その冷気が徐々に登ってきて、喉を、舌を、唇を順に凍らせた。

「まさか、まさか、そんな訳がないよ。逃げて来たんだもん、それもこんな遠くまで。完璧に、撒いた筈で——」

受け入れ難い現実、抗い難い恐怖！

それらを払拭すべく眩いたつもりだったが、実際には唇が微かに震え、歯がカタカタと音を鳴らしただけだった。

今や手や足まで固く凍り付き、身動き一つ取れない。ただ聴覚だけが研ぎ澄まされている。

『さながら狼煙だ』

隊長の低く囁く様な声が、梓の背筋を更に震わせた。

『今も昔も、それは戦の合図に違いない。彼女たちは真つ直ぐそれを目指してやって来た。なんて誠実な事だろう。さあ梓さん、もう分かったかな。あなたの成すべきは、何一つ変わっていない。何一つ！』

梓はようやく気が付いた。

全ては、自ら招き寄せた事だった。

「……たい、たい、てったい、撤退ッ!!」

上下が張り付いた唇を無理矢理動かして叫び、M3リーは走り出す。

梓には愚行を戒める時間も無かった。出来る事と言えば、より惨めに遁走する事だけだ。

とにかく敵から逃れようと、路地を滅茶苦茶に曲がる。

「どうすれば。西住隊長、どうすればっ」

最早、副隊長としての恥も外聞もない。最後の頼りとばかりに、みほに縋り付く。

そして、敵も追い縋ってくる。今度ははっきり視認できる距離。

その時、二発の砲弾がM3リーの左右を掠めていった。ほぼ同時に、直ぐ正面の民家が爆発倒壊した。元民家の欠片が、かんこんと車体を叩く。

梓は涙目になった。

『落ち着いて下さい、梓さん。まずはC—2地点で合流しましょう。そこまでいけば、後退を支援出来ます』

事ここに至っても、みほの口調に問責の作意は混じっていないかった。不出来な部下に愛想を尽かさぬばかりか、むしろ助けに向かうとまで言った。

だが、その慈悲を無下に梓は叫んだ。

「西住隊長、C-2地点って、つまりどっちの事ですか!?!」

この言い草に、みほは言葉を失った。というより、掛ける言葉が見付からなかった。

みほは千里眼を持たない。命令をしようにも、当人たちが現在地すら把握していないのでは、どうしようもない。

あなたは地図すらまともに読めないのか——という叱責は浮かんだが、必死で滅茶苦茶に逃げ回っているだろう状況が伺われて、言う気が萎えてしまった。

みほにしてみれば閉口するしかなかったのだ。

頼れる西住隊長がどうしてか黙ってしまった間も、梓は何かと喚き立てていたが、遂にM3リーは行き止まった。無計画に走り回った挙句、逃げ場の無い袋小路に押し込まれたのだ。

実は敵二輛によって巧みに誘導されていたのだが、梓たちに察知出来るはずもない。

正に命運の行き止まり。

二本の砲塔が殺意を持って、ゆっくりとこちらに狙いを定めている。

一年生たちは、狩られる直前の子うさぎの様に、唯々震えて怯えるばかりであった。

「ひっ、ひい……助けて下さい……西住隊長……たすけ……」

今や梓を初め、一年生は闘う意志を完全に放棄していた。

何もかもが甘かったと思いついた。戦車道を舐めていた。抜き身の殺意に晒されるのが、こんなに怖かったなんて、知る由も無かった。思えば戦車とは本来、殺人兵器として産声をあげたのではなかったのか。

なんという事だ。

戦車道とは、嬉々として殺人兵器で駆けずり回るいかれ共の世界だ



！

それに比ぶれば、今までの人生の何とこのうとうとしていた事か。怖い、怖い、怖い——

西住隊長に見捨てられては生きていけない、などという戯言も遙か彼方へ吹っ飛んだ。そんな感傷より、この瞬間、自分の身が可愛かった。

それでも西住隊長ならば、という幻想めいた信頼に、梓はぎゅっと目を瞑り、救世主の到来をひたすら祈った。

こんな可哀想な私たちを、どうか助けてください……!!

『いやだよ』

幻想は無感動に切り捨てられた。

誰が最初の一人であったろうか。一年生たちは、奇怪な声を上げて、恐怖の鉄箱から弾かれたように飛び出した。

◆ 直後始まった砲撃の嵐に、M3リーは呆気なく白旗を上げた。

通信機器を懸命に弄り回し、それでも応答がないのを確認すると、沙織は首を横に振った。

IV号内部がシンとなる。序盤の奇策による優越は完全に失われ、戦況は悪化の一路だ。

追求するまでもなく、原因は明白だった。余りにもあからさまな、練度不足——これでは団結して隊長の足を引っ張っている様なものだ。

「やるなあ」

シンとした車内で、みほはぼつりと言った。

敵前逃亡した味方への軽蔑か、快進する強敵への賛辞か、誰にも分からなかった。

ただ静かな声、というだけだった。

優花里は、隊長の心理を勝手に考察する。

察するに、他人の合力だけを乞い求め、自力で打開しようともしない、浅ましい者共に自ら成り下がる——そんな一年生の成し様は、いかにも西住みほの嫌う卑怯な根性に思えた。最後の最後に、救いの手

を引つ込めたのが証拠だ。

西住殿は冷静に見えて、きつと内心で憤り、呆れ果てているだろう——優花里は、また勝手に慚愧し、そして恐れた。

みほの怒りを恐れたのではない。何より、彼女の輝かしい戦歴へ泥を塗ってしまふ——自分の夢と希望を自分で潰す——その事を恐れたのだ。

『軍神の初黒星は、仲間にも背中を刺されたから』等と言われた日には、もう日向を歩けない。

にわかに皮膚が粟立った。

もうそんなの、平身低頭で一生戦車道を避けて生きてゆくしかないじゃないか！

想像しただけで、身を裂かれる苦痛だ。耐え難い苦悩に、優花里は隊長の横顔を伺おうとしたが、それすらも憚られて、代わりにもつさり頭を掻き毟る。

優花里の烈烈たる忠義は完全に裏目に出ていた。

「捉えた」

部下の心を知ってか知らずか、みほは前方を指差して言った。

「一時方向へ150メートル。あそこ、煙が出てる。撃破された煙炎か、それとも煙幕かな？」

果たして笑って良いものだろうか、周囲が悩んでいるうちに続ける。

「敵がその場にいるうちに、背後へ回り込みます。麻子さん、少し迂回して接近して下さい。逆に袋小路へ追い込みます」

麻子は低く「おう」と不機嫌そうに応えて進路を変えた。

今までIV号はM3を助けに向かうはずだった直行ルートを猛スピードで走っていた。それを転じて、背面攻撃へ切り替えたのだ。

後手に回ったとは言え、この敏速かつ柔軟な切り替えは流石の手腕と言えよう。

優花里を初め、沙織や華も懸念を無理矢理押し込めた。ただでさえ練度が足りていないのだ。余計な不安で攻撃の手がぶれてしまつては、それこそ擁護出来ない。

間もなく目的地へ差し掛かり、対戦闘の緊張が走った。数十メートル先の袋小路に煙が充満している。酷く見えにくい。どうやら、撃破されてもお空っぽのM3リーは煙幕と煙炎の両方を噴いているらしい。何という無様だろうか。

しかし、これは好都合だ。

敵がああ煙に呑まれているとすれば、こちらの動きを察知出来ない。完全な奇襲が可能だ。

更にIV号は敵へ迫る。

みほは目を細め、煙の奥を深く観察した。奇襲をするにも、タイミングの見極めが肝心だ。何時でも砲撃命令を下せるよう、手を振り上げる。

薄らと煙の先が見えてきた。いよいよ手に力を込めた時、みほは細めていた目を見開いた。

煙の中の影は煙を噴くM3一つのみ——敵の影は、そこに無い——  
罨か!?

「停止ッ!!」

みほは今日一番の大声を出した。

直後、強烈な砲撃音と共に、IV号前方を掠めるような砲弾が横切った。あと一秒遅ければ、車体の真ん中を撃ち抜かれていただろう。

奇襲を掛けるつもりで、逆に釣られていたのだ。

みほは眼球を高速で運動させ、必殺の一撃を放った主を探し、難なく発見した。

曲がり角の死角に張り付く様にして、そいつは居た。チャーチルMK.VIIから上半身を露出させ、黄金色の髪を品良く束ねた——聖グロリアーナ女学院隊長、ダーズリン。

みほと目が合うと「あら……」と意外そうな顔をして、クスリと笑い、言う。

「惜しい」

氷柱を背中に突っ込まれた心地がした。

ダーズリンの笑顔は包み込む様に柔らかく、透き通る瑠璃色の目は、精製された殺意に満たされていた。

ここまで純粹なそれに満たされた乙女には、中々巡り会えるものではない。

「この——」

二つの目線が合わさった。

瞬間、みほは思わずその視線に射すくめられた様に固まり、ダーズリンに見蕩れてしまった。

美しい。

今一度、みほはダーズリンを見つめ直した。とても綺麗だと感じると共に、まるで鏡を見る様な錯覚があった。

これは自惚れであろうか。それとも、向こうも同じ様に思ってくれているのだろうか。嗚呼、そうだったら良いのにな——堪えられない程、切ない気持ちちが溢れ出す。

みほは確かめる様に、貰ったものと同じだけの質と量を込めて、視線を相手へと手向けた。ダーズリンは一瞬、射すくめられた様になって、やがて頬を染めて微笑んだ。

蕩けそうな程、頬が熱くなった。

最早、二人の世界に言葉は不要だった。思い交わすのは、砲弾だけで十分だった。

私が見つめて、あなたが見つめ返す。

分かるでしょう。

この刹那の時、あなたの全部は私のもので、私の全部はあなたのものだ。

恋とか友情とか、些細な感情を超越した、説明不可能な愛おしさが胸に込み上げた。そして、お互いにそれを共有している実感があった。

もう堪らない。

みほは天に向けて大笑いした。激しく手を叩き、足を踏んだ。

そうだ、格好だけつけた以前の彼女よりも、よほど。よほど今の姿は『優雅』としか言いようが無いではないか！

「ああ、この、戦車乗りめ」

甘美な睦み合いも束の間、みほは即座に転進命令を下した。聖グロ

にはもう一輛残っている、だとすれば。

想像通り、回り込んで来たマチルダⅠⅠがⅣ号を挟み撃たんと現れた。猛烈な速度で旋回を完了したⅣ号は、未だ体制の整わぬ敵戦車の横を通り抜けようと突進する。

すれ違うその直前、マチルダⅠⅠが砲撃を強行した。Ⅳ号の側面装甲が抉り飛ばされる。また、それが無線機側であった為、沙織が衝撃で吹き飛んだ。沙織が「やだもー!」と泣き言を叫んだのと同時、Ⅳ号は辛くも敵戦車の横を通り抜けた。

結果のみを見れば、奇襲が失敗したばかりか、追われる目になっただけだった。

度重なる苦境に、Ⅳ号の士気は更に沈んだ。彼女らに、先の逢瀬のやり取りが理解出来る筈もない。

少し元気づけてやる事にした。

「どんな逆境にあらうと」

俯きがちだった顔が、みほに集まる。

「西住流は前進する。それだけなんです」

落ち込むどころか、昂揚として諦めない隊長の様子に、隊員たちは目論見通り顔を上向きにした。こんな単純なお題目でも、言う人間によつては効果が有るものだな、とみほは感じた。

背後を顧みれば、合流した二輛が追撃を仕掛ける構えだった。今度こそ、確実にとどめを刺すつもりだろう。

何処までも好ましい敵よ。

好ましいが故に、期待に込めて叩き潰したいと思う。真の西住流たるを、骨の髄まで思い知らせてやりたい。

だからこそ、だからこそ惜しい——みほは唇を噛んで、衝動を堪えた。

でも、私は勝たなくてはならないのだ。



Ⅳ号戦車を先頭に、彼女たちは同じ道を駆けてゆく。

応酬に応酬を繰り返す砲弾が、大洗の町並みを瞬く間に廃墟に変貌させた。

矢継ぎ早に交わされる三輛分の行進間射撃は、平穩な田舎町を見るも無惨な瓦礫の山に還元するのに十分だった。

苛烈な乱撃戦の道中、みほは半身を晒し続けた。

土砂を頭から被り、礫が身体を弾こうとも、不敵な笑みで迎えて、戦車外部で采配を振るい続けた。並大抵の胆力では叶う仕業ではない、今の乱戦状態では尚更だろう。

正に、常在戦場。

その精神を体現したかのような采配ぶりは、味方を大いに鼓舞し、敵の感嘆を誘った。

彼女が世間一般に『軍神』と崇められる理由の一つがこれであった。

この様な振る舞いをする戦車乗りは、世界広しと言えど、そうは居ない。

舌が回るだけの煽動者ではなく、身体を晒して先陣を切り、矢面に立ち続ける。これこそ絶大な信頼を勝ち得る秘訣であり、戦車乙女たちが彼女の下に集う理由だった。

敵二輛の攻撃を避け続けられたのは、そうした采配と、また、それに良く応える操縦手の絶技の賜物だ。

片方でも欠けていれば、IV号はとつくにやられていただろう。

この追跡劇と無慈悲な破壊活動が、まるで無限に続く様な、そんな錯覚を覚えた頃だった。

ふと、先頭に行くIV号戦車の足が鈍った。

それまで決して追跡者から目を離さなかつたみほは、肩越しにちらりと前方を確認した。

黄色と黒の虎柄が、数十メートル先に見えた。

「おい、工事してるぞ」

指摘するのも嫌そうな低い声で、麻子は言う。虎柄の向こうでは、コンクリート（この世界の道路敷設はアスファルトではなくコンクリートである）が剥がされて、所々に深穴の掘られた悪路が待ち構えていた。

通行止めの赤い看板が、やけに目立っている。

みほは直ぐには応じずに、敵に視界を戻した。

今の今まで中に身を隠していたマチルダの車長が、ひよっこり顔を覗かせた。露骨にほくそ笑む顔面に「これでお終いな」と書いてあった。

なので、こっちも笑い返してやった。

敵車長が一瞬で蒼白になる。

みほの笑顔には、彼女のそれとは比べ物にならないほど邪悪ななにかが込められていた。

甘いぞ、聖グロリアーナ女学院。

「行けるでしょう？ あのぐらい」

敢えて挑発するような口振りで、みほは操縦手に言った。車内で「ええっ！？」と声上がる。

麻子は大きく舌打ちした。

「ああ、行けるかもな」

「無理しなくても良いよ」

「ほざけ」

鈍ったスピードが急に上がった。

転輪と履帯とが異様な機械音を立てる。

通行止めの看板を思い切り吹き飛ばし、IV号はそのまま悪路へと突っ込んだ。

脚に泥を巻き込み、絶妙なテクニクで穴を避け、低頭する男性現場員の看板を踏み潰しながら、何とか対岸のコンクリートへ辿り着く。

「反転」

安堵も束の間、隊長の命令に操縦手は無言でハンドルを回転させた。側面へ強い遠心力が襲う。「むぎゆう！」と今度の沙織は逆に通信機に押し付けられた。

車体が正確に180度回転した位置で、IV号はピタリと止まる。なので次は逆側面へ慣性が働いて、乗組員はそっちへ跳んだ。

沙織に限らず、上記二人以外は、文字通り右へ左へ振り回されて叫喚の有様であった。

丁度その時「敵が行けたのなら行けない筈がない」と張り合ったの

か、マチルダが工事中の悪路に踏み入った。

結果は想像するまでもない。

前のめりの体勢で片脚が大穴にすっぽり嵌り、抜け出そうにも泥濘キヤタピラで無限軌道キヤタピラが無限に空転し、身動き一つ取れなくなった。

焦燥して何か喚いていたマチルダ車長は、車体ごとこっちを向いたみほの黒い笑みを目撃してしまい、更に絶叫して顔を引っ込めた。

「うが穿て」

みほの単純な命令に、華も単純な操作で応えた。発砲音。細く白い指先から放たれた砲弾は、前のめりになったマチルダIIの、丁度キューポラの中心に命中した。蓋ハッチが内側にへしやげ、その脇から白旗が飛び出した。

これは特殊カーボンという科学の奇跡が無ければ、皆殺しであっただろう。

「ようし、逃げろ逃げろっ」

子供の様に手を叩く車長には「逃げる」という行為に対する悲観が欠片も無かった。IV号は再反転して、目的地へ急ぐ。

「お前わざとあの道を選んだな」

後続のチャールルをある程度振り切った時、麻子が怒りも隠さずに尋ねた。みほは悪びれずに応じる。

「そうだけど」

「私が失敗したらどうするつもりだった」

「麻子さんなら行けるって、信じていたんだよ」

「……コノヤロウ」

美談めいた流れにされて、何も言えなくなった所に、散々（物理的に）振り回された沙織が茶々を入れた。

「麻子ってさ、みほと仲悪い様に見えて、実は息が合ってるよね」

「何だと糞が」

「こらくっ！ そんな事言っちゃダメ！」

麻子は舌打ちをして黙る。

咄嗟に否定したものの、内心では困惑していた。幼馴染みに「息が合っている」と言われた時、麻子の理性は一部肯定してしまったのだ。



理性ではともかく、感情では到底受け入れ難い。

理性と感情の摩擦は熱となって、麻子を苛立たせた。

我がものながら、何とままならない事か——操縦手は歯ぎしりをして、怒りの全てを操縦桿にぶつけた。

やがて、履帯とコンクリートの間で火花を起こしながら、IV号戦車は急停止した。工事現場に出くわした、からではなく、単に目的地へ辿り着いたからだだった。

海鮮料理屋の正面に、IV号は陣取る。

「此処で終わらせます」

みほは、黒の革手袋をきつくはめ直しながら、皆に伝えた。遂に雌雄を決す時が来たと、更なる緊張が走る。

「聞いて下さい。最後の作戦です」

皆はそれを聞いて息を呑んだが、一斉に「了解」と応じた。みほは、満足気に頷くと、静かに瞳を閉じ、その時を待った。

心を掻き乱し、奇策に陥れても、折れるどころか凄まじい殺意で迫って来た、恐るべき敵。奴らは何処から現れるのか。

隊員たちは、五感を尖らせて待ち受ける。

道は一筋、前か後ろだ。しかし、背後に続く道は民家で途絶されているため、実質は開けた前方の一択か——

◆ 「こちらの進行ルートを限定し、出会い頭を叩く。西住さんはそのつもりでしょうね」

「最後は正々堂々、という訳ですか」

聖グロ隊長、ダージリンは浅く頷き、顎に手を当てて思案した。オレンジペコは唾を飲み込む。今のダージリンは、何処を切り取っても西洋絵画の如く、冷艶で美しい。

「アッサム。IV号の操縦手、何と言ったかしら」

「冷泉麻子さん。西住さんと同じクラスの二年生です。正直、ノーマークでしたね」

素早くノートパソコンを開いたデータ主義の砲手が、間を置かず答えた。

「冷泉さん、ね。あの方はおやりになるわ。それが、みほさんの指揮能力と合わさった時の凶悪さたるや……まともに追撃するのも馬鹿馬鹿しいわね」

「こちらが行動を起こしてから、対応までの早さが尋常ではありません。彼女たちに匹敵するコンビは存在しませんよ」

「仲がよろしいのでしょうかね」  
「羨ましい事です」

二人は、微妙に的外れな推測に頷き合い、ほうと嘆息した。

「正面から撃ち合った時、外されて、回り込まれないとも限らない……あら、アッサム、あなたの腕を信用していない訳ではなくってよ」

「……事実ですから」

ちよつぴりむくれてしまった砲手に、ペろりと舌を出してみせる隊長だった——この緊張感の無さは、豪胆によるものか、それとも天然によるものなのか、ペコには判断がつかなかったので、取り敢えず呆れてみた。

「だからと言って、こんな策ですか？」

ペコは正面に立ち塞がる民家を見やって、殊更うんざりした様子を言った。

『「本気にては大業はならず」と言うでしょう？ 要は狂った者勝ちなのよ」

「葉隠、ですか。嫌だなあ……私、あれ怖いですけれど……」

「今更文句を言わないの」

後輩の不平も何処吹く風よ。先輩は流れる様に戦車内を潜って、操縦手（後輩）の両肩を叩いた。紅い唇を耳元へ近付ける。

やられた方は、可哀想に、背後からでも息が上がっているのが良く分かった。

「じゃあ、よろしくね」

語尾に音符でも付きそうなら愉快な、しかし、冷たく有無を言わせない囁きだった。

チャーチルのガソリンエンジンが性能限界を超えて唸る。

「前進」

操縦手の「My God!!」という悲鳴と共に、チャールMk. V  
I Iは正面の民家へ突進した。

◆ 耳をつんざく雷鳴にも似た轟音が狭路に響き渡った。

元は民家を構成していた木材や石材が、見る影もない断片となって  
飛び散ってゆく。それに伴う強烈な空気圧が、容赦なく中空を砂塵で  
染めた。

勢い付いたチャール歩兵戦車が、民家を潜り抜けるまで数秒と要  
さなかった。

ダージリンは、みほが一路待ち伏せをしている事を見抜き、裏を突  
いたのだ!

さしもの『軍神』と言えど、栄えある聖グロリアーナ女学院がこん  
な野蛮極まる奇策を用いるとは、夢にも思うまい——ダージリンは戦  
車が民家を概ね突き抜けた時、したり顔で外へ顔を出した。

舞い上がる土埃を、手で払い切る。

そして砂塵の先の光景を確認した時、その美しい顔は一転、驚愕に  
歪んだ。

西住みほは、こちらを向いていた。

彼女だけではない。I V号戦車が車体ごとチャールへ向いてい  
る!

「まさか」

思わずダージリンは呻いた。「そんな馬鹿な」と心の中で続ける。

あの『軍神』は、我々が背後を突いてくるのすら見抜いていたのか。  
開けた前方の道を完全に無視して、閉ざされた背後の民家へ砲を差し  
向けていたとでもいうのか!?

認めたくはなくても、事実はそれを物語っていた。指揮官として、  
次の指示を出さなければならぬ。

ダージリンが苦しげに口を開きかけた時、みほの腕が、ずっと宙を  
切り分ける様に振り上げられた。静かに微笑む彼女の表情が、これか  
らの結末を示唆していた。

応戦の指示は間に合わない、ダージリンが半ば確信した時だった。その黒い腕が振り下ろされる直前、それは突発的に生じた。

チャーチルによって倒壊させられた民家の破片——その石材が、同戦車のキヤタピラと地面に挟まれ、勢い良く弾かれた。

それだけの現象ならば他にも多数生じていたが、その人間の頭部大の岩が弾かれた先が問題だった。

その巨石は、西住みほの顔面目掛けて跳んでいったのだ！

誰かが警告を発する間も、叫び声を上げる間もなかった。その岩は、容易く人骨を粉碎できるまで加速していた。回避は不可能だ。

血生臭い惨劇、不慮の事故——そんな単語がダージリンの脳裏を横切った。

対してみほの反応は、少し目を見開いただけだった。

そして、半ば振り下ろしていた手で瞬時に拳を作ると、渾身の力で横合いから岩を殴打した。粉碎された岩の破片が、みほの斜め後方へ散らばってゆくのを、ダージリンは呆然と眺めた。

やがてはつとして、みほの安否を問う言葉を出しかけて……それを噛み殺した。みほが今度は余裕を消した決死の表情で、再び腕を振り上げるのを目視したからだった。

そうだ、今この時発すべきは、断じて心配の文句ではない。今は闘争、その最中。判断を間違えるな！

「撃てッ!!」  
ファイア

「穿てッ!!」

二つの叫びは、ほぼ同時に発せられた。しかし、闘争の駆け引きの観点からすれば、後者の叫びは致命的に遅れていた。

指揮者が命令して、砲手が認識し、指を引く——その一連の流れの中で、差は顕著に現れた。

二つの砲撃音には、明らかにズレがあった。

果たして、砲煙が晴れた時、白旗を掲げているのはI V号戦車のみであった。

ダージリンは、天を仰ぎ、大きな空気の塊を吐き出した。長らく止まっていた呼吸を再開する。久々の空気は、硝煙の味がした。

或いはこれが勝利の味か——心臓の高鳴りと共に、ダージリンは粘膜に染みるそれを噛み締めた。

しばらく余韻を味わった後、今度こそ名誉ある敵の安否を問う言葉を出そうと、視線を前方に戻す。

違和感を感じた。

その敵の表情に浮かんでいるものは、度し難いものであった。

彼女は、笑っている。

悔恨や、無念を誤魔化す為の笑いではない。もっと樂觀的な、勝利を確信した様な、そんな笑顔。

否、覚えがある。あれは信頼の笑みだ。長年背中を預けてきた仲間に向けるような穏やかな。何か信じる様な、そんな目をしている。

はたと、ダージリンは気が付いた。

みほの視線が、自分に向けられてはいない事に。肩を通して、更に後ろに投げられている事に。

背後、だと——

瓦礫が崩れる音がした。

蠱惑的なみほの笑みから、無理矢理に離脱して、ダージリンは勢い良く後ろを顧みた。チャーチルが突破した民家跡地。

代わってそこに陣取っていたのは——大洗の38（七）戦車!!

聖グロの意識から外れる程に、今の今まで姿を見せなかった大洗最後の戦車による鮮やかな奇襲だった。

その切り札が、戦車の構造上の弱点、装甲の薄い背中へと既に狙いを定めつつある。

確実に旋回は間に合わない。聖グロの勝利は、一瞬のうちに覆され、瓦解した。

ダージリンはやや遅れて状況を把握すると、ただ唾然と口を開いた。勝利の余韻が、造作も無く吹き払われた事に、感情が追い付いてこなかったのだ。

やがて、反射的にみほに顔を戻し、硬直した。

黒い、どこまでも黒い女が居た。信頼の笑みは失せ、代わって嘲笑がそこにあつた。

あなたは結局、私の掌で踊らされていたんだよ——呑み込まれそうな漆黒の瞳が、無言のうちに述べていた。

そこで初めて、ダージリンは西住みほという人間に対して、恐怖を体感した。

どれだけ強固な覚悟を決めたとしても、あの微笑みと共に、造作も無く握り潰されてしまうのではないか——そんな無力感や絶望といったものを、相手に想起させる闇が、みほの奥底には宿っていた。

嗚呼、アールグレイ様が恐れていたのは、この瞳だったのか——  
ようやく、ダージリンは尊敬する先輩の心を理解した。とても、あれとは、目を合わせていられない。

目前に迫った38（t）を眺める気にもなれず、光を奪われた瞳を閉じ、ただ無気力に肩を落とし、顔を伏した。

今までの聖グロの奮起は、全て、無駄に終わった——

「ダージリン様」

足元から柔らかい声がした。

瞼を開くと、オレンジペコが上目遣いにこちらを覗き込んでいた。後輩の目尻には涙が潤んでいたが、決して光は失われていなかった。

そこには、頼りない指揮官への失望や諦観ではなく、健気な信頼があった。砲弾を抱えて情けなく震える後輩の姿が、何故だろうか、これ以上無い程に頼もしく思えた。

ダージリンは、はっとした。

決意を賭した勝負に負けようが、敵の恐怖に震えようが、せめて、この小さい騎士が守るべきに値する隊長で在り続けねばならならぬ。きつと、この信頼だけは裏切つてはいけないのだ——と。

「ありがとう。もう、平気よ」

ダージリンは後輩へ微笑み返すと、奥歯を噛み締め、視線を上げた。瞳には、燃え上がる様な覚悟が帰還していた。

38（t）の砲塔が旋回を止めた。狙いが定まったらしい。

やられる、と直感した。敵の砲弾によって、弱点が穿たれる光景がはつきりと脳裏に浮かんだ。

それでも目は瞑らない。

指揮官としての意地と、胸を突つ張って、敗北の光景を見届けようと覚悟していた。

砲撃音と共に、その時は訪れた。

最後を飾る——筈だった砲弾は、しかし——明後日の方向へ飛んでいった。

『はっ。』

この場に居合わせた全員が、ぽかんと、目と口を見開いた。

どうしようもない沈黙が、戦場に流れた。

やがて、正気に戻ったチャーチルが、慌てて砲塔を旋回させて、一発放った。

呆気ない程にそれは38（七）に的中して、速やかに白旗を振らせた。

再び流れる沈黙。

それを切り裂く様に「桃ちゃんここで外すっつ!？」と副会長の絶叫が響いた。

◆ 斯くして、大洗女子学園は、聖グロリアーナ女学院に敗北を喫した。

隊長席に深く沈み込む様に、みほは座っていた。

未だに現状を呑み込めていないI V号の隊員たちは、金魚の様に口をぱくぱくさせて、何とか言っている。

大きなため息を吐いて、より深く椅子に沈み込んだ。

悔しさは微塵も無い。彼女たちへの信頼は少しも裏切られてはいなかった。ただ何時もより、少しの疲れと、惜しいという気持ちがあるのみだった。

目を瞑り、口元に手を当てて表情を隠した。岩を弾き飛ばした拳が、まだじんじんと熱を持っていた。

「勝った」

誰にも聞こえない音量で、そう呟いた。

## 鬼神西住29

西住流の闘争哲学とは、つまり、この一言に尽きる。

『勝利の為には、犠牲を厭うべきではない』

これは幼い頃、母親から与えられた極少ない言葉で、更にその中でも納得している稀有な言葉だった。

母親が真の意味で理解しているかどうかは微妙な所だが——少なくとも娘は自分なりに噛み砕く努力をした。

西住屋敷書庫。みほを構成する西住流の大部分は、この場所からの引用である。幼いみほは母の言葉を理解するべく、何時もの如く、崇敬する先祖の生き様に習う事にしたのだった。

埃臭く、照明もまともに点かない暗がり、みほは家系図を引っ張り出した。太い巻物の形態である。

一々巻き直しながら読むのが面倒くさかったので、廊下の手前から奥まで巻物を勢い良く転がし、全容を開いてしまうと、端と端に適当な古書を積んで固定した。

長過ぎていっぺんに見れないので、本棚の上によじ登って全体を俯瞰した。

そこには、西住一族二十代の樹形図と、生年月日と没年月日、そして死因が明記されていた。

呆れ返る程『戦死』の文字が多い。

常々そうと思っていたが、やはり家の一族は馬鹿なんじゃないかと思った。

樹形図を頭頂の初代様から下って、やがて末端に辿り着く。『みほ』と、まだ新しい墨で書かれた名前に誇りを抱いてしまう辺り、やはり自分も馬鹿の端くれなのだと言合点した。

一体私の死因には何と書かれるのだろうか——と愉快な事を考えつつ、末端に位置する自分の名から、樹形図を三つ遡る。

曾祖母『軍神』西住戦車隊長——彼女の名前がそこにあり、例に漏れず、戦死の記述があった。他の先祖と比べても、圧倒的に若い。弱冠二十四歳での戦死である。



「会ってみたかったな」

本棚の上でみほは呟き『戦死』の文字をじつと見つめた。みほの一番尊敬する曾お祖母様。数多の敵を撃ち倒し、前へ進み続けた戦車隊長。生涯でただの一度の敗北も無かった無敗の『軍神』。

一度で良いから、その強さの秘訣をご教授願いたかった——  
「……ん」

ふと、看過できない違和感が引つかかった。首を捻る。

曾お祖母様は最後の一瞬まで闘い続け、敵の大軍を殲滅した後には、怪我が元で失血死した。遂に敵は、曾お祖母様を正面から破る事は叶わなかったのだ。

生涯負け無しだった曾お祖母様——それなら何故『戦死』しているのだ？

普通、そこまで勝負に勝ち続けたなら、生きて帰ってくるべきじゃないのか。だったら私にも会えていたかもしれないのに。それが何故、失血死などという、無念の結末を迎えるまで追い詰められているのだ。

闘いの勝利と、本人の生存が結びついていない……？

『戦場での勝敗が全て』という、現代戦車道の体系の中で育ったみほにとって、この現象は極めて不可解なものに感ぜられた。

みほは本棚から飛び降りると、過去の戦記を片っ端から手に取り読み漁った。すると、曾お祖母様の様なケースが、他の戦死した先祖にも共通して見られるという事に気がついた。

これは如何なる事か。散乱した本や巻物に埋もれて、みほは益々首を捻って考えた。

勝利が最優先、という西住流の基本理念。それを忠実に実行した結果、追い詰められて戦死する。

何処かがおかしい、理屈に合わない——電撃が駆け巡る様に、或いは林檎が不意に落ちる様に——みほの中に一つの答えが生まれた。

西住の女たちは、眼前の戦闘を一心不乱に楽しむ余り、大局に敗北しているのだ。

我が一族は、局地戦闘に代表される、戦術単位の争いにはめっぼう

強い。ほぼ無敵とまで言つて良い。しかし大局と呼ばれる、戦略単位の駆け引きは絶望的に苦手なのだ。

些末な戦術上の勝利を積み重ねたところで、他方が二倍三倍敗北していれば、戦略的には無為ではないか！

あの口下手極まる祖母や、母や姉を思い浮かべ、みほは自ずと頷いた。

連鎖するように、闘争の目的と手段についても疑念が産まれた。西住流をそれ足らしむる闘争目的『闘うために闘う』——これは正である。

闘争の歓喜とは、何物にも代え難い無上の喜びだ。西住一族にとって、理屈を超越した血脈、遺伝形質の様なものだ。

みほは、その闘争目的に共感する一方で、過去の達成手段について批判した。

彼女らは闘争の消費者であり、生産者では有り得なかった。

例えるならば、目の前に果実がなっていたら、熟しているか確かめもせず飛び付く様なものだ。

けれど美味しい果実だからこそ、水をやるなり肥料をやるなりして、育てるべきではないのか？

育て、増やし、他者にも分配すべきではないのか？

己の死がそのまま敗北だとは思わない。

でも、生命の使い方が余りに純粹だと思った。

これらは西住流が圧倒的な個の強さを追求し続けた故の弊害なのだろう。だが、みほは弊害と思つても、限界であるとは信じなかった。

弊害があるのなら、単に破れば良い。

「私がいます」

数多の『戦死』の文字へ語りかける様に、みほは独語した。

彼女たちは最後まで気付きを得る事なく——或いは気付いていても実践すること無く——死んだ。

しかし、みほはこの場に存在している。心臓を拍動させ、血流を循環させている。

この身は誰から頂いたものか？

答えは全て、目の前の樹形図に書いてある。

ならば刻むべきは、その続きだ。

『大きな勝利の為には、あらゆる小さな犠牲を厭うべきではない』  
母が教えた言葉は、娘の中で変容した。

では、本当に得るべき『大きな勝利』とは何か。そのために必要な犠牲とは何か。目的を達成するための手段とは何か——考えなくてはならない。当面の課題は定まった。後は、達成するための才覚を磨くのみだ。

与えられた言葉を自分なりに噛み砕き、答えを出したみほは満足して、開いた家系図巻物を巻き直した。

紙がこんがらがって、上手くまとまらなかった。何度か試したが、やはり駄目だった。書庫を見渡すと、引つ張り出した古書が散乱している。

みほは一時悩んだが、このままでも菊代さんが、まあ何とかするだろうと思って、放置して書庫を出た。

上記の理解が二度目の変質をしたのは、敗北を知った後——逸見工リカに精神的敗北を喫した後である。

中学高校と、がむしやらに『大きな勝利』を求め、確実に成果を重ねていたみほが、あろう事か他者に停止を強いられたのだ。

結果的に、それが良かった。勝利と敗北、それぞれの価値について客観的に見られるようになったのだ。それだけではない。心を許せる、好むべき腹心までをも得た。

驚くべき革命だった。

勝利によつてのみ結果と承認が得られると考えていたみほが、敗北によつて大きく前進したのだから。みほは、認識を改めなければならぬと思った。

そして、件の母親の言葉へ、今もまだ継続する答えを導き出した。『大きな勝利の為には、あらゆる小さな犠牲を厭うべきではない。それが我が身であっても例外足り得ず、時によつては推奨される』

戦略的勝利を得んと欲すならば、他ならぬ勝利に振り回されてはならない。場合によつては敗北すら勝利より大きい価値を持つ——思

春期特有の自我の膨張も相まって、知らず知らず先祖たちと同じ様に、目先の勝利に囚われていたのかもしれない。

そうと悟ってからは、より一層、自らを含めた犠牲を切り捨てるのに容赦がなくなった。

心身を切り裂く痛みは、しばしば痛みを伴ったが『大きな勝利』の為なら、我慢出来た。自分から流れ出てゆく鮮血を見て「綺麗だ」と思う頃には、痛みを何とも思わなくなっていた。

他者を切り捨て、自己に刃を入れて得られる勝利は、以前とは比べ物にならなかった。

戦車道全国大会における黒森峰の十連覇は、みほの不惜身命を証明した顕著な例であっただろう。

目指すべきは、前へ。

みほのにとって『大きな勝利』とは、西住流の発展であり、またその先に他ならなかった——けれどまさか、家族に弓引かれるとは想定していなかった。



恐らく、みほが生来の戦術的天才であったなら、上記の発想には至らなかったであろう。

しかし、彼女は天才ではなかった。強くなる為には、少なからず努力をする必要があり、才能の欠損を他物で補う必要があった。

やがて彼女は、自身の闘争哲学を実行するための最強の武器『人徳』を開花させた。

みほが現在の西住流を批判し『私だけの戦車道』を切り拓こうとする姿勢は、正史と何ら変わらないのである。

## 鬼神西住30

西住みほは、白旗を上げたまま牽引されてゆくピンクやゴールド、ふざけたカラーの戦車隊を眺めていた。

大洗女子専用の待合テントは空席が目立っている。人数分の座席があるのにも関わらず、掛けているのはみほ独りだけだ。

他の隊員たちは、何処であるにしろ、みほの視界に入らない様な場所に居るのだった。

合わす顔が無いのだ。

とんでもない事をしでかしたという痛感があった。注意欠落、敵前逃亡、致命的照準ミス——その他思い当たる節が多過ぎて、とても近寄れない。

そういうチームの問題はさておいても、本当に彼女たちを苦しめたのは、社会的問題だ。

みほが勝ち取ってきた揺るぎない数々の名声『無敗の戦車隊長』『軍神の再来』——その全てが今日台無しになったのだ。他ならぬ、大洗女子学園のせいだ！

少なくとも彼女たちには、罪に向き合う時間と、腹を括る時間が必要だった——と、そこで腹を括り慣れた人物が現れた。

生徒会長、角谷杏である。

腹を括りすぎて、胃を絞り上げられた彼女は、試合直後にトイレに駆け込んで、その内容物を全てぶちまけていた。「我慢してたんですか？」と失笑する友人に「まーねー」と平気な顔で、努めて強がった、その後での対面である。

正直みほの横顔を見るだけで嗚咽が込み上げたが、既に込み上げてくる物理的なモノは存在しなかったので、酸っぱい空気を戻すだけで済んだ。

頑張つてそれを呑み込むと、杏はみほの隣に、一つ間を開けて、腰掛けた。

「ああ、会長」

戦犯の一人に気が付くと、整った童顔に憂いを帯びさせて、そちら

を向いた。

普段より弱って見えるのに、逆に何倍もの圧プレッシャー力を感じるの、臆病心が生み出す錯覚なのだろうか？

「その……ごめん……」

姿を見せない皆を代表して、つい真つ先に謝った。言った後で、これは悪手だったと後悔した。

杏は、奥歯で舌を噛んだ。

「何がですか？」

「私たちのせいで、負けちゃったから」

「初心者軍団ですよ。残り一輛まで追い詰めた、むしろ敢闘だったと思いますけれど」

「西住ちゃんは勝つつもりだったんだらう」

「無論。悔しいですよ」

「だから、ごめん。邪魔ばかりして、応えられなかった」

「何だ、自覚はあったんですね」

直球だった。吐くものが無いので、内蔵が裏返って出てきそうになかった。

みほは、くつくつ陰湿に笑っていたが、直ぐにさっぱりとした表情に変わった。

「私は『軍神』なんて立派なものではありません。負ける時は負けるし、それが自然だとも思っています。そして敗北の責任は、指揮官が有します。最も重い、ね。それを差し置いて、会長たちが何を謝るんですか？」

「それは……」

「謝る必要が無いのに、どうして謝るのですか？」

「う……」

理詰めで意図的にぼやかされている、と杏は感じ取った。

さては、非は自分にもあると認める事で、逆に罪悪感に訴えてくる戦法だな。畜生、効果抜群じゃないか。

いつそ、怒り任せに詰問してくれば良いのだ。怒る指揮官に、皆を代表して生徒会長が真心込めて頭を下げる。これで一応筋は通る

だろう。

よしんば自棄を起こし、暴走したとしても、秘められた邪悪が白日の下に晒される事となる。全く無傷とはいかなくとも、杏一人を犠牲にすれば、十分駆け引きは可能だろう。

だがそんな短絡的な対応を、この女は取らない。この上は貸しを作るだけ作るつもりなのだろうか。あくまで理性的、合理的で、故に容赦が無い。

分かっていった。分かっていたのに――

近く、歓声が聞こえた。

この場に集結した学園艦や、大洗町の住人のざわめきだった。その数、数千を下らない。前日の、惜しみなく予算を注ぎ込んだ宣伝の結果であった。

聖グロリアーナ女学院の代表――ダージリンが、壇上に立つたらしい。美しい、少し緊張気味な彼女の挨拶が聞こえてくる。

杏たちが今居る天幕は、敢えて舞台の裏側に設置しているため、姿は見えない。

「……せっかく集まってくれた大洗の人たちに、西住ちゃんの勝つ姿を見せられなかったから」

杏は、愛して止まぬ大洗の人々に助け舟を求めた。

あながち、的外れな事でもない。つまり問題は『西住みほの醜態を世の中に晒した』という点に尽きるのだから。

「あの人たちは別に『戦車道の西住みほ』の事なんて良く知らないでしょう。戦車道なんてマイナー競技ですから。宣伝を聞いて、興味本位でやって来ただけ……絶対的な勝利だなんて、そんなの、最初から期待していませんよ」

「けれど、不敗の名声はこれで終わった」

「言われてみれば」

「惜しくはないの？ 言いにくいんだけど、西住ちゃんの築き上げてきたもの、全部台無しだよ。それも他人のせいでき。怒られても仕方ないと皆思ってる。だから誰も姿を見せないんだよ」

「私ってそんなに怖いのかな」

「……どうだろうね」

「確かに、ほんのちよつと……いえ、嘘、嘘でした。本当は結構がつかりしています。これで前からのものは何にも無くなっちゃいました」  
「だったらっ」

「けれど名誉欲で戦車に乗ってる訳ではありせんからね。気付かないうちに、心に不純物が積もっていたみたいです。こういうのが一番厄介なんですよ。一掃できて、むしろ清々しました」

「でも西住流の教えでは『勝利が全て』なんですよ？」

「あつ、良く知ってますね。嬉しいです！」

杏の心臓が、本能的にどきりとした。感心して目をぱちくりさせるみほは、本当に可愛らしい。

孤高の花の冷たさと、群生する野花の温かき。その二つの美しさが、彼女の内部で不思議と摩擦すること無く混在していた。

言わば、天性の魔性だ。誰も彼女を捨ててはおけない。理由は無くとも正義だと信じたくなり、無条件で味方をしたくなる。彼女の微笑みや、喜びといった些細な見返りのために、身を投げ出した努力が簡単に出来てしまう。

皆、西住みほという人間が好きになる。

実際、ひたすら無知に追従出来たなら、どれだけ楽で幸福だろうか。ただ言う通りに働いて、頭を撫でて褒められたらなら、理性など吹き飛ばす自信がある。

みほにとって権力基盤を固めるためには、弾圧に頼らずとも、魅了で十分だった。

杏は奥歯で舌をきつく噛んだ。頬が熱い、胸が高鳴っている。危ない、吞まれるところだった——気を抜けば籠絡されてしまいそうだ。本人すら気付かぬ間に味方にされてしまう。

何より、それが恐ろしい。現代社会において『正義』とは味方の数で決まるからだ。その民主主義の大原則を知らぬ西住みほでもあるまい。

杏はぶるりと身を震わした。

みほは、目の前の震える小さな女の子を眺め、情に浸っていた。



己の魔性は自覚している。だから効果的に行使出来る。みほは「お前が好きだ」という告白には慣れており、面白くも何ともなかった。反対に「お前が嫌いだ」という敵対が、どうしようもなく愛おしかった。他人を魅了しながらも、本心では敵の出現を望んでいるのだ。

完全に我が儘だ。

それは自覚している。けれど知った上で「個人的な好みは別問題」として開き直っていた。

自我の怪物の様な友人を故郷に残してきた。彼女は有り余る反骨精神で歯向かってきた。それ以外の道を知らない不器用な奴で、だから大好きだった。

しかし、この会長はタイプが違う。

最初から有るか無いかも分からない様な、なけなしの勇気を振り絞って歯向かってくる。流されてしまえば楽なのを知っていて、それでも踏みとどまっている。

いじらしい。

魅力するつもりが、逆にすっかり魅了されてしまっていた。好みがはつきりしている分、案外惚れっぽい性分なのだ（先のダーズリン戦でも、うっかり戦略を忘れそうになっている）。

歯向かえば歯向かうほど好まれる——全て、杏の知る由もない事だった。

「そもそも、今日の『勝利』の定義とは何でしょう？ 試合でダーズリンさんを叩きのめす事ですか。相手に屈辱を与え、こちらの優越を誇る事ですか。そんな浅はかな自慢のために、今日の親善試合は組まれたのですか」

静かだったが、明らかな反論だった。会長は怯む。この隊長は、今挙げたそれらを狙っているとばかり思っていたのだ。

「覚えていませんか。戦車道の素晴らしさを世の中に広めるのも、私の夢の一つなんです。楽しい競技ですから。心からそう思っているんです」

ダーズリンが壇上で何か言う度に黄色い歓声上がるのを聞きながら、みほは言った。真意か方便か、杏は測りかねた。もしかすると、

両者混在しているのかもしれない。

何を言っても、この黒い女には響く気がしなかった。分け入っても分け入っても真つ暗闇で、決して彼女の心中には辿り着けない。

実は別の意味で、みほの心に滑り込んでいたのだが——悲しい事に、杏としては暗中を手探りで進むしか選択肢が無かった。

「で、でも大洗はそうでも、外では。例えば黒森峰とか——」

半ば意地になった杏は言の途中ではつとして、青ざめた。入ってはならない場所に辿り着いてしまった気がした。内在的恐怖のみならず、外在的恐怖の存在に気が付いてしまったのだ。

みほの双眼に宿る漆黒が、さざ波を立てた。

『西住みほ親衛隊』。みほの黒森峰時代に創設された、額面通りの組織。噂では、血を飲み交わした姉妹として鋼の結束を誇り、何とみほが転校した後も存続し続けているという。

彼女たちが、崇敬する副隊長を貶められた憤怒は如何ばかりだろうか。時に人というのは、自分のためより、他者のための怒りに我を忘れる。しかも集団心理が絡んでくると、もう鎮火は不可能だ。

もはや彼女らの絶対存在が収めるしかないのだが、目の前の元副隊長は、熊本を遠く離れて茨城だ。

暴走した親衛隊が、然るべき者に責任を取らせるべく、徒党を組んで報復に乗り込んでくるのではないか——

「大丈夫ですよ」

杏が何も言わないのに全てを承知した様子で、件の絶対存在は唇を歪めた。

「彼女たちは忠実です、けれど馬鹿ではない。隊長も優秀な娘ですから、何とか抑えてくれるでしょう。でも大洗の外に出たら……警察がちゃんと仕事をしてくれれば安心だと思います」

「本当に？」

「会長。本当でないとして、私の責任ですか」

そうだろ、とは断言しづらかった。教唆したならともかく、他人の自己判断について、みほがとやかく言われる筋合いは無きに等しい。熱狂的ファンの凶行と言われればそれまでだ。

最悪なのは、犯行を教唆しておきながら「こんな望んでいないのに」と被害者面で涙を浮かべる事だ。悲劇のヒロインは直接手を汚さず、戦犯を排除し、同情まで買えるという訳である。

杏の頭脳は、真つ先に最悪の事態が頭に浮かぶような仕組みになっていた。自分の有能は、すべからくここに起因しているのを知っていたので、嫌な気分になった。

「じゃあ西住ちゃんから、直接注意するっていうのは」  
「嫌ですよ」

「何で?!」  
「出奔同然で辞めてきたのに連絡を取るとか、気まずいじゃないですか」

「……っ!」

都合良く普通の女の子ぶりやがって!!

謝るつもりが、逆に罵倒したくなった杏は椅子から腰を上げかけたが、それこそ報復を囁かれたら堪ったものではない。仕方なく、腰を下ろした。

この女と議論を試みると、ろくな事にならない——杏の追求はそれきり止んだ。積極的に目上の人物を脅かす程、みほは意地悪でなかったの、二人から会話は無くなった。

「につにつ、にしじゅみっ」

異常に上擦った声がして、二人がそちらを向くと、黒目の位置がまるで定まらない河嶋桃が何時の間にか立っていた。震える膝が極端に内股になって、血の気の引き様は今にも貧血で気絶しそうに見える。モノクルがずり落ちて、右目に半分しか掛かっていない。

それもこれも、聖グロとの雌雄を分けた天才的砲撃ミスのせいだった。その重責は、杏の比ではない。優に桃の心の器の容積を超過していた。

杏は「西住に殺される!」と泣き喚く桃を、柚と二人がかりで戦車から引きずり下ろす苦勞を思い出しつつ、心から友人を哀れんだ。

「……この後スピーチがあつてだな、忘れてて、だから」

「ああ、これですね」

みほは、テーブルの傍らに置いてあつた原稿用紙の束を丁寧に差し出した。桃はへっぴり腰でそれを取った。

「最後のはしゅまなかつたな。違うんだ。あれは、敢えてというか。いやっ、わざとじゃないんだが、真の実力じゃないというか」

「そうですか」

「たまたま、偶然、砲弾が逸れたのであって——」

論法の破綻した言い訳は暫く続いた。みほは適当に相槌するだけで、関心を示さなかった。そのうちに少し落ち着きを取り戻した桃は、恐る恐る訊ねた。

「……怒らないのか？」

「ええ、特に」

以外にも穏やかな隊長に、一時、胸を撫で下ろした。少なくとも「殺される」なんて事態にはならなさそうだ。だったら気が変わる前にそくさ退散しようと、桃は後輩に背を向けようとした——続く言葉を聞くまでは。

「だって、八つ当たりになつてしまふじゃないですか。怒るのも可哀想です」

ねえ、会長——とみほは隣を顧みた。唐突に話を振られた杏は、咄嗟に首を縦に振ってしまった。

「会長にも少し言いましたが——今回の敗北は、無能者に詰めを任せた指揮官の、私の目が曇っていたというだけの話です。それだけなのに、会長は謝つてこようとすし、逆にこつちが申し訳ないぐらいですよ。ですから、河嶋さんが責任を感じる事はありません。これからも、あなたを怒る事はありませんから、安心して下さい」

優しい口調だった。しかし、その優しさは、どんな激しい怒りよりも辛辣に、桃の自尊心を深く抉った。それだけならば、発作的なヒステリーを起こして、心の安定を図ったかもしれない。

「杏ちゃ……会長。本当ですか、皆を代表して、後輩に謝つただなんて……」

見た事もない悲痛な表情に、会長は狼狽えた。「いいえ」と言つてく  
ださい——と目が訴えかけている。しかし、みほの手前だ。嘘をつく

わけにもゆかず、最終的には首肯するしかなかった。何から何まで、自らの軽率さを呪った。

「ひ、や、ああああ……っ」

桃はその場で喘ぎ、膝から崩れ落ちた。朱色になった顔に原稿用紙を強く覆い被せ、力無く横に首を振った。

経験すらない、激しい『恥』が全身を焼いていた。

無能と蔑まれ、侮辱されるのは慣れたものだ。傷付くに値しない。

それより、なにより。敬愛する生徒会長に、昔馴染みの親友に、全部の責任を押し付けて恥をかかせる——桃の善良なる自尊心に拠れば、独立した個人として、断固許されない所業だった。

更には「私のせいで」と泣き喚ぎ、懺悔する事すら封じられている。気にかける価値も無い、と断言された様なものだからだ。

これまで何が何でも保持してきた虚栄心や自己陶醉が、羞恥に焼き尽くされて灰になった。後に残ったのは、虚しさだけだった。

「確かに、私は、戦車道で無能かもしれない……」

失意に打ちひしがれた桃は、ふらふらと立ち上がった。

細かく震える細い指と、顔に押し付けられ、ぐしゃぐしゃになった原稿用紙の隙間から、濡れた瞳が覗いた。

その奥では、それまで無かった炎が揺れている。

「だからせめて、私に出来る仕事を全うしよう」

壇上から、司会が河嶋桃の名を呼ぶ声が聞こえた。呼ばれた広報担当は、足取りも強く、二人の前を去っていった。

二人のうち一人は呆然とし、もう一人は満足そうに笑った。

◆ 壇上に登った河嶋桃は、数千の群衆の面前に姿を現した。ざわめく彼らの中には、先のダーリンの言葉による熱が、まだ残っている様子だった。

一瞥した後、桃は徐に演説台へ原稿を広げた。

そして、皆の熱が未だ冷めきらないうちに、マイクに向け口を開いた。

『——今日この場に集まった幸運な人々は、大洗女子学園にとっての

重大な転換点を目撃している。それは何か……数十年前に命脈の閉ざされた戦車道復活という歴史的快挙である！これは決して生徒会だけではならなかった。試合を快諾された聖グロリアーナ女学院にも、応援して下さった大洗の皆にも、感謝の念に絶えない——』

堂々と落ち着き払った、荘厳とまで思える発音だった。広報主任の外見通りの鋭い視線が、皆に投げかけられた。片眼鏡が陽光を反射させ、鈍い光を放つ。

一度聞き始めたら、注意を逸らすことは許されない。そんな人柄の真面目で厳しい印象を、人々は第一に抱いた。

『——そもそも我々が戦車道を復活させようと考えたのは、すべからく母校のためを想ってであった。全ての始まりに、生徒会長のお言葉が有った。その時はまだ、私をはじめとする、極小数の生徒が同調するに過ぎなかった。しかし、今では、数千人の人々が同意するに至った——』

演説は続く。待合テントから移動したみほは、舞台袖で桃の姿を観察していた。

周囲には、壇上で別人と化した広報主任を眺めている少女たちが居る。機材を弄るのも忘れ、ただ啞然としているのは広報委員たち——つまり、桃の部下である。

彼女たちは、桃の実態を一番良く知っている。広報の能力はあつても、人格的に極めて頼りない上司を常々情けなく思っていた。しかし何故か憎めない人柄を、からかいの種にしていた。

それが、今やどうか。

音響係らしい小柄な少女が、疑心と好奇心を混ぜた顔をして、みほの横顔をまじまじ見た。

一体、この人はどんな奇術を使ったんだろう——その視線と、意図に気が付いたみほは、口で応えず、悪戯つぽく肩を竦めてみせた。音響係の少女は赤面して、機器のダイヤルを意味も無く弄ったりした。

可愛い、一年生なのかな——などと思いつながら、無差別に魅了を振り撒く女は、自分の思案に戻った。

私が何をしたか？

簡単だ。何もしていない。

会長や広報主任が会いに来る前、みほは桃の忘れていった原稿に目を通していた。

内容を修正してやるつもりで、批判的に読んだのだが、修正箇所は一つも見付からなかった。やった事と言え、少し尻を叩いてやったくらいだ。

今の演説は、全て自分の才覚によって行っているものなのだ。

壇上では、演説も中盤に入っている。語気はいよいよ荒く、身振り手振りを激しくして、聴衆の感情を扇動している。

どうも、河嶋桃というのには、芝居の才能があるらしい。ぺらぺらの人格を覆い隠すため、生きてるうちに自ずと身についた仕草なのだろう。

みほと同じく後天的な才だとしても、由来がまるで異なる。

全く、人格を恥と思うのなら、治す努力をすべきであるのに、それを隠す方に能力を裂く辺りがどうしようもなく小さい。

『——世界の変化を拒む様に、多くの困難が我々に襲いかかった！古い慣例、資金不足、生徒の不理解、挙げれば限りがないほどだ。しかし、一番の問題は人材の欠乏だった。だがそんな時、我々は素晴らしい友を得た。既に皆も良く知っているだろう。彼女は、西住みほという転校生だった——』

みほの名前が出ると、群衆の熱が一挙に上がった。人々は、まるで本人に向けるような好意の視線で、桃を見た。

その本人は、舞台袖で薄く笑った。賞賛というより、滑稽さが勝つての笑みだった。

『——我々は共に誓った！ 停滞した社会へ風穴を穿ってみせると。輝けるあの日を取り戻すべく、あらゆる努力を惜しまないと。そして、今日という日、その不断の努力が形となったのだ。この代え難い歓喜は、この場に居る全員と共有できるものと信ずる——』

桃の演説は、大袈裟で、聞こえが良く、そして中身が無い。事実を脚色し、多少の嘘を織り交ぜながら紡がれる虚言。それに気付かず沸き立つ人々——全く滑稽としか表現出来ない。

姿形など幻影の様なものだ。刹那的に移ろい、何ら意味は存在しない。しかし、民衆というものは幻影に価値を見出してしまふ。

何故か？

彼らは真に価値あるものを、追い求めた経験が無いからだ。知らず知らずのうちに、知らない振りをしているからだ。

だから上辺を飾った虚像に簡単に騙される。好きにも嫌いにもなれないし、興味も湧かない。つまらない人々だ。しかし世の仕組みと  
いうのは、こんな愚かな連中に主権を渡している。

そんなだから、私なんかにつけ込まれるんだ——みほは皮肉に口元を歪めた。

『——では諸君らに紹介しよう。権威ある西住流後継者にして、名譽の大洗女子学園戦車隊長……西住みほ!!』

遂に、桃は勢い良くみほの佇む舞台袖を指した。拍手をしながら、ゆっくり逆側に下がると、聴衆も促されて拍手をした。

お膳立ては完璧と言って良いだろう。彼女は宣言通り、自分に出る仕事を全うしたのだ。

無能者は仲間に要らない。

後背の敵こそ真つ先に処理すべきだ。

その対象に、河嶋桃は入らない。

黒い少女は舞台袖から出て、聴衆に姿を晒した。歓声と、手を叩く音が一段と激しくなった。

その音源へは一瞥もくれずに、敢えてゆっくりと歩く。やがて演説台へと辿り着いたとき、それらの音は最大となった。

みほはマイクの電源を入れる。

原稿は持っていないかった。

◆ おまけ 『魔王島田』

◆ 愛里寿ちゃんも誕生日おめでとう。



西住を倒せ。

物心付いた時には、そう言われてきた。

脳に直接刻まれているみたいに、一族の者は事あるごとにそう言った。

島田流戦車道は、俗に『忍者戦法』などと呼ばれる。多彩な謀略を駆使し、西住流を追い詰めるものの、最期の最期では何時も負けた。期待されていたお母様も、現役時代にあと一歩のところまで西住を追い詰めたのだが、遂に決着は付けられなかったらしい。

お母様が家元の座にあるのは、その善戦が評価されたからだという。

積もり積もった期待は、さらに上乗せして私に渡される事となった。

私は才能に恵まれていた。

これならば積年の恨みを晴らす事が出来ると、一族の長老たちは咽び泣いて喜んだ。

しかし、喜びは束の間だった。

西住姉妹。

よりにもよって同じ世代に産まれたのが、西住流の中でも、更に怪物みたいな乗り手——それも二人だった。

中学生にしてジュニア戦車道国際試合決勝戦において、ドイツ代表を殲滅、完封するという覇業を成し遂げた。西住流の名は世界に轟き、彼女らの勢いは留まる所を知らなかった。

でも私は独りだった。

ただ一族の見栄のために飛び級を重ねた私に、信頼を育んだ仲間など居なかった。

果たして、あんな怪物たちに単身で渡り合えるのか。口に出来ない恐れが、心の片隅に巣食った。

目一杯努力して、成果を出しても、常に西住と比較された。一族は言った、西住を倒せ。何の解決策も示さないのに、無責任で、過度な期待だけを投げかけた。

誰も私を見てくれなかった。

優しいお母様でさえ、私の背後に、倒せなかった『あの女』を透かして見ている様に感じた。

耐え難い孤独は、口にする事すら許されず、心の底に積もっていった。巢食った恐れと、積もった孤独は、急速に私の心を蝕んだ。

——愛しているわ愛里寿

——西住を倒せ

——あなたには才能がある

——西住を倒せ

——皆、期待しているのよ

——西住を倒せ

——だからもつと頑張つて

——西住を倒せ

——西住を倒せ

——西住を倒せ

——西住を倒せ

ある晩、私は独り絶叫した。

試合で勝ち取ったトロフィーも、一族の写真も、お気に入りのボコ人形も、全てめちやめちやに壊した。

破壊活動が終わると、私は笑い出した。

息が続かなくなっても狂った様に笑い続けた。

終わらせてやる。『倒す』だけじゃ足りない。島田も、西住も、何もかもぶっ壊してやる。

過去も未来も、一切の因縁を粉碎すれば、煩い事は何も言われなくなる。私は自由になれるんだ。

そうすれば、そうすれば——誰か私を見てくれるだろうか？

## 鬼神西住31

西住みほは、自分の容姿というものについて概ね気に入っている。ただし、その認識が終始一貫していたかと問われれば否と答えよう。

西住家の女性には、みほの他に、祖母、母、姉と三人居る。この三者は凛々しい顔立ちという点で共通していて、横に並べてみると「なるほど親族だな」と頷かれるくらい似ている。

特に母親というのは、娘視点からでも飛び抜けて美しい女性であると思う。まだまだ発展途上であるが、きつと姉も、勝るとも劣らない美女になるのだろう。

祖母は、もちろん既に花盛りは過ぎているものの、すつと筋の通った顔立ちは健在で、和服の様になった老婦人である。

その辺り、みほは違う。

何となく顔全体がふにやりとしていて、凛々しいなどとはお世辞にも言えない。これを人に言わせると、柔和とか、朗らかとか、優しげとか、大体そんな風で統一される。

全くもって気に食わない。

西住女衆四人で撮った写真などでは、自分だけ全然似ていないので、よく仲間外れの気分になったものだ。

「みほは坪井川で流れてるのを拾われたからだ」とは姉のからかいで、真に受けて大泣きした事がある（姉の質の悪い事には、この手の冗談を真顔で言つてのける）。

姉は速やかに拳骨を喰らい、謝罪してくれたが、そのせいで家族写真を好まない性分は未だに引きずっている。

このキの抜けた顔は曾お祖母様譲り、というのは年代物の肖像写真を見て十分知っていた。

心底嬉しい反面、しかし自分の顔を故人と見比べるというのは、とんでもなく虚しい行為の様な気がしてならなかった。

この時のみほは、只今の姿形に対する執着を捨て去れるほど、精神的に成熟してはいなかったのである。

想いは燻り続け、やがて中学に上がるか上がらないかといった頃、思春期の目覚めと共に「自分は醜い」という自意識に取り憑かれた。恐ろしくつまらない事だが、当時のみほは『完璧』を目指していた。そのためには容姿すらも完璧でなくてはならないと、またつまらない努力を色々試したものだ（お陰で化粧技術は向上したが）。

みほは馬鹿でなかったもので、そんな努力は虚しいばかりで意義は皆無だと早々気が付いた。

思えば、ありのままを受け入れられず、偽る方が余程恥ずかしくはないか。十人に一人振り向けば幸運、何処にでも居る素朴な器量良し——程度の顔だが、ともかく悪くは無いことから、それで良し。

そんな風に樂觀するようになってから、顔面の善し悪しなど、すっかり眼中に無くなってしまうたのである。

再び思い出してきたのは、つい最近の事だ。全く不本意な転校をして、全く新しい環境に身を置いてからだ。

みほは気が付いた『誰も私を相手にしない』と。

このまま黙っていれば、友達が一人もできない様な、かといって無下にもされない様な、自分はそんな顔をしているのだと。

これが姉であれば、同じ風になつていただろうか。いや、黙つていたって打算しか頭のない様な女共に囲われていたに違いない。

凛々しきで姉に劣り、可愛らしきで武部沙織に劣り、華麗さで五十鈴華に劣る——そんな容姿だからこそ、自然と人間集団に溶け込む事が可能なのだ。

だから今では、自分の容姿を大体気に入っている。

◆  
手で掬い取れそうな巻雲が、蒼天の内でもゆったり風任せに流れている。薄い雲の膜を通った強過ぎない日光が頬に暖かい。しつとりとした一条の海風は、爽やかな潮の香りを運び、少女の胡桃色の髪をさらさらと靡かせた。

素敵な日だ、気分が良い。

彼女は、演説台に立つてまず初めに思った。

太陽を浴び、風を嗅げばこそ、生きた心地がする。願わくば、この

感性を忘れたくはないものだ。

良い気分で、突き抜ける天を仰いでいた顔を引くと、世界が打つて変わる。

人間だ。

人間、人間人間人間——突き抜ける蒼天の下、そして彼女の足下では、数千からなる黒山が所狭しとひしめいて、好き勝手に蠢き騒いでいた。

少女は無意識に目を細める。これを眺めるに、果たして気持ちの良い奴が居たものか。居るとすれば、余程の変態か、狂人に違いない。全員が全員、同じ顔だった。

少なくとも彼女にはそう見えた。一々区別する努力をしなかったからで、そうする意義も認められなかったからだ。

彼らは中身がどうであれ、生まれながらにして平等で、同等の権利を持ち、それが決して侵されないのでだろう？

それだけ理解していれば十分だった。

辟易する気持ちで目玉を動かせば、それなりの秩序があった。

後列に一般市民、中列に高等部、前列に中等部。

そして最前列には、熱狂的に詰め寄せる前中後の人々を、死に物狂いで押し返す風紀委員のスクラム——聖グロリアーナ女学院戦車道部隊長、ダージリンと、広報主任、川嶋桃の前座によって、場は加熱しきっていた。

少女の唇が歪む——寒気のする位、蠱惑的に。

これは茶番だ、しかも笑えない類の。きっとそれさえ分かっている、正気を保てるだろう。

けれどこの場で、自分以外に正気の人間がいるだろうか。全然そうとも思えない。

だったら、正気に戻さなければ。

「西住です」

始まりは一言の、それは名前だった。

私の名前は『西住』という。

それだけだった。

たった一言で、空間そのものが震えた。

幾千の喉で発生し、幾千の口から放たれる歓声が、一点に向かって宙を飛び、やがて炸裂した。

空間を震わし、肢体が引き裂かれてしまいそうな音の波動。少女は、ただ静かな笑みで全てを受け止めた。

西住みほ。

このたった一人の少女のために、この場の誰もが集合し、熱狂している。

黒い少女だった。

光の反射を一切拒んだ漆黒の戦車戦闘服。パンツァージャケット 上衣にシャツにタイにズボンに軍靴に、容赦無い黒布をあつらえている。

そして唯一、襟に置かれた鉄十字を型どった白銀のバッジが陽光に閃く——およそ女子高生らしからぬ装いは、しかし、みほと奇妙に調和していた。

可憐な少女は、巨大な存在感を友として、ひよいと挙げられた手をゆらゆら振っていた。

やがて空気を震わす歓声が頂点にも達しようかという時である。

黒衣の腕が、不意に、すうつと水平に倒れた。

水面を打った様に沈黙が波及した。

それは演説台に発し、前列、中列、後列へと順に及んだ。ものの十秒もすると、声の限りを尽くしていた数千の人々は、余すところなく口を噤んでいた。つい今まで熱狂し、前へ前へと詰めかけていた者共は、彫像の様に立ち尽くすだけのものとなった。

風の音までも聞こえてきそうな、完全なる静寂だった。

全く不可思議な現象であった。

彼女のそれは派手な仕草ではない、声とて出していない、事前の決まりがあつた訳でもない。にも関わらず、たった一人の少女が、たった一挙で、この場全ての言動を支配してしまったのだ。

そして何より不思議な事には、この現象に直面した誰一人として、違和感を感じていなかったのである——彼女の手の先には、人々に声を張り上げさせ、そして沈黙させる魔力が宿っていた。

口を結んで、人々は次に有るべき言葉をシンと待っている。声援が失せた分、期待や観察といった、無音の圧力が増した。

張り裂けそうな音の波動は、鋭利な静寂の刃と代わり、壇上の少女を容赦無く突き刺した。

沈黙とは恐ろしい。一瞬ごとに次の言葉に要求される水準が高くなってゆくからである。大概の話者は沈黙を恐れ、必死に埋め合わせようとするだろう。

しかし、みほは極自然に、この状態を『気持ち良いもの』として分類していた。むしろ気味の良さそうな顔で、彼らを見渡している。

煩いのが静まると気分が良い——と、それだけの理由だった。

この異常な現象は、みほの歓心を揺らすものではない。部屋の小煩い羽虫を拍手一撃で潰した時に伴うささやかな快感と、別段変わらぬ感覚だ。

肝が太いとか、経験の蓄積とか、そういうのではない。元来のんきな娘であるだけだ。

みほが、のんびり沈黙を満喫していた一方、群衆の緊張感は加速度的に張り詰められてゆく。

演説者が黙っている、何事かあったのか、緊張で声が出なくなったのか、それとも内容を忘れてしまったのか——見るからに落ち着きを失いつつある人々を、みほは内心で冷笑した。当の本人を差し置いて、他人が焦燥するというのが可笑しく思えたのだ。

数千の木偶の坊たちが、風や波の囁きにさえ胸の痛みを覚え始めた頃だった。

最も効果的に、沈黙は撃ち破られる。

「——ここで何を話すよりも先に、まず感謝をしたい。試合を引き受けて下さった聖グロリアーナ女学院戦車道部、私に付いてきてくれたチームメイト、運営に関わる様々な委員会、暖かい応援をしてくれた地域の方々、私の話を聞く全ての人々へ。感謝の気持ちは絶えません。私が此処に居られるのは、全て皆さんのお陰です。本当にありがとうございます」

深い角度でお辞儀をする話者につられ、不自然な程多くの人々が会

釈を返した。

無難とも言える挨拶から始まった演説だが、しかし、礼を返した全ての者は、この時点で黒い少女の話に呑み込まれていた。

独創性を欠いた演説は続けられる。

本日の日柄の良さだとか、敵の勇戦を称える言葉だとか、戦車道という競技の意義だとか、適当なものだ。

自然、張り詰めた緊張感は解れてゆく。確かに言葉巧みで眠たくな  
らない演説ではあるが、身構えて聞く程度でもない——と、ある種の警戒めいた心理が薄れ、興味が逸れる、正にその途端だった。

それは、至極なめらかに開始された。

「——私の眼前に、とても沢山の人が居ます。今、ふと思いました。この大勢の人たちが、果たして何処から来たのか？ 私は聞きたい。あなたは、何処から来たのか？」

不意打ちであった。

弛緩しかけた群衆は、不意に困惑の最中へ叩き落とされた。油断していた分の心理的落差が大きい。

質問には、誰も答えを出すことが出来ない。当然、成り行きを待つしか選択肢がない。

そうである。この時、人々は目を剥いて、本当の意味で彼女を見てしまった。

「大勢の人はこう答えるでしょう。『自分は大洗女子学園の町から来たのだ』と。では『大洗の住民』とは一体誰を指すのですか？ 役場に赴けば、それが確かめられるでしょうか。紙片一枚を突き出し、紙片一枚を突き返されれば、あなたは大洗の住民だと、高らかに言えるでしょうか。本当にそうですか？」

人々は目線を交わす。得体の知れない不安感に、心臓を鷲掴みにさ  
れていた。

己が言葉の効果全てを承知した微笑を浮かべ、みほは両手を胸に当  
てる。

「例えば、どうです。この『西住みほ』では？ 私は産まれも育ちも熊  
本です。事実、数ヶ月前まで熊本の住民でした。黒森峰女子学園という



学園艦に住み、勉学に励み、戦車道を営み、糧を食み、友と交わって  
いました。私自身も、黒森峰こそ我が母校と確かに思っていました。  
そんな私は、果たして大洗女子学園の住民と言えるでしょうか？」  
演説者は口を噤み、聴衆を見渡した。

呆とする大多数の間で、幾人かは、何か言いたそうな顔で唇を擦り  
合わせている。けれども、少女が彼らを見つめると、皆一様にさつと  
顔を伏せてしまう。

みほは徐々に悲しそうに眉を曲げゆく。

「あなたは、大洗女子学園の仲間よっ！」

沈痛な空気を一掃する様に、最前列から声が上がった。みほ一人  
と、数千の視線が一斉にその場へ集まる。発言者は、数多の注目に大  
きく怯んだ様子だったが、それでも大声を押し出して見せた。

風紀委員長、園みどり子である。

「……西住さんは、もう私たちの一員よっ。学園の事を想って、戦車道  
を復活させた。こんな大きな催しを成功させてみせた。私が認め  
るわ。あなたはここに居る誰よりも、生徒の鑑よ。そんな西住さんを  
否定する奴は、私が許さないんだから！」

みどり子は息を切らして言い終わると、途端に顔を真っ赤にして  
「失礼しました……」と小さくなった。

彼女は本来、出る杭という柄ではなかった。しかし、みほの悲しそ  
うな表情を見て、なのに誰も何も言わないのを見て、とても黙っては  
いられなかったのだ。

園みどり子とは、そういう人だった。

風紀委員長の発言の効果は絶大だった。

賛同の声が各所からぼつぼつと上がり始めたと思えば、瞬く間に総  
員を巻き込んだ同調のうねりとなった。

『西住さんは我々の仲間だ!!』

腕を振り上げて叫ぶ皆々に、みほは「ありがとう」と、はつとする  
笑顔で喜んだ、様に見えた。

暖かい声援に暫し甘んじた後、みほは続けた。

「よく町を歩きます。新しい住処へ早く馴染みたいと思うからです。

散歩の道中、地元の人とお話します。その際、気が付く事がありました。町の人たちは、決まって私に同じ事を言うのです」

みほは一息置いて、語気を強め、言った。

『昔の大洗は良かった』のだと『昔を誇ることが出来ても、今を誇ることは出来ない』のだと。『あなただけが希望だ』と、転校生の私に頼むのです——さて、この人は大洗の住民と言えるでしょうか？」

煩い歓声が静まった。

再びの問いかけに、此度は、誰も声を挙げない。苦々しい空気だけが広大な傍聴席に蔓延した。

「是」と言えば嘘になる気がする。かといって「否」と答えれば——詰まる所、彼等には『この人』に心底覚えがあったのである。

「……あなた方は、西住みほという新参加者を大洗の住民と保証出来るのに、この人には出来ないのですか？」

静かに、だが辛辣に、黒い少女は問うた。決して苛烈でない筈の彼女の視線を、誰も見返すことは不可能だった。

聴衆は、突然の恥を覚えた。言われるまま、誘われるまま、この場に集まって、彼女の話聞き、熱狂していた自分自身への羞恥である。

何年も、或いは何十年も大洗に住み着いて「何とかしたい」と漠然と願いながら、どうして誰も彼処へ登ろうと考えなかったのか。

どうして、たかがぼつと出の新参加者が、あの場所へ立っているのか——その不整合を、みほは痛烈に指摘した。

極一部の傍聴人——みほの本性を承知する——は驚愕する。

西住みほとは、劇的にして狡猾な人心掌握術にものを言わせて、大洗女子学園の『支配者』になるつもりではなかったのか？

これでは、自らの手の内を破却する様なものではないか。

今回の試合で『軍神』の無敗神話は終わった。その上で、転校生が在来住民を先導するという異常性を殊更に指摘し、批判した。

よもや諦めたか。そう信じられれば良い。だが、この胸のざわつきは何だろう。

良くないなにかが深淵から這い登って来る。それは知らぬ間に肺腑の奥を侵食し、じわりじわりと内側から呑み込まれてしまう——西

住みほの言葉を聞いてみると、そんな猜疑に陥るのだ。

問題は、そのなにかに形が無く、色が無く、音も無ければ臭いも無い、完全に透き通っている点なのだ。

「私の話をしましょう」

壇上に在る黒衣の演説者は、全てを無視して話を続行した。論理的にも、感情的にも、正気でない彼らの消沈を意に介する必要性を感じなかったのだ。

「先程も言った通り、私は黒森峰女学園の出身です。戦車道が盛んで、古くから西住流との繋がりも深い学校でした。そこで戦車道部の副隊長をしていたんです。昨年は全国大会十連覇という実績も挙げました。とても居心地が良かったです。学校や友人が好きだった。西住家の女は、代々この学校を卒業するのが習わしです。私の母や、祖母や……曾祖母も黒森峰の卒業生です。けれど、きっと、私は違う」

一瞬、漆黒の瞳の奥で、毒々しい色が流動する。その色は、誰に氣取られる間も無く、活動を止めた。

代わりにきつい腕組みをして、みほは述懐を続ける。

「私が此処に立つ経緯には様々あります。多くの人の名誉のため、詳しい話はよしましょう。けれども、敢えて原因を挙げるとするならば——私は全く思い上がっていたのです。私独りが強く、皆を率いれば良いと思っていた。自分の理想は、他人の理想だと信じていた。言葉にせずとも、行動で認識が伝わると理解していた——その思い上がり、私の全部を奪った」

みほは、蒼天に遠い目を向けた。視線にどういう意味があるのか、万人の目に明らかであった。

未練。

みほは少しも隠そうとはしなかった。考えれば『家』『学校』『生き甲斐』とを同時に全て奪われたのだ。思春期の少女にとって、それは世界の総括と同じではないか。

未練を懐いて何が悪かろう。

「まぬけでしょ？」

みほは胡桃色の髪を掻き混ぜて、自嘲混じりに呟いた。

「まるで失敗だらけなんですよ。何にもかもが上手くゆかない。新しい試みの度、無力感に叩きのめされる。やっとの思いで這い上がったと思ったら、既に手遅れ。頑張れば頑張る程、失った時の悲しみは絶大だ。もう嫌になる。失敗が怖い、挫折が怖い、後悔するのが怖い——」

尻すぼまりに声が失せた。頭を垂れる少女の姿は痛々しく、見るに耐えない。

その情けない姿に、聴衆は初めて西住みほという人間に共感を持った。人々とは、他人の強い部分より、弱い部分に共感し、安心したがるものだ。

どこか自分とは隔絶した人種であると思っていた『西住みほ』。果たして彼女の正体とは、ここで尻込みし、恥じ入る自分たちと変わらないのだ——と信じかけた時、みほは顔を上げた。

「然れども私は此処に立っている」

演者は期待を裏切り、断言した。全ての聴者は圧倒され、息を呑む。少女が一変した。

その全身から生命力が噴出し、黒い瞳からは底無しの闘気が迸る——今日これまでは同じIV号に乗る者しか知り得なかった、それは、一人の戦車乙女の姿だった。

「人が往く道は何時も理不尽で舗装されている。歩めば歩むほど足はもつれ、風雨に打ちのめされ、転んだ所をまた叩かれる。けれども、嗚呼、それがどうした。私は、その道を歩み通した人を知っている。遂には倒れたその人の、続きを歩んだ人を知っている。そして、今、私の足下に倒れた人の顔を知っている——だから私は、未だに此処で立っている。百の挫折を強いられても、行き先だけは忘れない。何故なら苦難に立ち止まったその時、私の足元へ続く、ただ一筋の道程を振り返るからだ。幾人が倒れ伏し、幾度も継がれた血の道が、何時も私に語り掛けてくる」

演説者は、黒い両腕を目一杯に開いた。

浮世全ての理不尽を歓迎した様に、忌むべき身上を祝福する様に——かつて彼女の曾祖母が雲霞の敵に同じくした様に——笑う。

「鬪争せよ」

卷雲が流れている、日は暖かく射し、海風は颯爽と髪の間を抜けてゆく。西住みほの言葉は、それら自然物と同じ静けさで、人々の肌から染み入った。

「世界は大きな不条理で満ちている。生きる事とは、それそのものが苦しみだ。だからこそ鬪争は美しい。その信念を胸に持つて歩いてきた。結果、何もかも失った。道半ば倒れ、痛みで動けなくなることも思った。だが、この腕はどうか。まだもがける。この足はどうか。まだ立てる。この両眼はどうか。まだ道の先を見据えられる。では、この心臓は。まだ血を廻らしている——私は、まだ生きている」

彼女の声は、語りかける平静から、訴えかける激情に転じた。声調に合わせ、所作も芝居じみて大振りになる。

「生きているなら立ち上がる。立ち上がって前進する。然れば此処に銘記せよ！ ありとあらゆる障碍は、この認識を阻めない。何人たりとも『西住の流儀』を止める事は出来ない！」

誰もが皆、西住みほを悲劇のヒロインだと思っていた。きつとそう思われたままであれば、同情のままに、生きるに易い生活が待っていたのだろう。

しかし、そうで在る事を、彼女の尊厳は選ばなかった。

悲運の少女として囲われながら生きる事と、敢えて悲運を突き返し再び鬪いを選ぶ事。どちらが人間として尊い選択であるか——少なくとも、彼女は知っていたのだ。

「何処へ行っても、皆が口を揃えて私に言う事がある。『同じ戦車に乗せてくれ』『我々を率いてくれ』と……もう沢山だ。それは断然間違っている。私の主人は私で、あなたの主人はあなただ。その認識を、何人にも侵略させてはならない。誰に強要されるでもなく、誰に譲渡するでもない——あなたは、あなた自身の『自由意志』で鬪わなければならない！」

みほは一息に言うと、少し息を切らした様に肩を上下させた。呼吸を整えながら、再び穏やかな少女の言葉で続けた。

「私は大洗女子学園を、私好みの学校に変えたかった。大好きだった

故郷を超える様な、この場所こそが第二の故郷なのだと、胸を張って言える様な、素敵な町にしたいのです。私一人で変えるものではありません。各々が、各々の意志と、方法で変えて欲しい。少しでも良いんです。学生は学生の、社会人は社会人の、家人は家人の。平生にある、ほんの小さな苦勞に立ち向かうだけで良い。自分は確かに大洗の住民だと、胸を張って言えるだけで十分です。それを実行したならば、私たちは信念を分かち合った仲間となる。同じ船に揺られ、同じ思想の下、困難に相對する真の同志に」

壇上のみほは、話しながらも下段の聴衆を眺め渡した。間もなく気が付く。判然とせず、区別もつかなかったはずの人々の顔が、自ずから浮き上がって見えるのだ。

みほにとつて、ただの『大勢』という塊に過ぎなかったものが、明確な意志を持った『個人』の集まりへ変化しつつあった。

『闘争せよ大洗。人間は自由意志の生き物だ。苦難に負けるな、世界を変えろ。理不尽を倒せ、停滞を破れ、諦めを殺せ。闘争の意志を持つ限り、人間は無限に自由だ。あなたはあなたの大道を闊歩せよ』

集まる理由も無く、しかるべき恥も無く、たかが女子高生の言葉に一喜一憂していた聴衆は、ただ無言でそこに在った。だが沈黙にはあらず。己の両眼で、百の口述より雄弁に意志を伝えていた。

一過性の熱も、上辺のはつたりも、ここでは全く消え失せた。それで良い。本物の意志とは、言葉ではなく目に宿るのだ。

『闘争せよ』

明確な意志の光が込められた、無数の両眼に見つめられた時、みほにある現象が起こった。

背中に汗が伝うのを感じる。胸の鼓動が、まるで銅鑼どらの様だ。なんだか膝が震えて言う事を聞かない。空気とはこんなに吸いにくいものだったか。

不可解な現象に伴う様にして、腹の底から形容し難いほど、激しい感情の波が押し寄せてきた。少女は僅かに狼狽し、その感情の正体を必死で探った。

やがて、その感情が『緊張』だと悟った時、黒い少女は愕然とする。

それと同時に、にわか泣き出したくなるような莫大な恐怖と、それに勝る無尽蔵の歓喜が爆発した。

嗚呼、そうだ。これが人間の目だ。

私は『正気』に見られているのだ――

何もかも初めての経験だった。

大洗という真白のキャンバスに、西住みほという芸術家が色を乗せた。しかし、その色は予想外の色調に変わり、独りでにキャンバスを駆け巡る。

もはや、芸術家が何もなくても絵は描かれてゆく。果たしてどんな絵が出来上がるのやら、いち女学生如きには見当もつかなかった――だからこそ、面白い。

西住みほは笑う。誰よりも人間らしく、それ故に誰よりも魅力的に。

「私は指導者ではありません。まして、無敗の軍神などでも。そう、私は、あなたの隣人――」

中学生の時、神に成ろうと思った。

失敗した。

人は自由意志を放棄し、最も唾棄すべき存在へと自ら成り下がった。

高校生の初期、指導者に成ろうと思った。

失敗した。

要を失った人は自分の足で立つことが出来ず、堅牢と信じた集団は崩壊した。

では、次は？

次は何に成ろうか。

「――そして願わくは、あなたの友人に成りたい」